明治卅六年六月十五日定期增刊
毎月一回五日發行

明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界夏期增刊
第三巻第八號

姫ゆり



東京博文館發行


地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

女學世界定期增刊 姫百合目次

つみ草



(博進社工場印行)

榊原蕉園女史筆

參籠



廣瀨勝仙氏筆

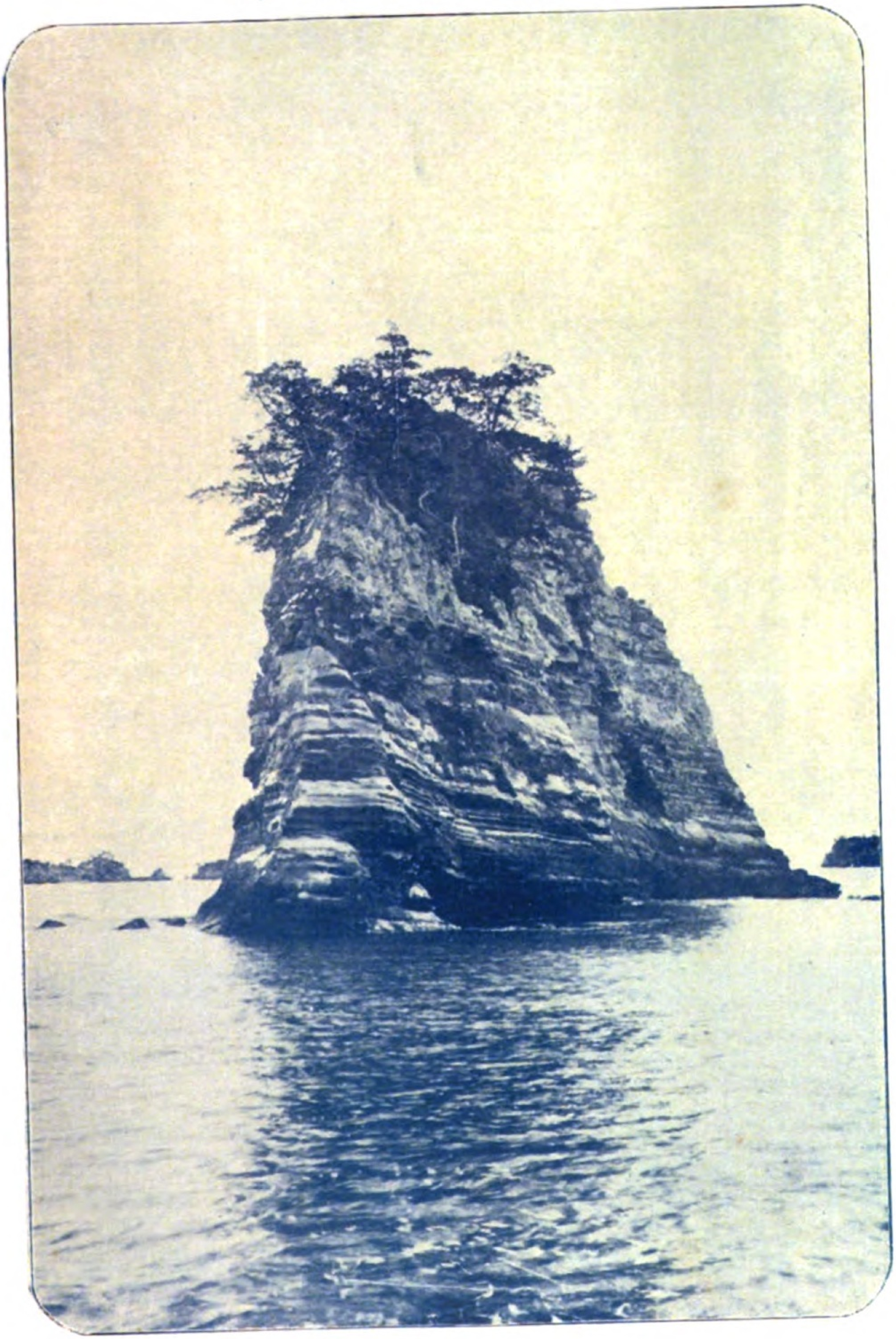
臺灣貴紳の花嫁



（台北　三輪宗治氏寄贈）

（記事參照）

松島花魁島



幸田露伴先生校訂（近刊）

按訂

狂言全集

上巻

和装上製
正價金五拾錢
郵税金拾錢

狂言記目次

續刊 中巻……續狂言記五十番 下巻……狂言記拾遺五十番

東京 博文館發行 本町

(甲の一)

文學博士三上參次先生序文
文學博士芳賀矢一先生序文
山本九馬亭著
越太政夫改 竹本攝津大椽
文學士藤岡作太郎先生序文
文學士嶋文次郎先生序文
竹本彌太夫賛助

淨瑠璃通解

全部拾貳册
一册 紙數約二百六十頁 菊判大和綴 表紙優美

▲第壹編……六月廿日發行

淨曲が德川文學の精華にして當時の世態を反照せしにも係はらず學者其人を惜みて其書を捨て敢て一顧を與へざりしかば永く磨がゝざるの玉となりて空しく今日に至れり近時諸大家漸く其篇を認めこれが研究に從事するを見る著者久しく斯文に研鑽し精勵遂に通解を完ふす此文學は上雲上より下裏長屋に至る迄神祇釋敎戀無常あらゆる社會の狀態を寫せるものなれば用語の範圍頗る廣く隨て解釋の難澁なるもの尠しとせず著者茲に注意し臺詞曲節の調より歷史地理の大に涉り隻語を遺さず正を質し全を求めて斯文の精華を啓發して餘蘊なし蓋し淨曲の寶庫は此得かたきの秘鑰を得て始て世に萬丈の光彩を放つものといふべし

水谷不倒君校訂
●義太夫百番
全壹册洋裝上製美本
正價壹圓郵稅拾貳錢

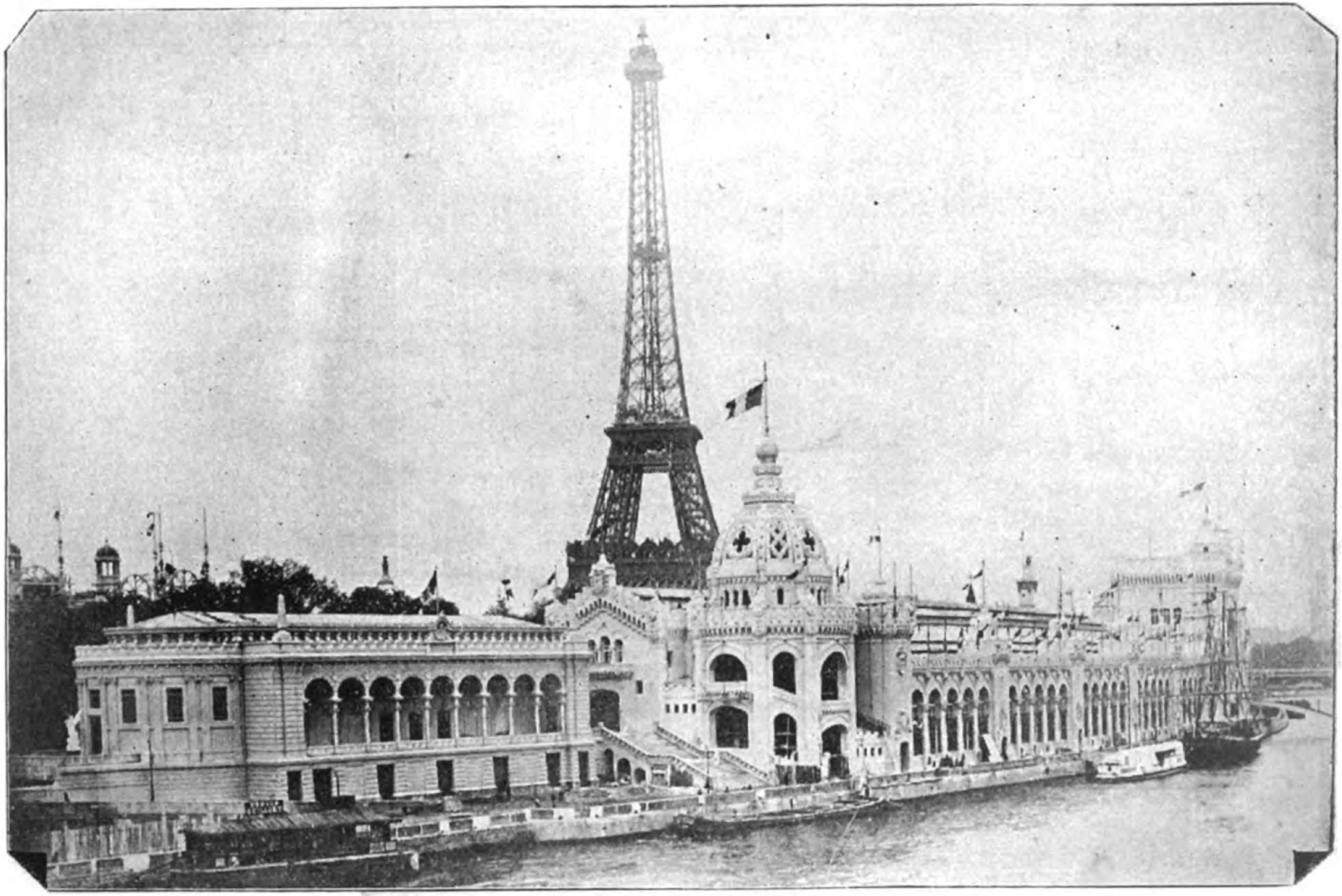
博文館編輯局校
●淨瑠璃名作集
全壹册洋裝金文字入
正價六十錢郵稅十六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(甲の四)

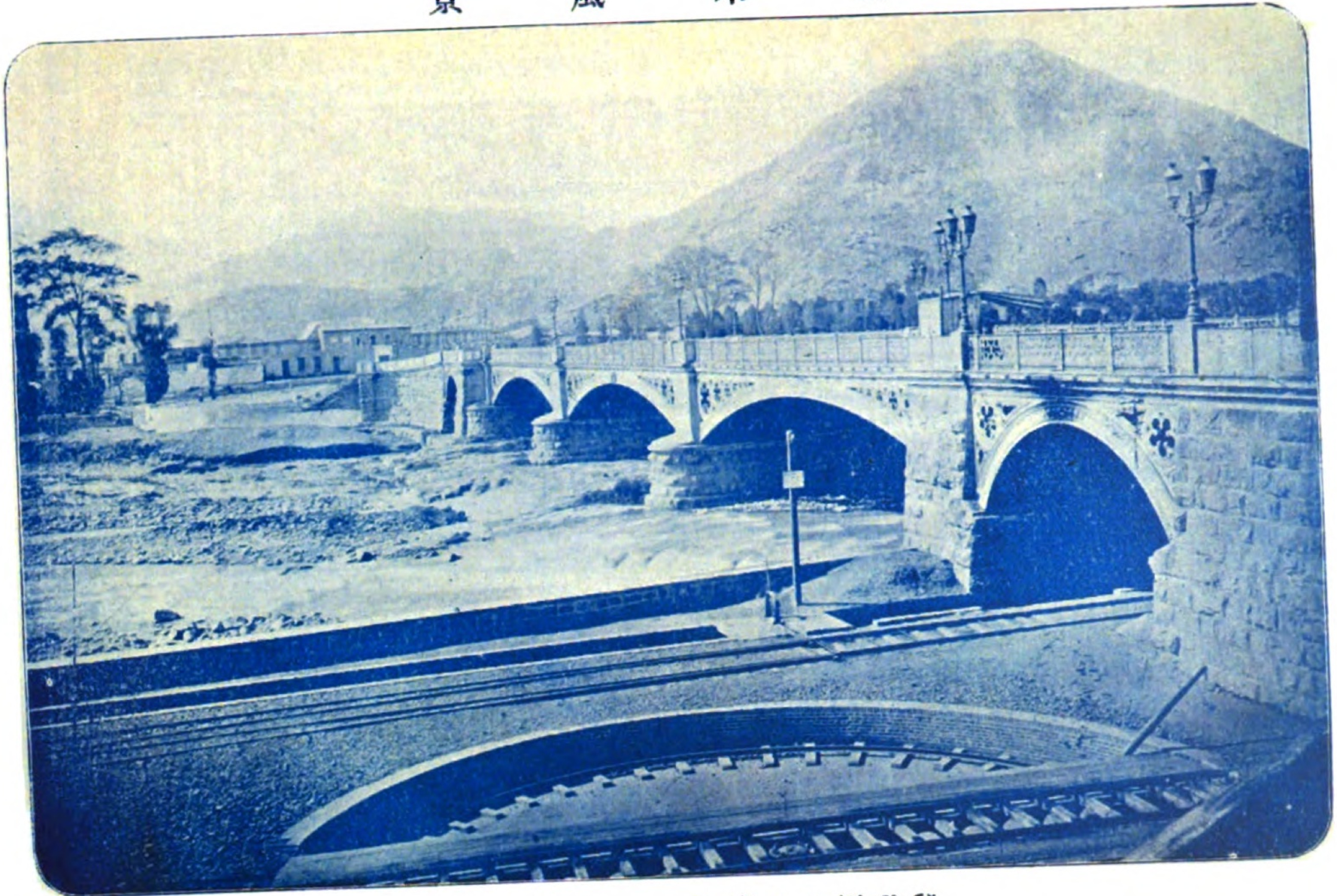


神戸女學院卒業生及職員



巴里市エッヘル塔

南米風景



秘露國リマ府リマック河の石橋

(乙の二)

理學士山崎直方先生
理學士佐藤傳藏先生　共編

大日本地誌

第壹卷……七月中發行

全部十卷
約六千頁

第壹卷 ▲關東　第貳卷 ▲奥羽　第三卷 ▲中部
第四卷 ▲近畿　第五卷 ▲北陸　第六卷 ▲中國
第七卷 ▲四國　第八卷 ▲九州　第九卷 ▲北海道
第十卷 ▲琉球及臺灣……順次發行

地理の書たる汗牛充棟啻ならずと雖も、其の描寫、其の觀察多くは普通の地誌たるにとゞまり未だ地形地勢より説き出して、沿革の變遷、産業の盛衰、行政、司法、宗教、教育、軍事等に及びたる者わる

●地形地勢　各地方に於ける地形の大勢を説き、山系、水系、海津、港灣の形勢を明かにし、氣象の梗概を明快に記述し、自然地理の形勢をして一目眼頭に來り迫るの思ひあらしめんことを期す。

●沿革　各地方に於ける歴史上の事踏を地理的に描寫し、殊に古今の盛衰興亡に就きて多大の苦心を費せり、されば此沿革を以て、地圖と相對照せば、英雄豪傑龍闘虎戰の野も都邑城市變遷盛衰の理も忽ちにしてこれを知解し得べし。

發兌元　東京市日本橋

を闕かず。本館多年これに慨する所あり、今回斯學の泰斗と稱せられたる山崎佐藤兩先生に囑するに此事を以てし、歐州に於ける最新地理の體裁を參酌し、以て大に本邦地誌の闕を補はんことを期せり。之を以て其の力を盡す所、全く在來の地誌と其目的方針を異にし、地文人文の關係を說くや極めて詳密、極めて明徹、竊かに誇りて本邦地理書中の偉觀と爲す。而して其その卷冊の浩瀚なる、其敍述の明快なる、その製本の美麗なる、一として力を盡し思を致さゞるなし、況んや每冊鮮明美麗なる彩色地圖を挿入すること十數葉、各地方勝地の寫眞版を添ふること八十余頁、諸君をして錦上花を添ふるの思ひあらしむるに於てをや。此書一度完成せば、日本全國に於ける地理は宛然これを掌に指すが如くならんか。今其の編著の方法の大略を下に示す。

●行政司法　行政區劃に於ては、中央政府と地方政治との關係を明かにし、司法區劃に於ては、その管轄區域の詳細を記す。其他地方廳、裁判所等の所在地等勉めて洩すことなし。

●軍事教育　海軍に於ては鎭守府の位地及管區權能、組織、役員等を始めとして軍艦の所屬、造船所の内部等一々詳しくこれを說き、陸軍に於ては、師團の分布、師管の區劃、及各師團の特色等を詳說し、地理的觀察を用ゐて、或はこれを綜合し、或はこれを解剖し、一々批評を附し、詳密丁寧を極む。

●產業　農業、工業、商業、鑛業、林業、水產の六部に分類し、農業には米穀養蠶牧畜等の現今の景況より其歷史に及び、地理的分布を詳述し、工業には製糸、織物、陶器、漆器、銅器等の產地、沿革、製造の狀況等を記述し、商業には銀行、取引所より內國商業外國輸出の一盛一衰する有樣及其理由、鑛業には各地鑛山の分布、林業には國有、民有の區別、植物の種類及產額等、水產には各地方特色ある漁獵、遠洋漁業等を記述的に敍し、一として洩らす處無からん事を期す。

●交通　各地方に於ける鐵道、滊船を始め、電信、電話、郵便、道路に至るまで、細大洩すなく、本邦交通機關の要は　この中にあり。

●地方誌　都府を中心にして、其附近の名勝、古蹟、神社、佛閣等を記し、其他の地理的形勢に就き、最も其精を極めたり。殊に材料は皆最新にして最精確なるものを選びたれば、一面最良の地誌たると共に、また旅客の爲に好案內記たらんことを期す。

（乙の三）

區本町三丁目　**博文館**

見よ　社會主義　見よ

理學士依綠軒主人著

社會主義新小說　文明の大破壞

全壹冊洋裝　合表紙菊判　紙數四百頁　正價四拾錢　郵稅拾錢

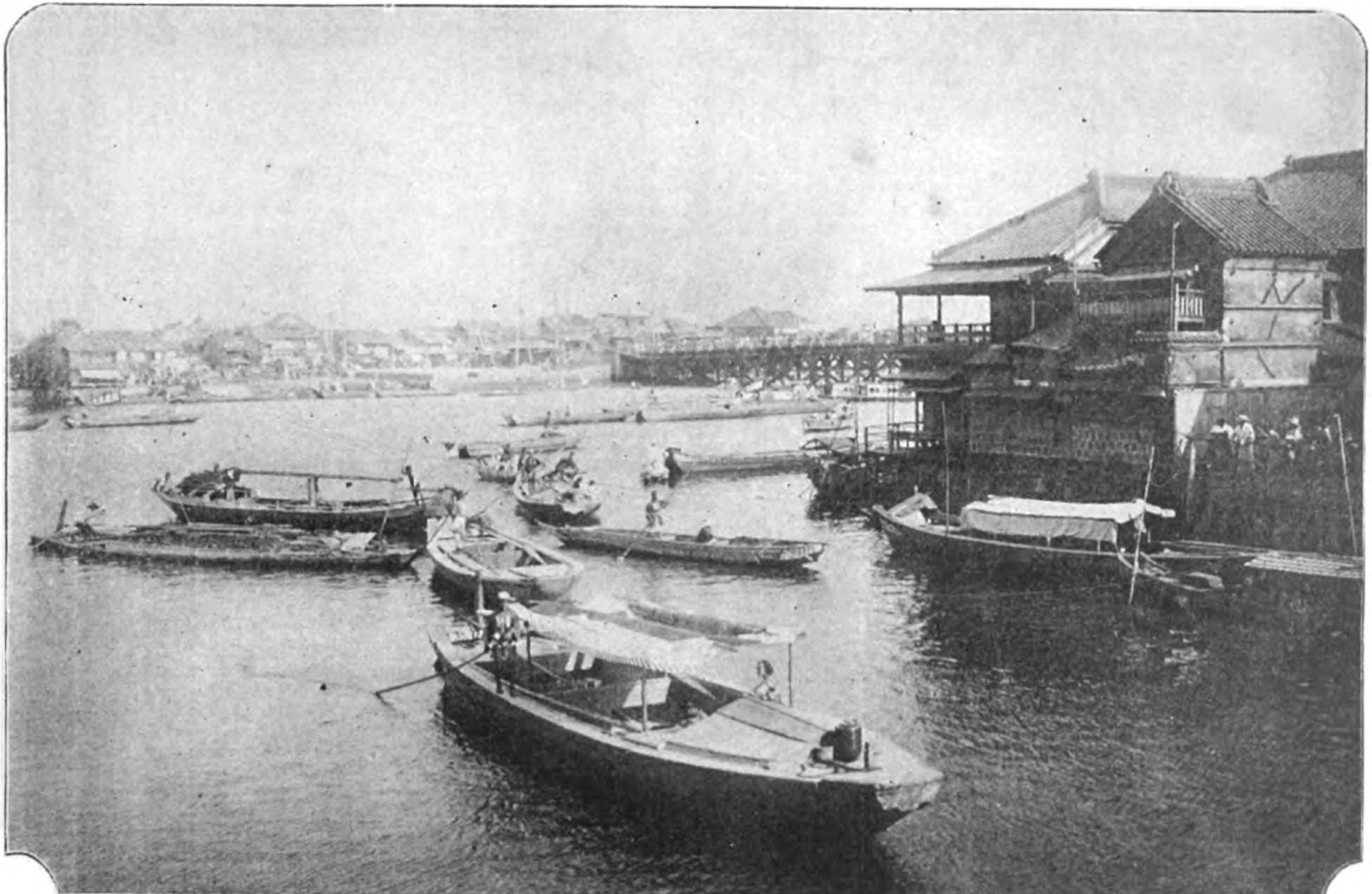
物質的文明の大進步は、貧富の大懸隔を生して、大富豪の專制となり、玉樓天に聳えて、貧者地に哭し、金殿甍を列へて、餓莩地に滿つ、既にして、大反抗は社會主義なる標榜の下に激成せられて、闇黑なる地下より絕叫せられ、現文明は、大叫喚の間に粉碎せられて、理想の自由鄕は却て天外萬里の山頂に建設せらる、其間英雄の血涙あり美人の熱情あり、忽にして、妖魔の毒彈空に破裂し、忽にして白骨の高塔、天に冲す字々痛快句々壯烈、人をして魂躍り、神悸らしむ、方今の社會主義を說く者、先つ此書を繙かさるべからず

內田不知庵君著　●社會百面相……〔全壹冊洋裝菊判美本　正價五十五錢郵稅十二錢〕

村井弦齋君著　●酒道樂……〔全貳冊洋裝菊判上製　一冊五十五錢郵稅八錢〕

發兌元　東京日本橋本町　博文館

（乙の四）



兩國橋下の納涼

横濱紅蘭女學校





大阪清水谷高等女學校

布哇風俗



布哇ホノルヽ府の花賣

旅途の伴侶

水哉坪谷善四郎君著

日本漫遊案內

東部 東京附近、關東、東海道、中仙道、北國、奥羽、北海道、京都附近、（一冊近日中發行）

西部 中國、山陰、四國、九州、冲繩、臺灣（一冊本年秋發行）

全貳册袖珍本洋裝
正價未定

近來我國の交通機關は、陸海ともに日に備はり、東西漫遊の遊客は年々に増加するも、皆其の漫遊すべき地方に於る完全なる案內記なきに苦む。是れ案內記無くして旅行するは、燈なくして暗中を行くが如く、目的の視察は槪ね遂げずして、失敗と不快とを招くことのみ多ければなり。

本書は著者自ら全國を漫遊し、最近の精確なる材料を集め、親しく視察する所によりて編述す。凡そ全國の大都名邑、高山大川、港灣湖海、大社巨刹、名所舊蹟、温泉場、海水浴地等の風景風俗より、其等各地に至る順路、氣候、旅館、酒樓、遊觀地：船車の利用及其等の費用、物産及農工商業の事情、諸物價等より、各地歴史上著明の事實、其地方に關する古今名士の詩歌等をも編入し、且つ各地の詳密なる部分地圖と數十の風景風俗寫眞を挿入し、記事の盡さゞるを補ふて、實益と趣味と兼ね備ふることを期せり。特に旅行家の案內記たるのみならず、蓋し一部最近の全國地誌たるを得べし

總て案內記に必要最も**なるは、新しき材料**により、最も精確に說明するに在り、之を爲すには著者平生自ら實況を審察せざる可からず、若し凍腐の材料に據り、漫然几上に編纂するが如きあらば、案內記の爲めに旅客を誤まること至大ならん。本書は此點に於て殊に意を用ゐたれば、從來旅客の爲に案內記不備の缺點は、庶幾くは此書によりて補足するを得んが。

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（丙の一）

(丙の二)

專賣特許

安全かみそり



定價

甲 壹圓五拾錢 替刄付箱納

乙 壹圓 紙函納

丙 七拾五錢

最新發明ノ特許品柄ノ先ニ車トネジアリ自在ニ廻轉ス耳鼻穴ノ他ハ思通ニ剃レ小兒ノ頭チ剃ルニハ至極妙陸海軍人海員海外移住者並ニ旅行ニハ是非必要品ナリ

發賣元 東京日本橋本石町一丁目廿六番地 三劍商店

●繪畫通信教授

每月二回講義錄發行一年卒業詳細規則郵券二錢

東京市麻布區飯倉町四丁目 大日本繪畫講習會

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一（電話下谷二二五九番）

藥學得業士 金澤 巖

●歐米流行新化粧品

●目下佛國巴里を始め、其外歐米文明國貴顯紳士貴婦人間に最も賞用せられつゝある優等品なり

●毛髮發生增殖液 原名ヘヤーウッチ（藥價）甲五圓乙三圓丙一圓丁五十錢

●毛髮發生脫毛劑 全ヘヤーオミット（藥價）甲五圓乙三圓丙一圓丁五十錢

●美白光澤皮膚液 全スフロスミン（藥價）甲三圓乙二圓丙一圓丁五十錢

●面皰斑點整止液 全リヽオニース（藥價）甲二圓乙一圓五十錢丙一圓丁五十錢

●口中含嗽芳香液 全ザンシエンクチユアー 甲一圓乙五十錢丙二十錢

●其他雲南產正眞麝香、清涼ふけ止め、しらが染め、巴里香水、香水入はみがき、其他數百種

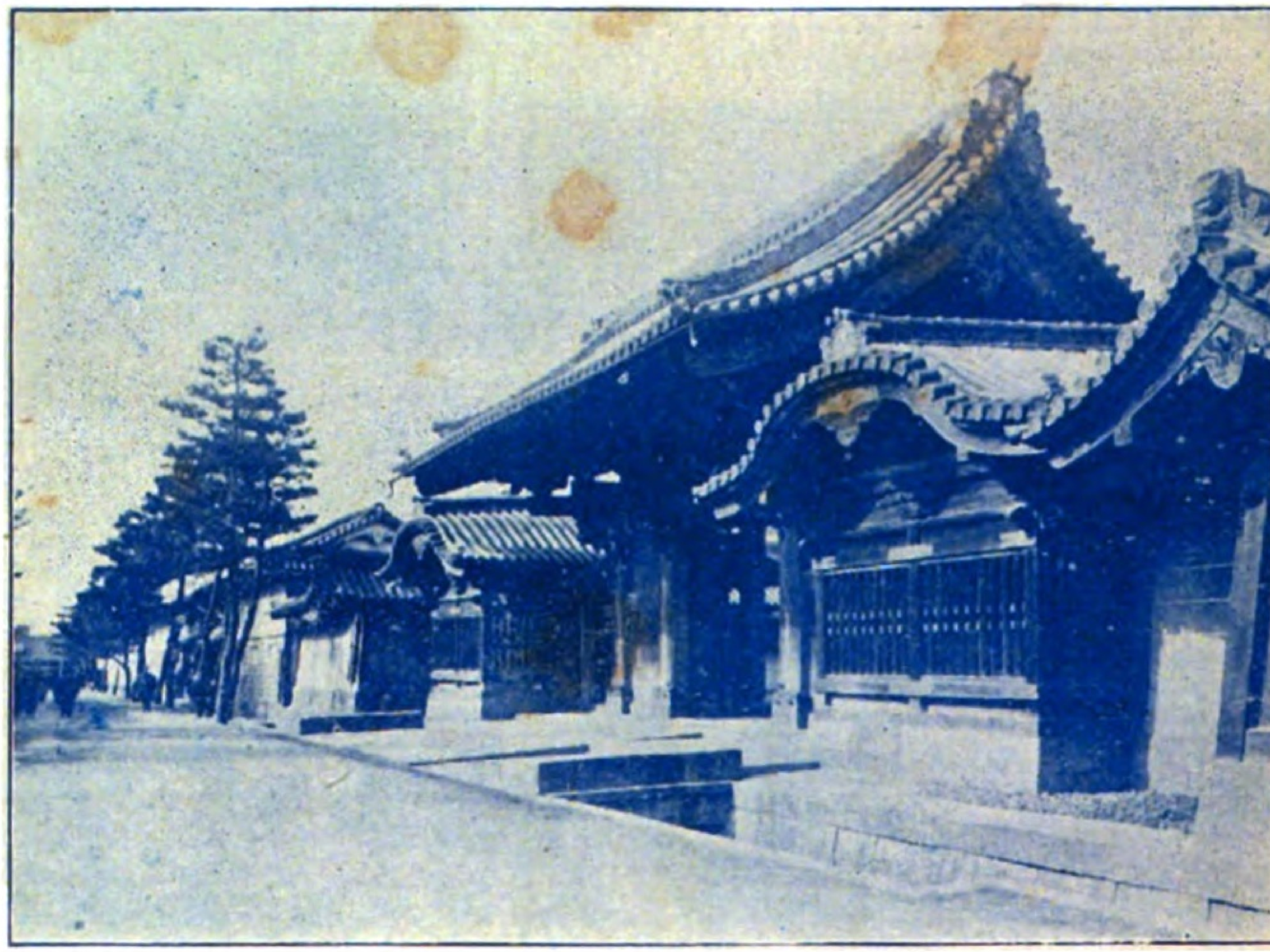
郵送料各十錢

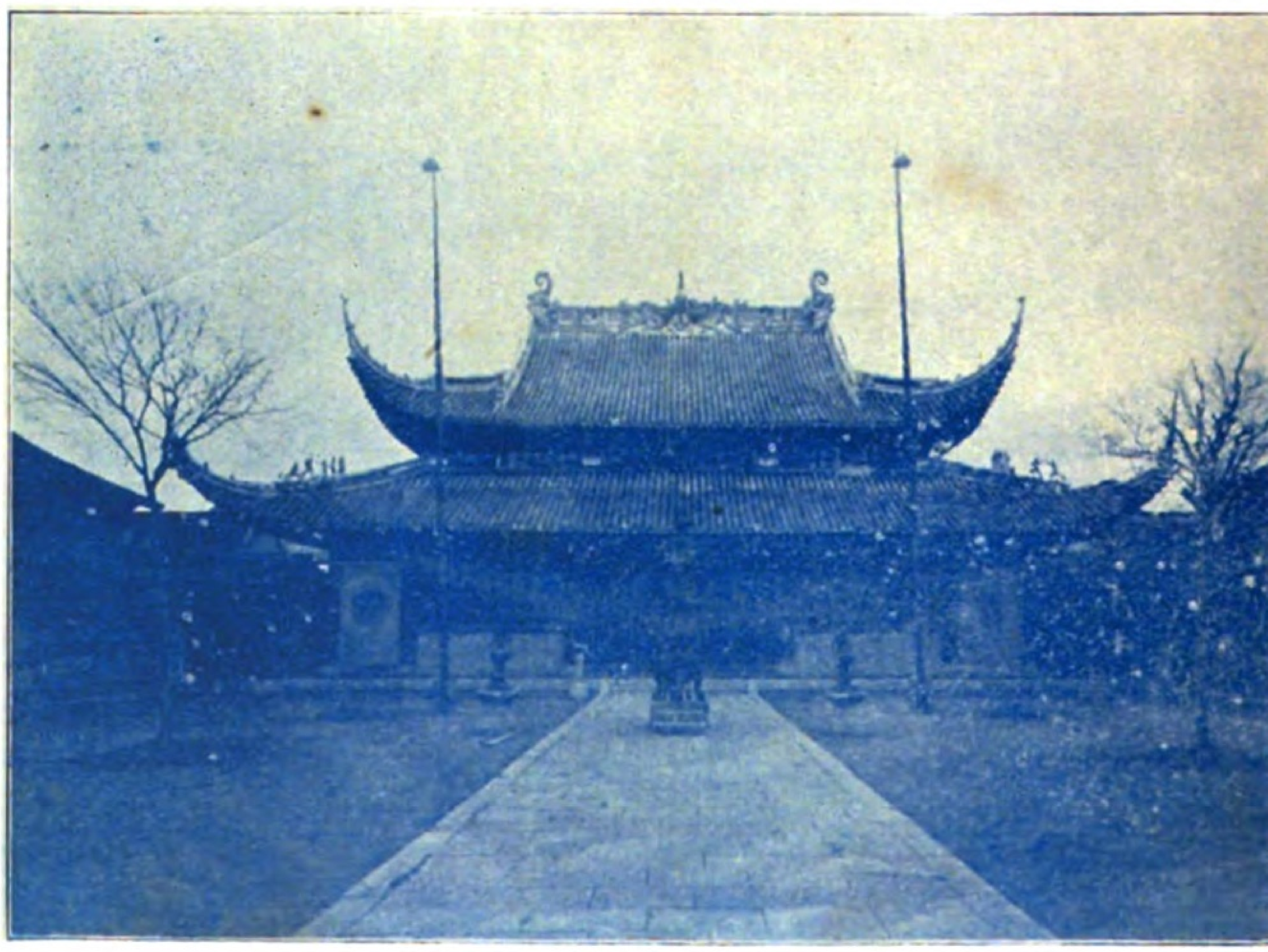
●御注文之際は即日發送仕候

內外藥種化粧品 卸問屋 東京市日本橋區大通り本石町角

博愛堂本店（電話本局二一八六番）

京都本派本願寺大玄關





清國上海龍華寺



(記事參照)

詞林三歌仙(大塚楠緒子作竹柏會餘興假裝演藝の圖)

博文館編輯局校訂

人情本傑作集

全一冊洋裝背皮金文字入
正價六十錢郵税十六錢

博文館編輯局校訂

梅暦春告鳥

全一冊洋裝背皮金文字入
正價六十錢郵税十六錢

博文館編輯局校訂

滑稽名作集

全二冊洋裝背皮金文字入
正價六十錢郵税十六錢

藤本藤蔭君校訂

西鶴名著集

（近日發行）

全貳冊

洋裝上製
背皮金文字入美本
正價未定

上卷目次

下卷目次

附錄目次

以上

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丁の一）

圖畫圖案手工裁縫及刺繍の良敎科書

◎東京美術學校敎授　白濱徵　校閲

◎秋田縣師範學校敎諭　芳川流外　編

模樣畫初步

◎用紙上等舶來紙◎

◎着色石版三度刷◎

●全壹冊

●定價　卅五錢

●郵稅　四錢

●模樣畫初步參考書

全壹冊　定價金拾錢　郵稅金貳錢

目次

●市松形●鱗繋●二字崩●四目格子●業平菱●三菱繋●重蜀紅●武田菱●龜甲繋●松皮菱●網代形●十字繋●井字繋●霰繋●賽目繋●重菱●毘沙門龜甲●松皮崩●鳥襷●稻妻菱●矢筈繋●網形●分銅菱●石垣龜甲●万字繋●万字崩●井筒龜甲●風車●錦形●麻葉繋●蜀江繋●青海波●結龜甲●千鳥繋●龜甲崩●麻葉車●龜甲疊●雲菱●雪霰形●角網崩●組合菱●角違龜甲●立涌●八重組菱●七寶菱●籠目形●牛衔繋●輪違龜甲●結蝶●松竹梅總計五拾圖

近來普通敎育に於ける圖畫科の漸く世人の注意を喚起するに至りたるは斯道の爲に最も喜ふべき傾向なりとす而も其の成績の擧からざるは畢竟敎材の選擇と敎授の方法とが其の常を得ざるに因るゝ抑も圖畫は審美的形象を發明し心意を陶治し以て形式的修練を遂ぐると共に直接に形躰を看取して日常生活上に應用するを得るなど甚だ實際的價値に富めるもの而して此の大切なる敎科の基礎は全く點網畫によりて導き得べく點網畫の果實は實に模樣畫なりとすれば模樣畫の圖畫科に於ける地位は兒童敎養上最も重要なる部分を占むるものといふべし本書は著者が多年の試驗に據り正確の描法を用ひしむるが爲に例題を多くし務めて相互の連絡を保ち既修のものを利用して未修の新圖に及ぼすの考案を立て加之各圖共に着色石版三度刷となし又彩色の具と使用の器とは極めて簡易なるものを用ゐ何れの學校に於ても容易に之を課するを得せしむる等質地適用上最も工夫を凝せり　從來此種の冊子は徒らに古代の模樣を蒐集せしに止まり本書の如く敎材の選擇敎授の連絡等に深く意を用ゐたるものは絶えて無しされば本書一たび出で、圖畫の敎育的効果を完全に收むるに庶幾からんか　又參考書は本書の各圖に就き說明圖法彩色の三項を詳述せしものなり

發行所　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地　大日本圖書株式會社

（丁の二）

秀才文壇

毎月一回一日發行

毎號名士の高論秀才の佳論誌上に錦繍を飾りて善盡し美盡せり

成功……毎號管綠陰先生執筆

正價一册金拾錢●六册前金五十七錢●十二册前金壹圓八錢外に郵税一錢宛●郵劵代用必一割増之事

東京小石川區指ヶ谷一三三

文光堂

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵封入にて御照會あれ

千葉縣安房郡曦村千倉 川名助次郎

總裁 二條公爵
議長 本田男爵

青年議會 附 少年衆議院

毎月十日一回發行雜誌内容少年議場青年議場特別室短文和歌俳句漢詩新體詩會員投稿等愈面白し入會金十錢會費一月九錢規則進呈見本郵劵十錢

東京神田千代田町

帝國青年議會

●博文館出版圖書總目錄●

圖書目錄は五月末現在の各圖書を調査し新訂掲出し猶は五月以後の出版をも豫先せり入用の方は往復端書にて照會あれ

博文館小賣係

謄寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書圖書數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

●定價 二オンス壜 装鑵送料共 ●四拾錢 郵税代用壹割増

東京神田末廣町卅八

中村屋商店

佐々木信綱君著 ●歌の栞 正價一圓二十錢 小包四百匁

大和田建樹君著 ●歌まなび 正價壹圓五十錢 郵税六錢

佐々木信綱君著 ●詠歌自在 正價壹圓 郵税十二錢

落合直文君著 ●新撰歌典 正價四十錢 郵税八錢

宮澤春文君著 ●作歌自在 正價二十五錢 郵税六錢

東京本町 博文館發兌

(丁の三)

女學生必讀要書

女學世界主筆 松原岩五郎君著

女學生の栞

（新刊）

中判和裝美本
寫眞銅版挿入
正價三十五錢
郵稅六錢

本書目次

學生の巻 學問の早道、理想と忍耐、卒業後の心得、女學生の前途、品性の修業、持參金の活用

主婦の巻 新婦のつとめ、家政學、夫婦の獨立、家事經濟の極意、勤儉と貯蓄、家の品格と主婦の心得、女子と職業、職業の種類

母親の巻 忍耐と勇氣、無形の寶、理想育兒法、母親のつとめ

附錄 下田歌子津田梅子鳩山春子の各女史棚橋絢子三輪田眞佐子の各刀自が女學敎育に關する意見を掲載し**學校案内**には日本女子大學校を始めとして東京産婆講習所に至る三十餘校の科程、修業年限、入學資格、學資等を明細に記載したれば女學生は勿論父兄、主婦等の是非一讀を要すべき良書なり。

本書の目的

此書は女學世界の責任者松原氏が女子敎育に對する多年の抱負を筆にしたるものにて立言の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基き、文章は平易流暢を旨とし、丁寧親切よく利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ、書中マヽ諷諭諧謔の筆を弄して時弊を刺し、或は毒筆を以て單刀直入婦人の弱點ゑぐる處あり。世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親、いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者が萬斛の涙の如何なる點に向つて灑げるかを知りたまふべし

本書の眼目

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（丁の四）

ひめゆり

第三巻第八號

作者と讀者

文學殊に小説の如きものは婦人が作らんとするはたやすき業にあらず、吾人は文事のたしなみある婦人に勸告せん、御身等は自ら小説家たらんと志すよりも、寧ろ忠實なる讀者となりて、文學によりて慰籍を受くるの優れるに若かざるなりと、是れ黒人の爲に氣焔を吐きたる「アンクル、トムス、ケビン」の作者ストウ夫人の言ひし所、吾人は此の語を採つて我が婦人讀者に薦む、卿等は此の夫人の敎ふる如く下手な作家たらんよりも、忠實なる讀者を以て任ぜよ、徒らに筆を走らすを止めて精細なる讀書眼を文藝の上に注ぎ、之に依て慰籍を求むるは其人自身の爲に大なる利益なり、又た忠實なる讀者の多きは俊秀なる作家を促すの力あるを以て社會にも亦た利益なりとす、故に吾人は左の如く言はんと欲す、書くよりは讀め、讀んで自己の趣味を養ひ、社會の好尚を高めよ、と。

小説

若葉のひかり

上　月の巻

東京　玉簾女

『静な晩で御座んすこと、まるで夢を見て居る樣ぢや御座いませんか。』

肺を病める園子は、久々にて訪問れ來りし夫なる海軍大機關士平清水茂雄の腕に寄り懸りつゝ恁う云つたのである。

穩な晩春の月の一夜で、四邊はしつとりと温い露で沾ふたかの樣、總ての物象の配置が落付いて、海邊の方から恁う渚の方へと懸けて、濃い靄が曳いて居て、磯へと引上げられた船、其處等邊の砂路にヒヨロリと立つて居る矮い松の樹などが浮上つた樣になつて見えて居る。

相洲平塚の海岸なので、沖の方からは絶えず、ざ、ざ、ざんぶ〱と何かしら陸路に需める樣な浪の音、月の光りに浪頭の走るのが、白く輝いて見え、さつと呟きながら引いて行く後を、直ぐと大手を揚げてのし懸つて來る。沖の方には、漁船の燈火が二つ三つ動いて、其れが朧の中に又と無う艶麗に見えて、遙かに江の島の灯

らしいのも眼に付く。

『ほんとだねえ。遇々上陸してお前に遇ふ晩が這麼のは、己の幸福なのだねえ。お前寒くはないかい。』

『いゝえ、些つとも……。』

荒い糸織の綿入に、縞チルの單衣を襲衣して、其の上から黄八丈の書生羽織を端折つて居る園子は小指を擧げて、些と鬢の亂れ髪を掻き上げ元氣よく應へた。

去年の春結婚したばかりで、一つ家に夫と起臥して居たのは、廿日足らずの日數で、夫が釜山碇泊の艦に乘込む命を受けて、横須賀へ赴く日、相伴うて鎌倉で過した半日の清遊は、彼女を見舞うた最後の幸福なのであつた。夫が釜山に着した手紙を受取つて、此方から書いて送つて遣つた二度目の書面には、自分が病床に就いた事を知らす悲しい文字を書かねばならなかつたのであつた。

夫からは靜に心を持つて落付いて養生しろとの情深い手紙を受取つて、一人の傭女に附添はれて、此の平塚の別莊へと移住む事となつたのである。去年の暮、夫の茂雄は歸朝はしたのであるが、艦船が俄に呉軍港附になつたので、彼方からは逢ひたいから是非來て呉ろとの事であつたが、園子の容體が許さなかつたので、新婚當座の頃見た華々しい夢を一つの灯の下に見る樂しい境界は、園子の上にも、茂雄の上にも來なかつたのである茂雄は一週間故國の水を呑むで、直ぐと又旅立つて了つたので、其れから五ヶ月目の今、園子の病も少しは怠たつて、茂雄も三週間の休養で艦から放れ、此處に園子と落合ふたのであるが、最早明日此の土地を茂雄は放れねばならないんで、再び園子は其の寂寞なる病牀の中に、夫の幻影を浮べて樂まねばならない孤獨の生涯に入る其の前夜なのである。

『園さん、あんまり氣を使はない樣にねえ、僕は初めから思つて居た、園さんはあんまり神經質で、物事を深

く感ずるから、ひよつとしたらねえ……。』

茂雄は其の沖津白浪湖風に吹曝されて黒く、眼元凛々しく口元の引締まれる勇ましげなる顔を稍伏目にし、嘆息らしき聲の調子にて云ふのであつた。大島紬の袷に、同じ品物の羽織を襲ね、獵打帽子を稍阿彌陀に冠つて居るのである。

『御免なさいましねえ。』

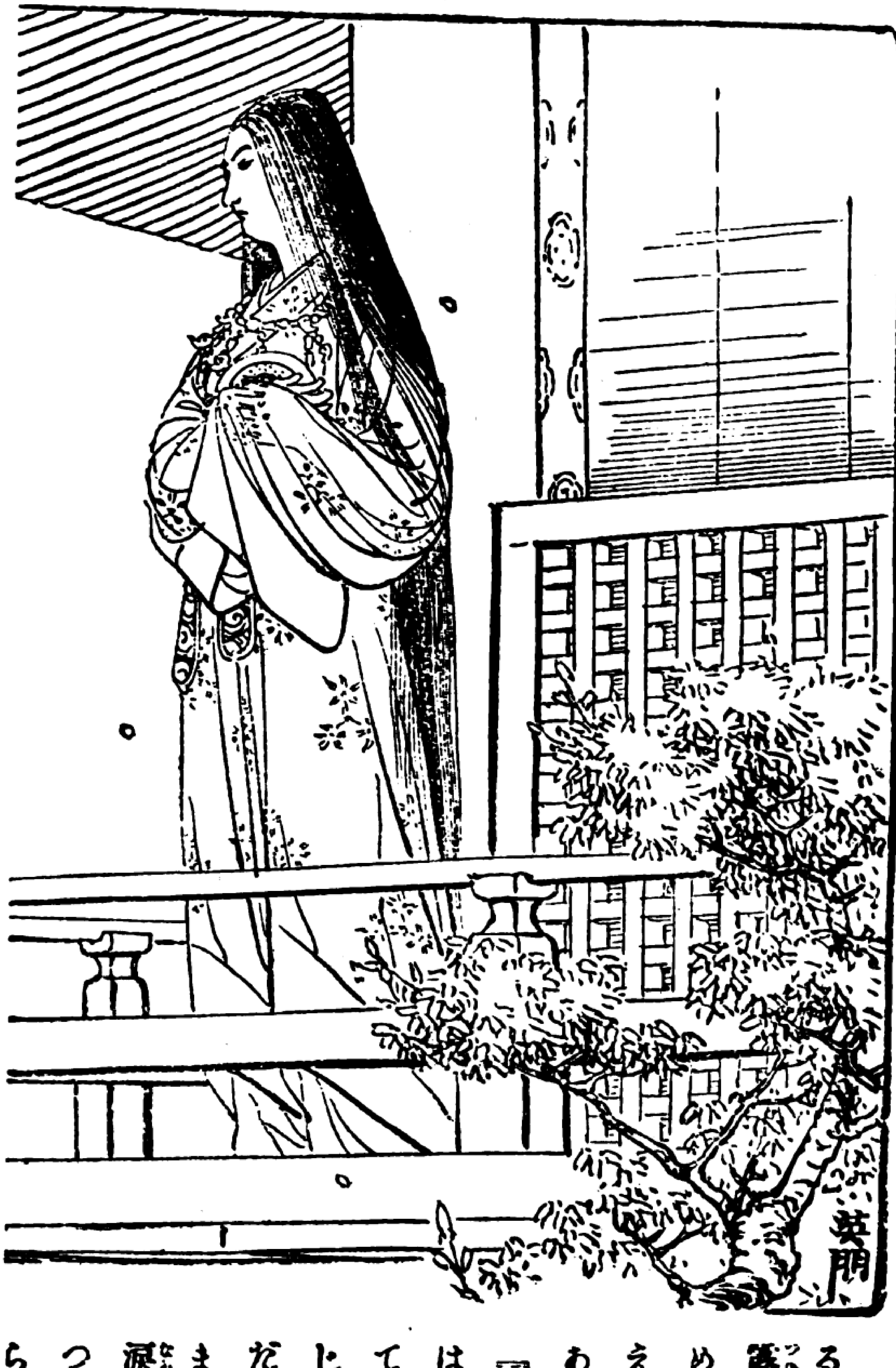
『謝罪る事は何も無いさ。』

『だつて、貴方……。』

詫びしげに云ひし園子の聲はいたく曇りて、密と茂雄の顔を覗いたる眼には露のきらめきが見えたのであつた。

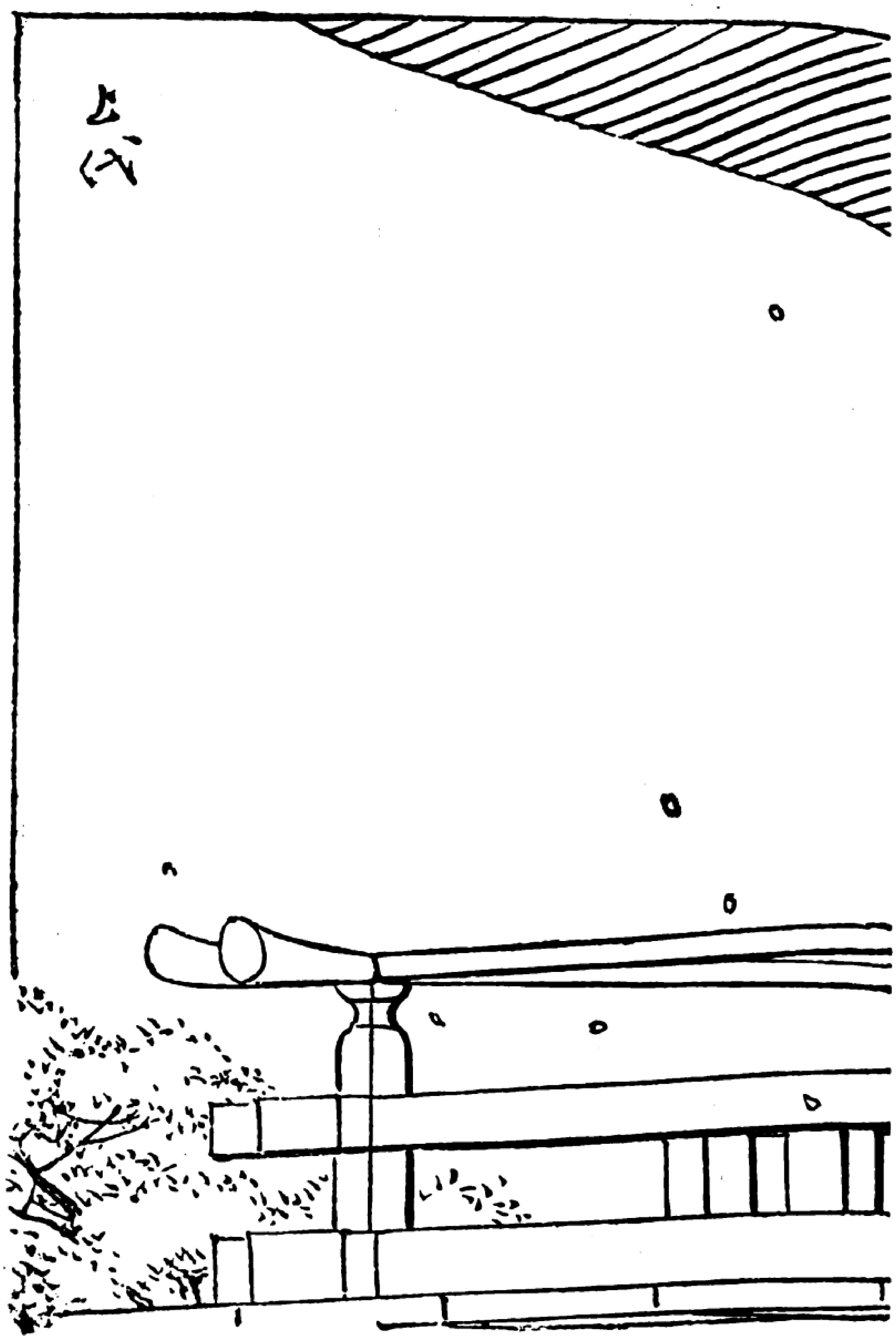
『園さんは奈何して然う感じ深いんだらう。また眼に涙が溜まつたんだらう、さ

上代貴人の世話



わ之で拭き。』快活に云つて、袂から手巾を取出して、園子へと渡して遣ると、園子は受取つて、其の儘ひしと顔に押し當てた。

(風俗畫がたりの一)



『何が那麼に悲しいの、何も泣かなくつたつていゝぢやないか……。』優しく云つて、月の影に、其の横顔をつくづくと眺め、其の瘠せ、の見えた頰に、いたく感動したらしくついと沖の方へと眼を向けて了つた。

砂路の其處此處に、ヒヨロリと月草の花が咲いて居て、其れが月の光りを受けて白く浮き上り、暖な風が吹いて來る毎に、音を立てずに果敢なげに動く。松林を超えて遠くの方で銀笛の音が聞え、其れがしつとりとした物憐な音色で響いて來る。

『園さん、何も運命さ、呆めて了ふさ。何も不充ない事にくよ〳〵爲なくつてもいゝぢやないか。人が此の世に產れて來たなら一度は死な無くちやならないものぢやないか、眞實に死ぬのを恐れて居だなら、一寸の間だつて人間は落付いて居られないぢやないか……僕は毎時も然う思つて居るよ。人間と云ふものは、此の世に產れて來る時、神の手から番號札を渡されて居るんで、其の番號札の表に、丁と自分の行く道は詳しく書き記されて居るんで、何歲の時に恁ふ云ふ悲しい目に遇ひ、何歲の時には、恁ふ云ふ嬉しい目に遇ひ、其れから女ならば、妻ともなるし、母ともならうし、男なれば、夫ともなり、父ともなつて、幾歲迄生きて居られて、其れから墓場へ行くんだつてねえ、丁と定まつて居る人だと思つて居るのさ。園さん然うぢやないか。』

『へい……。』稍鼻聲の返辭をしたが茂雄の今の言葉を熱心に聞いて居たらしく、眼に當てゝ居た手巾を放して、茂雄の顏を見上げた。

『園さん然うは思はないかい。僕はねえ、園さんに、何那麼病は直に治癒る、心配するには及ばないと、那麼一時の氣休めの僞虚を云ふに忍びない。園さんだつて那麼言葉を僕の口からは聞きたく無からうしねえ……。』

些と茂雄は言葉を途切らしたが。

『園さん、肺を病らつて居るのが何が恐いの。つまり死ぬのを恐れるからさ。那麼事つちや生きて居られや爲ないぢやないか。僕なんか毎時船板一枚地獄の上に、浪や風と戰つて居るんで、其れでまかり間違へば大砲の彈丸の下も潜らなくちやならないんだもの。生きて居るのは、死神が襲ふて來るのを待つて居る樣なものぢやないか……不充ない。病氣になつたからつて泣くなんて、お止しなさいね。』態と勢よく云ひ放つた。

『はい。』

園子は、微に返辭をしたが、其の愁はしげな顏に微笑を寄せた。『ぢや、園さんもう歸りましやう、寒くなつて

來た樣だから身體に障つちやいけないから。』

『はい。』

何事にも夫の言葉に諾々として、園子は然ながら松の枝に搦む白藤の樣に、茂雄の肩に凭り懸つて歩むのであつた。

中彈奏の卷

『久し振りだね、園さんのバイヲリンを聽くのは、息切れが爲やしないかい。』

『いゝえ、些つとも……。』

云ひながら園子は、其の肩から洋鼓弓を下に下して、右の手の弓を下に置くのであつた。今稍長い進行曲の一曲を奏し終へた所なので、園子は其の頰に少し血の氣を見せ、華やかな情感を胸に持つて居るらしう、其の眼を活々とさし、額を汗ばまして居るのである。

穩かな春の夜の月は、二人が座つて居る窓の邊を照らして、此の夜の此の塲を、いとも美くしく又とない樂しい塲所として照らし出して居る。迷ふ樣な風が吹き入つて來て、部屋の中の灯火を動かすと、名も知らぬ虫がぶう〳〵と迂鳴りながら其の灯の周圍を二度三度廻るのであつたが、其の儘ついと出て往つて了つて、部屋は一しきり森とした樣になつた。茂雄は情感の滿ち渡つた顏を其方へと向けて。『園さん、僕は今其れ二人で、新婚旅行した時、江の島の金龜樓で宿つた事を思ひ出したよ。』

『然うでしたねえ、あの晩は丁度今夜の樣なお月夜の晩でしたねえ。』

『あゝ然うだつた。園さんが欄干に靠れて、バイヲリンを彈ひて、僕の今度此度に合奏したんだもの……。』

「おほ、ほ、ほヽヽヽ。能く覺えて被入いますね、貴方今夜も御唱ひ遊ばせ、私は彈き申ませうから……。」
「あヽ、ぢや一つ遣つて見やうかねえ。」園子は再び弓を右手に取り上げ、バイヲリンを程よく搆へるのであつたが、茂雄は初めは笑を含みながら唱ひ出すのであつた。
割合に唱ひ破られた聲なので、園子の巧に操る弓と宜く合つて歌は唱ひ終へられた。伴奏者の頰にはいと滿足げな微笑が上り、唱歌者の頰にも樂しげな微笑が上り、其の愛に輝いた眼は、愛に輝いた眼と見合はされ、二人は瞬時、愛の天國に住む者の心を抱くのであつた。が、次の瞬時には先づ園子の顏に悲哀な影が動いて、續いて茂雄の顏にもうすら淋しい影が動くのであつたが、其の顏を見せぬ樣に先づ茂雄の方からついと側を見向くと、園子は其を追ふ樣にして眼を向けたが、之もつい側を向いて了つた。
「あヽ面白かつた。園さん僕は上手いだらう。」
思ひ回したものか、もう此方へと向直つた茂雄は愉快氣に態ぅ云ふのであつた。
「ほんとにねえ……私も永らく御聽き申しませんでした。もう一つ何か遣つて頂きたぅ存じますね。」
「あは、は、はヽヽ然ぅ譽められるともう一つ遣らざあならないね、然しもう止めやう。あんまり遣ると藝が安價ぱくなるからねえ。」
「まああんな事被仰いますわ。」園子は華かに云つて退けるのであつたが。
「さあ請願もう一つ。」
「いや、本統にもうよさう、園さんが勞れるだらうから。」
「いヽえ、私は些つとも……お聞き申したいんですから。」
「然うなの。」沈んだ聲で茂雄は返辭して、覗ふ樣にして鋭く其の眼を園子の顏へ向けるのであつたが、よし

今宵一夜の思出に、其の頰に麗はしき血色上り、眼は美くしく輝いて居るとは云へ、頰の肉のいたく落ちて、見るも可憫らして迄も憔悴を極めた面貌には、坐ろに傷心せずには茂雄は居られなかつた。眼敏く認めた園子は、弓を下に置いた手を突と差し延ばし、掌の裏表を翻し、五本の指を擴げ、二の腕の邊り迄も袖をたくし上げて見せ。

『私本統に瘠せて居りますね。』嫣然として云ふのである。

『いゝさ。其の中に肥る事もあらうさ。』事もなげに云つて。

『園さん、水夫の中にや隨分藝人が居るよ。』

『然うですかい。』

『水夫になるつて云ふ奴だから、陸に居りや其りや暴者さ、親兄弟に見放されたと云ふ樣な奴も尠くないがね其れ夫け女の子に可愛がられた聾合なんだから、どれもこれも其れ相當の藝を持つて、踊りを踊る奴やら、三味を彈くんやら、笛を吹くのもあるしね、遠國の奴にや、僕等が聞いた事のない四つ竹で節を取るのもあるがねえ、仲に只だ一人バイヲリンを彈くのが居るのさ。』

云つてから茂雄は側の煙草の筥を引寄せ、卷煙草の一本をつまみ上げ、煙草盆の火を移しながら。『其奴に僕は卒中彈いて貰つては、唱つて居たんだが、少し上手になつたと思ふが、園さん然う思はないかい。』云ひ切つて、靜に煙草を燻らすのであつた。『然ですね……。』園子は微笑みながら、人焦らしする樣に未だ何とも返辭せぬ前に、彼方の階子段に足音を立てゝ、園子を三年起し世話する傭婆は上つて來た。もとより白髮頭の、顏のしやくんだ、皺の多い、鼻の扁平い、口の小さい、見た所直ぐ正直で深切らしいのである。『旦那樣もう一時で御座いますよ。まあ其處の窓が明いて居るぢや御座いませんか。』

獨言の樣に云つて、二人の背後から廻りながら、窓を閉めに懸るのである。些と云ふのを忘れて居たが、此の別墅は、二階丈け西洋風に建築られて居るのである。

『あゝ然うだつたか、談話に實が入つたのぢやない。唱歌に根が生えて長なつた。ぢや園さん眠やうぢやないか。』

『えゝ…。』

園子は未だ眠るのを欲せない樣な返辭である

『起きて談して居るのもいゝが、明日は僕も早いんだからね。』

『然うで御座んすね。』の云ひながら

奈良朝



園子も立ち上つた

『あのお床は、下の六疊にお取り申しましたから…。』

老婢は豆豆しく其の邊りを取り片付けに懸るので、茂

雄が前に立つて、二人は二階を下に降るのであつた。產れた時には名も知り合はず、所も知り合はなんだ異性の二人が、不思議な愛情の糸に繰られ、日光の輝く、月の照る、蒼い大空の下、清い水の流る、此の世界に、夫婦と呼ばれて、手と手を握り合ひ心を一つにし、影を一つにする事は、恐らく今宵が其の終極なのであらう。

宮女　（時代風俗畫がたり二）



下　松原の巻

『旦那様、お車が參りましたが……。』信婆のお關は、次の間から襖の閉切つた此方の室へと恁う聲を懸けた。

「あゝ然うか……。」
茂雄の稍鈍つた聲が聞えたが、園子は何とも云はなかつた。暫時してから襖子が開いて、二人の姿は見えたが茂雄はもう儼然たる大機關士の正服で、其の腰にした短劔の鍔の輝くのが、目馴れぬ備婆の眼には神々しく見ゆるのであつたが、園子の眼は奈何やら濕んで、眼の縁さへ少し赤くなつて居る。
「ねえ備婆や、車は三臺來て居るんだらうね。」
「否え、あの二臺なので御座います。」
「然う……。」
園子は辛氣臭さうな顏をしたが、早や一人の此邊の田舍車夫は二行李の荷物を家から運び出して車に乘せて居るのである。旦那の御出立と云ふので、平塚の町から備婆の知己の者が二人ばかりも手傳ひに來て居て、臺所の方は可なりに賑はい、小供の聲も交ぢつて聞えるのであつた。
「あの備婆、未だ發車の時間迄には一時間ばかしあるんだから……。」
云ひながら茂雄は見て居た時計を衣兜にと入れ。
「乃公は歩いて行かうと思ふから、お前あの臺所に來て居る老爺に命令けて、荷物を宰領して前に停車場に遣つて置いてお呉れ。」
「老婆や、私其處迄御見送り申さうと思ふから。」
園子も言葉を添へるのであつた。
「はい、然うで御座いますか、其れぢや然う申附けませう。」
云ひながら臺所の方へと引込んで往つたが軈て、備婆に引連られて、六十餘りの頭の禿げた、其れでも手織木

綿の袷に、小倉の帶をきちんと締めた克明らしいのが出て來て、其の頭を地に付けんばかりに丁寧に辭義を此方にしてから、物馴れないと見え、萬事傭婆のお關に吩咐けられて、只

『はい〳〵。』と返辭して、後の車に乘つて、家の前の砂路を、松原を縫ふて、彼方へと、俥は轍の痕を深う印けて徃つて了ふのであつた。

『私もお供いたしませうか。』傭婆が云ふと。

『然うねえ……。』と、玄關を降り懸けながら、園子は考える態に云ふのであつたが、

『歸りが何だから來て貰ふがいゝよ。』

もう靴を穿いて一足前に表へと出た茂雄が口を入れたので、

『えい、然うですね……其れぢや傭婆來てお呉れ。』

手にして信玄袋を老媼に渡して、園子も表へと出るのであつた。

朝の華やかな日光が、透き通つた大空から斜に落とし懸けて來て、二人の影を家の前に長う幷べて印し、園子の束髮の蔭影は、丁度黃色く咲いて居る月草の根元迄も延びて、其の花の蘂には白い胡蝶が一つ淋しく夢を見て居る樣に、羽を休めて居るのである。

『御機嫌よう……。』

眼に淚を溜めんばかりに、田舍人の情深く、傭婆の姪に當る女とかで、其の五歲になる女の子を引連れて、表に立つて見送るのであつた。

茂雄も此の家を離るゝのを厭ふらしく、身分に相應しからざる禮を回し、偖て園子と立幷むで步むのであつたが、折から沖の方から朝風の淸しいのが吹渡つて來て、園子の長い袂を飜し、紅絹裏の赤いのを見せたが、

ぱつと薫り高い白薔薇の香ひが立つのであつた。
臺所口から出たと見え、傭婆のお關は、表口の所で其の姪と二言三言話すのであつたが、二人が歩むのとは、十間ばかりも距を取つて附隨ふのであつた。

『鳥も通はぬやンれ、八丈が島へ、やれ〳〵遣らるゝ此の身は厭はねど……やンれやれ〳〵後に殘りし妻や子が……やンれやれ〳〵……なあ。』

松原越しに、子供の聲ががや〳〵として聞えたかと思ふと、一際節も冴えた恁うした馬士歌が耳に入るのであつた。

曳耳を立てゝ聞いて居た茂雄の眼は異様な光りに滿ちて輝くのであつたが、見る間に感慨深い色が、其の頰に動くのであつた。園子は、何も聞き付けぬ態を裝ふのであつたが、其の心をいたくも搔亂されたのであらう、何か云はうとした口を噤むで、其の儘あらぬ方に眼を遣るのであつた。

『園さん。』

『はい。』

『僕が往つて了つたら淋しからうねえ。』

『はい。』

園子は思迫つたのか、俯頭いて了つた。

『園さん、身體は分れて居たつても、心はいつ迄も一つなんだ……。』

沈んだ調子で、未だ何か云ひ續け樣とする時、今唱つた仲間なのであらう。十五六を頭に、七八つ迄、女の子も男の子も交ぢつて、銀杏返しに毬栗頭、坊主頭にくぢや〳〵卷きのと、汐風に烘けて、いづれに身代りにな

る顔立はなく、一様に破れ草履を穿いた村の童男童女が八九人ばかりも横手の松原から、不意に二人の前に顕はれたので、茂雄は口を噤んで、つい園子の側を放れて歩むのであつた。

松葉の落葉を掻拾ふらしい、背負籠に熊手を持つのもあつて、一様に不思議な眼を睜つて二人を見るのであつたが、氣の利いたらしい年嵩の女の子が茂雄の軍人姿に御辭義をすると、續いて其の小さな頭をばたばたと順番に降すのであつたが、もう歌も唱はず、聲を低めて、直ぐ後の松原へ這入つて了ふのであつた。

頬白の切りに囀づるのが聞えて道は少し曲途となつた。僱婆は小半町餘りも、もう遲れて了つて二人の眼からは見えなかつた。松と松と手を延はし合ふて居る下の砂道を、二人は靜に歩むのであるが、廣い松原に人の跫音一つ聞えず、昨夜降つた露は未だ乾いて居ぬらしいしつとりとした氣勢の空氣は、松原の奥から動いて來て二人は思はぬ爽快を覺えるのであつた。

『園さん、僕が此方へ來て居る間、通り雨が二度あつたばかりで、海も暴れなんだが、平塚は毎時這麽のかい。』

わらぬ事を云ひながら、再び肩と肩と觸るゝばかりに近寄るのであつた。

『えい、ほんとに此處は氣候はいゝんで御座いますよ。』

『然うだらう……。』と云つたが言葉は又も途切れて、二人は無言に歩き出した。

もう平塚の町近う來たらしい。がやがやと市の聲が耳にして來て、松原は半町餘りで盡きて了ふのである。其れと心附いたらしい、茂雄は突と顔を上げて、四邊を瞻したが。

『園さん。』と、呼んで佇立つて了つた。

『はい。』と返事して、園子も佇立つたが、如何にも悄然たる態で、肩を落して兩手を前に、無限の悲哀が間近う迫まつて來るのを、心に思ひ惱むで居るのを明に示して居る。

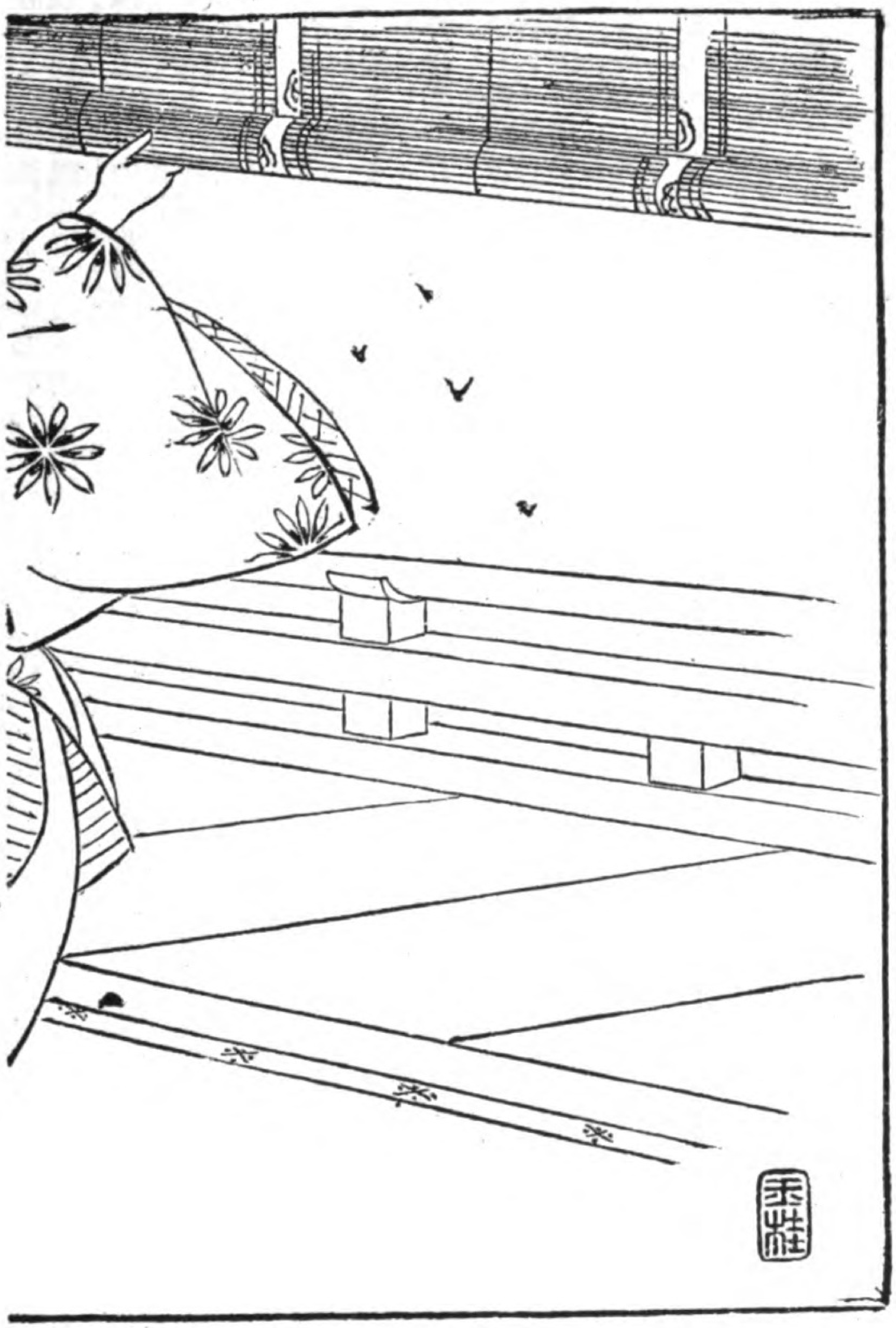
『園さん。』茂雄は更に呼んだが。

『もう此處で別れるとしやう。何處迄送つて貰つたつて名殘は盡きないんだから……。』

云ふ顔は引締つて、少しの笑を置く餘地は無い樣に見えた。

『はい。』園子は眼を大きう瞻つたが、今にも涙が零れ出さうにするのを押えて居るらしい、唇を堅く引結んで居るのである。

王朝時代



『其れぢや身體を大切にねえ、充分養生を爲て下さいねえ。今年の末にやまた逢へるからねえ。』

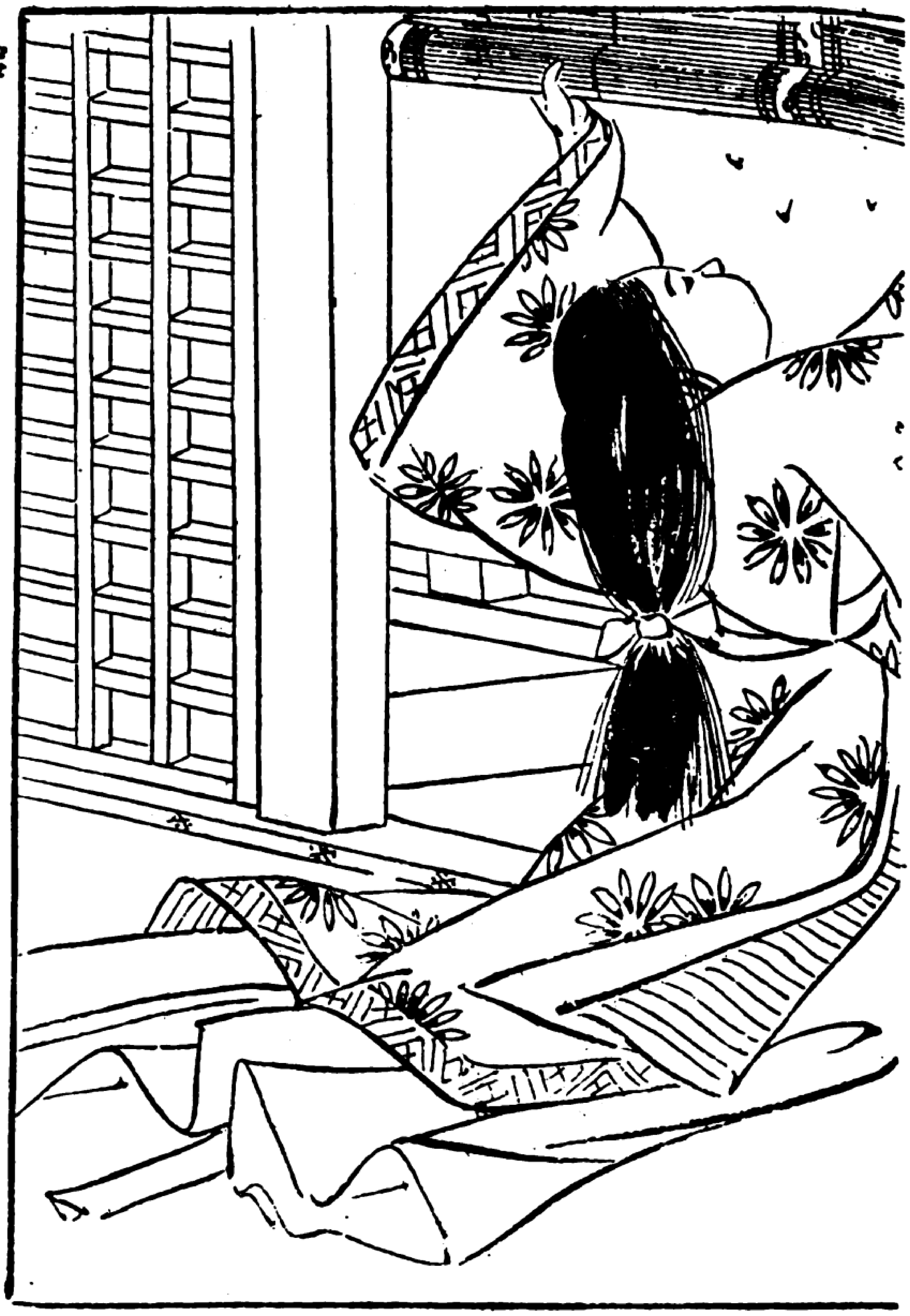
『はい。』

最早怺え切れず、園子は顔を俯目にして下の砂路へと、茂き露の樣にぽとぽと涙を落すのであつたが餘りの無情さで堪えられなかつたらしい、後

へと思はず悄々とするので、茂雄は突と寄り添つて、其の手を取りながら。

『園さん、何だね、確りお爲なさい、那麼事爲られちや僕は心殘りがして出立

風俗畫がたり（三）



れないぢやないか。』

『はい。』齒を食ひ縛るらしう微に返辭したが其の儘ひたと茂雄に寄り添ひ、自分の袖を上げて茂雄

の肩の邊りで泣き咽ぶのであつた。

茂雄は拂ひ除け樣ともせず、つく〴〵と其の横顔を眺入り、之も同じ思ひに睫毛を少し濕し、眼を瞑するのであつたが、丁度後から追付いて來た傭婆の足音が、とぼ〳〵と聞えて來たので、はつとして、園子の肩へと手を遣り。

『さあお止しなさい、僱婆が來たから見つともない、何だまた逢はれないぢやあるまいし、さあ……。』云ひながら、園子を放したものゝ、園子は猶袖を顏に押し當てた儘泣き止みさうに爲ないのであつたが、老婆は早や間近う、彼方の途に其の姿を見せるのであつた。

『園さん確りお爲なさい。』

『はい。』と、漸々の事で、顏に當てた袖を放し、淚の目で夫の顏を見上ぐるのであつた。

儼然として茂雄は云ひ放つのであつた。

『ぢや、いゝか、之で分れやう、吳へ着いたら直ぐ手紙を出さうし、朝鮮へ往つても手紙は怠らず出さうから園さんからもねえ……。』

『はい。』と云つて、また園子は今度はいつの間にか袂から取出した手巾を眼に當てる。

『養生お爲なさい、お前のは養生一つで奈何ともなるんだから……。』

『はい。』と、園子が返辭する時、僱婆は側近う遣つて來たので、茂雄は、其方を回顧つて、

『おや僱婆、賴むだよ、停車場迄來て貰つても同じ事だから、此處で別れやうと思ふから……。』

『然樣で御座いますか、何なら停車場迄、夫人樣も其方が……。』

『いゝや、此處のがいゝ、滊車の窓からプラットホームに立つてる姿を見るのは辛いからねえ。』

『其れも然うで御座いますね。』老媼の應へる後から。

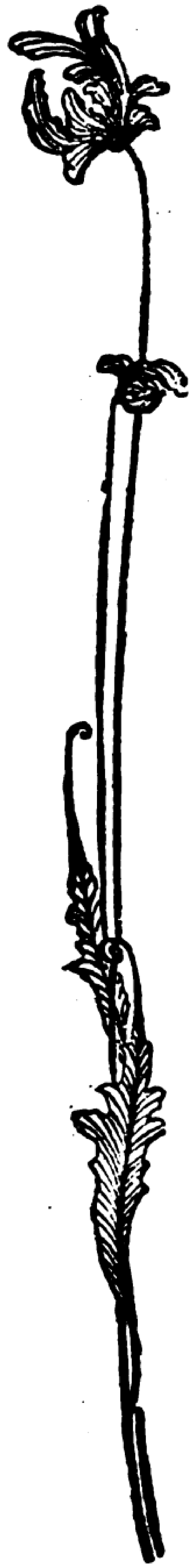
『其れぢや、園さん御機嫌よう、僱婆も御機嫌よう。』云ひながら行懸け樣とする。

『旦那樣。』園子が呼止めたのであつた。

『なに……。』回顧ると。

「旦那様、之が一生の御別れで御座いまする。二度と御目に懸る事が出來ませぬ。」
「真、真個な、那麼事が……。」
「いゝえ然うで御座います……左様なら御機嫌能う末長く御榮え下さいまし。」
生別死別の限りない悲痛の色は園子の顔に動いて居るのであつた。
「そ、那麼事が……。」と云つて茂雄は少し顔の色を變へさまに近寄らうとしたが思回したらしく。
「左様なら御機嫌よう、養生なさい。」
「左様なら御機嫌よう。」
「左様なら御機嫌よろしく、またの御出でを待ちまする。」
送るもの、送らるゝもの共涙で、茂雄の顔にも明に之が今生での最後の別離であるとの事が印象されて居る。
前方へと次第に砂路に足音を立てゝ距つて行く夫の姿を、園子は潤むだ眼で飽かず〳〵眺めて居たが、些とした松が枝が茂雄の肩を隠すと直ぐ、園子はよゝとばかり聲を立て、よろ〳〵として傴婆の肩に靠縋るのであつたが、もう茂雄の姿は全く隠れて了つて、其の足音のみ、松原の中に次第〳〵に距たつて行くのであつた。

（完）



寫生の花

ひめゆり

田山花袋

一

最早既に四十餘日を經たり。机に凭りてこの間の事を追想すれば、さま〴〵なる事情、區々なる人物、いろいろなる場景さながら走馬燈を見たるやうに明かにしかも早くわが眼前をたゞよひ行く。電氣燈のかゞやきわたれる新築の洋館に、花のごとくかざり立てたる令孃達の立姿、親戚、諸侯、及び當路者に贈るべき歳晩のおくり物、歳晩の夜のかしましき騷ぎ、注連かざり、謠曲の式、わが名呼びて肩に凭りかゝり給ひし少き姫の美しき姿、新年の式、舊臣の賀正、酒の席にいたく醉ひて家扶を呼び捨にしたる舊臣、赤き顏、おもしろき夜の歌牌會、女中共の喧しき噂、それよりそれへと思出されて、殆ど夢にはあらずやと疑はる。

このさまこそ人生の活劇なれ。交際社會の一面なれ。この中に交りて巧に手綱を取り、しかも自らこれを樂むはとに非ざれば、人はこの現世に用ゐらるゝこと能はざるべし。こはかの家從見習なる林行雄が言なり。まことに然ならん。この複雜なる世を圓滿に渡り行かんとならば、さばかりの用意なくては叶はぬこと勿論なるべし。されとわれはこの現社會に滿足することを得べきものにはあらず。

人間は何ぞ、人生は何ぞ、社會は何ぞ、皆是れはかなきものにはあらずや。幾千年、幾萬年の上より見れば、唯是れ一塲の夢のごとし。あゝわれいかでかこのはかなき世に更にはかなき名譽、財寶、快樂をもとめてやむべき。

然らば汝は何を爲さんが爲めに生くるか、何の爲めに一瞬も早く死に就かざるかといふ人あらむ。まことに然

り、われに求むるものあらずば我は早く已に死せしに相違なし。されどわれは猶求むるものあり、猶死する事能はざるものなり。

そは美なり、美を愛し美をもとむる念あるが爲なり。

否、わが厭世の念はこの美をもとむる念をさへ捨てゝ了へと命ずる時あり。美といふものははかなきものなる事を示して、われにそれを斷念させんと迫る時あり。われはをり〳〵太く迷ひて、執りかけたる畫筆をも捨て厚き君公の恩をも捨て、故郷なる老いたる祖父母をも捨てゝ、捨てゝ、捨てゝ、獨り死せんかとも思ひ、又は山に入らんかとも思ひしこと幾度なるを知らず。されどわれには幸か、不幸か、美を見るの眼あり、美に全身を捧ぐるを辭せざるやさしき心あり。

我や人生の巴渦の中に漂ふを願はず、浮きたる榮華の夢を見んことを願はず、虚僞と虚僞とを戰はして陰にて相陷阱せんとする如きはかなき交際界に入らんことを願はず、門戸を張り、衣食を美にし、輕車揚々として、街路を走らするの虚飾を願はず、願ふは只美のみ、わが心をして滿足せしむる一葉の畫圖のみ。

われはこの一ヶ月來、喧擾と煩雜と多忙との中にありながらも、今年の七月までに落成せしむべきかの塔の畫のことに就て、いろ〳〵さま〳〵なる空想を費したり。否、その考は着々歩を進めて、組物を紙上に映す爲に用ゆべき幻燈機械の工夫にまで及べり。

二寸ばかりの小圖をひろげて、三四尺の大さに映さんにはその幻燈機械は飽まで精良にして且大なるものならざるべからず。されどわれは貧書生の身の、買ふことは勿論、借りんにだにいと覺束なきをいかにかせむ。知人の中にて持ちたるものもあれど、そは小にして用ゆるに足らねば詮なし。かくてわが工夫は愈進みて、遂に御殿の中に藏められたる徑二寸ばかりなるレンスを應用せんとしたり。このレンスを應用して、幻燈を映した

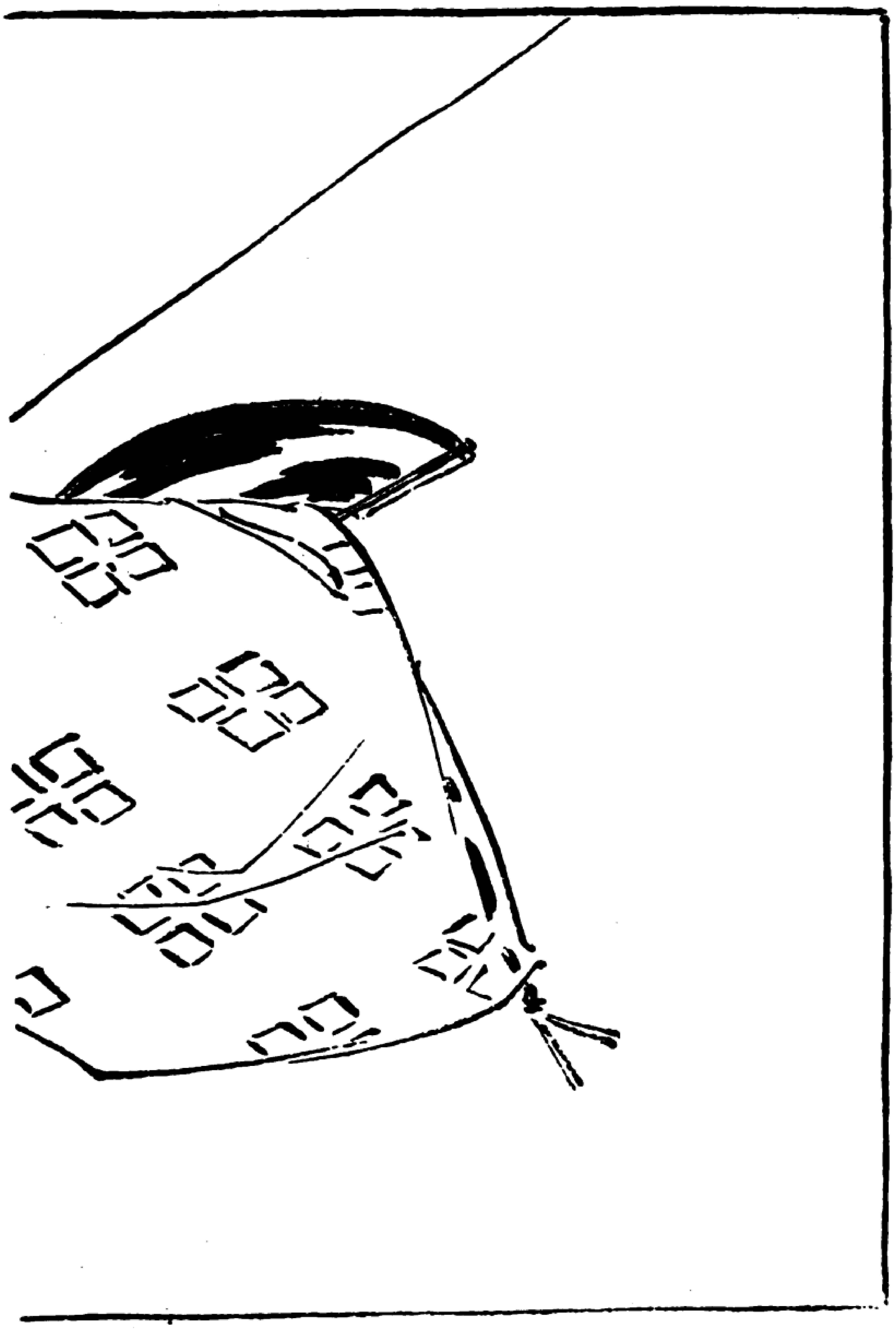
る上を縫取りて、その組物の輪郭を作らんと思ひ始めたり。されどこれを用ゆべき大なる燈火なし。たとへありたりとて夜燈火を用ゐて殊更めかしく勞作せんことは、君公は咎め給はずとも、御殿の人々に對して遠慮せねばならじ。いかにすべき。われは遂にわが居れる二階の一室を閉切り、これを闇の夜と同じやうになし、其窓の戸に一つの穴を穿ち、其處より太陽の光線を引きて、これにて燈火の代用を爲すことに心を決しぬ。

午后、いろ〳〵準備を整へて試みしに、存外の好結果なり。

嬉しさに堪へず。

されど翻つて思ふ、この喜悦の遂に何の意味たるを知らず。幻燈の工夫旨く出來たりとて美術には何の關係だになきにあらずや。わゝかゝるはかなき工夫に空しく日を費し腦を費すは何たる情

鎌倉時代

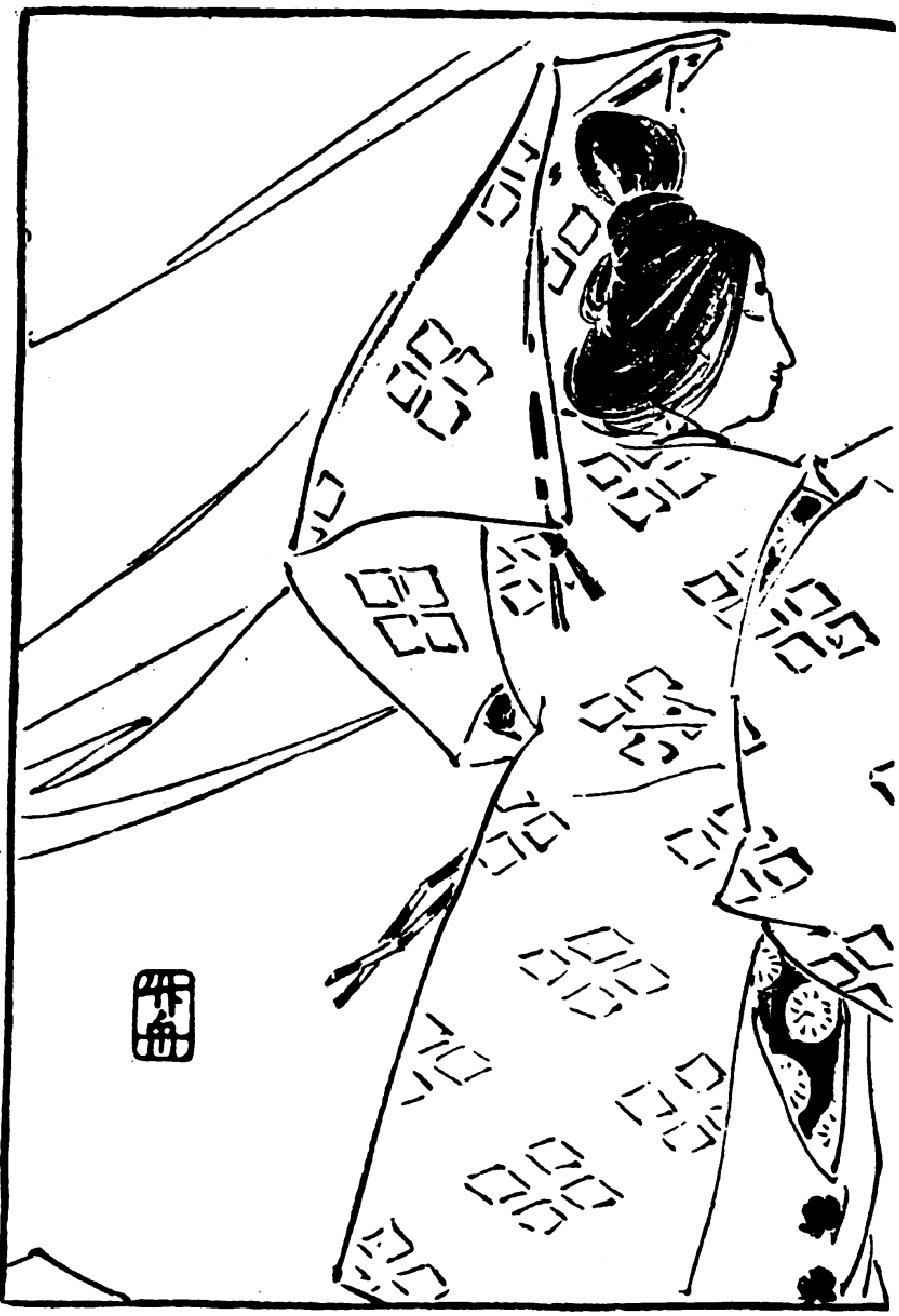


なき事なるぞ。

二

準備は先意の如く成就したれば、わが理想に適ひたる塔の寫眞をもとめて、それを幻燈用に製版すべき爲め、この數日間を我はさまぐに苦心したり。初めの日は淺草に行きて、いろく寫眞師を說き付けて、適當なる地位より撮影して貰はんと逢つて頼みたれど意の如くならずして歸り、次の日は芝、麻布わたりまでも適當なる塔の寫眞なきかと尋ね廻りたれどこれも同じく手を空しくして歸り來ぬ。殆ど策盡きて、今は詮方なしと思ひし時、不圖お茶の水橋の畔の寫眞師淸陽館を思出し、かしこの主人は塔の寫眞多く持ち居る筈なればと夕暮より行きて見ぬ。折よくも主人店頭にありて、塔の入用なる所以など親切に問はるゝに、われは詳しくその一伍一什を語り、併せて

(風俗畫がたり四)



浅草の寫眞師の浮薄をそれとなく打出せしに、そは氣の毒なれば周旋して進せんといふ。我はうれしさに堪へず、其道に知己なき身の、幾重にも頼みて、やがて二階に伴はれて、塔の寫眞を幾つとなく見しに、奈良の東大寺の塔の言ひやうもなくわが意に適ひたるを發見したり。われは喜びてこれを購め、そを幻燈寫眞に製せんことを主人に依頼したり。主人はそをその道の專門家某氏に依頼し遣らんことを約し呉れたり。今日の夕暮にはその幻燈寫眞出來上る筈なり。

夕暮――本郷春木町なる某氏の家を訪ひてその出來上りたる幻燈寫眞を受取り、喜びてわが一室に歸り來ぬ。明日はその事業に取りかゝる事を得んと思ひて、眠に就きしに、夢に、幻燈取り居るところに君公來りて、つまらぬ事を爲し居るものかな、汝はそれにても美術家と烈しく叱せられたり。

わくる日は終日雨降りて幻燈を映す能はず。そのわくる日も曇天にて日出でず、されど屋上に殘れる雪ありていと明るし、映すことを得るやうに思はれたれば、試みて見しに、薄すけれど少し映れり。

然るにその翌朝は猶雨頻りに降りて、纔かの希望なりし雪も殘りなく解けぬ。

わが性急なる性はこの晴るゝことなき雨をいかに悲しく情なく思ひけむ。この朝目覺めて點滴の檐端に滴る音を聞きし時などは、我は殆ど聲を擧げて號泣せんとしたり。今日の業たとへ思ふまゝに首尾よく行きたりとて美術の上には何の功にもならぬものを、かゝる事にかゝつらひて一日一日と徒に過ぎ行くわが身の悲しさよ。

三

長雨は漸く晴れて、一天の晴色拭ふがごとし。雀の軒端に囀る聲、風の寒く枯林を鳴らす音、その心地よきこと譬ふるにものなし。われは活潑に起きて、活潑に戸を明け、朝餐を畢るや否、頃日來計畫したる幻燈の準備を

殘りなく整へ、直ちにその撮影にと取懸りぬ。

先初めに畫の大さほどなる綠暈引きたる美濃紙を古屛風の上に水張して、それを室の一面に立置き、さて室を闇にしたる後、豫め明け置きたる文久錢ほどの穴のところに幻燈寫眞を挿みたるかのレンスを宛つれば、太陽の光線はそを透して、薄く倒まなる五重塔をその立てかけ置きたる紙面へと映すなり。われは片手に鉛筆片手に消護謨を携へて、その薄く覺束なき組物の影を一生懸命に描き始めぬ。始めの中は氣乘り情激したれば、その一部分を寫すにも何の苦痛をも感ぜざりしが、次第に組物の緻密になり行くに從ひて、その描寫はいよ〳〵難く、果ては殆どわが力には及ばじと思はるゝこと幾度なるを知らず。或は忘れたる幾何畫法の書籍を繙きてその影の及ばざる所を考へ、或は自らわが頭腦を痛めて、その足らざる所を補ふなど、それは〳〵まことに一方の苦みにはあらざりき。

されどわが強き忍耐の心と倦まざる勉勵の力とは遂にその百難を排し得て、夕日の影の新築の洋館の屋根にかゝらんとする頃までには最早下階の一つを殘したるのみにて、餘は悉くその大略をうつし終りぬ。

かくだにして置かんには、最早重荷を卸したるに均し。これより後の墨の繪取りはさして難しき事にもあらねば。かく思ひたれば、我は活潑に筆を捨て、室の限りなく散亂したるを片附けもせで、其儘落つるやうにとた〳〵と二階の階子を下り、椽側の敷石に置かれたる日光下駄を突懸て庭に出でぬ。

空の色は淸く澄みて、殆ど淨玻璃を張りたるもの〻如く見ゆ。空氣はまだ寒けれど、何處かに春の景色の籠りたるごとくも思はる。洋館の西の屋根に落ちて行きたる夕日の影は次第に微かに微かになりて、今は只その庭の一隅なる杉の大樹の一端に殘れるのみ。前なるニコライの敎堂よりはかなしげなる夕暮の祈禱の鐘の音聞ゆ。

われは晴れたる空氣の下に健康なる呼吸を感じつゝ、小松、ゆづる葉、石燈籠、築山などの間を、うね〳〵とめぐれる細き路傳ひながらいと靜かに歩み行きぬ。胸には滿足の念みち〳〵たり。遂に、椿、柏などの木蔭に造られたる小さき亭の前に來て、其處に備へられたる長き榻の上に倒るゝごとく腰をやすめぬ。此時身はいたく疲勞したるを覺えつ。

少時は、恍惚として、何を思ひ、何を考へしや自ら知らず。ふと心付けば、胸にはわるやさしく美しき念わりて曾て西洋のサロンの帖に見たる榻に後向になつて居れるわかき男女の洋畫それとなく思ひ出だされぬ。かの二人が息へるは恰もての庭の



(時代風俗)

漾のごとくなりしがと書思ひけて、まてとにかがの二人のさまのわが腦たを撲つてとりかく烈しきは何故なる五か、二人の胸に限りなき美しき感情の漲りたるが爲なるか。かく思へば何となく人のなつかしきさうなる心地して堪へ難し。もしかの男の我ならば如何ならん、我のさる境遇に陷いりたるならばいかならん、俄に心付きて、われながら餘りなる空想と思ひ返して、獨り心中に微笑みぬ。



夕餐を終るや否、再び二階の一室に入りて、かの晝間うつしたる塔の輪廓の線がきを爲し始めたり。調子づきたる筆は、進むこと常より早く、また幾時をも經ぬに、われはその塔の三分の一を書き終りぬ。少しく腕に疲

勞を覺えたれば、少時やすみて後にてぞと筆を傍に投じて、さて見るともなく見れば、こはいかに！今迄少しも氣付かざりし塔の形のいたく右に曲りて居れるを發見したり。のみならず、猶よく見れば、上部は細かに、下部は疎く、下部は大きく、上部は狹く、その不調子なること大方ならず。われは驚きて、こはわが眼の亂れたるゆゑかと再び瞳を定めて見たり。されど曲れるは依然曲れるにて、不調子は依然不調子なり。思ふに、こは幻燈の光線の曲折より起りたる誤なるべし。一時は非常に落膽したれど、又奮ひて修正して見ばやと思ひぬ。さて二ところ三ところ直したれど、とても直し終ふすべくもあらざるに、肝癪を起して、終日勞働してつくりたる圖に、紙も破れよと棒を引きぬ。四五十日間を費して漸く工夫したる幻燈は何の効をも爲ずしてやみぬ。あゝ我は如何にせむ。いかにせむ。わはれなる我は只かく叫ぶのみなりき。此時もし傍に短刀ありたらんには、我は自殺し了りたるやも知るべからず。

四

烈しき熱を病みて、床に臥すること已に十五日に及びぬ。感情は鈍り、思想は弱りて、身は殆と死したるものゝ如くなりき。只君公のやさしき言葉、家扶女中等の親切なる介抱によりて次第〳〵に快方には赴き行けと、かの覺束なき卒業製作の事を思へば、大なる責任の重くわが身の上にかゝれる如き心地して、その苦しさ言ふばかりなし。否、をり〳〵はその心を叱して、何たる意氣地なき精神ぞ。汝は畫工の天職ありと信じたるにはあらずや。その自信を有しながら、かゝる些々たる事に失望して泣き且笑ふとは何たる薄弱なる精神なるぞ。奮へ、奮へ、今少し確固たる思想の根底をつくれと自から勵ることも無きにあらねど、わが稚き頃より養はれたる厭世の情はいつもわが涙多く情鋭き心を動して、兎角絕望の深淵にのぞまんとするぞ詮なき。

わまつさへ、一意わが卒業をのみ依頼せる故郷の老祖父母、卒業後のわが處世の困難、いと僻したるため世に出でゝ人と交ること能はざるわが性格、僞善虚僞を以てのみ滿されたるこの社會などを獨りつく〴〵と考ふれば、わが行末は恰も霧の中に包まれたる野の路を其處か此處かと尋ねつゝ歩み行く心地して堪へ難し。眠りたるにもあらず、眠らざるにもあらず、只々恍惚として居りたる時、不圖わが耳に入りたるは、今年九歳の可愛き姫君の帶の紐につけられたる美しき鈴の音なり。やがて可愛らしき聲して、近藤の處に行きて見ばやと言ひ給ひぬ。

かくてばた〳〵と小さき足音の聞えたりと思ふ間もなく、早くも障子を開きて、わが室に入り來りたるは、美しく粧ひたる可愛ゆき姫君なり。莞爾とやさしく笑ひながら、わが枕元に來て無造作に座りしが、近藤、最早今日はよくなりたるにや、早く治りて繪を畫きて呉れずしては困つて了ふに……と可愛ゆき口付にて甘たるゝやうにいふ。最早治りたれば、直きに畫をかきて差出すべきにと言ひかけて、人形のごとき姫の美しき顔を見治りたらば何を畫きて上ぐべきか。

何にてもよけれど……早く治りて……と膝の上の毬を玩弄にしながら、横に少し傾きたる其顔の無邪氣さ、可愛ゆさ、美しさ。じつとそれに見入りたる我は、少時は夢を見たるごとき心地す。

此時、彼方より、姫樣〳〵と呼ぶ聲聞ゆ。われはそれとなくそれを聞しが、其聲は清く美しく可愛らしく、殆と譬ふるにものなきばかりなりき。こはかつ君なりと思ひ懸けて、打消して、又ひら〳〵と思出さんとせし時美しき、美しき――輪廓正しく、額ひろく、眼は眞珠のごとくかゞやき、頬には紅なる血の燃え上りたる――美しき顔、その半明きたる障子の一端にあらはれぬ。電光のごとくわれと眼を合せて、はッと少し躊躇ひたるさまなりしが、やがて丁寧に會釋して、姫樣々々先程より先生の來て待ちて居ます程にといふ。其聲のやさし

さ！

姫は伴れて行きぬ。

我は又も蒲團を被りて、以前のごとき空想の境に入れり。わが胸に浮ぶは、瑠璃のごとくにして黒く光ある眼房々と漆のごとき黒き髪、姫樣々々と呼びたるやさしき聲、あゝこの瞬間のわが情の美しさよ。

猶五日程經ちて病は全く癒えぬ。失望は恢復せられぬ。胸には限りなき奮勵の心燃え、腕には烈しき激昂の力滿つ。わはれこの力とこの精神！かの大畫を成さんにも、さして難きを感ぜざるべし。ましで第一に困難を感じたるかの塔の輪廓を紙に寫すことにつきて、われは他の



時）代風俗

容易なる方法を得たるをや。そは、昨年米國シカゴの萬國博覽會に出品したる五重塔の二百分一型の近頃理科大學に歸れるを、わる友人の周旋により て自由に寫



圖 か た り (六

生するを得たる事なり。この友人の周旋を聞きたる時、理科大學の參考室に行きて五重塔の小型の前に立ちし時、そのうれしさはいかなりけむ。われは殆どわが大業の成りたるもの丶やうに手の舞ひ足の踏むをも知らねばかりなりき。かくて昨日も今日もわれはまた顏色惡し丶と言はる丶にも拘らず、理科大學に通ひて、熱心にその塔の組物を寫生しつ。

筆は次第に進みて、今二日ほど通はゞ完成すべき見込なり。

いつもより少しく早く家に歸りしに、ふと、わが竹馬の友川田蘇岳氏めづらしくも音信れ來ぬ。こは詩集の二三冊も世に出して多少は人に知られたる青年詩人なるが、その情はやさしくして熱く、その意志は剛毅にしてしかも鋭し。嘗て人を戀ひて人世のはかなきを感し、女性のすぐれたるを崇拜しつゝも、しかも現世の女性の弊を嘆ずること深し。ことにその厭世的觀念、感情的詩興、多感的熱性に至りては一つとして、わが性質に合せざる處なく、一つとしてわれの意に投せざるなし。只一つ――久しく衝突して決せざるものあり。そはかれの女性崇拜とわれの非戀愛論となりき。

かれは常にいふ、戀なり、戀なり、戀ならずして人はおのれの清く美しき感情を發揮すること能はじ。見よ、まことに戀せざる人は、いかに野蠻、殺伐なるかぞ、いかに殘忍酷薄なるかぞ、いかに自己の主義にのみ執着せるかぞ。古人も言ひたるにあらずや。人を戀ふて始めて物のあはれを知ると。君よ、戀せよ、烈しく戀せよ世の人の爲すやうなる汚れたるものならざる戀を爲せよ。然らば、君は一歩を進めて、今少しく美しくこの世を見ることを得べく、更に大にこの天地平等の氣を享くるを得む、と。

われは常にこれを駁して曰く、戀を美しといふは面白き君の一說たるには相違なし。されと戀なくてはこの世は零なりといふ君の言葉は偏僻極るものと言はざるを得ず。その證は至る處にあり、戀なくして立派なる事業を爲したる人、戀なくして樂しくこの世に生活する人、戀なくして怡々快々たる人、數へ來れば殆と双手の指にも滿つべし。それに引かへて戀する人を見よ、かれ等の醜體は如何にぞや。かれ等はこれが爲めに家を亡し國を傾くるといへるにあらずや。否、そは皆汚れたる世間の戀なりといふ君の說を解せざるにはあらず、されと苟も戀とその以上は男女兩性の間に成立ちたるもの、肉慾と靈魂と伴ひたるものならざるべからざるは勿論なり。されば君の戀を美なりといふ說も、單に一面の眞理をのみ見たる議論に過ぎずと。

されどこの日は互に議論をも衝突をも爲さゞりき。かれは只わが塔の下繪を見て、いたく感じていふ、此闇涙あり、月の山の隙にひとり澄みたる處、無限の涙あり。こを見れば失戀したる人の涙むら〳〵として心中にあつまり來る。われは知らざりき、君の頑なる胸にかゝる温き美しき涙のひそまんとは。かく言ひて再びその下繪をつく〴〵と打見やりたるが、俄に、われは信ずる能はず、戀なくしてかゝる美しく高き涙を知ることを得るとは。われはいかにしても信ずる能はずとさも〳〵心あり氣にいふ。

かくてわれ等はいろ〳〵語り合ひぬ。やがて日暮れはてゝ友は他日を期して別を告げしが、玄關にて袖を分つ時、かれは極めて眞面目に、君は戀といふものゝ美しさを見たるにはあらずやと言ひぬ。

まことに我は戀といふものゝ美しさを見たるかと、小暗き階子をのぼらんとせし時、それとなく心に問ひぬ。まことにわれは戀を爲すべきか。

黑き眼、房々したる髮、新月のごとき眉は、此時ゆくりなく胸の底の底の底ふかく浮びぬ。

夜、窓を推せば、天地は殘りなく霞みつくして、月影は朧なること夢のごとし。その絶間々々には庭の花白くあらはれて、空氣のゆたかに穩かなること限りなし。戀とはかゝるものにやと思はる。

わが胸の半面には温きやさしき情あり。わが胸の半面には強く奮ひたる意志あり。しかもこの二つはいつか調和しつくして、我は限りなき平和を覺えき。

五

我は何物をか求むるごとし。名譽の外、希望の外、大畫完成の念の外、更にある些少なるある秘密なるものを求むるがごとし。今まではわが心の底に健全なる意志と厭世的感情との外に何物の藏るゝかを知らざりしに、

今は確かにある物たとへて言はゞ、薄き絹にかゞやく玉を包みたるごときある物の密かにその中にひそみ居てわれに何事をか迫るがごとし。

そは何なるか。

塔の型の寫生は完成したるが、そを繪取りて、畫に用ゐん爲めに存外隙取りて、そを全く成就したるはこの日の午後の四時過なり。最早これにてよし、これにて萬般の準備と丶のひたり。いざこれよりは、神を役し、靈を鼓して、力の及ぶ限り、精神のつゞかん限り、その大畫に取懸ることを得るかと思へば、腕鳴り、心動きて氣の進むこと限りを知らず。

新築の洋館の受附の書生は用事ありて遠き所に行きたれば、われその代理を命せられて、夜、受附の一室に行きぬ。程なく同じく入來りてわが傍なる椅子に座を占めたるは、分家(こはこの杉本家より出で丶三千石以上を領したる旗本なれど、主人の死したる後、いたく零落して、今は杉本家の世話になりて、邸内に建てられたる小さき家に住めり。母、令息、令孃二人、五人暮しなり)の令息にて、名を敏と呼び、今は高等商業學校の二年生にて、萬事君公の監督を受くる二十五歳の青年なり。

五年前この御殿に來りし頃より、この人とは寢食を共にしたれば、その性質はよく知りたり。偏僻太しく、何かといへばその氣を損ふを常としたれど、流石昔は應揚なる生活の中に育ちたる程ありて、人をして憎むこと能はざらしむるのとかなる好き所をそなへたり。且、われと同じく、寧ろ寡默の性なれば、二人さし向ひても、長き興ある物語を爲したる事なかりき。されど今日は思はず言葉を交へて、いろ／＼さき／＼なる事を隔てなく語り合ひぬ。

不意に室内に滿ちわたりたる電氣燈の光線の一端は破られて、前なる扉のひらくよと思ひし間もなく、早くも

閨の中より顯れたるは、おな美しきかの君の白き顏なり。兄に用ありて來りたるなるべし。

我は日毎にこの君に逢はぬことなし。日毎にその美しき黑き眼を見ざる事なし。されど、今宵ほど袖の觸るゝまで近く相見たることは無かりき、われはその美に撲れて、其衣の裾に觸るゝ資格だに無きごとく感せられたるなり。

されどかのやさしき無邪氣なる少女の心には何物の影をもやどさず、兄君と二言三言たのしげに語り合ひたる後、俄に我に向ひて、最早直きに御卒業のよし、目出度きことゝやさしげに言ひぬ。あゝ何ぞその言葉のしかくわが脉といふ脉の中に泌み入ることの烈しきにや。

我も狼狽てゝ、君も學校を卒業したまふよしなるが……と言ひ懸けしが、此時わが久しき前より思へる感――則ち我は美術學校をかれは小學校を同じ年に卒業するはうれしといへる感はゆくりなくわが胸に上りて、われは大膽にもそれをてゝに言はんとしたり。されど流石に、そを言ふこと能はずしてやみぬ。

その翌日の夕暮昨夕のごとく、再び洋館の受附室に行きて、馬丁、馭者などゝつまらぬ物語して居たるに、思ひもかけぬかの雅子はまたこの一室に入りて來ぬ。今日は兄上も居まさぬものをと、心にあやしみつゝも默してありしに、雅子は思切りたるさまにて、少しく紅を潮したる顏を背けつゝ、近藤樣に御願申したきことあれと……と口籠りぬ。

わが驚きはいかなりしぞ。半神なりとまで思ひし君より、そうやさしく美しき口づから、其事を聞きし時、わが心の動きたるはわはれ果して如何なりしぞ。われは烈しき震へを全身に覺へぬ。

成べく落付きたるさまを粧ひて、何にても、……君の命ならば……と笑ひつゝ答へぬ。我ながらかゝることを言ひ得し大膽さよ。

少女は猶低頭きつゝ、紫の唐縮緬の風呂敷の中より。白紙と筆とを取出し、學校に殘して置く爲めに書くものなれば、運筆の法を教へて下されと微かにいふ。

われは躍る心を押へて、言ふがまゝに簡單に運筆の法を教へて遣りぬ。されど未だこれにては不滿足なれば、よき手本を捜して今夜御邪魔ならずば參上いたすべしと言ひしに、何卒――と絶え入るばかりの聲。

二三冊の畫譜と簡易なる運筆法を記したる畫帖一冊とを携へてわが二階を下りたるは最早日暮れて久しく經ちたる程の頃なりき。下駄を穿かんとして、頭を擧げ

徳川時代



で戸外を見れば、夜は名殘なく霞みわたりて恰も薄絹に包まれたるものゝ如くいと淡し。月はあれども其光微かにて地上にうつれる樹

（風俗畫　かたり）



屋、花の影は殆ど將に無からんとせり。わたりには平和と靜謐の氣みち〳〵て、耳を欹てゝ聞けば小川町あたりの市聲蜂の唸るやうに遠く絶々に聞え來りぬ。築山の陰を向ふに廻らんとしてそれとなく顧れば、奥方の室には明るき一點の燈火ありて、一枚明けたる障子の間より遠く長く朧月夜をくま取りて、その餘光は前なる泉水の上にさゝやかなる美しき金を碎けり。しめやかに語る聲何處よりともなく聞ゆ。

わが胸に滿てるは限りなき平和の情なり。久しき間狂ひ悶へ苦み戰ひたる我はこの我にはあらぬ心地す。かくて我はこの長閑なるおぼろ夜の中をいと靜かに歩み行きしが、ゆくりなく思出せしは、今より凡そ六年前わがこの御殿に來りたる最初に初めてかのいとしき少女を見たる時の事なり。其時よりわれは世にもかゝる美しき少女もあるものかと思ひき。否、間もなくこの少女の分家の第二の令孃にて敏君の妹君なることをも知り毎日學校より歸りたる後には、姬君の御相手に來るといふ事をも知り、其顏にもをり〳〵接して、その美しく淸き姿は深くわが胸に刻まれてありき。かくて六年は經たり。かの少女はいよ〳〵美しくなりて、今は殆ど御殿の中にもかの少女より美しきはなしと陰にて噂せらるゝやうになりぬ。然なりとわれは不圖ある事を思ひ出しぬ。然なり、われはかの少女の次第に美しくやさしくなるを見て、書を敎へて遣りたらばと思ひたる事もありき。されどこは到底空想に過ぎずと思ひて、强ゐてこれを押へたる事ありたりき。

然るに今は……

われはいつか新築の洋館の表門を出でゝ、それより大通を左に一町ほど行きて、遂にかの君の家の前に至りぬ。雨戶は未だ閉ぢねば、燈火の光は滿面に障子に照りわたりて、其處に痩削なるかの君の姿黑くうつれり。それと對座に座れるはよく分らねど、慈愛なる母君なるべし。我は何となく躍り勝なる心を强ゐて押へて、その格子戶の入口より徐かに案內を乞ひしに、唯とやさしく挨拶して、洋燈を片手に持ちたるまゝかの君は迎ひに出でぬ。洋燈の光を翳して、近藤樣……と馴々しげにいふ。

導かれて火鉢の据ゑられたる六疊の一室に伴はれぬ。其處は戶外より見えたる一室にて、その火鉢の向ひ傍にかの君の母君は座りて居れり。年は五十を未だ幾つも越えじと思はるゝ程なれど、さま〴〵なる苦勞を爲したりとおぼしく、髮は大方白く、額わたりには皺多く、殊にその體度によき人の零落したるやうなるさびしき處

明かに見ゆ。
これがいろ〳〵お世話になりて……と母君は丁寧にわれに會釋を爲しぬ。われは挨拶をいかにせしか、物語をいかにせしか自ら知らず、只持ち來りたる運筆の畫帖と二三冊の畫譜とをかの雅子の前にひろげて、いろ〳〵と語り示したるを記憶せるのみ。
少女は聰しげなる星のごとき眼を畫帖の上に落して、一心にわが言ふところに耳を傾けたり。われはいつか興に乘じて、氣兼といふことをも忘れ果てゝ、意の往くまゝに得意にその運用のことを語りぬ。やがてそれも大方終りたる頃、母君は新に茶を煎じてわれに勸めぬ。
われは此時母君に向ひて、雅子の君に眞面目に畫を學ばせたまへと言はんと思ひぬ。されどそはあまりに唐突なる心地したれば、其儘口を噤みてありしに、母君は徐ろに、この子は畫心ありて、畫を書きたがりて仕方なきゆゑ、何にても好き程に、手本を書きて、直して遣りて下されといふ。
わが空想は實際となれり。とても望むべからずと思ひしわが希望は今やまさに遂げられんとせり。
少女は顔を赧くして低頭きぬ。洋燈の光はいと美しく桃色絹のごときその横顔をぞ照したる。
餘りの嬉しさに、我は返事も爲さで居たるに、母君は言葉を續ぎて、嘸々御面倒なるべけれど……といふ。いかで……とわれは慌てゝ、いかで面倒なこと申すことあるべき、されどおのれは未だ至らぬものにて人に敎ゆるは思ひもよらぬ事なれば。いかでさる事を……最早今年は卒業したまふ程なるものを。
雅子は文箱の中より二三葉の小畫を取出し、こは學校の先生のお手本にて描きたるものなればよくは出來ねどとて菫と竹の畫を我に示しぬ。
猶いろ〳〵なる事を語り合ひしが、餘り遲くなりてはとて、われは惜しき夜の別れを告げぬ。さて玄關までか

の雅子は洋燈を持ちて送り出でたるが、やさしく低き聲にて、さらば明日御室にまゐるべきに御手本を……と言ひぬ。其聲はわが全脈の血を湧かしむると覺えたり。

一時間の後、われは二階の一室にありて、將に其庭に向へる雨戸を閉ぢんとせり。今宵の出來事の今も猶眼前に浮ぶごとき心地して、胸にはやさしくうれしき情みち〳〵たり。われは戸を閉ぢんとして、それとなく戸外を見れば、春の夜は已に霞み盡して、おぼろなる月は愈朧に、微かなる花はいよ〳〵微かに、その風情の淡きこと殆ど人を惱まさんとせり。庭の泉水には靜かなる夜を破りて鯉魚の躍る聲聞ゆ。

われは今一度頭を戸外に出して、茫々と夢のごとく霞みわたれるおぼろ夜の景を見しが此時何處よりともなくあるあやしき念ありて、たえ〳〵なる花の香の全身に泌み入るやうに密かに來りてわが胸に入れり。あゝわがもとめたるはこれなるか、日頃絶えず不足の念を抱きたるはこれをもとむる念にてありたるか。

われは遂に戀せしか。

不意にわれに返りて、打消して、其儘雨戸を閉ぢて了ひぬ。おぼろなる月は春の夜長くこの夢のごとくなる地上を照せり。

（完）



懸賞才媛小說

岩清水

信濃　宮澤すみ子

上

「信さんすこしお休みなさいな、私や、お蠶の話はきいてゐたが、ほんに忙がしいものね、春蠶といつてもこつちは寒いからこんなに遲いのだはね、オヽ暑いこと、ゆふべの雷樣怖かつたわ、又御らんなさいな、あの雲を、私蚊屋の中で一心にお念佛言つてゐたのよ、さうするとピカッと光つたかと思ふとね、信さんお前樣私の話をきかないね、いゝわ、もう止よう、オホヽヽヽ可笑しな人だよ、そんな風に考へこんで居る横顔、生うつしだわ、今頃台灣ではどんなに暑いか知れないね、私送つて上げたいわこの清水の一滴でもさ、お母樣にさういつたら、手紙の中へ入れて上げろと仰つたのよ、それから二人で大笑してたとこさ、だから私玉のやうな汗がだら／＼流れて、茶の間には居られないが、信樣に笑はれるか知らないが、この通腕まくりよ、飮だつていゝわね、まあ奇麗な水、御らんなさいよ、水晶のやうにすき通つて居て、東京になんかいくら探したつてこんな處ありやしないわ。」

鄙には珍らしき大形の浴衣地あでやかに、髮は無造作なる揚卷の、少し曲みて左の方に傾きたるを、雪よりも白き手、今しも銀波にそゝがれたるまゝ拭きもやらでさし上ぐれば、玉の如き雫の襟元にひいやり美くしき人眉

すこし動きぬ。

「信樣。私も手傳はか、漸く涼しくなつたわ。」

「嫂さん、お前樣雷樣きらはつしやるのか。」

「大嫌ひさ、あんなもの誰が好くものあるもんかね」

「己、大好き……」

「オヽいやだ、ちよいとお母樣、信樣ね、雷好きだとさ」

夕貞の花ましろに咲けるあなたより五十に餘る老婆のゑましげに淸水がもとへ來れるを、甘へるやうにかけよりて、ながき袂をうるさしとや肩のあたりへなげやる眞似、折から入口もれて五尺にあまる畵半切の、ひらひら〱、淸水が中へふうわりと、小野流の文字いとよう讀まれぬ。

「この娘は落さつした、兄へやる文だらうに、惜しい事しさしつたな、信や嫂さはな、兄のとけへ、この淸水がやりたいとさ、可愛い事をいはつしやるわいと、己、獨で泣いとつたわ、お前樣、あんまり上手にすら〱と書かしつたから、水神樣が欲しがつたのよ、この水は、なあ信、神樣が御座らつしやるのだから、村の衆も大事がつて御座るに、思つて居る事が、すつかり寫るといふからな。」

「あらお母樣、ほんと、うつるの。」

「僞ついてすむもんかへ、映すにはな、七日七夜辨天樣へおまゐりするのだが、何がさて、皆怖がつてうつさないわ、己、懷姙して居る時、何の氣なしに、のぞいたところが、花さんのやうな嫁つ子がうつゝてな、忘れもしねい、袂の長い、菖蒲の浴衣に、緋縮緬の帶上げ」

「いやなお母樣、いゝ加減な事許りいつてさ、うそ〱うそ、私當てゝ見ましようか、寫つた人を、きつと、

きつと、あの方だわ、信様お前さん誰だと思ふへ、私知つて居るわ、ちやんと知つて居るわ、信様何か怒つて居るの、私何か悪い事いつたか知らん、いつたら耐へて頂戴な、私はおしやべりだから、つひね、よう信様、私こんなに何もかも打明けていふのに、お前様は心をぶちまけないから、困つて了ふわ。」

桑を半ばみたしたる籠をものかげに草の上におきつゝ、信とよばれる若者は、思ひ切つたる一言鋭くも、

「己可笑しくてならねえ、皆が兄貴の事で大さわぎするから。」

中

高きやにのぼりて見ればとのたまひてのみうたかしこしや、茲三百に足らぬ小村ながらも、朝な夕なの煙、軒端よりおびたゝしうもれて、山又山の谷間さへ大御代の光あまねく。わけても春より華にも勝さる麗人の、こゝなる村へ天降りしか、地よりわきしか、評判の吉兵衛がとこのお六も、横道のおたつ、土手下のお園、いづれも／＼顔色なうて、爐邊の話題に登るは、谷村貞夫が新妻花子、母親さへ、其心と姿の美に酔へるが如く、嫁ながらも大切に取扱ふは、村への自慢、悴の自慢、いくら村長様の息子さとへけでもわし等がやうな嫁御は御座るまいと、内々の大氣焔、腹を痛めた貞夫よりも、可愛ゆく／＼と、口僻のやう、乙息子へかたるを、これはまた兄の賢さに比べては男振なり、學問なり、十段も下の段、兄自慢、嫁自慢の母親悪くらしとにはわらねど、あゝつまらない、同じ兄弟に生れて、己が女房とするのはろくでもないお園女郎か、己も一つそ東京へ行つて、一稼して、美くしいのを連れてこよか、だが兄貴のやうな智恵はなし、學問はなし、やつぱりだめだめ、己にはお園が相應して居るわいと、愚にもつかぬ迷の雲、初めは紫の横雲のやう、幽かにも山際にたゞよひしが、一日は一日より、其形の大きくなりまさりて、我ながらわからぬ幾多の妄想、さしもに澄みたる岩

清水さへ、おのが曇を拭ふによしなくて、義理ある姉が慕はしいのやら、惡らしいのやら、さつぱりわからず、いつものやうに、信樣々々と弟の如くなれて物言るれば、ヱヽまたしてもうるさいといはん許りの顔付、さりとて、小半日も會はねば、寂しくつらく、仲秋月なきの怨にまさるうきおもひ、本家の悴が、ことの外なる姉自慢で・己はほんに浦山しかつたが、見ろ、奇麗な花さんを見ろ、己はな、嬉しい嬉しいとよろこぶかとおもへば、つまらないつまらない、花樣はねても起ても兄貴の噂ばつかり、己が事はさつぱり思て居ぬと見へるわい。山より桑摘む少女の一群、信吉が顔み返つて、見おくりて中なる一人は遠慮もなう大

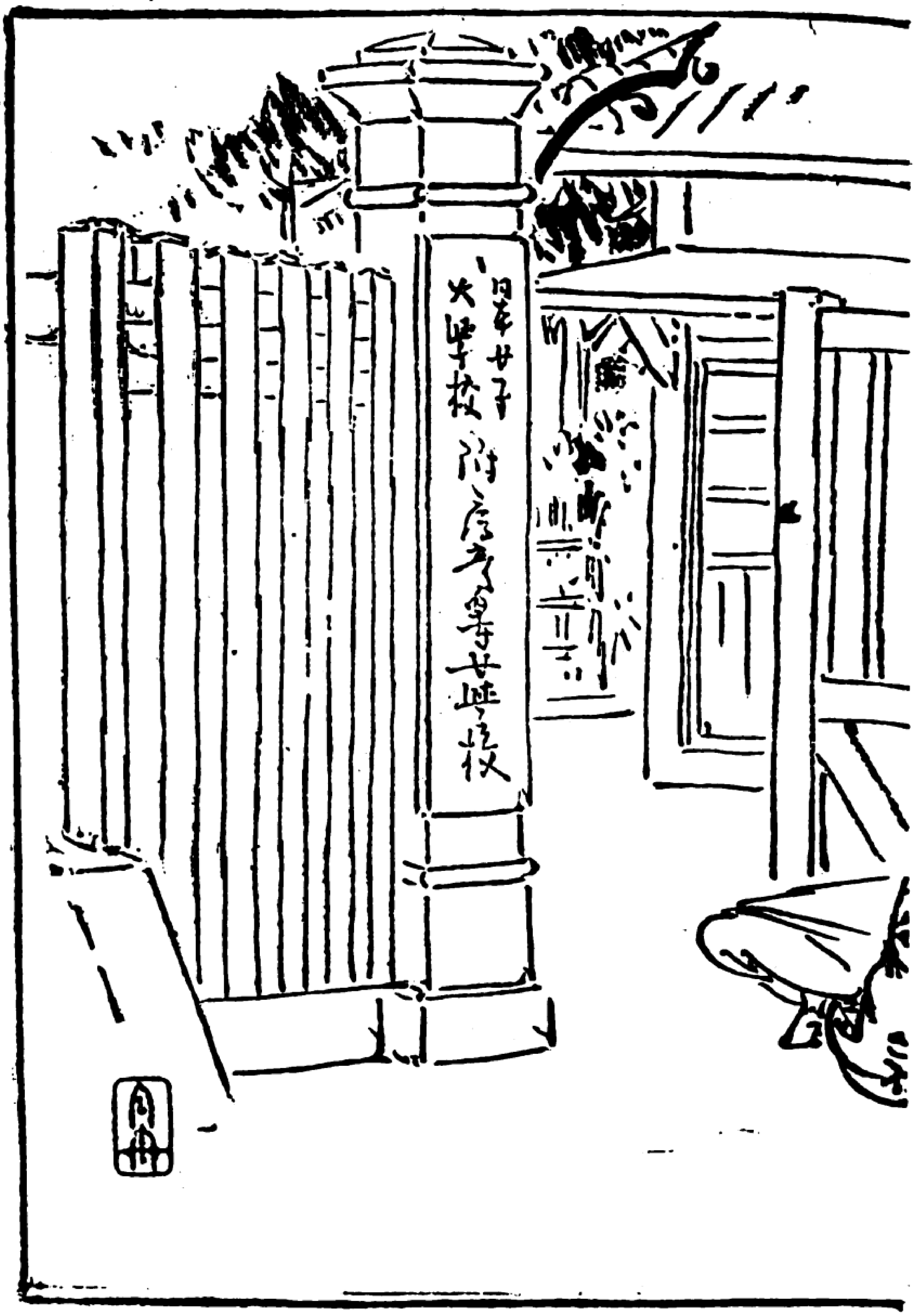
明治時代



であるに、「信さんお園とこの姉さは天人のやうだと村中の評判よ、だからお園姉が心配も心配も大心配だわ、お前さのふ、清水のはたで、大分面白そうだつたな、私等信さんお前はおたのしみだか、そんな風を見せると、お園姉が可哀相よ、」

「馬鹿共何をいふ、座敷へ聞へるではないか、わすこで、姉様が針仕事をして御座らつしやるのだ、お前達とは育ちが違はつしやるよ、東京の立派な家のお嬢様だからな、可哀相に巳が兄貴と半歳一處に住はしつて、こ

（風俗畫がたり）



あの横道を通つた時、お前とこの姉さがな、お前と並んで笑つたりはねたり、それにあの立派な浴衣や帯、あれは何かへ、平常のかな

んな寂しい山の中へ御座らしつたんだからな、貴樣達とは譯が違ふぞ、さつさと通つて、桑でもつみな」

垣一つ隔てしかなたの椽に、粗末なる簾おろして、針の運びものうげに、とほき異郷の夫が身の上、案じくらしつも、義理ある母と弟への勤に、近處の仕立物ひきうけて、肩のこるやうな木綿物すらいやがらず、いつもは賑やかな質の、人なき折は涙さへ催さるゝを、さくともなしに、きけば、我身と義弟の噂話、花子は、今更のやうはつとおどろきて、ま……あ……いやなこと、邪推にも程がある、信樣も嘸辛かろ、だ……だれが、私其お園さんとやらに、會いたいな、會ふて話さへすれば、わかること、信樣だつて決して〳〵惡くかないわ、貞夫樣の弟だもの、私あんまり慣々しくしすぎたかしらん、だつて世間が無理だわ、私の心……私の心は……淸水の女神も照覽あれ、……さ……貞夫さん……。

下

紅の襷、結びつ、ほどきつ、恥かしげにうつむく娘をいだかんばかり、情の熱ゆる眼ざし優しく、花子は夏そばの花陰に、信吉がなじみのお園にさゝやく風情しほらしや、たとへば御堂の中に安置し奉りたる觀世音の來迎まして、悶める少女を勞はるかのやう、おそのは女のさすが情のしみ〴〵と身にしみて、これや淸水の御神出現ましませしかといぶかりぬ。

「お前樣の仰ることは、私、よく解つたがな、姉さへ、」

お園ははや親身の姉に對する如く、

「おそのさんや、どうしたの、あんた、何故、ふさぐの」

「姉さ、私、悲しいわ、信樣に捨てられた」

「まお何をいふの、捨てるも捨てられるも無いじや無いか、私受合つたよ。きけば久しい間の仲よしだといふじやないか、今更何をいふの、おかしいね此の人は、お園さん、まだ私を疑ぐつて居るの、」

「まのふ私、信吉さんに遇つたのさ、そうするとね、手前のやうなお多福に用は無いと……」

「多愛もない事いふものではありません、そんな事いつて居る中が花のさ、私に委しておゝき、ね、解つたかへ、」

花子は姉様風情しほらしく、取持顏の仰山さ、出雲の神になりすまして、我家のゐわたり立もどれば、いつになき信吉の涙顏。

「どうしたの、信様、な、なにが悲しいの、母様に叱られたのかへ、私はお前さんを眞實の弟のやうに思つて居るのに、秘しだてするから、困りますよ、私のやうな重身の無いものは、姉振のも恥かしいが、兄様の女房だから、姉と思つて頂戴な、それから私氣のせいか知らないが、お母様や私が、貞夫様の事でさわぐとお前様いつでも面白くなさそうだが、察しても下さいよ、女房の身として、夫の戀しくないものがあらう筈はなし、お母様の身にしたところが、お二人しか無い兄弟を手放しておくのだから、お心細いわけさ、私ゐんまり子供見たやうに思つて居る事、みんないふから、氣に入らないだらうが、お轉婆な嫂を持つたが不運とあきらめてね、面白く暮さうではありませんか。」

「嫂様、す……すみません、己が惡つたの、皆已が思違ひから起つたと、お母様も兄様も嫂様もゆるして下され。」

あはれや、いつもの喜怒哀樂多くは表に現はさぬ人の、瀧なれ涙に袖もくちなんばかり、ひたなきに泣きぬ。清水が上に生ひ茂れる桑の實の、赤う熟せるが、ぱたり〳〵と落ちて、眞清水の影ゆらぐころ、信吉は心に辨在天を念じて、わがおもふ思をうつらしめ給へと、いのりつ、さて水の面を見れば、美くしき花子の、あでなる姿、ぱつと水鏡にうつりて、しかも、恨める顏のおそろしや、こは迷なりと、再びくりかへせば、花子が揚

巻わり〳〵と、うつるを、勿體なや道ならぬ戀、ゆるし給へと、小石をうてば、千も二千も花子が顔。

「あゝすみませぬ、嫂様、自分で自分の心がわからない苦痛、水神様の御告でわかつて見れば勿體ないやら、怖ろしいやら、嫂様、己全く、この儘清水へはゐつて死んで了ふと思ひましたわ。」

「いやな事、死ぬなんて、生命あつての物種じやないか、私かくしておく事が嫌ひだから、信様よくまあいつてくれたね、そりや一寸魔がさしたのさ、私だつて時々は迷ふからね、其時は一心に、お念佛をいふのよ、だが私のお念佛は如來様を念じるのではなくつてよ、寂しいと思ふ時なんか、一心不亂に、念じるのよ、……貞夫さん……の百萬扁を稱へるのさ、だけれど女がおもふ程男の人は思ふまいね、證據があるよ、信さん、お前様はおそのさんに、まあ何をいつたの。」

「嫂様どうしてそれが解つたゝな」

「それ御らん、私神通力で、わかるの、きのふ夕方、あの娘に會つたわ、可哀相に泣いて許り居るとさ」

「己、つく〳〵いやだな、東京へでも行かうかしら」

「お前様二言目には東京〳〵といふけれど、あんなとこへいつて御らん、兄様のやうにとほいところへやられて終ふよ、いくら學問が出來たつて、それではつまらないわ、私、なぜ始めつからこの村に生れなかつたのかしら、そうすりや貞夫様だつて、母様なんかに寂しい思はさせないからね、私羨ましいわおそのさん、信様余計な考を起さないで、あの娘と一つにおなりよ、一日も早くね」

「わかつた嫂様、己はなせかう馬鹿に生れついたかしら」

今更のやうはら〳〵と落つる涙のとめどなく、それでも決心の面鋭どう、岩清水の澄める面を窺へば、木の間洩れたる夕月の影さら〳〵〳〵小田には蛙の聲高し。（甲賞金五圓）

華洛帶

京都 前田美子

「辯護士池田武夫法律事務所」と筆太に記されたる長看板は法學士何某の門札と相俟ちて厳めしう。中庭には自用車の影消えて米國新式の自轉車ぞ時を得顔なりや。さらぬだに壯年氣鋭の武夫、去年歐洲より歸朝の後は氣焔愈當るべからず。某女學校の出身たる妻の勇子も亦特に英獨の語に長じ、女流ハイカラーとして將交際家として夫武夫と共に其名いみじとかや「勇、勇「ハイ何か御用で」癖なき額髮を故更に縮らせたる勇子を見るにも舞踏會に立ち舞ふらん樣の忍ばるゝかな「俊子は何處に居る「アノ繪の先生の許へ參りましたが「ナニ留守か丁度好い、實は彼の縁談に就て汝に相談があるのだ「オヤ爾うですか何方からのお話で「實は斯うだ己も今年の總選擧に一番打つて出やうと思ふに就ては第一兵糧の準備だナ、で内々供給者を探して居つた處意外な好い話を聞いたのだ、汝知つてるだらう大山を「太山、大山つてアノ實業家の?「爾うだ彼の子息の嫁に俊子を呉れいといふので結納に五百圓遣すとさ、マア五百圓は僅かだが時宜に依れば己の出陣の後押しをもせうといふのだが汝何と思ふ「マア貴郎何うも斯うもないじやありませんか、大山といつたら市内でも屈指の豪商ですもの、彼んな家に貰はれて行けば第一俊樣の幸福ですし、貴郎の方も立派に作戰計畫が出來るんですもの、妾に何の異議があるものですか「ウム己も爾う思ふのだ、じや俊子が歸つたら汝から爾ういつてくれ「ハイ宜しうございます……眞個に容色のいゝ方は異つた者ですネ「ハヽヽ大山の奴さん何處で見たか底根執心で、同業者から蒼蠅い程話があるのに、何うでも俊子を貰つて呉れと强請るんだつてアハヽヽヽお蔭で此方は幸福さ、俊子と呼ばれしは武夫の妹にて今春高等女學校を卒業せしかど、太く繪畫を好みて今も尚丹青の技を樂し

めるなり。されば溫雅の天性は愈居常の靜けきを尙び暇だにあれば一室に籠りて唐紙を伸べつゝ、勇子の如く交際場裡に花を咲かすと絶えてなければ、活潑なる勇子は因循と呼び支那風と蔑しみ事に物に衝突を免れざれども、俊子は巧に其鋒を避けて露爭はず、姉上々々と敬ひ侍ける也けり。かゝる話のありとも知らぬ俊子は今しも歸り來りぬ「兄様只今、姉様遲くなりました「オヽ俊様丁度好い處だつた此方へお這入りなさい、少し話があるのだから「ハイ」と答へて優かに勇子が下座につきぬ。瓜核顔の高髷姿似合しう衣服其他の好み華美ならぬうちに自ら氣品備りて坐ろに其性情の美はしきを思はしめぬ。

「俊様お喜びなさい縁談が定まりましたよ「縁談つてアノ何方様の？「何方様でもない貴女のです「エ妾のですつて……オホ……マア姉様の御串戯ばかり「何の串戯なものですか、貴女も知つてなさるでせう實業家の大山様といふのをネ、彼處からのお申込なので願つてもない良縁と思ひますから決めました」俊子は驚きに打たれて愛らしき眼を瞠りしが「アノ折角のお話ではございますが、何卒是はお斷り遊ばして「端然としていひぬ、其聲其樣常の優しき俊子にはあらざりけり、勇子が眉は電光の如く閃きぬ、武夫も思はず屹然なりぬ「エ此縁談を斷れと……夫れは又何故です「ハイ妾には定まつた夫がございますので」と惡びれたる樣もなし「ナニ旦那様がありますつて、怪しからぬ全體夫れは何處の何といふ方です」今にもあれ雷神鳴りもいでんの樣よ

「アノお父様の御在世中に決めて頂きました木村壽と申す方で、兄様はよく御存知で在らつしやいます」勇子が面は今や武夫の方に向ひぬ「貴郎御存じですの」と宛然詰るかのやう、武夫は捲莨の灰を拂ひつゝ「ア、爾う聞きや日外親爺が爾んなといつとつたつけ、然し大山と木村とはてんで比べ物にはならないよ、勇汝は未だ知るまいが木村といふのは親爺の同藩で、所謂莫逆の間であつた處から封建的に親同士で決めたのだ、ナニ壽かい文學士で高等學校の教授さ、彼樣な貧乏教師が何うなるものか「マア爾うなのですか、文學士も結構です

が學士といつても中には捨場に困る方がありますから子、夫れに第一財政困難では俊様が困んなさるでせう「だから大山に嫁るさ」俯向きたる儘身動きもせでありし俊子は漸う頭を擡げて「兄様夫れではお父様のお心に背くではござりませんか」只一言に無量の恨は籠れり「アハヽヽヽ汝も中々偏屈だナ、全體己は此許嫁といふ奴が氣に喰はないさ、何も親同士が結婚するんじやなし子、が幸なことには畢竟口約に止るので、加之双方とも契約の當人が生きちや居ないのだから、全然無功に歸するのだ、ナニ些とも心配はない「爾うですとも俊様餘計な心配はお止しなさい「でも妾何う考へましても爾ういふ不徳義なことは「何だと「妾財婚とやらは嫌でござります「ナニ財婚だと生意氣な、夫れ程貧乏教師の木村が戀しけりや如何なと勝手にするが好い」意氣鋭ういひ放てば「マア貴郎爾う一徹に仰しやらないで子……俊様如何したものです兄様に抗辯するなんて、貴女にも似合はないじやありませんか「でも妾お父様の思召に背いて、女の大切な貞操を破つて迄も……」霑みたる聲に力を籠めていひ出るに「俊様貴女はお父様々々と仰しやるが、此許嫁は決して文明的ではありません考へても御覧なさい、常識のない、例令ば夫婦の何物たるとも未だ知らないうちに、一生の大事を決められて仕舞ふのです親の獨断ですナ、是は畢竟子を見ると親に若かずといふ古言に怯んだ支那風なので、だから自然駿馬痴漢を乘せて走るとか、佳人薄命とかいふ歎聲も起るのです、是では放逸不頼の夫に苦しむ良家の淑女や、不貞の妻に泣く勇士の世間に絶えないのも決して無理ではないです、苟にも明治の新教育をうけた者が如何して此樣な不當な壓制な結婚に盲從することが出來るものですか……それに俊様貴女も少しは財政上の事を察して下さいな、旦那様が歐洲を漫遊なすつたについても、隨分少からぬ金を失くしたのですし、又今年の總選擧には何うでも候補にお立ちなさらうといふのですもの誰か有力な後楯がなくつちや迚も遣り切れませんから子、大山樣の方が甘く行くと眞個に都合が好いのですよ子　俊様、貴女の幸福ばかりでなく、池田家の幸福なのですか

ら……」言葉に巧なる勇子は非をさへに枉げて理とせるにあらずや、さても許嫁を不當よ壓制よと罵びつゝも己また俊子が意志の自由を妨げんと努むるにあらずや。武夫はシーガーを吹かしつゝ折々俊子が擧動に眼を注ぎぬ「姉様お言葉はよく解りましてでざいます、が妾もう少し考へたうでざいますから、何卒今夜中お待ち遊ばして」訴ふるが如き俊子のさまを流石に哀れとや思ひけん「じや爾うなさい今もいふ通り貴女の幸福は引いて一家の幸福になるといふとを、よつく考へてチ」かくて武夫夫妻は或會のために中村樓へと赴きぬ。

高倉橋の欄干に倚りかゝりて池の面に浮ぶ月影を見つゝ思ひに沈む女あり、折しも、天下誰か君を知らざらんと……微吟しつゝ近づき來る一個の青年、訝しげに女の後姿を眺めしが「アッ俊子樣じやありませんか」女はピリヽと身を傈はせて顧りつ「アラッ壽樣！」とばかりそが袖に縋りつきぬ「俊子樣如何したのです、夜分一人で此樣な處へヱ何ですつて？」俊子は涙ながらに今日ありしとゞも落ちもなく物語りつ「兄も彼樣ではありませんでしたに……結局お金のために妾の操を犧牲にせよといふので……」壽は愕然として聞き居たりしが、稍ありて天を仰いで嘆息しつゝ「で貴女は僕へ義理を立てゝ、死なうといふのですチ、成程情の激した時爾う思ひなさるのも決して無理ではない、が畢竟夫れはニユースの三面に花を咲かすばかりで、僕に取つては先づ薄情とはなければならんです、僕が父の死去後貧苦と闘ひつゝも、斯して學事に熱中して居るのは、全く貴女といふ……イヤ貴女と愉快なホームを造りたいといふ希望があればこそです、夫れに貴女一人身を潔うせうといふのは、取りも直さず僕を絶望の淵に沈めなさるのです「ア壽樣、妾飛んだ心得違ひをしましたので」恰も夢の覺めたらんがごとく、四邊見まはして身を傈はせつゝ「でも妾今更宅へ歸るとは出來ませんから、アノ東京へ參ります……彼地には友人がございますから、如何ともいたしまして……」壽は思はずも俊子が手をとりて「アゝ俊子樣よく仰しやつた、では爾うなさい貴女は繪が好きだから成るべく其方を研究なさるやうにチ、僕も三年の間

には乾度誓て人の目を惹く程なとを遣る決心ですから、何卒それ迄耐忍して下さい、何か一つ効を立てたなら兄様、池田君だつてよもや慘酷なとも仰しやるまいと思ふです「ありがたうございます、妾も出來るだけ勉强いたしまして……「オヽ夫れで僕も安心です、處で貴女旅費がないでせう、子死ぬのに金は入らないからハヽヽヽ丁度今僕は飜譯料を受取つて來たのですから是をお持ちなさい、じや兎に角停車場迄送りませう。

其夜更けて後歸りたる武夫夫妻は俊子の出迎へざるを怪しみしかど小間使の「お孃樣はお頭痛がすると仰しやつて、宵からお寐つていらつしやいます」といふに眉うち顰めつゝも其儘寐につきぬ。翌朝日の高う昇る頃迄も俊子のたえて起き出る氣色なきに 愈 訝りて、勇子 自 其部屋を覗へば哀れ臥床は空蟬の殻となりて涙の痕さへ乾き果てたり、たゞ俊子が日毎に馴れ親みたりし机の上にぞ一葉の短冊は殘されし。

たのみなき此世をすてゝ父母の
いませる方にいさゆきてみむ

嘗て敷島の道に入りたゝざる武夫夫妻も是には太く胸を打たれて今更のやう慌て惑ひつゝ、彼方の河よ此方の濠よと人を奔らせしかと些しの手掛りだもあらざりけり。翌日の新聞紙は早くも「令孃の家出」てふ冒題の下に可憐なる俊子に同情を寄せて太くも池田夫婦の不倫を罵りしかば、素封家の聞え高き大山家にては大に驚きて直に前の申込を取消しぬ、流石の夫妻も俄に面目を失ひ、はた頼みとせし後援に棄てられて今は候補に立つべくもあらず、意氣の挫くると共に漸く前非を悔ゆるに至りぬ。かくて後は交際場裡にたえて勇子が縮れたる額髮を見るを得ずなりぬ。

春秋を閲みすると爰に三回、今日しも武夫夫妻は新聞紙によりて意外の報に接しぬ、そは他にあらず、死せりと思ひ定めし俊子は東都の丹靑界にありて、正に一頭角を顯はせるなり、因循を以て目されたる俊子が秀名

は、今や上野の展覽會と共に世に喧傳せられつゝあるなり、勇子は思はずもハラ〳〵と熱き涙を灑ぎぬ、武夫も亦アゝとばかり轉た暗涙を浮べつ。さるに紙上の異彩は獨り是に止まらざりき、嘗て一喝の下に貧乏歌師として斥けられし當年の木村文學士は、今度呈出の論文によりて文學博士の號を授かれるなりけり。

新たに大學の教授に任せられたる文學博士木村蘐は、新婦俊子を伴ひて今宵しも池田家を訪はんとし圖りなくも高倉橋を過ぎりしが、俊子は懷舊の情に堪えずやありけん、水に映れる月を坐ろに眺めつゝ「子ー所天妾あの晩もしも所天にお目にかゝらなかつたらば、如何なつたでせう？」（甲賞金五圓）

記者曰く今回懸賞小說百二十種中特賞の部に入るべきものなし依て甲點二賞とし各金五圓宛送呈する事となしぬ



撰外秀逸の部

▲袖時雨
▲うしろ髪
▲妙子
▲仇さくら
▲かへりざき
▲帰省
▲夕のおもひ
▲人心
▲琵琶の音
▲わがれ
▲子寶
▲心のなやみ
▲はやり風
▲朝顔
▲離れ鳥
▲天の樂園
▲笛吹川
▲その夜の記
▲操の花
▲なみだ
▲夢の奇縁
▲親友

篠原かず子
豐前 露くさ
ふさ子
山崎壽子
周防 中谷登羽子
埼玉 大赤隆子
大和 麗月女史
ときは
茨城 山口澄子
東京 かつら女
埼玉 高鹿照子
伊豫 中平たか
盛岡 金田一流子
長野 はる子
德山 松岡その子
神奈川 花村女
麻布 阮峯道
石見 青柳秀子
京都 竹下秀子
本鄕 田中桔梗
仙台 千葉千代
大阪 仙田蒔子

▲昔語り
▲眞如の月
▲魔叫
▲若葉の緣
▲女教師
▲哀れ浮き世
▲喜捨函
▲藤
▲女ごゝろ
▲沙彌物語
▲朝立
▲岡の上
▲ての夏
▲運命
▲わかれ
▲落花無情
▲式部と菫
▲可憐の少年
▲濱をなみ
▲芙蓉峯
▲てのうつしゑ
▲心のなやみ
▲離別
▲情のもつれ
▲葉ざくら
▲白ゆり
▲逝く祭
▲天職
▲ローンテニス
▲めくら姫

伊豫 野口初江
和歌山 田中實子
麻布 山田滋子
熊本 田尻尙子
東京 小山たま子
大津 藤田ゆう
三重 蒔田かずゑ
岐阜 中田久子
京都 西澤重子
滋賀 德田秀子
名古屋 福鎌恒子
肥前 せい子
伯耆 小早川盈子
京都 大西玉子
伊勢 岸田鈴子
麴町 岡本須生子
伊勢 山麓緑子
兵庫 松原小春
伯耆 富ノ子女
下總 白百合子
陸奥 みちえ
大阪 古山楠子
信州 春江女史
攝津 原田春葉
保ヶ谷 加川一枝
德島 白露女史
橫濱 白薔薇
京都 てふ子
奈良 今田雪子
三重 山本藤子

臺灣貴紳の婚禮服（口繪説明）

臺灣婦人の禮服に二樣あり、一を通常禮服、一を婚禮服とす、通常禮服は先づ下には通常服たる袴と衫とを穿ち上に禮服用として裙を卷き、裙は日本婦人の腰卷に似たるものにして、男子の褪褌に對するものなり、而して又上に女袍を着して居る、女子亦珠數を用ゐ、頸に懸けて胸に垂る、髮は一種の束髮にして其の形龜の如し、中央に龜結(笄)を挿し、匙仔針(ピン)を用ゐて之れを飾る、其數六本あり、龜結と共に金屬製のものにして、別に花簪を用ふ、其色黃色なり黃は老年を意味し、之れを用ゐて以て、我れ既に老ひたりと爲し、以て謙遜の意を表するものなりと、尙裝飾品として耳鈎、手環を用ゆ、然れども是れ必ずしも禮式用たるにはあらず、足には先づ脚帛を卷き、上に靴を穿つ是亦通常用と異なる所なし、次に婚禮には通常服たる女袴衫を着したる上に、响裙を着して居る、响は音にして、响裙とは動搖する度びに音響を發せしむるため、裙の下端に鈴を附けたるものなり、上に大紅衫を着し、又其上に霞佩を着し居る、所謂上着なり、而して肩には响肩を懸く、一種鈴付の肩懸なり、此の二品は官吏又は官吏の資格を假用するものならざれば用ゆることを許されずといふ、髮は龜結と匙仔針とを用ゐて龜形に結び、上に二本の紅色花簪を挿す、或は簪に代ふるに櫛仔を用ゆるもあり、而して此の上に金銀珠玉もて作りなせる鳳冠を戴く、鳳冠に瓔珞あり垂れて顏を覆ふ樣に造られたり、足には脚帛を卷きて通常の靴を穿ち、其の上に大なる紅靴を穿つ、是れ婚禮の服裝として最も完備せる所にして、其の費用を要することも亦頗る大なり、斯くの如きは極めて富家にあらざれば新調し能はざるを以て、本島普通の婚禮に於ては多くは其の二三を用ゆるに過ぎざるなり、其他裝飾品として耳鈎、手環を用ゆること勿論なるが此等婚禮の服裝は何れも婚禮當時に一度用ゆるのみにて、其後は之れを衣匣中に藏し、其人死亡するときは必ず着せて葬むるの例なり

衣食住の變遷

考古博士談
記者筆錄

婦人の學問として衣食住の變遷を知るのは尤も大切な事柄であらうと思つたから、頃日去る博士を訪ふて、日本の上古から近世に至るまでの生活上の有樣を聞きました、併し上代の事柄は專門の大家でも、彼是の史籍に依つてその大概を知るに止まる事であるから、事柄の詳細を悉すといふのは難いのであります。假令は器物の名稱の異同やら又はその使用の途などに就ては、今日から見て判斷のつかないものも多い、故にどれ等は唯臆說を記して後日の識者の解說を待つといふのであります。もとより淺學の記者が一場の座談に依つて得た事であるから、悉く聞說の誤りはないと斷言する事も出來ませんが大體に於ては說を悉くして居る事と信じますから、初學の方々がこれに依て衣食住の概略を承知して下さらば、記者の骨折甲斐もあらうといふのです。

上代の衣食住

いづこも同じ上古の衣食住の有樣極めて單簡でありますが、それに比較すると日本上代の衣服は割合に進んだものでありました。先衣服の原料としては布類が尤も澤山に用ゐられました。その布は現今の木綿ではなくて、自然に生えた麻の皮や、又は楮の皮でした、楮の皮は後世紙の原料となりましたがこの時代は衣服の料となりました、その麻や楮の皮を晒らして綿のやうにしてそれを績んで後機に上せて織つたものであります、又葛布といふものがあつてこれは藤の葛を晒して織つたものであります、勿論此時代から絹や眞綿はあつて布帛の衣服は高貴の用となつてゐました、扨これ等の衣服を染むるに何を用ゐたかといふと、重に植物の葉や花で、その外色彩のある粘土即ち赤土や靑土やを摺りつけて染めたのであります。

次に、その時代の容儀ばどうであつたかといふに頭髮

の様は男子は頭の中央から髪を左右に分けて兩方の耳の處ろで結ぶやうにしてあり、又女子は長髪を一つに束ねてその餘りを後ろに垂らしたものであつた、男女盛裝の時は頭に草木の枝葉を纏ふてこれを飾りとしてゐました、これを鬘と言つて大古からの風俗です、又髮を梳るに櫛を用ひましたがこの櫛は今の世に用ゆる横に長いものと相違して竪に長いものでした。

それから服裝の飾りには曲玉、管玉、といふのがあり又釧、脚結といふのがあつた。曲玉といふのは彎曲した形の玉で管玉は筒の形になつたもの、いづれも頸のまわりの飾裝としたものでした、釧といふのは玉や鈴をつらねて小手の飾りとしたもので、脚結といふのも又同じく膝のあたりを結び固むる紐で足の飾りとしたものです、扨この曲玉の起りは何かといふに人類學者の説によれば、大古野蠻の時代猛獸と戰ふのを人間生存上の唯一の仕業とした處ろから、その角や爪を取つて、それを自分の身體につける事が勇者の誇りとなつたその餘習だといふ事であります。

又飲食器具に就て見ますると上世民の常食とした處ろは、今日と同じく穀物ですが、肉食も随分したのであります、佛法傳來以前は日本の國民は盛に肉食をしたもので、牛、馬、猪、鹿の類より禽鳥魚介すべて上世國民の常食としたものです、但し米は無論玄米です、後世のやうにまだ舂き精げるといふ事はなかつたのです、そしてそれを炊ぐにも今日のやうに釜で飯に焚くのではなく甑で蒸したものです。今日の飯はむかしの姫飯といふもので。王朝時代から始まつたものです。副食物を調味する味噌醤油の類はまだ此時代に發明はされなかつた。但粗製の食鹽があつたばかりです、けれども酒は神代からあつて、現に八頭の大蛇の神話に酒の事が語られてあります、但しこの時代の酒は今日のやうな清い酒でなくて、濁酒であッた、それから食器は大抵土器でありました、併しこの土器には釉藥を施さないもので、今日のカワラケ又はホウロクと同様なものです、その外植物の葉でこしらへた食器もありました。次に物を煮る鍋、酒を貯へる甕皆土器

で、金屬で鑄た銅釜はまだ使用されなかつた。
それから此時代の燈火には重に脂の多い松の根などを焚いて明を取ッたのであります。
欽明天皇の世に佛教が高麗國より傳來してから日本の生活上、風俗上に大變影響を來しました、まづ第一各國に寺院の建立があり、これまで茅もて葺かれた屋根は、この時分から瓦を製する事が出來て瓦屋根を見る事となり、勿論これは唯寺院に限ッたのです、それから遣唐使の往復が出來るやうになッてから支那の風俗を摸する事が多忙で皇居には大極殿が建てられ、殿内には支那風の甃砌を敷き又門なども支那風の衡門を作るやうになッた。次に服裝も太古とは大に趣を異にし、朝廷の冠位、服制といふものが立ち、段々と太古の蠻風を變じて開化の文華をつけるやうになり、質樸は變じて、華美となり、上流社會で左衽を變じて右衽としたのも又この頃からであります

奈良朝の衣食住

奈良朝は日本文明、最初の花の開きはじめで、衣食住の上に非常の發達を來した事は今日から見ても實に驚かるばかりである。扨てその文明の花は專ら支那の風、即ち唐の時代の文明の風が吹いて來て、日本の物質を開かせたのであるが、一体外國のものを取ッてそれを國に適用する事の上手な國民であッたから政治上の事は勿論風俗上の家屋、衣服、器具、その他の裝飾物に至るまで悉く唐制の美粹を拔いて我が國に摸し國民生活の上に大なる進歩を來しました。そこで奈良一代の文明は唐制摸倣の上に驚ろくべき發達を遂げ、後世から一代の文華を慕はれるやうな成績も遺したのであります。まづその中に就て著るしいのは建築であります。この時代の建築は、皇居を始めとして官衙、佛殿等いづれも瓦屋根で、柱を塗るに丹堊を用ひ、間々柱などに彫刻をするなど實に立派なもので、上世の白木の家で、削らぬ柱に住ふて居た頃とは著るしい相違を來しました　即ち今日に遺れる奈良東大寺の正倉院、日本美術の寶庫として、寧樂朝時代の遺物として有名な正

倉院は實に此の時代の建築の規摸であります。
次に服裝は孝德天皇大化の革新から冠位十三階の等級に從ふて服裝の色も定まり續いて持統天皇の朝に姓氏の大小によッて又九等の服色が定まり。國民の容儀が一時に嶄然と改まりました。今其一斑を申さば、當時婦女の禮服は頭に寶髻を戴き、身には衣、紕帶、褶、ゆはだの裾をつけ、足には錦襪をつくるとあり、寶髻といふは髻の緒を飾るに金玉をもてするので恰ど支那婦人の髮飾のやうに髻の根元に飾りつけたものであらう、これは元より高位高官の婦人の禮服で、庶民一般そうといふ譯ではなかッた。
扨ての時分の服裝の槪略をいへば、體の上部に衣があり、下部に袴があつた但しその衣も袴も共に細くて恰も現今の洋服に似寄ッたものである。袴の上に裳をつけ、又帶をつけた。その帶の幅は極めて狹いもので一重廻りで前に結んだものである。これより先我國の衽は左前であッたのを上流社會では夙に唐風に鑑み、左衽は夷狄の風であるといふ處から右前にしたのであるが、下流社會一般は此時分まで猶左衽であッた、けれとも養老三年に布令を出して天下一般に右衽となるやうにしたのである。
扨又此時代の衣服の原料は布と楮、麻葛、苧などを用ゐましたが、養蠶術が段々進んで來た上に、唐から織工を聘して絹織物を織せる事が開けて、綾、錦、紕、その他隨分立派な織物を作るやうになり、貴人の奢侈品を供給する事が出來るやうになつた。
次に驚ろくべき進步は飲食庖厨の品である。まづこの時代から食物を調味するのに醤油といふものが出來た、但し當時の醤油は味噌のタレのやうなもので、まだ今日のやうな流動物ではなかつた。それから、肉類野菜の類は或は羹、或は膾となし、或は羹として食ふやうになりました。
それから、當時鮨といふものもあつた、但しその鮨は魚類を鹽につけて貯へ置き、久しくして酸味がついてからそれを食ふので、今日のやうに酢を飯に混ぜて食ふ鮨ではなかつた、又野菜の外に海藻類をも食ふた。

果物類には梨、栗、柑子、瓜などもあッた。嗜好品香味のものに、胡椒、葱、蒜などもあッた、それから滋養薬餌の食品として牛酪牛乳もあッた。それから又茶もこの時代に、既に唐から輸入して高貴の庖厨に入ッて、貴人の嗜好品となッたのである。

扨又食器並に日用器具に就ては精巧を極めたものが出來て、蒔繪、螺鈿などは實に眼を驚かす品が製作された。飲食の具に銅器あり陶磁器あり。又遊戯として蹴鞠あり、博戯として奕碁双六あり、装飾品として玻璃玉を製する事などは今日より見て實に意外とする處であッた。

王朝の風俗

此時代には有名な紫式部、清少納言、小野小町などの才媛文學者の多く顯はれた時代、百敷の大宮人が櫻かざして春の永日をあそびくらした時代、藤原氏數世に亘ッて榮華を極め、俳優のごときお公卿さんが花のやうな御輿に乘ッて平安城の都大路をうねりあるいた悠長な時代で、社會の生活狀態も自然優美閑雅であッた。

扨てこの時代の風俗は、上流社會は逸樂を事とし、遊惰に荒み、贈答する和歌は專ら男女の情交の媒介で、年若き男は一身を戀愛の犧牲にして女の爲に苦勞し、世間に美女があるといふ事を聞けば、萬事を拋ッて女の所へ歌を贈ッて情を通ずるといふ有樣業平朝臣の伊勢物語は實に當時の時代精神を直寫したものである。されば閨門は上下一般に亂れて公卿、官女と婬するは珍らしからぬ事であッた、彼の源氏物語は實にこの宮中の亂れた樣を書き顯はしたものでせう。宮中既にこの如き有樣であるから一般庶民の有樣推して知るべしで地方では神社の祭禮、佛寺の齋日などは殆んと男女婬奔の媒介所であッた。諸國に遊女、傾城といふものゝ出來たのもこの時が始りで、歌舞唱歌、音曲などに婬聲を交へるやうになッたのも又多くは此の時代からであります。

扨て衣食住の有樣に就て申さば、京都の王城は實に規

模宏壯なるもので、元より平安城の結構は專ら唐の長安を眞似て設計されたものであるから、建築の上に悉く唐風の名がつけられた。皇居は紫宸殿以下十六殿あり、その他の諸舍、堂觀いづれも善美を盡したもので縉紳の邸宅すらも正殿、寢殿あり、釣殿、泉殿あり、庭園には春草、秋草を陳ねて四時の眺となし、又泉水築山を拵らへて散歩逍遊の興を添ゆるなど實に建築上一代の進歩であッた。

扨又室内裝飾の具には簾ありて、母屋と庇の間に垂れ、席には茵ありて、雲間縁の疊の上に布かれ、その側に几帳を立て、脇息を置いて安座休息の便に供へられた。猶調度の品には厨子あり、文房具あり、粧裝の用具として鏡臺あり、衣服を懸くるに衣桁あり、室内は實に整然としてよく秩序が保たれたのである又此時代から既に室内を照すに燈油を用ひ、又蠟燭も用ひられた。これと同時に又火桶といふものがあつて、冬日暖みを取るに供せられた。

この時代にあつての貴族の豪華なる樣は實にその乘輿に依つて示されてゐる、輦車は天子ばかりでなく、權門、貴紳が物見遊山の節など皆これに乘つたもので。その車には蒔繪を施こし、金具には金銀珠玉をちりばめ屛張には綾羅、錦繡を用ひ、綺麗、華奢を競ふて、諸人の眼を驚かした。

唯に邸宅器飾に於てのみならず、王朝は又實に容儀服裝に於て文華の花を咲きほこらした時代であつた。此時代の服飾は又專ら唐に倣ふたもので、貴人が大禮に用ゐた禮服は唐制の花紋、花章を摸して衣服に花鳥、雲鶴など種々の紋を染め又織り出したるがあり、天子の着玉ふ御衣には日月星辰山龍等の九章に別られて恰も現今支那官人の服の如き紋章があッた。それからこの時代に用ひられた衣服の種類は極めて多かつたもので、まづ束帶のとき、上に着る袍に縫腋、闕腋の二種があッた、尤も縫腋は文官の服、闕腋は武官の着るものであッたが、その外、直衣といふのがあり、狩衣、といふのがあり、又水干といふのがあッた、狩衣水干などは、放畧、遊獵などの節に着たもので動作の便利

に用ゐられたものであッた。又下部に着る袴にも表袴、指貫の二種あり、束帶の時には頭に玉冠を戴き腰に魚袋を佩ぎ胸の下より綬を垂れ、又玉の佩を膝のあたりに垂らし、錦の襪を着け、塗ものゝ深沓を穿ち笏をもつなどなか〳〵繁褥を極めたものであッたゞけに又極めて華麗優美で眞に上代服飾の盛華を極めたもので、恰も源平時代に平家の公達が、甲冑武具に一代の驕奢を衒ふたと同じく、此の時代は實に公卿が服飾に奢りの極を盡した時代と言つてよろしいのである。

以上は男子の服裝であるが宮嬪婦人の服裝は又一段の華麗で、唐衣、裳、表着、袴、領巾、裙帶などあり、單衣を襲ぬること十餘枚に及び、十二一重の名稱さいあるに至ッた。袴は裙長で地を曳くこと三尺、常住檜扇を手にして、容儀をつくらふに黛を彩どり、鐵漿をつけ、顔面には白粉を厚く施して殆んと素顔といふものはなかッたのである。

扨又此時代の飲食、幷に饗應の有樣は如何がであつたといふに、平安朝人文の進歩は朝廷の儀式饗燕の上にあらはれて、山海の珍味善盡し美を盡したものであッた、まづ天子の供御には大床子といふものがあッて、饗應の時には大きな机を据へてその上に數人の食物を陳列し、別に酢、鹽、醤などを置いて即座に客の嗜好に應じて加味し、箸の外に匕を用ひたなどは稍や外國の風であッた。當時飲食物を盛るには椀あり高杯あり、窪杯あり盞銚子あり、又これを載する臺には折敷あり、臺盤あり、折櫃あり、いづれも後世の三寶のやうなもので、その上に菓子、餻餅を盛り飾ッたものである。この時代には日本の國も餘程開化し、又王化が普ねく行屆いて、天子の御料藤原氏の庄園は殆んと全國に亘つて居たほとでであるから各國の物産や貢物が京都に集ッて來て京都は實に山海の珍物の幅輳する處ろであつた。それ故、魚介、鳥獣、蔬菜の類、生物として干物として、鹽漬として又製造された諸〳〵の食料は數限りなく、まづ魚介類では鮑、年魚、鰹魚、鮭、鯛、海鼠、帆立貝、海膽など貴人の饗膳に用ゐられ、鳥獣では鹿猪、雉、雁、鴫の類、それから海藻類では紫菜、和布、鹿角菜、海松など、盛饌の料理に用ゐられた。果物野菜類に至つては當時既にあらゆる食膳に用ゐられ、菓子製造の法も漸く進んで饗應の飾りとなつたが、但し菓子

は後世のものと違ひ、當時は重に、餅、糫、餛飩の類であつた。それから昆布、串柿、熨斗鮑、鰹などは專ら祝賀の儀式に用ひられたものである。

流石に王朝は文華の榮えし時代だけあつて、衣食住の華美を極めたが、それと同時に又遊戯音曲の方もなかく進歩してゐた。太古以來我國固有の神樂、催馬樂に加へて、支那、朝鮮から傳來した舞樂も此時代には盛んに行はれたのである。彼の行幸、節會は申すに及ばず、佛事供養にも舞樂を奏せしめ、又私の小宴にも管弦を合奏し、彼の白河法皇、鳥羽法皇の院政時代には盛んに是等の舞樂が行はれた。されば、此時代の樂器には琵琶あり、箏あり五弦、横笛、簫、篳篥より、太鼓、鉦鼓の類、その外種々樣々なる漢土傳來の樂器があつて、伶人、白拍子など宮中又は大臣の私邸に出入し、奏樂の節伶人はさまぐの面を被り、異樣の衣裳をつけて舞ふたのである。彼の平相國清盛の寵を受けた、祇王、祇女、佛、又九郎判官義經の妾となつた靜など皆この白拍子である。この白拍子といふは大饗の節舞樂をする伶人とは異つて、遊女の一種である。されば其の容貌は優美閑雅で、頭に立烏帽子を戴き、身に水干を被て金作りの太刀を佩きて舞ふたといふ事である。次に遊戯としては室内に行はれたもので歌合せ、詩合せ、貝合、繪合、香合などといふものが盛に行はれ、雙六、圍碁、投壺などの博戯も盛んであつた。又戸外遊戯としては蹴鞠、鷹狩など重なるものであつた。

要するに平安朝時代は公卿全盛の時代で王畿の地は申すに及ばず、諸國至る處ろに藤氏直領の莊園があり、諸國の守護國司なるものは概ね公卿の内から出て交代をしてその地の政治を行ふた時代であるから、全國を擧げて藤原氏の所領といつてもよい位、その尤も全盛を極めたのは御堂の關白道長であるが、その前頼忠より兼家、道兼、道隆と續いて五代の榮華、皇后、中宮は皆その家から出て、天子廢立權をも掌握し、源氏平氏の武門も當時はまだ勢力なく、權威なく殆んど藤家の隷屬と言つてもよい位なものであつた。それ故藤原氏は日本全國の富を集め、その富の力を以て數世の間平安の都に榮耀を盡したのであるから、王朝の風俗が古今に儔ひなき驕奢を極めたのも又偶然ではない。以下鎌倉、室町より豐臣德川時代に至つて著るしく變遷しましたが、それは後日を期して後を逐ふことにいたしませう。

和歌

佐々木信綱先生選評

故郷の蓮

いたづらに草のみ伸びて故郷の池に淋しき花蓮かな　高知　岡村たゞ子

評　あれはてたる様見るが如し　初句原作「人もこず」

折にふれて

夕やけのくもはいつしかうすらぎて三日月涼し葉櫻の山　河内　大矢たれ子

三四句原作「くもはおぼろになりそめて三日月しろし」

郭公

ほとゝぎす青葉の奥になきそめて蚊帳うり人は今日も來にけり　栃木　齋藤すぎ子

評　初夏の山村さこそと思ひやらる

松の花

日の光小暗き山のかげ道のたまりさゝ水松の花ちる　麻布　舟木かほる

あやめ

花うりし翁はあらず家はあれてせとの古池あやめさくなり　陸前　渡邊しげ子

首夏

翁ひとり釣竿たるゝ山中の水海のほとりうつ木花さく　常陸　成井しげ子

三句以下原作「小山田の池の水まして夏は來にけり」

ひめゆり

蚊遣火
蚊帳でしに子の寢姿をうかゞひてやがて糸くる蚊やり火のもと
大阪 奧山せつ子

失題
螢とぶ里の小川のかち渡り石ところ〴〵新月の影
越後 芳溪女史

螢
うなゐらが花火のすさび消はてゝくらきさ庭を螢とびかふ
河内 大矢たれ子

下句「暗をよこぎるはつほたる哉」とあり

琴
夕月夜誰が手すさびの音搔ぞ琴の音凉し夕顔の宿
河内 櫻井喜子

初句四句「夕月凉し」「琴の音もろゝ」とあり

瓜
けふも亦た畑の白瓜もてゆきて父が好める酒にかへ來む
佐賀 靑柳たみ子

農婦
日にやかれ土にまみれてあえぎ〳〵田草とるなりあはれ賤の女
和歌山 西口峯子

蓮の露
きよらなる蓮の露もこぼれては濁れる水となりにけるかな
信濃 堀内こま子

評 いひざまは新しからねど着想おもしろし

青すだれ
靑すだれ少しかゝげて病む友に月影見する蚊遣火のもと
和歌山 春子女史

折にふれて
歸り來て靑葉しげれる岡の上に我たゞ一人昔をぞ思ふ
伊豆 大川迷

百合
瀧つ瀬のしぶきとびちる岩の上にうつぶきさけり山百合の花
高知 高橋ゆき子

原作「いくちひろ落つる瀧つ瀬のそしぶきにさかり久しき」

百合
筆とりて繪にせんとしてなりかねつあまりに淸し白百合の花
伊勢 寺井つゆ子

村雨
詩の神の其囁きの聲ならむ若葉にそゝぐ村雨のおと
岩代 才東すが子

原作「詩神の小さき囁ききかはやと若葉にそゝぐ雨にたゝずむ」

郭公
今日もまた雨にくれゆくみ陵の松原がおくになくほとゝぎす
日向 植松せつ子

螢
わすの日の下見も終へて窓の戸をさゝんとすれば螢とふなり
南筑 遊歌里子

籠中雨
雨七月旅ゐのほどの徒然に徒然草もよみつくしけり
對馬 志田照子

評 やゝ作り過ぎたる難あり

首夏の旅
朝立の路はかどりてくだり坂若葉のなかに鶯のなく
越後 吉田梅子

佳調

夏季雜題

橋の上に蝙蝠とひてたそかれの川そひ小村しつかにくれぬ　　河内　杉田千代子
下句原作「川そひの宿灯のともる見ゆ」

たらちねの御背なでつゝ涼むかな月影白き夕かほの宿　　河内　櫻井喜子
三句原作「涼まばや」

弟の溺れて亡せし古池の水蒼うして浮藻花さく　　和歌山　曾根とも子
下句原作「水蒼くして藤の花」

蝶もさり花もちりたるまとの外の青葉かくれにほたるとびかふ　　熊本　宗村秋子
結句以上原作「蝶もはや花もちりけりまとの外にいさめかほにも」

君と二人二人歌思ふ欄の柳にかゝろ夏の夜の月　　和歌山　木下常子
初二句原作「吾妹子と二人むかへろ」

世にまさば袖ふりなべて君とふたりながめんものを姫百合の花　　長崎　たれ
原作「二人してながめんものを姫百合は露の雫とくちしかなしさ」

少女らが桑つむ歌もくれ初めて青葉の森に月ほのめきぬ　　東京　平山ちい子
一二句原作「うなゐらが歌の半ばに」

夏の海しづかにくれて島山の一本松に月まとかなり　　德島　深尾富久子
三句結句原作「浴場の」「宵の月まろき」

虫喰のつれ〲草をとり出てみるもたのしきさみたれの宿　　佐倉　桒宮信子

ともしひもふきけすばかり風立ていよ〱涼し竹の下庵　　薩摩　吉峰志美子

懐かしき友を送りて渡場に舟まち居れば時鳥鳴く　　大和　山口君枝子

青殿なかばあげたる池殿の夕べ涼しく蓮の花さく　　日向　厚地廣子

淀のやどを立たむた・じのたゆたひに月傾きて鳴くほとゝぎす　　備前　有本閑子

我が居間は縁にかして物いれにかりの梭家をつくるころかな　　京都　三の宮露子

若楓青院のまどにみどりきよく小雨靜かに白鳩のなく　　新潟　檜八重子

病む母をいたはりつゝもたちいでし若葉の陰に薬すゝむろ　　麻布　松田實子

またしても手向の閼伽にこぼれきぬみ墓のそばの青桐の花　　長門　植都せい子

ほのくらき楢の下道わけいればにほひゆかしきゆりのひともと　　岩代　菅野和子

磯にあそぶ人の夜聲も靜まりて波にふけ行く夏の夜の月　　姫路　中村八千代

名古屋　定子

● 夕風に袂ふかせていそつたひ波にくたくる月をみるかな　政　子

● 松風の琴の調しつまりてれむりもよほす夕蟬のこゑ　尾張　定　子

● 紋遣火の煙のすゑをなかめつゝありし世しのふ夕顔のやど　岐阜　山崎歆子

● つゞらこにいれしふる着のから衣かたおもからぬ夏はきにけり　前橋　直井潮子

● 病みませる友をたつれてかたらへは夜もはやふけて郭公なく　高知　岡村たゞを

● 蚊遣火の煙ほそりて親子三人雨降るゆふべ昔語りする　千葉　米頁紅葉

● すむ人もなきふる里の柴の戸を誰がためたゝく水鷄なるらむ　麹町　淺井清子

● ゆら〳〵とさはれば消ゆるはちす葉の露にやどれる短夜の月　廣島　和知廣子

● 涼風の吹きくるこよい背の君はながめおはさん印度洋の月　伊勢　山川つい子

● 河骨の黃なる花咲く池の面に三つ四つ二つ水馬飛び交ふ　平塚　長崎よし

● 茶摘み女の茶つみの歌もおもしろし山よりつゞく宇治の茶畑　千葉　稲垣茱女

● 田うゑして歸る母親まちかれて門邊に立てる幼兒二人　京都　中川せい

● うたゝねの枕すゞしく雨はれていさめかほなる月のさやけさ　伊勢　田中賢子

● 松高く行く水清く風涼し殺に忘れん夏の暑さを　河内　大矢たれ子

● 老僧のころもかへして禪に坐す伽藍すゞしき夏の夕風　小石川　貞　子

● 經をよむ聲の音ひくき尼寺にさすも涼しき夏の夜の月　播磨　三木みさを

● 來て見れば池の蓮のさきみちてこほるゝ露の涼しかりけり　千葉　小林米頁錦

● やま寺のあかくむ井戸の井戸垣に世をうのはなの咲き初めてけり　麻布　舟木かほる

● なき友の藷さし撫子花咲きぬみ墓清めていざ手向てむ　長崎　植松ちか

● 水清き川ばた茶店青簾して客よぶ少女こゑのすゞしき　姫路　中村八千代

● 病みませる背子をみとりてこの夏もむなしく明石の浦に月見る　紀伊　藤井爲子

● 一むらの小鳥老木の松に入りて夕立くらし湖添ひの道　京都　前田美子

● こゑたかくなけほとゝきすはろ〳〵ととひこし友をあたにかへすな　京橋　つま子

● ふれひとつゝなきすてたるかはぎしの柳かくれにほたるとふなり　和歌山　原田季子

● 細殿をかよふともしの影もれて御苑の薔薇に雨ふりそゝぐ　廣島　和知廣子

● おちさゐの花さきそめて枇杷の實の色づく園にさみだれのふる
赤坂　福永けい子

● 爲筆とりて朝の野邊の景色うつす君がみ袖に百合の露ちる
大坂　田中瑜瑳子

● きてみればちぎりし人は世を去りて昔のそのにたゝゆりのさく
結句原作「今もゆりさく」
大阪　岩橋けい

● さゝ川の岸につのぐむ玉柳玉まろばして夏の水すむ
駿河　林すぎ子

● さ少女の影は見えれど山もとの松原かげに田歌きこゆる
陸中　黑澤みね子

● 蚊やり火の烟をよそに門の外に出つれば涼し夏の夜の月
近江　よしね

● 一度は必ず來ませ夕顔のさく花白き川そひの宿
越前　刀禰千代子

● 山を背の十戸の村の夕闇を人聲絶えて螢飛ぶなり
山口　今橋文子

● 夕立はあとなくはれて吹く風の音新しき礒の松原
上毛　綠子

● 詩集手に眠れる子あり三保の崎世は荒金の地もとくる頃
麴町　きみ子

● 夏草はしけりにけりな少女子かすみれつみしも夢の岡にして
上州　飯田かつの

● 月ゆゑに思はぬ友もたつれきてすゝみふかしぬ庭の松かけ
大阪　田中瑜瑳子

● まど近き青葉のかげのうばらみて洗ひし絹筆また染めにけり
伊勢　岸田智枝子

● 妹の葬すみて淋しくもあめの夕部をほとゝぎす啼く
加賀　松寺三酉子

● 姫百合にましりてさける撫子は貴人の子の心地こそすれ
加賀　松寺三酉子

● あられなはかくておれかしいつまでも浮世の風を身にうけすして
岡山　橋本芳子

● 風吹かは散りやみたれん玉笹の露にやどれる夏の夜の月
伊勢　中村三重子

● 涼みせし濱松かげの眞砂路に我名わが歌書きて皈りぬ
函館　さくら

● 弟がきのふ作りし箱庭の池にもやぶる夏の夜の月
埼玉　高鹿照子

● 夕べ／＼なれをわがまつこゝろくみて今宵はなのれ山ほとゝぎす
岩代　芦川きよ子

● ゆく水に流ると見せて川そひの柳に高くとぶ螢哉
日向　山下いづみ

● いたづきのなやみもしばし忘れけりゆふ風かをる池の釣殿
大阪　園はる子

● やり水に棄うらうつせる朝顔のつぼみかぞふる夏の夕くれ
大阪　大西ふく子

● 案内する友の姿は見えずなりぬ生ひしげりたる夏草の中に
長門　原田粂子

● 波青く白帆は島の影に入りていその松山虹のかゝれる

ひめゆり

● 大坂 鶴　子

小夜ふけて今宵もなくよ時鳥心にかゝる病院の友

● 大坂 増　子

臺灣の父を思ひてこの夏は暑しとだにもいはぬ子ら哉

● 山城 古川よれ子

くひなさへ夜なく〳〵とひて岩たゝく水音きよし谷の下いほ

● 埼玉 林 若 葉

燈火はふとかき消ねて涼しくも松か枝うかふ窓の月かげ

● 志摩 濱口しづ子

都より歸り來し妹伴ひて思ひ出多き夕涼みかな

● 志摩 濱 口 し づ

涼し場に舟待ち居れば月落ちて水上遠く杜鵑なく

● 山口 草 賀 通 女

月やどる露の白玉たま〳〵にちるも涼しき松の下風

● 下關 大 濱 ま つ

やり水に五日の月のこぼれきてあたり眞白く卯の花のさく

● 河内 大矢たれ子

宿の子かもてなしふりの蚊やり火にすゝしくくもるやまのはの月

● 本鄕 和 歌 子

やみの夜に消えつ光りつ螢火のかけおもしろき玉川の里

● 滋賀 山元高麗子

さゆり花をりてながめて少女子のなに思ふらんひとり笑みたる

● 本鄕 高野たつ子

夕立の晴れて涼しき月見ればこゝろの雲ものこらさりけり

● 長崎市 中 島 と み

我宿のしげき青葉の木がくれに小雨降る夜を鳴く時鳥

● 京都 三の宮露子

螢追ふわらべつとひて里川の土橋のつめのにぎはしき哉

● 信濃 竹鼻はる子

ゆふべ夕べ星のさゝやく聲さむしさゆり花咲く畑中のいほ

● 河内 桂 君 枝 子

君と二人めでにし花の跡とへば青葉かくれに初蟬の聲

● 佐賀 川 濱 梅 子

ふり初めし日數々へてみつる哉あまりにつゞく梅雨の雨

● 相摸 小岩井 すみ子

雨はれて白薔薇かをる袖垣に夕風そよぎ月ほのめきぬ

● 福井 刀禰しん子

城あとの一本松に月おちて荒れたる堀に水鷄なくなり

● 千葉 平川遊蝶子

はじめての旅よ今宵は木曾の宿物思ふ窓にほとゝぎすなく

● 三重 稲 葉 愛 子

藪蔭に小百合手向る夕暮を雨こぼれ來て鳴く時鳥

● 肥前 夏 木 露 子

父もなく母もなけれど此の夏たゆきて過さん故鄕の家に

● 愛媛 入 多 貞 子

この夜よし月おもしろし風すゞし川邊ありきに歌おもひみん

● 常陸 遠 山 榮 子

蚊遣火を立つる畑におのれまづむせびて宿を出てにけるかな

● 日向 日置たれ子

城跡の一本松に荒鷲のかげさやかなり夏の夜の月

● 芝　鈴木なばな
鯰魚あそふ池のほとりの乳母くるまれふれる乳兒に藤の花ちる
● 近江　福永靜子
ほとゝぎす思ひもらせる一こゑは露の衣もつゝみかねらむ
● 和泉　南川ひろ子
思あまり又とひきつる故郷にむかし語らふ山ほとゝぎす
● 對馬　山本房子
兄君の歸り遲しといで見れば銀河の邊り杜鵑啼く
● 高知　小西雅子
柳かげにつらき別れをやゝしばしたゆたひ居ればなく時鳥
● 三重　吉村靜枝
路端の清水流るゝ木下陰暑さを餘處に地藏尊立つ
● 日向　山下王子
白百合のひともと咲きぬ山陰の清水に清き影をうつして
● 鹿兒島　横山いは子
わが家のありし昔も忍ばれて古井戸ばたの夏菊の花
● 信濃　竹鼻はる子
かきならす琴のしらべもものうげにれぶの花ちるたそかれのかど
● 姫路　中村やち子
打寄する波に暑さを洗はれて秋の聲する濱の松風
● 信濃　竹鼻はろ子
ほとゝぎすなく聲のして雨くらし螢とび交ふ川沿ひのむら
● 出雲　竹内鶴子
なき妹の靈かとぞ思ふ香袖に招かぬ螢獨り落ち來ぬ
● 和泉　井上登美

夕月の影は一つを家ごとにいれてぞすゝむ川面の里
● 河内　巽白ゆり
小車の上はわだちの音高し下りてや聞ん鳴くほとゝぎす
● 河内　巽白ゆり
紐紅き菅の小笠のまじりつゝ麥畑一里たゞうたの聲
● 周防　大木久仁子
すゞしげに露のこぼるゝ音のして吹く風かをり蓮のくづれぬ
● 奈良　今田深雪
佐保姫が道のしるべに殘し置く匂ゆかしき野邊の白薔薇
● 加賀　ちさ子
おしなへて青葉若葉となりにけりいつれか紅葉いつれ常盤木
● 能登　久保しづ子
琴の音も淸く凉しき高殿のすだれに通ふ夏の夕風
● 武藏　鈴木米子
谷川の朽木の橋に露とぢてあやめもわかず梅雨のふる
● 東京　田中みれ子
月影のうすく殘れるあさぼらけ池のはちすのたゞほの白き
● 福岡　宇野稻子
さみだれのいぶせき窓に別れにし都の友を思ひこそやれ
● 尾張　藤野園子
山三里こゑてやすらふ松かげの苔むす岩根水ほとばしる
● 陸中　木木まつゑ
渡し場に友見送りて歸るさの有明月夜鳴く時鳥
● 長崎　松浦かね
ひくき音に小琴のしらべ聞ゆなり花菖蒲さく草ぶきの家

● 尾張 白ゆり

せゝらぎにゆめも流るゝ心地してうたゝねすゞし川添の床

● 長門 杉山きこの

ほこりかの世にはならはて賤か家の垣ねにかほる姫百合の花

● 本郷 高野よし子

世の中に暑さも遠くはなれけりよし野の奥の夏の夜の月

● 函館 横川とめ

紀念碑の文字見ねぬ迄しげりあふ青葉の奥に杜鵑鳴く

● 丹波 植村太刀子

はる暮て夏さり来ればふし川の水音高しふじの雪解に

● 茨城 藤原歌子

花の世はゆめのごとくに過ぎゆきて梅雨ふる軒に郭公なく

● 大阪 和田とらの

浴み終へてそゞろあるきの川風に秋かすめて螢飛ふなり

● 奈良 奥田りう

柴の戸を叩く水鶏にはかられて短き夜半もめさめがちなり

● 大阪 木村岩枝

ほのくらき杉の下道たどり行けば涼しく瀧の音ぞきこゆる

● 深川 和歌子

影うつる若葉すゞしき山川にあゆ子さばしるなつはきにけり

● 甲斐 波木井常子

さくゆりの花のこゝろは知られども浮世のちりにそまぬめでたさ

● 神田 企成子

暮るゝまで高くきこねし蝉の聲もいつしかたねて月になりにけり

● 若狹 板橋つれ

搖籃に母をゆめみる幼児のうつしき頬に青嵐ふく

● 大阪 小野桂花

夕つく日涼しき風に吹かれつゝ月の出んをまつの下かげ

● 長門 草賀はな子

まゝにならば都の君に送りてむわかやに通ふ松の下かぜ

● 京都 村井澄江

我庭の松の葉越にてる月の光すゞしき夏の夜半かな

● 札幌 ゆき子

立ちならぶ杉の林のひまことに光りこほれてにほふ月かな

● 山城 今邑しやう

見返れは今しそなへし山百合に胡蝶とまれり友のおくつき

● 東京 鈴木米子

夏かけて咲くとも人は知らざらん青葉かくれの遅櫻花

● 栃木 須永しげ

夕されば里のうなゐら打ちむれて小川のきしに螢かるなり

● 神戸 中村きく子

妹は庭の青葉の下陰に書よみうみて編物をする

● 伏見 みき子

山の端も霞の衣ぬぎかへて緑すゞしき夏よそひせり

● 紀伊 池永ふみ子

ふく風に燈火の影消ねぬれどなほ窓あかきゆふ月夜哉

● 福島 菜女

外國のあつき都にすむ兄は今宵のあつさいかにすこさむ

● 越後 照子

もの思ひにたねでたゝすむおばしまにあはれ血になく山ほとゝぎす

失題

白百合露子

人の心を誠ぞと、
唱へば、ばらの花咲きて、
人の言葉を誠ぞと、
唱へば、水の面澄みて、
去つて、偽りのかゝる世を、
なかしからずや、山深く、
あした、谿間におり立ちて、
岩ほに觸れて流るれば、
夕べ、山路を分け行きて、
枝を渡りて風ふけば、
樂しからずや、偽りの、
流れのつゞみ、松風の、

思ひし事の愚かさよ。
針含むとは知らざりき。
頼みし事のはかなさよ。
底に濁ると知らざりき。
落葉しとねに、岩枕、
詩と歌とを友として。
掬ぶ小川のこけ清水、
こゝに、鼓の響あり。」
憩ふ高嶺の松の蔭、
こゝに、小琴の調べあり。」
浮世の外に、けがれなき、
小琴に、歌を合はせつゝ。」

想に調に、別にすぐれたる新しきふしのあるにあられど、其のいふところ、おだやかにすなほにして、此の頃流行する彼のいやに氣取りたる口吻なく、且つ、いひまはしも整ひて、先づ一篇の新躰詩の心を得たり。調もよし。（雨江評）

親しき人に別れて

相模　室田たもつ

五月雨の、
空霽れやらず、
昨日今日、
降る雨わびし。
あな、懐かしの
我が友は。
あな、慕はしの
我が友は、
袖ふり切りつ、
路遠き
東のみやこに、
かたみに文は
通へども、
その寫し繪は、
手にあれど、
文には、君の
聲もなく、
ゑがきし口に、
言葉なし。
窓打ち明けて、
雲かくれ、

都の空を、
眺むれば、
つばめのひとつ、
飛ぶ見えて、
降り込む雨に、
袖寒し。

調にはめづらしき色なけれども、そのつくらぬところに、なかなかに、切情のやさしくひゞきてきこゆるものあり。末段の二句、彼の元微之が白樂天の貶謫を聞きて悲しみて贈りたる絶句の「暗風吹雨入寒窓」に似て、限りなき情景の身にしみておぼゆるものあり。（雨江評）

小蝶の夢

牛込　鈴木かつら

若草もゆる春の野に、
かぎりは遠き行末の
花咲き鳥舞ふ野に立ちて、
愛となさけにつゝまれし
落花亂るゝかげにして、
ふたりが戀にかへむには、
怖むなしき野をいでゝ、
あゝあやまちし身を悔いて、

ひとり歩みをいれし時、
望みある身と思ひてき。
はからず君と知りしとき、
うれしき身ぞと思ひてき。
甘露の夢に醉ひしとき、
惜しからぬ身と思ひてき。
むかしの小徑たどる時、
はじめて物を思ふかな。

末段やゝものたらず、句調もやゝ平調のきらひあれど、常に纏の

ある調を思ひて、思想をいひまはしたるところ、一かどの愛すべき文才見えたり。（雨江評）

靜夜吟

信濃　小澤八重子

星一ツ長く流れて、
宵月今や山に落ち、
さ迷ふ廣野影淡く、
萬象此處に靜まりぬ。

天界萬里冴え行きて、
察くほゝゑむ星を載せ、
我が世の夢は今深く、
せゝらぐ小川調高し。

星の笑顔に比べては、
人の情の冷たくて、
小川の調に比ぶれば、
心短かき我が世かな。

見よ、温かきほゝゑみに、
深き情のこもれるを、
聞けよ。小川のせゝらぎに。

巣き獸籠の母くを。

されば、聞ゆる俗の人よ、
汝が果敢なき想捨て、
せめて靜夜の野に立ちて、
しばしは想へ。造化(カミ)の啓示(サトシ)を。」

しつかりとしたるふしはあれど、餘りに理屈がましきを惜しむ。（雨江評）

暮春の田園

本郷垂玉女史

朝

川面白く明けそめて、
立つ一すぢの煙をば、
うす紫の其内に、
鎭守の森の深緑、
呼びかふ鷄聲はれて、
野末の賤が伏屋より、
根に引きこめし朝霞、
ほのほの見ゆる山影や、
杉の梢に集ひつゝ
夜の帳は消えにけり。

晝

日はうらうらと照りそへば、
黄金の波はゆらぎつゝ。
小陰にねむる里の子が
十畝の畑の桑の花の
露だけにのびし青麥の
ゆたけき穎に、平和の
色を浮べて、さゝ川に
たのしみ多き田園の
自然の歌を歌ふなり。
水かふ馬のいなゝきは、
靜けき風と諸共に、

夕

蘆の新葉をこぎ分けて、
後を追ひゆく暮の色、
金龍躍ると見ゆるまに、
鐘は揺曳つたはりて、
アー田園の春の暮。
流をくだる柴舟の
落陽西の雲に入り、
野寺に起る入相の
世は翠帳に包まれぬ、

節毎の句數の一致せざると、調のやゝ單調なるとは、いかゞなれど、優麗なることばは、四條派の山水畫を見る心地すと申すべし。（雨江評）

わかれ

磐城　永田きよ子

今より離れと遊ぶべき、
日暖かきはろの野べ、
共に遊びしおしろ山、
こぞに變はらぬ櫻ばな、
明日はやがてぞ笑はしく、
咲くべきものを、吾ひとり。
胡蝶は舞へど、君なくて。

今より誰れと歌ふべき、
夕風涼しき夏の夜は、
手を携へてたどりつゝ、
いつも立ちよるはしの上、
彼方此方(ヲチコチ)照らす螢火や、
寄する岸べのさゞれ波、
きよきながめを友にして、
いと樂しげに興じつゝ、
聲爽かに歌ひしものを。

今より誰と眺むべき。
もゑなむばかりの夕榮にも、
あとなく消ゑて、澄み渡る
御空に高く、かりがねの、
數さへ見ゆる秋の月
影をばうつす丹後ざは、
君を浮べて、眺めしものを。

今より誰れと語るべき。
軒端に雀かまびしく
見渡す限り銀世界、
肌うらさむき冬の朝、
圍爐かこみて、君と吾、
歌よみ文をひもときつ、
共に樂しく語りしものを。

一つ心の君と吾、
かくもなれにし君とわれ、
思へば悲し、今日の別れ。
願ふは、千里を距つとも、
たのむは、かりがね、心して、
君がおとづれ、春秋に、
それを命に、わは生きむ。

調うるはしく整ひたるはよし。されど、詞多くして、なか〳〵に、情のやゝ切にきこゑざるを惜しむ。(雨江評)

落花流水

下野 石塚こう子

一すぢ清きたに川の
風になみよるかは柳、
吹きくるかぜのゆるければ、
かげも靜に映るかな。
折りもこそあれ、漣の
波のまに〳〵漂ひて、
來ぬるは、春の名殘とや、
うたがたならぬ花筏。
あはれ、ゆふべの小嵐に、
散りにし花のおほければ、

業のしがらみ堰きあへず、
身を行く水にまかせてぞ、
行方さだめぬ波枕、
あないぢらしの姿かな。
榮りはいづれ限あれば、
ふかれど、花はちるものを。
あゝ、心なの春風や。
如何にや、しばし、吾が膝に、
今宵は宿れ、われもまた、
はるの名殘を惜まなむ、
少時とばかり、青柳の、
下枝さしのべ、寄り添へば、
花も、情をうれしとや、
もゆる唇、枝につけて、
しばしがほどは、眠ひけり。
されど、つれなき小波の
誘へば、またも波の上に、
行方もしらず流れゆく。
今はいづこに漂泊ひて、
宿る柳のありやなしや。

一かど新しき材料を取り來たりたるは、愛すべけれど、なほいひまはしかれたるところあるを惜しむ。(雨江評)

農夫

伊勢　なでしこ

飽き「希望」と「名」をすてゝ、
「自由の國」にたがやせば、
神の賜ひしうま土に、
「理想」の花はにほふかな。

人は虚飾につかはれて、
「罪の衣」をかさねるに、
只、鍬とりて、草ぎりて、
荒き布子にほゝゑみつ。

清き小甕の甘酒に、
酔うては眠る藁の床、
聞くは、自然の樂にして、
語るは、何の幸ならむ。

思へば、安き年月を、
「自由」の夢に起き臥して、
吾子の爲めにと墾く野の、
朝な夕なの樂しさよ。

いふところ、やゝ新しきを得たれども、なほもの足らぬふしあり。結句の殊に平凡なるを惜しむべし。(雨江評)

西の京を懷ふ

伊勢　神尾　英

十年の昔いわけなき
まだふりわけの黑髮を
洗ひもしたる鴨河の
水は淸くて今も尙、
綾織る浪の色もたへに、
流れやすらむ、西の京。

嵐の山に春くれて、
藤の花房散りぬれば、
木々は緑の色深く、
風は涼しき音たてゝ、
大原の里に置く露の、
朝な〳〵は繁からむ。

住みもなれにし岡崎や、
草道の椿の實りては、
葉がくれうすき紅の、
奇絮にもゆる其の色を、
いかなる人か又住みて、

若き生命と歌ふべき。

われや空しき漂泊の、
昨日は東、今日は西、
行くに定めのあらざれば、
別れて遠くなりぬれど、
錦飾りて童ゆきて、
汝に逢はんは、いつならし。

若葉五月の陰くらく、
雨も靜けき窓の下、
思ひ出づれば、つく〳〵と、
心もなくてながめたる
都大路の、おもかげの、
今はみながら懐かしき哉。

調美はしくしたてられたるはよし。されど、なほ情のひゞかぬものあり。結句殊に平凡なるを惜しむべし。（雨江評）

一葉舟

[illegible]井　刀禰　雪子

浮世のちりにたへかれて、
しばし憂をわすれんと、

夕かぜ清きみづうみの
一葉の舟に棹させば

み空に動く夕ぐもの
五彩ほのかに匂ふとき、
水に光りを沈めては、
黄金玉よる浪の面。

入相つぐるかれの音の
餘韻かすかにひゞくとき。
浪にたゞよふもゝ舟は、
夜のとばりにつゝまれぬ。

浮雲遠く消ゆきて、
ゆかりの色の新星の
すゞしきまゆを開くとき、
仰げば、空に啓示あり。

あゝ、青春の夢に醉ひ、
理想の戀にあこかれて、
エデンの園をしたひゆき、
浪に心を洗ふかな。

浪にこゝろを洗ひつゝ、
わがふきすさぶ笛の音の、
龍のみやこに聞ねなば、
女神の夢もさめぬらん。

見渡すかぎり、露おきて、
やさしき清く月かげに
みどりにふける夜の光
眠るが如く見ゆるかな。

萬籟とはに音やみて、
うれしや、われは只ひとり、
自然の母のふところに、
ミューズの神の歌を聞く。

小松原

京橋　柴田　勇子

葉ごしに濱の花見ゐて、
　浦風清き小松原、
玉敷く如き眞さご地に、
　囀る鳥も心地よく、
昇る春日の長閑なる、
　その朝毎に來て見れば、
里のうなゐら鄙歌を、
　歌ひつゞけて來たるなり。

くまで擔へかご持ちて。

一葉もなかで掃き去りし、
　昨日の松の木のもとを、
一夜隔てゝ今朝見れば、
　こがれの糸を置き添へて、
眞砂の上をかざるなり、
　よべのあらしのしわざかも、
知るや知らずやうなゐらは、
　節面白く歌ひつゝ、
落ちし枯葉をかきよせつ。

歌ふ間にいとけなき、
　笑ひ聲さへまじりつゝ、
繁る木の間をこゝかしこ、
　晝げの烟家々の、
かやの棟よりのぼるまで、
　にぎはひわたる聲すなり。

やがて聞ゆる山寺の、
　かねのひゞきにうなゐらは、
あつめしこの葉こに滿てゝ、
　我家のかたにいそぐなり、
籬の外に母親の、
　待つらむ顔の見ゆるまで。

晝げのあとの村里は、
　皆家毎に戸を閉ぢて、
人げ少なくなりぬれば、
　またもうなゐは打ちつれて、
ねぐら求むるむらがらす、
　うしろの森にかへるまで、
清き眞砂の松原に、
　遊び暮しつ長き日を。

想ひいづれば其かみは、
　君も其等のうなゐにて、
松吹くあらし波の音は
　今猶耳に殘れども
故郷遠く離れきて、
　學びの路に遊ぶ身は
其のおもかげを思ひねの
　夢路にたどる外ぞなき。

悼亡詞

上野　新井まさ

錦の衾あやのきぬ、
生けるが如く備りそへど、
たてまはしたる金屏の
倒なるを、いかにせん。
花のかむばせ、雪の肌、
ありし昨日にかはられど、
眼をとぢて、永劫に
さめぬ眠を、いかにせん。
人百歳のよはひなく、
春は九十に過ぎぬ共、
誰が願はんや、白璧の
圓きにすぎて、碎けよと。
さはいへ、千音萬音の
めゝしき業をくりぬ共、
冥路に去にしみたまをば、
返さんすべのあるべきや。
せめては君が用ゐてし
眉を繪きしふでもて、
楞伽金字の經寫し、
空しき骸に捧げばや。

君のもとへ

佐賀　野口とし子

美はしき
君の許へとふでとれど、

まて、言ひ捉ることの葉の、
こゝに至りてあらざるを。

嘉みのみ筆頭にあてゝ
たゞ目をつむるこのゆふべ
清ねては見ゆるみ姿の、
やさしく我れをなやましむ。

まてしや、いかに、祈り〳〵は、
君がやさしき御すがたの、
あれ、あの月のかげに立ちて、
こなたを目守ることあるか。

せめての願ひ、たゞ君が
みづから植ゑしむらさきの
蕾ふくろゝ朝がほの
その蔓ながら、手折りてむ。

かくして得たる一つをば、
君へのふみにはさみつゝ、
のこりの蔓を、瓶にさして、
ある夕となく、ひとり眺めむ。

ひめゆり

東北饑饉

信濃　小林つね子

めぐみ洽ねき天つ日の、
光りはけぢめなからんを、
あゝ如何なれば雨風の、
我等にのみぞあはつけき。

去年の秋より一粒の、
稟も實らぬ凶歳に、
多くもあらぬたくはへの、
黄金も穀も盡きにけり。

人も羨む背戸の田や、
家に讓りのたからもの、
身を紛にすとて放たじと、
立てし誓ひも仇なれや。

過ぎし昔ははらからと、
なぐさみがてらせしものを、
彼と爭ふ栗拾ひ、
兎と競ふ蕨狩り。

野に[illegible]む[illegible]の食、
雪す寒くとて[illegible]

日頃めでにし飼犬や、
牛さへ屠る浅猿しさ。

花咲き匂ふこん春は、
いとし孫子と手を取りて、
博覧會に行かましと、
頼みし老もあるらんを。

遠山寺の鐘の音、
氷るばかりの此の夜ごろ、
餓に迫りて冥府にゆく、
哭きの聲ぞ地に満つる。

うき世の人は昨日今日、
花も既足とよそほひて、
上野の山に淺草に、
うたひつ舞ひつ狂ふらん。

女學世界第七號才媛銅版入選者中左の諸姉の住所不明につき至急御通知あれ。
小西雅子　吉田辰子　[illegible]子　横山いわ子　神尾くに子　逸水ふせ　岡田美和代　岡田[illegible]子　[illegible]子　[illegible]香子

史傳

紫式部

勢多桃陽

わづまをもろ〳〵の器物の上に置き紫をよろづの色の中にたとひるが如く源ふかき水はくめども更に盡くる事なくくらくなき玉はみがけばいよ〳〵光をます我國の至寶は源氏物語に過ぎたるはなかるべしとは、後成恩寺兼良が「花鳥餘情」の開巻第一に叙して、我平安城の女文學者紫式部の「源氏物語」を賞嘆せる語なり。果して其著作の眞價が如何なるにもせよ當時の文學界は勿論、後の國文學者、儒佛の諸流にさへ千古の妙文、我朝の至寶と稱へられ、或は春秋に比して仁義五常の道を說けりと爲し、或は天台六十卷に較べて、中道實相の敎を論せりといひ、又此物語見ざらんものは歌讀みの無下なるものとまで斷せしめしも豈故なしとせんや。予は今此有名なる文學者の性格生涯の如何なりしやを窺ひ、併せて其周圍との關係、其著作を生せし起因等を知らんとす。然れども其時代旣に遠き平安朝に屬すれば、作者の經歷傳系の如き明瞭ならざる憾あり、されど予は先づ、當時文學の如何に發達せしか、又一般の風俗習慣は如何なりしかに就て述ぶる處あるべし。

第一　その時代

夫れ平安朝は概して和歌の盛時なりき、然れども其上半期は寧ろ漢文學の時代として見るべし、殊に平安遷都の初より淸和帝の頃に至る凡七八十年の間は、實に其極盛の運に向ひし時なりといふべし。夫の奈良朝以前より盛なりし隨唐の交通、留學生は、醍醐帝の時に菅原道眞が上書してこれを廢するに至りし迄、歷朝殆と此擧わらざるはなかりき。又天智の朝に於て刱めて學校を設け、漢文の奬勵を計らせ玉ひしより、累代の

天子は益々これが發達に意を注がせられしかば、諸國普く國學の建設あらざるなきの有樣なりき。孝謙帝の朝嘗て公廨田二十町を附し、諸生の給養に充てられしが、桓武帝の時に至りて更に勸學田百二町を增加し費用の足らざるを補ひ給ひしにても、其文運の隆盛なりしことを察し得べし。尙淳和帝の頃よりは廟堂の貴紳も自ら齋庫校舍を設け、愈々斯文の發達を助けたりし事實、例へば和氣の廣世は弘文院を建て、右大臣冬嗣は勸學院を置き、源氏の奬學院、淳和院、橘氏の學館院、菅江兩氏の文章院等、競ひ起りて世は靡然として漢文學に傾向しぬ。

偖此等學問の奬勵が此時期に與へたる影響のいかばかり顯著なりしぞ、國史の修撰は歷朝爭ふて企てられ、律令格式の撰も亦少からず、其他公の記錄制令はいふに及ばず、貴顯搢紳の私の往復文まで殆ど漢文を用ひし程なれば、其漢文詩賦の流行察すべし、桓武より清和に至る迄、諸帝概ねこれに意を傾け玉ひ、殊に嵯峨朝の如きは宮中の諸姬に至るまで、其藝に堪能ならざりしものなかりしとぞ。

抑も此の如く前朝以來鋭意學問の奬勵を計らせ玉ひし目的は、普く人民を敎化するの旨趣に出でしかといふに然らず、蓋し學生となるにも嚴に資格の制限ありて、一般人民の入學を許されず、寧ろ其目的は單に朝廷に屬する人物を養生するの意に出でしなり。去れば當時學者文人と稱せらるゝものは概ね廟堂の上に集り、獨り九重の裡に於てのみ文化燦然たるの光景ありき、かゝる有樣なりしも、漢文學は當時男子專有の學たりしなり。紫式部日記に「なでう女が眞名文は讀む」といへるが如く、昔は經讀むをだに人は制しき、貴姬宮嬪といへども漢文を弄せざるにはあらざるも、女子は一般に假名製作以來これを以て和歌を弄ぶを普通とせしに似たり。されば漢文詩賦の潮流は專ら上流男子の間に流行し、或は奔端ともなり、或は激流ともなり、飛泉落瀑の盛觀實に見るべし。此時に稍々發達せし假字文は女流の用文に過ぎずして、萬葉撰集以後一時振はざりし和歌と共に寧ろ傍流として、僅に翠帳紅閨の

中に其臘を保ちしに過ぎず。夫れ寒梅の馥郁たるも、櫻花の爛熳たるも、春風の節に和すればなり。而して風候の花を開く、豈曾梅櫻のみに限らんや。當時の宮廷は靡然として文化に傾けり。文學の花蕾は既に漢文に於て綻盡せり。豈獨一たびその萠芽を生せし國語のみ發達せずして止まんや。漢文學の全盛時に於てこそ充分の發達を遂げざりしなれ寛平の頃より漸々其頭を擡げ、醍醐帝の頃に及びて假名文のあらはるゝもの少からず、例へば紀貫之の古今集の序文、及び土佐日記の如き、實に其思想の影響と其文辭の對照とに因りて、爭ふて進歩の域に到り、尋で一條院の鋭意和漢の人才を登庸し玉ひ、廟堂の文學愈々郁々たるに及び、此等の文人に親近する宮嬪亦甚だ秀逸なるものを生ずるに到りぬ。且一條院の中宮上東門院の如き、女流の才華あるものを擇みて、左右に置かせられしに際しては、假名文學は振興を極め又前代に比類なき我國女文學者の盛時とはなりぬ。

一條院嘗て人に語りて宣はく、朕不德なりと雖も人才を得るの一事は敢へて延喜天暦の盛時に讓らずと。實に帝の御宇は我平安朝文學の隆盛なりし頂點にして、恰も駘蕩たる艶陽の時節雨新に乾きて、千紫萬紅一時に綻びたるの趣あり。即ち清少納言、赤染衛門、和泉式部、伊勢太輔等の女流は皆文才を以て鳴り、四納言と稱せられし源經信、藤原公任等また文學を以て其才名を鬪はし、假名文物語のあらはるゝ實に少しとせず。予が說かんとする、千古の名文源氏物語の作者紫式部も亦此時に出でたりき。此貴族的流文學、むしろ平安朝文學の代表なりし源氏物語の成れる時代の風俗習慣はいかなりしか、今これを論ぜん。

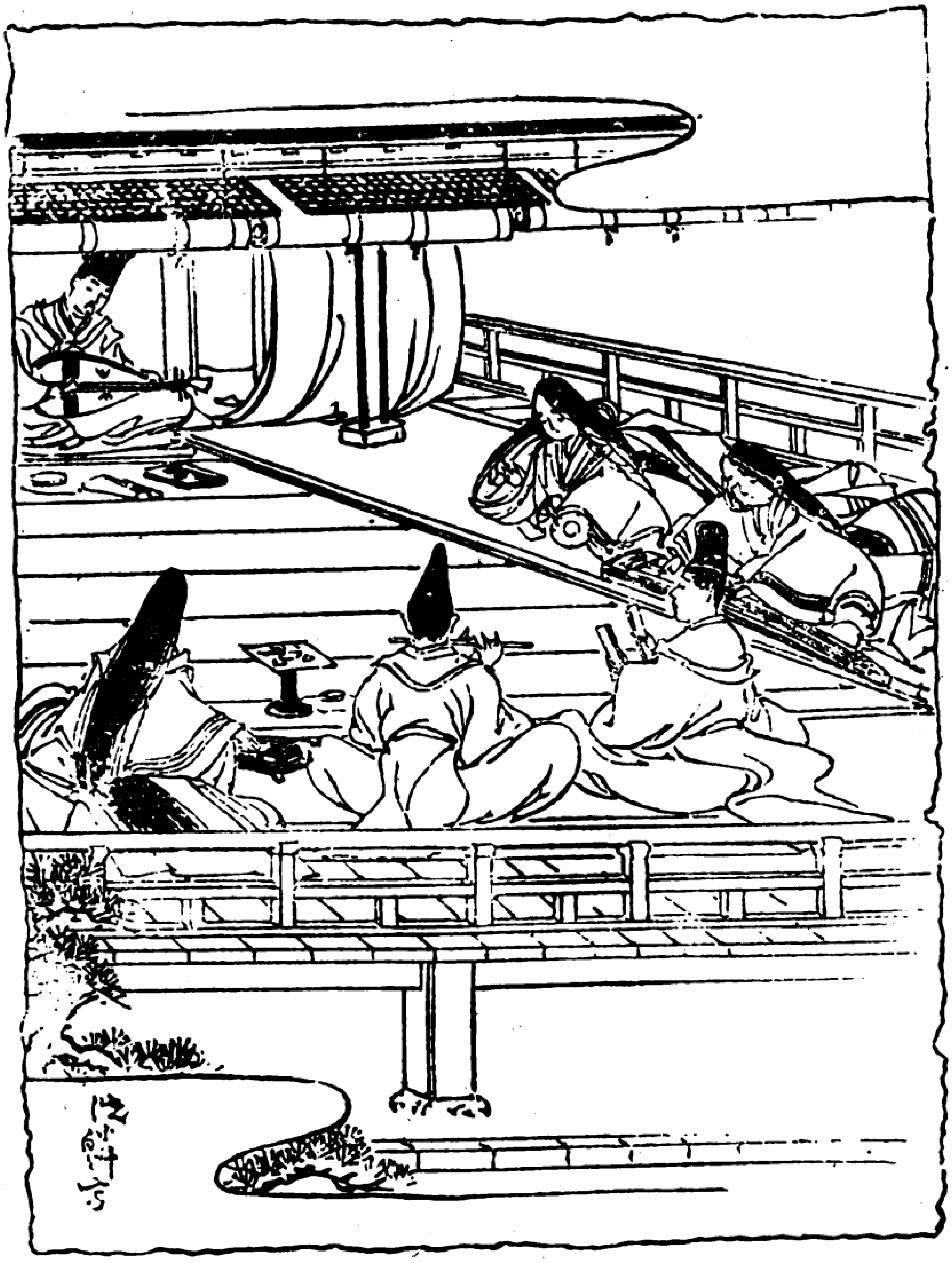
前にもいへりし如く、隋唐の交通は、當代の文明殊に貴族社會にいかなる影響を及ぼせしか、又かの佛教の渡來がいかなる結果を有すべきか、前代の制度改革は更にいはず、唐風漸く行はるゝに隨ひ、上代素朴の風儀は變じて浮華となりぬ。聖武孝謙の國分寺設立は亦說かず、佛教の益々弘通するに及び、上下勇壯の氣象は化して懦弱となりぬ。此弊や既に奈良朝に於て見は

れしが、平安朝に至りては、更に著しく、殊に藤原氏の政權を掌握せし時に至りて一層甚しかりき。藤原氏は鎌足が曾て天智の朝に勳勞ありしより、外祖外舅の親を以て世相承け、位人臣を極め、子孫相繼て攝政關白となり、其子弟は大臣大將に補任せられ、政權は擧げて一家に集り、朝廷の尊嚴を擬して朝野を臣僕となし、攝政准三宮の例を作り、隨身兵仗の榮を得、關白職始まり、攝政後關白職亦起りぬ。實に藤氏一門の重きことは、猶諸皇子も抗禮するを得ざる勢にして、政權榮耀を掌弄する其極に至りぬ、況乎其富に於てをや。莊園は天下に偏ねく、諸國の農民は藤原氏の爲に耕し、藤氏は恰も天下の大地主として貨を有し、政所を設け、御教書をさへ僣用するに至りきといふ、其奢侈實に驚くに堪へたり。當時朝廷には皇族甚だ衆く、或は姓を下し、或は國守に任じ、或は又輔相の任に當るものもありしが、藤原氏の子弟は、此等の諸皇子と比肩し、富貴を極め、第宅別業を起し、驕奢豪美至らざるなく、閑雅逸樂てれ事として、管絃を弄し、放縱に耽り、佳人才子相携へて、世は宛然仙境の如きものありきご

御堂關白道長の歌に「此世をば我世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」以て道長の心事及御堂の建設の如何に壯嚴美麗なりしかを知るに足らん。「椽の大防はしく金の色なり萬の金物皆こがねなり御前の花形すへは皆金の漆のやうに塗りて違目ごとに螺鈿の花形すへたる色々の玉を入れ」燦爛たる瑤臺「塵もいかたき」ものありしなり。藤原氏の勢また盛ならずや。

一切世にあるものは皆死す壽命無量なりといへとも必盡くる期あり盛なるものは必衰ふ會ものは離別あり果報として常なることなしあるは昨日榮へて今日衰へぬ春の花秋の紅葉といへとも春の霞たなびき秋の露立ちこめつれはこぼれてにほひ見えずたゞひとわたりの風に散りぬる時は庭の塵水の泡とこそはなるめれたゞこの殿の御前の榮花のみこそ開けはじめしより千年の春の霞秋の露にも立ちかくされず風も動きなくして枝を鳴らさねばかをりまさり世にあ

りがたくめでたきこと優曇花の如く水に生ひたる青き蓮の世にすぐれてにほひならびなきが如しと榮花物語に見えたりしが誠に其盈滿の狀さてそと思はる。藤氏の專横奢侈斯の如く、期する所は其榮華の永劫ならんにあり。後世の安樂たらんにあり。故にこれを佛果に求んと、是に於てか崇佛の念盛なり。佛教はこれが爲に强盛を極めしなり。然るを況乎畫さには、最澄空海等の名僧出で、本地垂跡神佛一致の説を唱へ、上下敬神の心を飜して、奉佛の軌轍に就かしめ、又歴代の諸帝この教に歸依し給ひしに於てをや。其勢力强大僧侶は益々尊まれ、朝廷殺生を禁じ、慈善を務め、佛法を以て國家唯一の護法と爲し、天災地妖、疾病兵寇をさへ佛陀の通力に因りて避けんとするに至りぬ。斯く貴族と共に榮へたりし佛教は、又彼等に與へたりし影響も尠からず。彼等はこれに由りて盛者必滅の理を知り會者定



離の教を覺りぬ。又彼等は現世の無常を觀じ、死の定りなく、生の頼み難きを知り、もし生前に於て安樂を得ざれば、他日これを得るの道なしと思ひぬ。されば其所謂安樂は唯目前の快樂にありき。毫にても必身に苦痛あれば「手にむすぶ水に宿れる月影の有かなきかの世にてそありけれ」などの述懷を誦ずかと思へば憂苦を忘るれば忽ち「櫻かざして今日もくらしつ」の氣樂遊戯三昧に暇なかりしなり。こゝに至りて素朴勇壯の風は全く跡を絶ち、浮薄文弱となり遊惰性を爲し一般に淫猥の風行はれ、一夫にして多妻、一女にして數夫に見ゆるが如きは驚くに足らず、夫の萩原廣道が當時の狀態を推想して

　よりくる縁にのみまかせて誰は本妻彼は側室などときはやかに名を附くる事にさばかりきよくはなかりし樣なりされば貴き人の御うへには本妻と覺しき人の二人までおはすもありまた妻とも妾ともしられぬ類などもありて樣々なりしなり（源氏詳釋）

といひしが如く、又「枕草紙」に「男も女も法師も契深くてかたらふ人の末迄中よき事」は「しうとにほめらるゝむこ又しうとめに思はるゝよめの君」と共に世に有難きものとして數へられしにて推測し得べし。此時天子數々詩歌管絃を合せて、兩席三席歌合の御會兩船三船の御遊をなし玉へば、公卿殿上人は曲水の宴、紅葉の賀、其他香、双六の遊戯に暇なく、或は郢曲和琴笙笛鞠鷹を以て、家を起すものさへありしも、實務は更に觀る處なく、武事を輕じ、徒に泰平無事を希ふも、天下失勢の如何に傾きつゝあるかを知らず。夫の朱雀の朝に起りし天慶の亂の如き、武士の力を頼みて漸く鎭定に歸したるも、これに鑑みる所もなく、終に諸國の武士は漸々放恣の風を爲し、世は既に騷亂を釀しつゝあるも、亦更に慮る所なかりき。

要するに當時代の貴族の生活風習は、驕豪奢侈淫逸遊蕩にして、無思慮無分別の中に、日月を徒過したりしに外ならず。されば當時の貴族的文學者は、此無分別なる空氣の中に棲息して、無分別なる天地を歌ひたりしなり。否彼等は其無分別なる一分子なれば作るとて

ろの詩歌小説猥褻の分子あるを免かれず。而して當時の風俗習慣を描出して最も事情を盡したるものは源氏物語なり。予はこれより此の作者紫式部が性格生涯を記すべし。

第二　その人

紫式部は閑院冬嗣の第六子贈太政大臣良門五世の孫越前之守藤原爲時の女にして、母は常陸之介爲信の女堅子なり。兄三人あり、長を惟規といひ、從五位紫部丞に叙せられ、歌人の聞えありき。其詠ずる所の和歌後拾遺以下の撰集に見ゆ。次を惟通といひ、安藝守に任せられ、季は阿闍梨にして定暹と號し其家世々歌人を以て稱せらる。父爲時は晉三品文時の門に出で、當時才名高かりしといふ。

式部の名古來諸史の傳ふるものなし、蓋し美術文學の未だ一般に發達進歩せざる時代に於ては、其製作の甚だ貴重すべきものあるも、作家の名傳はらざることあるは、東西通じて免れざる所にして、亦遺憾なりといふべし。偖紫式部とは、其本名にはあらず、呼名にして、もとは其性に因り藤式部といへりしとぞ。其紫と稱すること、或は其物語に「紫の上の事をすぐれて書きなしたる故」とし、又「藤式部といへるを幽玄ならずとて藤の花の色のゆかりに紫の字にあらためらる」といひ、或は「物語に若紫卷を作れる甚深なる故此名を得たり」とも、又「一條院の御乳母の子なり而して上東門院に奉らしむ我ゆかりのものなりあはれに覺しめせと申さしめ給ふ」故なりともいひ、傳説區々にして明確ならず。

式部の名傳はらざると共に、その生時幷びに終期をもこれを詳かにするを得ず。思ふに生時は圓融帝の末年なりしが、後右衛門權の佐藤原宣孝に嫁し、女子を生めり、名を賢子といひ、亦詞藻に巧にして、和歌をよくし、「狹衣」を著せり。太宰大貳高階成章に嫁し、後に後一條院の乳母となれり。大貳三位と呼ばれしは是なり。紫部は宣孝卒後再嫁せず、其女と寡居して風月を樂みしが、時に一條院の中宮彰子（上東門院）女子

の才德ある者を擇びて、左右に置かせられしかば，式部また屢々伺候したりきといふ。偖その終期は、或は長元四年の頃ならんといひ、今これを確むるに由なきも、大凡後一條院の末年なりしは疑なかるべし。

式部は資性聰敏にして、强記の人なりき。幼なき時より學を嗜み、人の書を讀むを聞きて、傍より能くこれを暗したりきといふ。漢學の隆盛を極めたりし當時に於て、其父母の彼が男子ならざりしを恨みたりしは、固より當然の理なるべし。當時一般の女流の如き、假令幼時敏慧なるも、長じて其學を發する者幾となかりしにも關らず、彼は宣孝の生前幷に寡居の時といへども、和漢の典籍を究むるに餘暇なかりしなり。三史五經佛書幷に我國の歌集物語の類に通じたりき。又彼は合香彈琴等の諸藝をも曉りたりき。

上東門院に侍りけるとき里に出たりける此女房のせうそこのついでに箏つたへにまうてんといひて侍りければつかはしける

紫式部

露しげき蓬が本の虫の音をおぼろけにてや人のたつねん　（千載集）

式部は又その人となり、婉順淑德にして、其長ずるところに矜らず，常に謹愼を旨とし、謙退を以てその理想とし、且つこれを實行せんことを勉めたりしが如し。去れば彼が平素身の行ひは、明かにその「日記」にあらはされぬ。安藤爲章が「紫女七論」に彼の才學の單に豐富なりしのみならず、其淑德の高かりしを稱揚して、『凡才德ともに備ふること丈夫すらかたきことになんありけるまして女にては大和唐土最とも稀なるべし』といひしも、强て過賞にはあらざるべし。彼は謹愼謙退を旨とせしと雖も、亦因循は其好まざる所なりき。又他に對し同氣を求め、自ら姿風を裝ひ、動もすれば阿世媚俗に陷るが如きは彼の好まさりしのみならず、寧ろ勉めてこれを退けたりしなり。夫れ當時一般の文人墨客と稱せらるるもの、殊に宮嬪なるものは、其長に矜り、其學を賴みて常に人を輕侮する多かりき。故に唯式部の名を聞き，又單に其物語をのみ

讀みたる輩は、彼の豐富なる才華に感ずると同時に、驕慢自負の人ならんと思ひ、これに面見するに及ひて、其意表に出づること往々なりしといふ。

式部は最も謹愼を以て旨としたれは、當時浮薄なる空氣の中にありて、其貞節を全ふしたりき。世或は傳へて關白道長の妾なりといふも、是れ根據なき訛傳にして、固より式部を知らさる者の言なること明なり。其「日記」道長懸想の條を讀まは、思ひ半に過ぎん。

わたとの丶戸口の局に見出せはほのうちきりたるあしたの露も未だおちぬ殿(道長)ありうせたまいて御隨身召して遣水拂はせ給ふ橋の南なる女郎花のいみしう盛なるを一枝折らせたまひて木丁のうへよりさしのそかせたまへる御樣の最と恥つかしげなるに我が朝顏のおもひ知らるれはこれおそくてとわろからんとのたまはするにことつけて硯のもとによりぬ

式部

女郎花盛の色と見るからに露のわき遣る身て
そしらるれ

あな疾と微笑みて硯めしいつ

道長

白露はわきてもをかし女郎花心からにや色
のそむらん　(日記寛弘五年の文)

又

源氏物語おまへにあるを殿の御覽して例のすゝろ事ともいてきたるついてに梅の枝にしかれたる紙に書かせたまへる

道長

すきものと名にしたてれは見る人のをらて
過くるはあらしとそおもふ

たまはせたれは

式部

人にまたをられぬものを誰か此まきものそ
とは口ならしけん(日記寛弘六年の文)

又

わたとのにねたる夜戸をたゝく人ありと聞けと恐ろしさに音もせてあかしたるつとめて

道長

通背くひなよりけになく〳〵そまきの戸口にたゝきわひつる

返し

式部

たゝならしとはかりたゝく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし（日記同上）

それ道長の權勢と富貴とを以て當時何者か意の如くならさるへき、且ッ彼は上東門院の父にして、しかも此謹愼なる一婦人の意は得る能はさりき。道長の彼を戀ふ既に久し。且ッ深宵戸扉を叩くに至りては、其思一層切ならさるにあらす。然るに能く其時其處に接して、婉順恰も幼きか如く、おいらかにこれを過して、うしろやすきを得たるは、實に其淑德の如何に高かりしかを容易に推量し得へく、一方に於て此の詞藻花の如く優美に、あはれを旨とせる女文學者が、意志の甚弱からさりしかをも測知するに足るへし。

記してこゝに至れは、余輩は此女文學者か當時淫逸遊蕩なる周圍の中にありなから、獨其淑德を完ふしたりしも、亦所以なきにあらさるを疑はす。夫れ滔々たる世態、紛々たる人情、これを狂と見、俗と見は、又何者か狂と俗とならさるへき。こゝに於て自ら狂となり俗とならは、其か開悟にまれ、執迷にまれ、世間の潮流に同化して樂きを得べし。若し夫れ自ら狂ならす、俗ならさるを欲せんか、自然世間以外に立たさるへからすして、一般と共に安きを望むも亦得へからす。將此狂と俗とに出てゝ、世人と共に樂まんはいと難きことなるべし。而して吾人處世の方針を要せば、槪此三を出てす。式部は其處世の標準を此最後の道に求めたり。彼の謹愼を要せし亦宜ならすや。彼は當時周圍の狀態か如何に淫靡なるかを知らさらんと欲するも得へきにあらす。之を淫靡なりとして嫌惡せんか、畢竟出世間の人となるを免かれす、これ彼の取らさる所なりしなるべし。去れは其周圍か如何に卑猥なりとも、其儘にこれに觸れて決してこれに逆らはす。外面よりこれを觀れば、恰も淫逸遊蕩は世間の常なりと思ひし

が如き觀あらしめたりき。尙詳しく言はゞ、前に述べたるが如く、當時は無思慮無分別の世の中なり、一般の貴族は放恣遊蕩なりしなり。一方に於て彼等は人世を泡沫の如くはかなみ物のわばれを感すること蠟に象の印するか如くなりしなり。人惣して世の無常を觀せんか、必しもこれに對して厭ふの念起らさるも、少くとも之を憂ふるの情なき能はす。憂ひてこれを慰めんとするも、人情の免れる所なり。夫れ無分別なる彼等にして、亦何を苦んで憂しと見し世に憂さを重ぬるの念あらんや。況んや彼等の地位と財產とを以て、何物の娛樂か天下に需め得さるに於てをや。淫逸遊蕩も此に至りて亦何そ怪み憚らんや。式部は此時に生れ、彼等と共に亦人世の無常をも觀したり。然れとも彼は彼等の如くこれを娛樂の中に忘れんとは勉めず、又無常なる世のつれ〴〵を慰めんに、其樂を世外に求めんともせざりしなり。唯其外境の空氣に對すること恰も柳條の風塵に裊々たるか如く、逆ひて自ら傷るゝは固より取らさる所なりき。換言すれは他は然かあるか儘に觀して、たゞ我はこれに染まさらんとのみ勉めたりしなり。即彼の生活は出世間的ならすして、而かも世間的ならす。社會的ならすして、而かも個人的ならす。又樂天的ならすも、厭世的ならす。惣じて寧ろ兩極の中間に安心滿足を求めんとしたり。彼の謹愼謙讓固より其資性より生せる結果とはいへ、此の目的の方便として、これを勉めたりしこと亦多かりしなるべし。

式部生涯の記事は、別に傳ふるものなければ、悉くこれを知るを得す。夫の日記の如きも、彼の上東門院に伺候せし折の記に止まれは、宣孝卒前の經歷は、更に窺ふを得さるなり。今假りに彼の生涯を宣孝在世の時と、其卒後との一期に分たば、彼の生涯は槪して單純なりし中にも、殊に前期に於ては變異なかりしか如し。彼の詠歌を以て察するに、彼は名所舊跡を歴遊したり、思ふにこれ其前期に於て爲せしなるべし。

津の國にまかれりける時都なる女友達の許に遣はしける

難波潟むれたる鳥の諸共にたちゐるものと思はましける

(續拾遺集又家集にも見ゆ)

近江のみづ海にて三尾か崎といふところに網ひくを見て

みをの海に網曳く民の隙もなくたちゐるにつけて都こひしも

攝津山といふ道のいとしげきを賤の男のあやしきさまして猶からき道なりやといふをきゝて

知らん往來にくらきしはつ山世にふる道はからきものそと

都の方へとて歸る山越えけるによい坂といふなる處のいとわりなきかけちにてしもかきわつらふを恐ろしと思ふに猿の木葉の中よりいと多くいて來たれは

ましも猶遠方人の聲かはせわれこしわふるたこのよい坂

水海にていふきの山の雪いと白う見けるゆゑ

名に高きこしの白山ゆきなれて伊吹の嶽をなにとこそみね　(以上紫式部家集)

當時倘京外は殆と荊榛の地たるを免れずして、旅行便を得ざりしにも拘らず、又其女性なりしにも似ず、彼は攝津近江の邊はいふに及ばず、越の遠國にまで歷遊したり。

夫れ琵琶湖の漂渺たるを望みては、「風飜白浪花千片」の句を思ひ、越山嵯峨たる處、「雁點青天字一行」の感も一層深かりしなるべく。此等の眼に入り神を怡はしめし遠山近水のいかに、彼の才氣を養生するに力ありしかよ。彼の物語に於て、名邑勝地より田舍村落の光景を寫して、精緻謂くが如く、又單に其外面の形容のみに止まらずして、源氏物語に

八月十五日夜隈なき月影ひま多かる板屋殘りなく漏れ來て見習給はぬ住居のさまもめづらしきに曉近くなりけるなるべし隣の家々あやしき賤夫の聲々目さましてあはれいと寒しや今年こそなりはひにも賴む所少く田舍の通ひも思かけねはいと心ほそけれ

北殿こそ聞き給ふやなと言ひ交すゝ聞ゆ……こはくとなる神よりもおどろ〳〵しく踏み轟かす碓の音も枕の上と覺ゆ……白妙の衣うつ砧の音もかすかに此方に聞きわたされ空飛ふ雁の聲取り集めて忍びがたき事多かり

と記せるが如く其内部生活の狀態まで描き出して、人をして遺憾なからしむるもの、此經驗ありしが故なるべし。因みに記す彼の越前に遊びしは、父爲時其任にありし時なりしなり。



長保三年四月 宣孝 卒しぬ。茲に蕭殺たる悲風は、秋を俟たずして此女文學者の心膓を破りき、「見し人のけふりとなりし夕より名もむつまじき鹽竈の浦」とはそれ彼が此悲哀の時の詠ならずや。さらでも女性の常として感情深きに、此不幸に遭遇して、いかで心緒の動かさゞるものあらん。こゝに至りて其無事なりし生涯も忽ち多少の變化に導かれざるを得ず。彼は一層人生

の無常、浮世の味氣無さをも感せしなるべし。一方に於て此第二の生涯初まりしと共に、前生涯の一段落は結了せられぬ。彼自身女子としての生涯は、既に經過し畢りたる如き思ありしなるべく、又世態人情の如何は槪此時には殆んど知得せしなるべし。去れば一たび既往を追懷せんか、過去に於て經驗せし事相は續々として至り、悲哀の味氣なき思と共に混和して、種樣の感情即あはれもをかしきも、其胸中に湧出せしなるべし。實に此期に於て、彼の「源氏物語」は成りぬ。彼は又此期に於て中宮に仕へぬ。

「日記」寛弘六年の文に、中宮に樂府授けたりしを「をと〻しの夏の比より」とあれは、此は寛弘四年の夏なるべし。然れども同五年九月中宮御產の事を記し、「また見奉りなる〻程なけれと比なくいみしと心ひとつに覺ゆ」と書けるを見れは、倘此頃までは新參なりしと見ゆ。去れば宣孝卒後、長保三年より三四年の間は、其家に寡居して出でず。寛弘二年の頃より中宮に伺候し初めたり。思ふに「源氏物語」は彼の寡居し未だ中宮に伺候せざる時に成りしなるべし。要するに彼の後生活は、著作期とも見るべく、前生涯は其作を生ずる著者豐富なる才能と該博なる學藝と經驗とか養はれつ〻ありし時期とも謂ふ可きか。

第三　その著作

紫式部の著書は、單に一部の「源氏物語」あるのみ。倘強ひて其作として數ふれば、其の實歷を記せる「日記」と折に觸れ時に處して、詠し置きたる一部の歌集とあるのみ。されば余は今「源氏物語」に就きて、聊か評を試むべし。

式部が「源氏物語」を著せし起因に就ては、古來傳說一ならず。安藤爲章は其「紫女七論」中に、

大齋院（村上女十宮選子内親王）より上東門院へ徒然慰みぬべき物語やさふらふとたづねまゐらせ給ひけるに紫式部をめして何をかまゐらすべきと仰られければ珍しき物は何か侍るべき新しく作りて參らせ給へかしと申ければされば作れと仰られけるをうけたまはりて源氏

を作りけるとそいみしく侍れといふ人侍れば又いまだ宮仕をもせて里に侍りける折さる物語作り出たるにより召いでられてそれより紫式部といふ名つきたると申何れが誠にて侍らん

といふを掲げ、且これを辨じて曰はく、

物語と日記とを見て式部が氣象と其時宜を推量るに縱は大齋院より草紙御所望あらん時中宮式部をめして何をか參らすべきと仰合せられんに新參の式部さかし立ちて珍らしきものは何か侍るべきあたらしく作りてまゐらせ玉へかしとてやがて其任に當りて此物語を作るべしや

と、蓋しこれ物語の既に流布せると、式部が宮仕へせし時期と、幷に其性質より推想せし論なり。彼の性質謹愼なりしより推想すれば、實に此說の如く、「無名抄」の前說は妄傳なるを疑はず。爲章は又後說を取りて

夫宣孝も卒しけるに宮仕もせて里に侍りけるやもめ住のつれ〴〵にさる物語作り出たるを聞召し入られそれより紫式部といふ名はつきたるなるべし

といへり。今これを具さに辨ずるに由なきも、此說最も信を措くに近きものならんか。

偖彼は又此物語を、何の爲に著はせしかに就き、或はこれを假りて道德を說くにありといひ、或はこれを以て佛敎の眞理を論ずる方便にせりといふ、後の評釋家の說少からず。然れども此は漢學佛敎の影響著しき時代に於て、漢籍佛典に通せし著者の手に成りたれば往々其痕跡あるより推して、偏守拘泥の說を爲したりしに過ぎず。若强ひて其目的を求むれば、自家寡居の幽情を慰むると同時に、此物語以前に流行せし他の物語に等しく、他の消閑の具に供せん爲なりしなるべし。

彼の後生涯は、世態人情に就きて見聞する所多く、隨ひて感ずるところ亦少からざれば、「心にこめかたくて」こゝに出てたるべし。抑も當時貴族社會に流行せし「竹取」「伊勢」等の物語は、皆古く「日本書記」に談の一字をものがたりと讀みて說話を綴りたる書名と

せし如く、此頃に於ても貴公子宮嬪の間に弄ひて、消閑の具とせしに過ぎず。されば彼が著作の目的も、他の徒然を慰むるの外に出でざりしなるべし。更に進んで著者が抱しき見解は如何なりしかといふに螢の卷に依れば、著者か作中の人物を假りて、自家の懷抱を發表せしにはあらざるか。固より彼は實際的記錄を記して、歷史的智識を與ふるの目的ならざりしは明なり。されば其事柄の虛搆なるに關らず、人情の免るべからざるを寫して、讀者の同感を求め、又時に撞着の話柄をも記して興味を促すの方法を以て、重なる要素としたりしなるべし。此方法を務め、若し世態人情を描寫せんか、これを自ら親く目擊せる實際的社會に求めざるべからず。

夫れ式部が小說に對する見解此の如しとせば、彼は其「源氏物語」に於て、其趣旨を充たしたるべし。即實際的人間が此世の外ならぬ實際的世界に於て、如何に生活するか、換言すれば「よにふる人の有樣」に就て、「見るにもあかす聞くにもあまる」事柄を基礎として、其語物を描出したるべし。去れば「心にこめがたき」彼の想像の源泉は、彼自ら其生涯に於て、親しく觀察せる生涯の狀態、人情風俗の有樣なり。詳くいへば當時の貴族社會の習慣平安城裡の實相なりしに外ならず。而して當時の上流社會は、花鳥風月の間に詩歌管絃を弄し、遊蕩淫逸の事柄なるを免れず。實に物語中の人物、一として淫奔浮薄の人ならざるなきは、蓋し此に起因す可し。さてこれを以て彼は其作中の人物の實体ともいふべき、當時の貴公子公卿に讀ましめ、且あはれを表せしめ、其消閑の要求を滿足せしめんとしたりき。

偖「源氏物語」は、寫實的を以て其本旨とせり、然れば余輩は果してこれを以て、純然たる寫實的小說として見るを得べきか。即著者の見解の如く、其事實は、果してよきもあしきも、總じて此世の外に出でざりしかといふに、余輩はこれに直に然りとは答ふる能はざるなり。此に於て余輩は少しく彼の趣旨と物語と一致せざる所あるを怪まざるを得ず。同時に彼は寫實的よ

り進みて、思想的の境域に入りたる傾向なきやを疑はざるを得ざるなり。夫れ其作中の人物の如き、頗る理想的の者少しとせず。客觀的に傾向せるものなきにあらず。第一に一方より觀察すれば、源氏の君紫の上の、如此世の外の人物にして、理想的なりといはざるを得ず。又余輩は前に著者の性質が如何に婉順淑德なりしか、又如何に謹愼謙讓なりしかを説けり。此婉順且謹愼なりし彼の性格、或はあらはれて作中の人物となりしにはあらざるか。此等の女流は其外面に於てこそ種々差別なる所あらはれたれ、一層根底に就きて窺見せば、謹謹婉順殆同一轍なるが如き感なき能はず。即共通の性質ありて、一貫せるものゝ如し。これ余輩をして著者が自ら持身の上に於て、唯一の理想としたりし德性の自らあらはれて、此に至れるにはあらざるを推想せしむる所以なり。況して當時貴族社會の淫卑なる事柄を以て、材料とせるにも拘らず、此傾向あるに於てをや。

此の如く理想的の分子あればこそ、近く因縁しては後の評家をして、これを以て逆に著者の才德を推して、「木人の歌舞は偃師が工みなるを知らざるが如し」といはしめ、遠く職由しては此物語を以て、勸懲の主義を取りたるものと迄主張せしめしなれ。安藤爲章は其「七論」に於て、一部の大事なりとて、物語に諷諭の存することを論ぜり。此諷諭説に就きては、評釋家の間に論難多き所なり。

夫れ式部が物語の中に描出せる事柄は、彼の日常目擊したりし、當時貴族社會の實相なりしに過ぎずされば夫の源氏の君と藤壺との關係の如き、柔弱無思慮にして、殊に戀情に動き易き貴公子が、實際の狀態より決して想像するに難らざりし事なるべし。換言すれば假令實際の世界に於て、かゝる甚しき出來事なかりしにせよ、優美なる主人公をして、其戀情に切なるの極、言ふに忍びざる結果に陷らしめしは、當時の貴公子が著者をして、自然に之を想像せしめ得る程無思慮なりしに由るべし。即此甚しき淫逸亂倫の事を記せしは、著者が自知自識に推想して、實際より理想に超過

せし結果なりといはざるべからず。更に其諷諭に出でたるにはあらざるべし。且諷諭にあらざれば、一部の大事なりと見るの必要もなかるべし。余輩は此點に於ては宣長の説の如く、これを物語の一事として見んことを欲するなり。同時にこれを勸懲の主義なりとは評價に偏せるの論なりといはざるを得ず、然れども又これを以て源氏が無上の榮華を示すの方便として作意せりといふには同意するを得ず。これ宣長の避見たるを免れざるべし。若し然りとせば廣道の説の如く、かゝる事柄に因らずともこれを示すの方便は決して尠少ならざるべし。

余は前に當時の風習を記し、又同時に貴公子貴婦人が文墨を翫はし、詠歌を事としたりしをも説けり、而して是等貴公子貴婦人の弄びし文詞詠歌は、惣じて浮華婉麗を好み、夫の萬葉時代の「川のせのうつまく見れば玉もかる散亂れたる川の舟かも」と歌ひし如き、雄健なる體は寧ろ失はれて、柔弱のもの多きに至れり。殊に春日秋宵の無聊を慰むるに供する物語の如き、優美なるの體を好みたりしは勿論なり。實に當時一般に美とせしものは、單に優美の外に出です。否淸少納言が

ひいなの調度蓮のうき葉のいとちひさきを池よりとりあげて見るあふひのちひさきもいとうつくし何もくちひさき物はいと美し　（枕草紙）

といひしが如く、寧ろ可憐を以て美としたりしなり。それ此時に出で、尚且女性なりし式部の文體が、亦妖婉美麗なりしは怪むべきにあらず。「源氏物語」の文辭は、一言にこれを評せんに、優美を以てこれを葢ふべし。尚細かにいへば、其優美婉麗なるの文は、周圍の眞相を寫して遺憾なく、隨ひて精巧緻密なるの筆は、人情の隱微を穿ちて漏すことなし。實に春花秋月山靑水明の光景を記しては、讀者をして其境にあり、其物を見るの想あらしめ、同時に喜怒哀樂の感情を寫しては、思はず驚嘆止まざらしむ。これ畢竟著者が筆鋒、意の到る所、情の馳する所に隨ひて、自由なりしが故なりといはざるべからず。而して篇中漢書佛典より轉

化せしめたるもの、往々にしあれども、假名文に巧妙なりしが故に、能くこれを調和して、其形跡の存するが如きことなく、香川景樹が評せし如く、「しかも漢ならぬ本朝の語意に寫して讀む人々をしてわかざらしむ」

本居宣長曰はく

女の學問だてして賢したちさえかるさはいみしう憎みて自からも人にしか思はれしと深く用意したるさま處々に見ゆ　（玉の小櫛）

と式部の文章は優美婉麗なると共に、沈着温潤なり。これ其女流なるが故のみならず、謹愼謙讓なりし性格の現はれたると、又物語の如き生涯の後期に於て成れるの結果なるべし。惜其優美婉麗なるところは、一方に於て平調に流れやすく、又沈着温潤なるところは、動もすれば氣力を失ふ如き、多少の弱點あるは亦免がれざる所なるべし。

安藤爲章。其「紫女七論」の一編として、七事共具なることを說き、（一）歌人の系統を受け（二）資性强記（三）勤勉該博にして（四）歌合繪合等の遊戲にも通じ（五）且文化隆盛の世に生れ（六）又旅行の企あり而して（七）中流の女子なりしより、此女文學者にして此著作ありしことを論せり。余が又上來說きしが如く、此女文學者の生涯の如何なりしか、又當時代並に周圍一般の風習が如何なりしかを知れり。且平安朝文學の發達、並に其文學の上に當時代浮華淫逸なりし外境が及ぼせし影響の如何なりしかをも詳かにせり。隨ひて此女文學者が、著書の上に於て受けたりし周圍の感化をも畧ぼこれを察し得べし。こゝに於て「七論」の論、亦一般評釋家の墨守拘泥の說を異にして、頗る價値なきの論にあらざるを疑はざるなり。惜余輩は平安朝に於て、文運の進步如何に著しかりしにもせよ、尙我國文學の初期に於て、人情世帶隱微にて抽寫し、緻密到らざるなく、千古の下、余輩をして、當時貴族社會の狀態を推想して、餘あらしむるの著作を生せし一事に於ては、亦驚かざるを得ず。これ實に著者が學藝該博なりしと共に、天才の非凡なりしに由るものといはざる

べからず。同時に以來の文學者、儒佛の諸流をして、嘆賞止まざらししめむ亦所以なきにあらざるなり。

(完)

武家時代の女訓

須藤求馬

近頃世間に、武士道を唱ふること大分流行するやうに見ゆるなり、折々著書も出で、また演説なんどなす者をも見受けたり、こは畢竟德義敗頽より反響せる呼聲にはあらざるか、武士道の精神は、何卒今日にても、國民全體に行はれんことを希望する者なり、さりとて今更武士道を行ふといふても、其の窮屈に角張りたること、武家時代の如き形式を今日再演せよと望むにはあらじ、只其の精神の行はれんことを冀ふものなり、すなはち、忠實信義を旨とするなり、禮義廉恥の四維を張るなり、これ皆文明人の德義にして、東西古今の相違あるべからず、されば武士道とし云へば、只男子のみの樣聞ゆる場合もあるが、さにあらず、女子とて武士道は同樣なり、同樣に守るべきなり、同樣に行ふべきなり、昔も武士道の男子に副ふべき樣、女子を敎育せられたれば、今日とても武士道を復活せしめんには、また女子の敎育にも武士道を敎へざるべからず、即ち其の精神を養成せざるべからず。

されば、昔時武士道に於ける女子敎育は、果して如何なる書に依りて其の道を講ぜしか、また如何なる書を用ひて學習せしめたるかは、武士道敎育研究の資料には、知らんと欲する所のものなり。

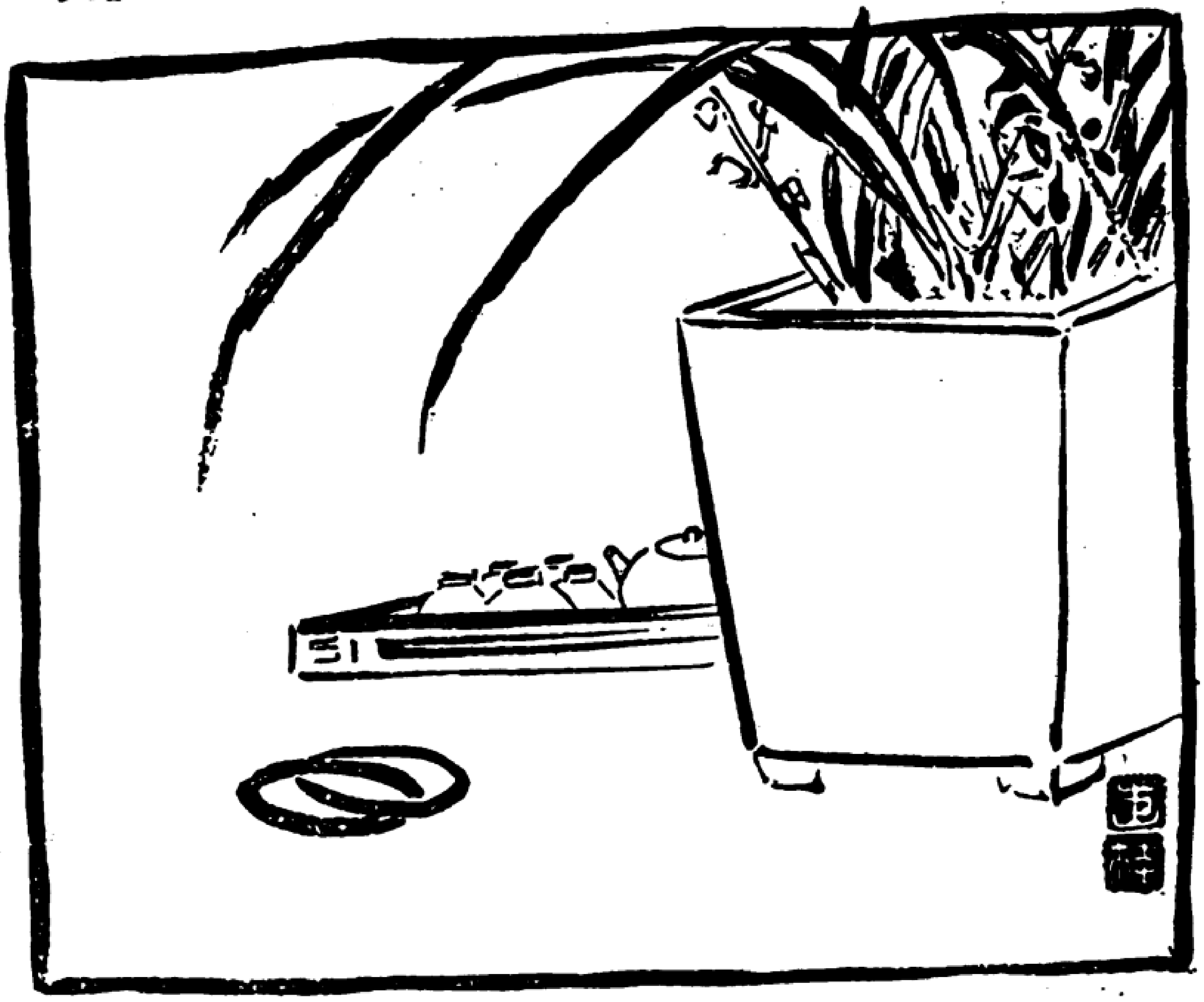
そも〳〵、我が國、武士道の行はるゝこと其の由來は、遠くして且つ久し、されど、其の敎育法を講究して、よく秩序を立て、上下一般によく普及せしめたるは、德川幕府時代を以て最も盛なりとす。

室町氏の末つ方より、女子を敎ふるに、女禮式てふもの起り、伊勢、武田、小笠原、斯波、細川、今川、曾我等、皆門戸を張り、各々その流儀を立て、以て女子躾方の稍秩序ある敎授の端を啓けり、されど、江戸幕

府時代の如く女訓の書は多からざりき。

德川氏元和一統の後は、偃武修文の世となりて、文教漸く起り、貞享元祿の頃に至りては、學者彬々として輩出し、男子の敎育盛に行はるゝと共に諸大家また女子敎育にも、稍々注意する者出來り、漸く女性の爲めに書を著はし、讀本を作りて世に公にし、男子に於ける武士道敎育に副はしめんことを務められたり。

偃武日尙は淺ければ、寬永の末頃までは、女子の爲めに書を著はすものも少し、其末年に至りて、始めて婚禮仕用けし袋などいへる書出版せられ、これは女子の躾方を主として記せるものにて、室町時代の女禮式等を集めて大成したる書なり



尋ぎて其の後、當時の大儒中江藤樹、女性敎育の忽にすべからさるを悟り、一書を著はし題して鑑草といひ女子敎育の讀本に供せり、是に於てか、世人大に女訓の注意を惹起せり、これ等によりて、女子敎育に動機を與へ、女子の讀本類漸く發行せらるゝに至れり。

正保年中に、釋一圓は妻鏡を著はし、慶安年中に、をんなかゞ見の刊行あり、明曆元年に至りて、黑澤弘忠は漢文を以て、劉向列女傳に倣ふて、本朝列女傳十巻を著はす、これ女子に對せる始めての大著作なり、同二年に、女四書出で、漢文を取りて和げ譯したるものなり、即ち漢の曹大家といへる女の作る女論語及び女誡、唐の陳邈

の妻鄭氏の著せる女孝經、明の太宗皇帝の后の內訓、この四種の書を集めて一書となし、因りて名けて女四書といふ、儒敎主義の婦道の大體は、この四書に說き盡せり、萬治二年に、女じんぎ物語出で同三年に女式目出づ、寬文二年に、淺井了意本朝女鑑十卷を著はし先づ本朝歷代の賢女節婦の言行を掲げ、卒章に女式を載す、全部を賢明、仁智、節義、貞行、辨通、女式の六部に分てり、了意は戲作に長じて博學なり、東海道名所記、日本廿四孝、太平記首書等の著ありて、當時有名の人なり、十八年を歷、延寶六年に至りて、藤井懶齋といふ人、京極黃門の百人一首は、歌道のみならばいざ知らず、女子敎育の讀本としては、猥りがはしきふし少からざるを以て、其の不適意と認むる部分を删去り、八代集の中より、敎へ草となるべき者を拔き取りて之に加へ、一百首となし、之に平易にして深切なる注釋を加へ、題して藏笥百首といひ、笥中に秘め置き、己のが女に授くといひて世に行へり、室鳩巣は當代の大家なり、鳩巣の懶齋に於ける、本と半面の識なし、されど、いたく之を推尊して、伊嵩先生徵君と稱す、與に交る所は、川井正直、米川操軒、中村惕齋の如き、皆一時高名篤學の士なり、定家の百人一首は、何れの頃より行はれしか、げに久しき事なれど、この藏笥百首一たび世に出でしより、爭ふて之を讀み、心ある敎育家は、皆この著書を以て、女子讀本の適當なるものと認定し、百人一首を舍きて、藏笥百首を用ゐしめたり、只定家卿は、歷代歌道の宗家なれば、冷泉の流を汲む者多く、天下到る處に在りければ、それ等の徒、常に小倉百人一首を推重するより、世は長閑にして、淫靡の風そよ吹く時代なりしかば、遂に藏笥百首の優れるを舍きて、亦百人一首を取るに至りたるこそ是非なけれ、天和元年に女五經出で、貞享三年に、加州金澤の人某、婦人養草を著はし、婦人の所有心得べき事を集め、女子をして故實有職にも明かならしめんと欲せり、其の外同年には、はなむけ草出で、懇々と婦道を說明せり、同四年に、伊藤仁齋と頡頏して、其の名を齊しくせし、中村惕齋といふ人あ

り、博學にして禮樂を好み、著書等身、其の著作中に、比賣鑑三十一卷あり、婦女教訓の爲め、和漢賢女節婦の物語を集め、聖賢の語、世俗の諺、あるは和歌をも引きて之を論述せり、編纂の法は、朱晦庵の小學に倣ひたるものにて、稍順序整へり、其文の一節に、飲酒に就きての論しあり、

酒は憂を忘れ、喜をいたすものなれと、好めば過ぎ易く、過ぐれば善らぬ事多し、飲む人、忽に物狂しくなる故に、酒の名を狂藥といふ、又これによりて禍出來くる故に禍泉とも名く、めでたしと見る人すら、醉ぬれば本性くらみ、或は妄行の端となりて、あさましき事どもあり、殊に、女の人に交りゐて、醉ひすさびたる果ては髮亂り、おもてさし出で、人目を憚らず、高らかにものいひ散らし、けうとく笑へる樣、いと見苦しくうたてし、管仲が詞に、酒入りて舌出づと云へるやうに、醉るよりして、詞の咎をとり、大事をもらすこと多ければ、重く戒むべきことなり、女論語に、酒は唯唇を濡すべしといへり、女の酒飲ますとて、事足らぬやうやある、痛く戒めて、ふつと飲まざるぞよき、暫が程の醉の樂に、さめての後の永き悔をとらめや。

其の所論大むねかくの如し、深切なりといひつべし、かくて元祿年間に及びては、女子の讀むべき書、續々出で來り、貝原氏の女大學を首として、苗村丈作の女重寶記、居初都音女の女書翰初學抄の如き、釋怡溪の女中大學、女中鏡、續人名女中の卷、さては本朝貞女物語、つぼの石文の類、寶永年中には、博覽多識の北村季吟の假名列女傳あり、正德年中に至りて、女中道しるべ出で、女名目抄に據りて、婦女の嗜むべき事を、上下に通じて說きさとせり、享保年中に及びては、肥後熊本の人、井澤蟠龍子の大和女訓あり、寛保年間に、貝原益軒の高足竹田春庵の女訓翁草あり、其他女諸禮集、女諸禮式綾錦等の書、前後して世にあらはる、明和年間に至りては、久川靭負の女學範あり、先づ學問の大意、女官品階より、讀書さては歌道の心得、雛祭、七夕祭等の事まで記されたり、其外女小學、

女中庸の如き、庭訓往來になずらへたる女庭訓往來、今川になずらへたる女今川あり、又女童子教、女實語教の如き類、是れ等も皆男子の讀本になずらへたるものにて、極めて卑近通俗的のものなれども、幕府時代に於ては、これ等卑近の書は、反つて社會敎育の讀本として、世間一般に歡迎採用せられ、其の教育上に多大の功を奏したり、寶暦の頃よりは、女子用としてし和歌文章の著作、また極めて盛に行はれ、又女節用集なる書種々様々の意匠を盡して著述され、其の數實に數十百種に下らず、其の收むる所は、修身、和歌、文章、有職故實、作法躾方、裁縫紡績、衛生、割烹、茶湯、香道、挿花、音樂、名女賢婦の傳、字書言語等、其他所有女子の心得べき事柄を載せ、さながら今日の女學雜誌なり。

されば、當時に在りて、廣く世に行はれたる書の大概を擧ぐれば、

○修身讀本

鑑草　本朝列女傳　女四書　女訓抄　女じんぎ物語　本朝女鑑　比賣鑑　續人名　本朝貞女物語、本朝賢女物語　本朝名女物語　女小學　女大學
假名列女傳　大和女訓　女訓山鳩草　女訓翁草
女今川　女實語教　女童子教　女中庸瑪瑙箱

○歌道の書

古今集　百人一首　歌仙集　藏笥百集　八代集　萬葉集　六百番歌合

○物語草紙

源氏物語　伊勢物語　榮花物語　竹取物語　大和物語　曾我物語　吉野拾遺　平家物語　淨瑠璃物語
枕草子　徒然草

この中にて、源氏と伊勢は、最も人の好みてよく讀みつる書なれど、この二書は、好色の媒なりとて、全然これを排斥するものも亦多し、道念未だ定らざる少き者には、見せざるをよしとす、

○故實有職

婦人養草　女重寶記　女中道しるべ　女諸禮集
女諸禮綾錦　女學範

〇衞生の書

婦人壽草　世繼草　いなご草　小兒育草

〇用文章

女書翰初學抄　女文庫高蒔繪　女萬葉稽古草紙　女庭訓往來　女用文章指南車

この外、地理には都路往來、國盡等あり、貴族上流社會には、名所方角抄　秋の寢ざめ等の書によりて、名所古蹟は知るならめ、尙また當時敎育家の、女子讀本として重きを置きたる書は、女中道しるべに、

女の讀みてよろしき書の事

女四書　比賣鑑　大和小學（こいろいろありいづれもよしよむべし）　假名列女傳　和歌童子訓　いなご草（産前産てのくわいにん養生の事をしるす）　藏笥百首



などよろし、この外さまざまのものあれども、義理にたがへる事まゝあり、心をつけて取り撰ぶべし。

女讀むまじき書の事　付小うた三味線などならふ事

女子にも、よませまじきものは、源氏物語、伊勢物語、其外好色の事かきたる草紙をば、かたく戒めて見せまじきものなり、女は歌を詠みたるがよけれども、歌よみ習ふとては、源氏などを、とくとよまねばならず、讀めば歌の道よりは、みだりなる事を面白しとおもふ心出で來ると見えたり云々、大和女訓に曰く、

女子六七歳にもならば、先づ平がなを書かしめ、片かなを習はすべし、よくおぼへば、孝經、四書、小學、近思錄などを讀むべし、かくして後、女訓を記るせる和字草子などをよませ、三綱五常の道、孝順貞潔の理あらまし諭さすべし、いかに生つきすなほなりとも、

道をきかずしては、はからざるに言行にあやまり出來べし、女訓と言せるものあまたあり、就中、

假名列女傳　女四書　大和小學　闇齋やまと小學
藏笥百首　童子訓　比賣鑑前編

この類よし、其の外はよみて害あること多し、心を付くべし、識趣さだまらざるうちに、源氏伊勢大和などの物語をば見せまじきなり、道のあらましを諭して後に見するは苦しからず、心を留むるは宜しからずと。

これ誠に穩當なる說といふべし、道念未だ定らず、未だ常識をも具え兼ねたる若き者に、源氏伊勢抔の好色物語をば見するは、弊害多くして利益少し、されど、既に修身の教を一わたり受けたる後は、全然之を排斥して、一切婦女に讀ましめざるを望む者も多し、こは偏見とやいはん。

女學範讀書の部に曰く、女子を教ふるに、唐土の書は讀みがたければ、

和論語　女四書　大和小學　女小學　女大學　大和俗訓　五常訓　童子訓　家道訓　大和女訓　女訓山鳩草　女訓翁草　女寶語教　女童子教　女今川

等の書を教ふべし、源氏は男女の婬亂れ事を記るし、伊勢は好色の筋ばかり書いたれば、かりにも幼き女に教ふべきものにあらずと云々、先づ以て大體は、これ等の諸書によりて、武家三百年間の女子教育は施されたり、而してこれ等の書に依りて教育養成せられたる婦女は如何、之を其の言行に徴すれば、節義の一點張りにて、人世の最上名譽は、博學にもあらず、多能にもあらず、富にもあらず、貴にもあらず、實に節義を全うせるを以て、最上々の行爲なりと心得たり、

節義てふ二字の爲めには、親をも棄つべし、子をも棄つべし、財產生命などは、塵埃の如く、また弊履の如し、誠に其の志操や高くして且つ潔し、すなはち高くして潔しと雖も、人情以外に境界を作りて此處に安置し奉られ、眞個人間世の樂は、徃々沒却せられ、悲觀的に一生を送る者多きは、げに氣の毒の至なり。

されば、武士道教育といひても、狹隘にして峭直に陥るときは、其の弊たるいふべからず、故に其の精神

の行はれんことを冀望すると同時に、其の形式を排斥する者なり。

（完）

近代閨秀美術家

芳宜園主人

▲小引

わが日本の國は、さすがに東洋の美術國と謠はるゝだけありまして、女子の中にも古へからめでたい美術家がありまして、彼是相映じて、後先絶ゆることがありませぬ。先づ古い所で、染殿皇后とか、彼の紫式部さては式子内親王の如き女があります。源平時代にありましては、平清盛の女の如き、源頼朝の妻の尼將軍政子の如き女があり、その外、縉紳の女で、繪事に巧なるものが澤山にありました。それから室町の朝に降りましては、大に衰へて、彼是云ふほどの才媛もないやうでございます。ついで桃山から江戸にうつりて徳川の威風つひに四海を靡みし、世の太平なるにつれて、またそろ〱と起りそめまして、をさ〱古への才媛にもゆづらないほどの女が出でました。此にかいつまむで、徳川初世このかた三百年間の閨秀美術家について、少しお話を致さうと思ひます。

▲小野お通

さて、江戸の初世に當りましては、先づ第一番に如何なる女子を推すべきかと問ひますると、誰れでもない淨瑠璃曲の創作者で名高い彼の小野お通に指を折らねばなりませぬ。

このお通といふ女は、何處の生であるかは、とんと知れませぬが、攝津國の士鹽川志摩守といふ人の妻で、織田信長の奥向に仕へ、後には、右大臣秀頼の母淀君にも仕へたといふことです。頗る和漢の書にも渉り、その才は天稟でありまして、巧に文を作り、歌を詠み筆札も見ごとでありました。ある時、淀君がお通に云はるゝには、往にしへの才女は、いづれもその徳を後世に殘しておいた。お前も文章を作らしてはなか〱上手で、よのつねの女子共の企て及ぶ所でない。何な

りとも作つて、名を後の世に傳へておいたらば如何じやとあるによつて、辭むに由なく、舎那王が淨琉璃姫に通ずるの事蹟を十二段に作りて、それを淀君に呈すると、淀君が非常に之をめでられて、角澤檢校に命じて、譜を下して之を謠はしめました。これが即ち今の世のいはゆる淨瑠璃曲の權輿である。この後には、近松巢林子のごとき、あるひは出雲、松洛のごとき名家が出でましたが、さてその源は誰かと云へば、みなお通が先倡の功に歸さねばなりませぬ。實に鬚眉男兒もお耻しいわけです。

お通は文詞のみが巧かと云ふに、決してさうでない、畫もなか〳〵上手で、狩野元信の筆法を學んだといふことでございます。人物が尤も得意であつたさうで菅丞相や柿本人麿の像を多く作りました。私の見ましたのは、京都の金戒光明寺の什寶になつて居る豐太閤の肖像ですが、衣描などはなか〳〵見事で、女子の手に成つたものとは思はれないほどであります。花鳥は至て稀であるといふことですが、私もたつた一つ見ました。それは大岡育造君の秘藏になつて居るもので、あつさりとした彩色で、頗る逸韻のあるものでございます。

此に一つ、私は妙な疑を抱て居りますが、世間の博識のお方に質したい、それは外でもない、このお通は、鹽川文鱗翁の先祖に關係がありやしないかといふことです。文鱗翁の祖先を尋ねて見ると、高祖は多田滿仲から出て攝津の多田の城主鹽川伯耆守の後だといふことでありますが、この鹽川家に、織田信長公から賜はつたといふ紺靑一合と、その目錄と書翰一通あつて文鱗翁に至るまで、大切に之を傳へて來ましたが、更にその因由がわかりませぬさうです。畫もかゝない人間に紺靑をくれたといふのも、少し變な話じや。思ふに、鹽川家に畫を書く人でもあつたのではなからうか前にも申した如く、お通の所天は、攝津の士鹽川志摩守といふから、或ひは文鱗の祖先の伯耆守の一門の人の處へ嫁したのではあるまいか。どうやら此には因縁がありさうに思はれます。なほ私も調べたらば申上ま

すが、御承知のお方があらば敎へてください。お通には一男一女あつたさうです。男の子は何と云ふか知りませぬが、女はお伏といふて、これまたお通にもおとらぬ才女で、和歌も詠み、絲竹、香茶の道にも通じ、その上に姿容も美はしいので、信州、松代の城主眞田信之の側室になりました。お通は、その緣で、信州にゆき、元和の二年に年五十八とかで身まかりました。とにかく、お通は、巾幗中の豪傑で、德川初世の文藝の花とゆるしても、決して差支ないやうです。

▲太郎姬

またお通と殆んと同時で、貴嬪で畫を作つたのには、關白近衞信尹公の嫡女太郎姬といふのがありました。信尹公は、三藐院と稱せられた人で、能書の譽があつて、その上に畫も巧で、好んで天神の像を作られたといひますが、太郎姬は即ち父の畫法を受けましたさうで、人物が得意で、また達磨大師の像を作りました。その筆は麁なものでありますけれども、氣高い韻致がある。さすがに名公の胤は爭はれぬものでございます



▲淸原氏女雪信

お通から少し後になつて、名の高いのが、淸原雪信で例の名高い久住守景の娘でございます。御承知の通り守景といふ人は、磊落の奇男子で、狩野守信の門下の高足と稱されまして、丁度、雪舟の門に秋月あるが如しとまで、世人にうたはれました。この守景が、守信の姪に當る神足善右衛門法名道庵といふ士の娘を娶りて、こ

の雪信をもうけましたが名は雪子といひまして年頃になつてから、平野屋伊兵衛守信といふ人の妻になりましたが、さすがに守景の娘だけわりまして、畫は天禀の才がありましたやうです。初めは父に學び、後には守信の門に學び、悉くその法を得て、自ら一格を成しました。

岸卓堂がかつて雪信の作つた美人花を鬪はすの圖を見て、非常に感服をして、筆法は元信に倣ふて、骨力餘あり。布置極めて工にして、設色婉媚なり。曲さにその態を盡す。蓋し筆勢を元信に襲して、設色を光信に擬するものかと申して居りますが、なるほど、卓堂の言の如くに誣ひざるの傑作が少からざるやうに見うけます。

雪信は、天和の二年に年四十とかで身まかりました。惜しいかな早世です。今少し長命であつたら、もつと造詣する所があつたらうと思ふ、殘念のことです。それはともあれ、雪信のごときは、閨秀繪事の中興第一と申しても好いのでございます。

▲遊女八千代

雪信と殆んと同時に、京都島原の遊女に八千代といふ女がありました。名は尊女とか申して、千人にすぐれた容姿で、その上に和歌を巧に詠み、畫もなか〳〵妙であつたと申すことです。私はいまだその眞筆を見たことはないが、名の高かつたのを見ても、たしかに巧であつたらうと思はれます。

慶安年中のことでありますが、良純親王が八千代の才色を愛でられまして、密々にお通ひになりましたがその事が遂に發覺して、親王は、甲斐國へお流されになりましたさうです。親王が御寵愛になつたのも、八千代の品性や才色が、をさ〳〵姫嬪にも劣らぬものがあつたからであらうと思ひます。

この八千代がまた親王の書法を學びまして、頗る精妙の域に進んだといふことで、古筆氏が鑑定書を遊女に付したのは、たゞこの八千代ばかりであつたといふことでございます。何にせよ八千代や大橋などは、遊女とは申しながら、めでたい女子であります。

▲遊女小紫

八千代よりは少し後になりますが、やはり島原の遊女で小紫といふ者がありました、この女も、よろづ風雅の事を好み、常の遊女でなかつたと見えて、貝原益軒が年のわかい時に通はれたといひます、書も作つたさうです。面白い話が殘つて居ります、それは益軒が國に歸らうとする時に、小紫がいたく別を惜みまして自らその姿を寫して、「あふ時はかたりつくすと思へども別れて殘る君の面影」。「すがたこそ繪にはうつれどなか〳〵に通ふ心は筆におよばじ」――、と申す二首の歌を題し、これを益軒に贈らうとすると、日頃姉妹の如くにして居る吉野が見て、歌はいみしう覺えて、筆を加ふる所なけれど、少しく物足らぬ心地すれば、一筆を書き添へむとて、「玉琴の引手あまたの浮れ女に、まことわりと心をつくす人は、あはれにもまたをかし。すべて男ほどあさ〳〵しきものはあらじと、われのみ思ふかもしらず、古へ佛刀自、靜など、まことなきかなといはんも野暮らし、まこと仇し野の露、きえなんいのち、われもしらず、遊はゞあそべ西へ東へ、いくたりの目にしはてはすいとさくら」、と賛しました。小紫もいと喜びて、それを益軒へ贐にしたといふことです。私はまた小紫の書といふものを見たとがないが吉野と姉妹のやうにしたほどの女ですから、定めて雅韻のある書を作つたらうと思ひます



▲了然禪尼

雪信や八千代から少し後になりましては、了然尼が書

を作りました。この女は、名を總子といひ、號を大休と申しまして、駿州富士の大宮司葛山內記といふ人の娘でありますが、東福門院に仕へ、門院が薨去の後は武田壽庵といふ士に嫁ぎ、幾ほどもなく、男女三人の子を生み、これにて女子の事足れりとて、自ら尼となりまして、弘福寺の鐵牛禪師に參じて、大事を了畢いたしました。銅器を以て頰を燒いたことは、能く人の知つて居ることですから、此にはまた述べませぬ。女子で此の位にめでたく一大事を遂げた人は、まづ珍しいと申します。

この了然尼の父の內記は、書の鑑定が巧で、繪見の長次といはれたと申しますが、了然尼も、おのづとその性をついだものか、畫が嗜で、禪燕の餘に作つたものが澤山ある。その畫は、大津繪に似たもので、道歌などを題してあるが、なか〳〵面白く、超凡の作があります。その境界が高いから、自然とその繪も好いのでございます。

遷化は、慥か正德年中のことで、年は六十餘とかいふことです。なほおもしろいお話が澤山あるが、藝術に關したことでないから、此には申しませぬ。

▲山崎女龍

元祿の頃に至りまして、江戶の村松町に住みて縫箔の上繪を業とした菱川師宣が、土佐の畫を學び、自ら浮世繪の一派を開きて、一時大に世に行はれしましたがその門下に山崎女龍といふ女子がありました。この女龍は、餘ほど畫才があつて、別に自ら一機軸を出し、太だ奇趣あつたといひます。女龍が創意の作では、在原業平の涅槃像などは、尤も世人を驚かしたものであるので、この一事でも、その畫才を窺ふに餘りございます。

▲岡野壽貞尼

さて、前からも申す通り、德川初世このかた、繪畫に巧なる才媛は、世々その人に乏しくはありませぬが、彫刻をやつた女は、太だ稀であつたやうで、その名の傳はつたのは、殆んと有りはせぬが、明和の頃に至りまして、大和國奈良に岡野壽貞尼といふ女がありまし

た。この女は、奈良人形を中興した才女であります。この岡野氏の初代は、號を松壽、通稱を平右衛門といひまして、奈良の西御門といふ處に住み、檜物職をなし、兼ねて彫刻をもなしました。この初代は、寶永の五年に沒し、その子孫が、世々その職を襲ひました。奈良人形は、その始はつばらに知れませぬが、春日若宮の祭典に用ひ給ふ所の島臺と、田樂法師が用ゐます笛の笠の飾に尉姥、三大臣、猩々などを彫みたるが、その濫觴といふことです。

壽貞尼と申すのは、五代目の松壽の妻であります。この松壽は、茶商の山田家より入りて岡野氏をつぎ、檜物と彫刻の業をつぎましたが、檜物を專として人形彫刻に拙劣でありましたので、累代の家聲も地に墜ることになりました。壽貞尼



は、それをいとくちをしき事に思ひまして、所天に代つて人形を彫刻し、頗るその妙に達しましたから、一時衰へた岡野の家も再び芽ぐみて、世にもてはやさるることになりました。なか／＼感心な女子でございます。

この壽貞尼から、傳へ／＼て、當今の松壽即ち十三代に至りました。これと申すのも、壽貞尼のごとき男まさりの女があればこそ、その業が絶えなかつたのです因みにお話を致しますが、近年その名を天下にとゞろかしました彼の森川杜園翁は、九代松壽名は保伯といふ人につきて、刀法を學ばれたといふことが、翁の書輪の中に見えました。

▲津村龜女

岡野松壽尼と殆んど同じ時代に、肥前の、長崎に津村龜女といふ者がありました。龜女の父は香爐を鑄造す

ることを業と致しまして、名工の譽があつたさうです然るに男の子がないから、その法を龜女に傳へたと申すことでございます。

この龜女は、よのつねの婦女とは違ひて、小節などにはかゝつらはないで、性質が豪放で、好んで酒を飲みつねに男子と共に遊びました。香爐を注文する者があると、手金として、先づ數十金を取り、直に酒肴を買ひとゝのへ、隣近所の年のわかい男共を招きよせまして、日も夜ものべつに酒宴をして、それから後に、そろ〳〵とその業に就いたといひますが、この一事でもなみ〳〵の女でないことが知られます。

龜女の性質は、かくの如く、誠に女らしくないが、然し乍ら、なか〳〵しつかりした氣節のある女で、威武を以てしても、黄白を以てしても、その守る所を奪ふことが出來なかつた。此におもしろいお話があります。それは、その頃の江戸の老中の某侯が、龜女の香爐を作るに妙であることを聞き及ばれまして、その意を長崎奉行に傳へて、龜女に香爐を注文いたされました。

然るに、半年の餘もすぎても、之を作らうとしない。やがて奉行の任期も滿ちて、江戸に歸るの時も迫つたから、町役人に命じて、やい〳〵と催促させました。そこで、龜女もやつとのことで、之を作りましたが、何の彼のと云ふて、香爐を渡しませぬによつて、町役人が卒五六人を出して、龜女の家の内外を守らしまして、いよ〳〵きびしく催促をするが、龜女は、平氣の平左で、つゆほども意にかけない。ある日の事、その作つた香爐を臺の上に置きて、おのれは牀に腰をかけ長烟管をとつて、すぱすぱと煙を吹きながら、ためつすかしつゝや、久しい間、香爐を視て居りましたが、何處かに自分の氣に入らぬ點があつたものか、傍に有合した斧をとつて、たゞ一撃に香爐を打碎いてしまひました。遂に奉行も空手で江戸に歸つたといふことです。老中や奉行の意にそむきても、その名を大切にしたなとは、實に感心なことで、世の美術家たる者の良い鑑でございます。

▲遊女大橋

壽貞尼や龜女の時代からは、畫の方では、才媛が澤山に起りました。まづ遊女大橋などは、前の八千代にも勝つた女子で、書畫、歌俳、音樂など、女のする技は何にても通じ、おの〳〵その道のくはしきに入つたと申すことです。

この女の父は、元は幕府の旗下で何百石かをとつて居りましたが、何かそれには譯があつて、浪人して京都に參りましたが、貧苦にせつて、據なく大橋を島原に售つたといふことですがなるほど元が立派な士家の娘であるから、おのづと氣質も、なみの遊女と違ふて居つたのは無理もない。
白隱和尚の年譜に依りますると、大橋は、島原に居るうちから、心を禪要に寄せて、つねに倦まず工夫を致しまして、ある日、雷の落ちた時に、釋然として疑を打破し、遂に白隱和尚に相見して徹證したとあります。後には白隱和尚の神足東嶺和尚にも參じたやうです。白隱の門下からは、なか〳〵すばらしい女居士が多く出でましたが、大橋などは、その錚々たる一人であるさうです。



畫は誰に學びましたかは知りませぬが、その境界が高いにつれて、おのづと逸氣があつておもしろい。その作つた畫には、いづれも自賛の歌を題してあるのが多いやうに見うけます。今は世に澤山ございませぬ。

▲德山玉瀾

大橋と同時に名の尤も高かつたのに、池大雅の妻の玉瀾でございます。この女は、名は町子、葛簞居と號しまして祇園の百合女が幕府の士德山某に昵みて出來た娘でありまして、長じて大雅の妻になりました。

玉瀾は、その性閑雅にして、他の婦女とはたがひて、少しも飾ることがなく、能く所天の爲す所を學びて、ひねもす所天と共に紙を伸べ墨を舐り、所天が三味線をひけば、おのれは琴で之に和し、食ふべき米もなくて、釜甑の上に塵を生じても、平氣であつたさうですこの夫にしてこの婦ありと云ふべしです。

玉瀾の畫は、初めは、やはり大雅に學びましたが、後にまた大和の柳澤淇園に學びましたさうで、水墨の山水は、遠韻雅雋にして、少しも俗氣がない。また四君子などは、おのれの性をあらはして、いとやさしく出來て居ります。玉瀾の玉は、淇園の別號玉奎の玉の字をもらふてつけたと申します。

玉瀾には、おもしろいお話が澤山ありまするが、いろいろの書物にも出て居りまするが、わざと略して、此には述べませせぬ。

▲三好雪女

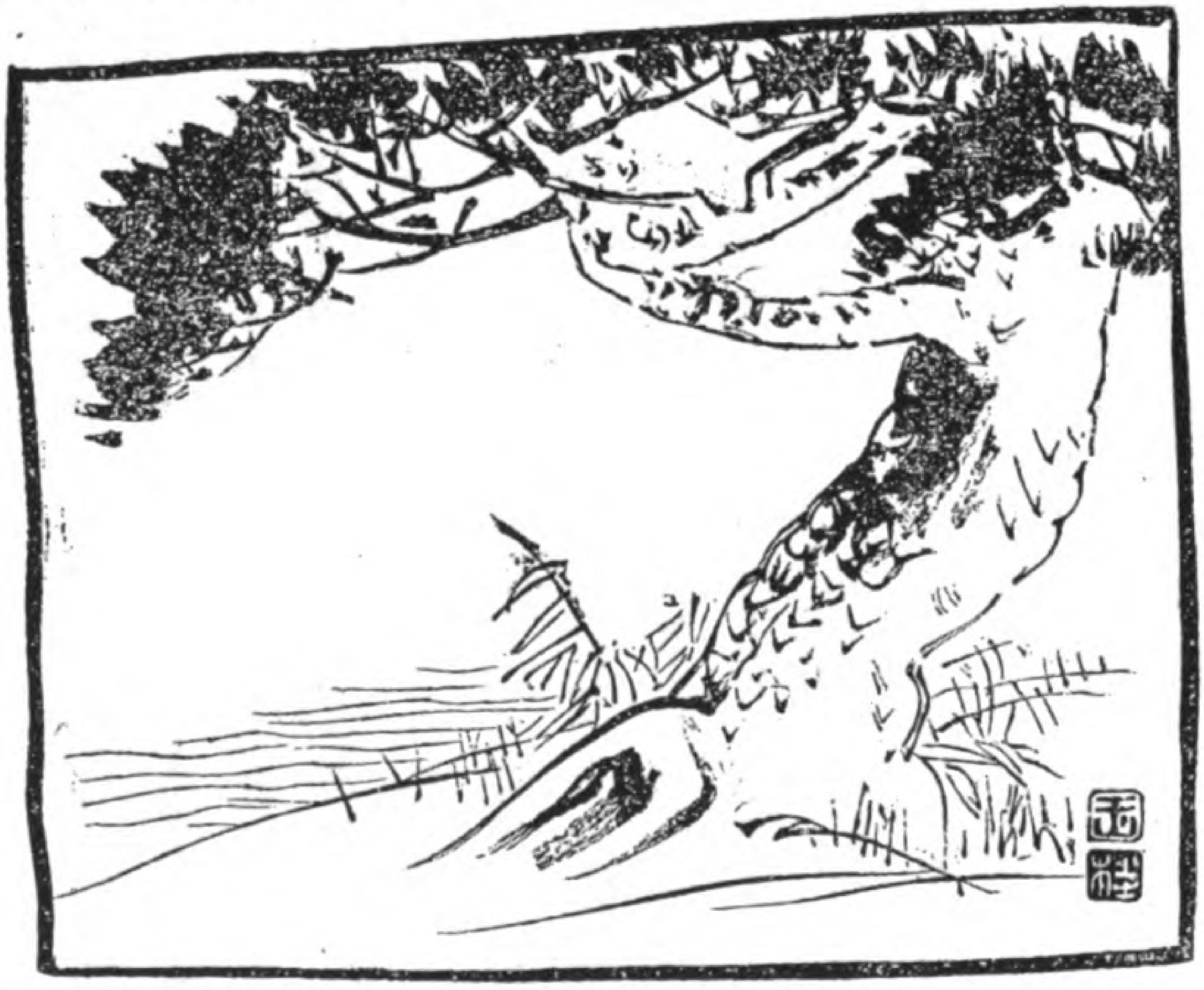
雪女も、やはり畫を柳澤淇園に學んだ一人でございます。大阪の長堀の豪商木津屋五郎兵衛といふ者の娘で三好氏の養女になりましたが、自ら誓ふて、一生夫をもたず、また家産を治めず、女でありながら、任俠の風を喜び、劍術や柔術を學び、なかなか人にすぐれた腕力がありましたから、世に稱して奴の小萬など丶呼びましたさうです。

この女には、おもしろいお話が多い、少し申しませうある時、天王寺に開帳があつて、市中の士女が參詣して市を成して居りましたが、忽ち盆を傾くるがごとき大雨で、人々が困却して居るのを、雪女が見まして、財布を傾けて傘一千本を求めて、悉くこれを參詣の人々に施しましたといふことです。またある時には豐太閤や關白秀次の冥福を祈る爲めに大法會を營みました。晩年になりましては、自分の庵室の門前に棺桶を掛けて、客と酒宴をした。これは死期の近きにあることを知つたからでもあらうと思ふ。とにかく面白い女です。

大阪の人の云傳へによりますると、雪女は、南朝の忠臣楠正成の遠孫でありまして、つねづね王室の衰へ

たのを慨き、ひそかに勤王の士を慕つて居りましたが志のごとく行かぬので、前に申す通りの行をしてその跡を晦ましたのであると申しますが、或ひは左様かも知れませぬ。

此に少し雪女の爲めに寃を雪いでやりたいのは、おほかたの人は雪女を淇園の妾であつたやうに云ひますが之はけしからぬ話である。雪女の氣象を見ても、人の妾となるやうな女子でない。それに慥かなる證據は、木村巽齋の死を悼める文にも、吾が師柳先生云々と書いてあります。この文は、蒹葭堂雜錄の中にも出てあります。雪女の靈をして、此のごときことを聞かしめたならば、泉下でさぞ／＼くちをしい極みに思ふてとであらうよ。



▲羅井來禽

彼の大島芙蓉は、篆刻にかけては、一時印聖とまで謠はれた人で、畫もなか／＼巧で、大雅、淇園、應擧など丶共に遊びましたが、その妻の羅井氏來禽といふのが、さすがに芙蓉に連添ふほどの女で、つねに好んで畫を作りました、その作は、大抵は花鳥ばかりですが筆が太だ婉媚で、その頃の支那人のやうな趣があります。

來禽がつねに用ひたる來禽樓の三字を刻したる銅印は所天の芙蓉の手に成たもので、なか／＼好く出來て居ります。この印は、當時大阪の好事家が大切に珍藏して居るさうに承り

ました。

▲三熊露香

來禽と同時の女子に、專ら櫻花を寫生して、頗るその妙を究はめし者がある。それは三熊花顛といふ人の、妹の露香であります。この花顛といふのは、山城國鳴瀧村の三熊藤八郎の二男で、名は思孝、通稱は主計、又の名を介堂或ひは海棠と申しますが、年のわかい時から、心を風雅の道に寄せて、一生妻を娶らずに、たゞ天下の名區に遊ぶことを樂と致しました。ある時つら〳〵思ふに、我が日本の櫻花は、すべての花の王であるが、淸女の枕草紙に、繪にかきおとりするものに櫻をのせたのを見ると、昔から能く之を畫いた人もないと見える、これは實に遺憾の事である。我もわかい時に、長崎の畫人月湖について、畫法のあらましは知つたに依つて、櫻を專らと寫して見やうよといふ志を起しまして、それからは春ごとに、京は更なり、遠近の國々までも、櫻の品を探りて、その種類の純はなると雜れると、また天氣の模樣、風雨の變化などにて、その趣の同じくないことや、花の開くことの遲い速いことなどを、一々に之を辨へ、櫻の爲めに心を惱ましたことが前後三十餘年の長い間でありましたが、悉くその眞を寫して、遂に櫻品三十六品を撰びました。かくの如く骨を折りましたので、その精はしきに入つて、花顛の畫いた櫻花の幅を掛けておくと、蛺蝶が來て戯れたといひます。まさかそんな事もありますまいが、とにかく巧であつたに相違ないのです。つまり露香はその兄の志を繼いだのであります。

露香が最初に師と仰いだのは、吳月溪であるさうで、いろ〳〵の物も作つたのであらうが、寬政の六年に、兄の花顛に別れてから、櫻を專門とすることになつたのであらうと思はれます。露香も餘ほど骨折つたものと見えて、女ながらも兄に劣らない處まで到つたのです伴蒿蹊が露香の櫻花帖に題したる序文が、能くそのあらましを知ることが出來まする、その文は、「三熊花顛子、この花をすけるあまり、畫にかきをとりするてふことを口をしとて、さま〳〵心をつくし、其まことを

寫し得たり。されば人もたぐひなきをめでゝ、競ひてこれを乞ふに、いかゞはせん、年頃なやみてついに泉に歸りぬるは時かも。こゝに醍醐の山縣蕪亭ぬし、親しきゆはひながら、これを得ざるを惜みて、其いろとなる露香女をして、此帖をうつさしむ。常にこのかみにとひきゝてやゝ趣を得たればとて、さてしも端にことくはへんことをもとめ給へれば、只ありのまにまにみする。おのが醉の花なれば、うつし畫の花にけがされてともみゆるされなんかし。」といふのです。また別の帖に、六如上人は、「思孝歿後世人視露香猶其兄也。思孝無兄而有妹。」と題し、また皆川淇園は、「予嘉其以閨閤之質而善聯其棣蕚之美。」と題して居るのを見ても、兄に劣らぬ名を得たことが知れます。私もをり〳〵この兄妹の櫻の圖を見ますが、脂粉でべた〳〵と染めたもので、もとより雅致のある畫ではありませぬが、形似は能く得てあるやうに思ひます。

また江州の女で、織田瑟々と云ふ者がありました。露香の家法を得て、また巧に櫻花を寫したさうで、文化文政の頃、京に住んで、頗る名があつたといふことであります。

▲香川氷仙

露香が京都で盛んに櫻を畫くと、これと相對して大阪で、女子の裁縫や中饋を治る事を旨と作つた女があるそれは米巽處といふ人の先妻の香川氏氷仙でありますこの女は、名は園葵、字は小洲と申しまして、森川竹窻の妻香川素琴の妹であります。この竹窻といふのは大阪の人で、名は世黄、字は離吉、また良翁と號し、古法帖を學んで、書を巧に作りました。書は南宗の法度を守つて、わけて竹を寫すに妙を得ました。妻の香川氏素琴は、字は紫桐、號は芝園といひて、つねに好んで四君子を作りましたさうです。氷仙は、この姉と姉婿とに薫陶されたのであらうと思はれます。田能村竹田か上田秋成を京都南禪寺の鶉居に訪ふた時に、壁上に氷仙の畫いた美人裁縫の圖を掲げてあるのを見ました、その畫は、白描法を用ひまして、或ひ

は、裁ち、或ひは熨し、或ひは尺を按じて商量して、その聲容が掬するが如く、筆もまた纖細にして潤澤あつて、纏綿として浮ならざるに感心したと、その著書の中に記してあります。氷仙か女の務とすべき事を旨として書いたのは、なか〳〵識見もある。ことに竹田ほどの名匠が賞めるほどに巧であるのですから、いよ〳〵珍重して然るべきです。（完）

庭前の記

書見、義雖に倦みける時、緣端近う出でゝつかれたる眼を庭前にやるは樂の一なり、さまで廣からぬ庭ながら、又風情なきにしもあらず。

櫻。爛熳と咲きほこりし花もいつしか散り果て殘るは青葉の梢のみ、されどこの葉の日射に映じて、限まく〳〵さやかに綠りなせる、えも云へず、殊に夕暮なんどやゝ冷たき風の木の葉を音づれたるなど風情多し。

桃。愛らしきは此實、凋みたる花の中より少しばかり頭を出せる様になかしく、やがて中夏になれば大きうなりて、吾等の乾きたる舌を濕ほし、苦熱をしのがしむ。

なぎ。はなれの茶屋の前に高き那木の木あり、根は一本なれど幹は二つに分かれて厚き葉の繁り合ひ、秋と云はず、冬と云はず、常綠の姿雄々しく、また幹のすらりとして美はしければ、吾れ其小陰に憩ひて詩集など繙く、その快闊ふべからず。

橙。濃き葉は一種のつやありて、これがとげあるのおそろしきを思はしめず。小さき花の咲けるも愛らしくやがてオレンヂ色の丸き實を結ぶかと思へば中々に殊勝なり。

桐。きのふまで棒立に立ちたる梧桐のやう〳〵小さき幼子の掌を擴げたる如きが五分ほども延びて、其狀恰も風車の形をなせるさまこよなうなつかう。

笹。南緣夕日うすづくところ、小笹ふりて微風に搖ぐさま凡ならず、一葉二葉手水鉢の水に散りたるもさびたる心地して、折々雀の葉隱れに囀づるなど配合おもしろし。

蘚。石の間よりところ〴〵葉をひろげ出でり、元より野草なれど雨降りたる時、玉水のほと〳〵とあたりて限りなきうら淋びしき想をさそひ、これが古城などの石垣の間より生ひ出でたる光景如何ばかりの侘びしさならむなど、そぞろに惹起さるれば、其儘に置きて、わが眺めの一つとす。（波間花子）

寫生文

紀伊　池永ふみ子

夕ぐれ方より海濱へとさまよひぬ、雪を欺く眞砂の濱を女波男波のひた〳〵と寄せくる每に千鳥むれ立ち、波は白き藻草を汀に殘して彼方へかへし行くもおもしろや、人の足音きゝて小さき鋏ふり立てつゝ、己が穴に隱る蟹も興あり、波間に漂ふ捨小舟舵とる主や何地ゆきけむ、あちらに漂ひこちらに流れさながら秋の雲の行方定めぬにも似たり、見渡す彼方に霞ひきはえたるは淡路島にやあらむ弓形をなせるは雑賀の岬、沖には眞帆片帆翻々として胡蝶の落花を追ふ如し、此處の岩に釣を垂るゝ漁師、かなたの岩に遊べる童、さながら繪の如し矢の如く走りゆく異樣の小舟は櫓聲咿軋として聞ゆる釣舟の中を縫ふて勇ましく折り〳〵きこゆる一二のかけごえかすかなり、

日は西に傾きぬ、夕陽の影の靜けき夕渚の波に映じて名殘りの光幾千條、白き漣波は黃金色となり波間に通ふ白帆の夕陽にてらされつゝ恰も花の笑の唇ほころばんとする如くその樣えも言はれず、潮にこがねの花を咲かせ波に紫瀾の綾を織りし夕ばえの色やう〳〵うすれゆく海の上、夕日を浴びてかへりくる眞帆片帆濱べにかず多くなりぬれば、いづくとも無く聞ゆる夕暮の鐘、餘韻は低く高く海づらを流れゆく、眞砂を洗ふ渚のほとり船出せし父の無事をいのりつゝあわりし妻子の姿あはれなり、白鷗は夕暮闇の大空をぬひつゝ飛び廻り、船頭のいそ節沖合より風のまに〳〵聞えつ寄せてはかへす海の妙なる調と和せり、日は全く西の海に沈みぬ。

小つぶなる星二つ三つかすかなる光りをもらす愛らしさ、暫くにして明月山を離れ、海は碧に空は青く、月ひとり水天蒼茫の間に紅玉をかけぬ、汐のかほりはのめきて波の白き砂地に海のひめごとをさやぐめり、月の登

るに随ひて水色一時に金色をなし、沖の島山月の光りにてらされて言はむ方なきながめなり。すでにして漁火一つ消え二つきえするにかへらむとふりむけば海士がとまやにともし火の影かすかに見ゆ。

○朝の山

横須賀　名木山勝子

我が國に向へる山は朝日の光うけて水々しき緑の色いとも懐かし。木の芽の白きあり赤ばみたるありて、わたかも花の如し。花は桐今しも盛りにて、其薄紫の匂ひこぼるゝばかり。さてはとこしへに變らぬ色の松が枝よ。高き其操を見せて一際黒うつきたてる様の雄々しさよ。あゝ見れどあかぬ朝の山の姿かな。あなたの山はたゞ灰色に霞みて。あなうるはしや。心地よくてなむ。書よむにも書かむにも。

○夕の山

同人

紅さうび匂へる垣根によりそひて優しき聲す。我名を呼ぶは、まがふ方なき隣り家のをとめ子なり。應と答へて折戸おせば、山邊ありきはと、けしき伺ふ。徒然なるまゝに打喜びて我は袂引かれぬ。夕ばえうるはしきみ空、木の間より仰ぎつゝ、小山田の畔さまよふ。夜の神は黒きみ帷を垂れまさんとす。をとめ子は、をかしき歌うたひて田の面の蛙に合すがごとなる、たゞあたりの靜けさ。いさゝ川の水のきらめくに、あはれと叫びつつ打仰げば、向ひの山の黒き松の上に、十三夜の片破月はかゝれるに非ずや。しばし月と山とに思ひを走らせて我ならぬやうになりし頃、をとめの姿は見失ひぬ。驚きてそが名呼べば遙うしろの方に聲す。ふりむけばまた後の山の林稍はなれて赤星はほゝゑめり。をちこちの濃き薄き山々あゝいとゞ其なつかしさをましけりな。あゝ靜けき夕の姿かな。思へばかのをとめは孤兒なり。此月の夜この山を見て戀しき昔を思ひ起すらん。あはれや彼れ黒髪なでゝし其たらちねの面かげを忍びいでゝは、ひとりひそかに袂しぼるらむ。あはれそれその歌へる聲も悲しさ帶べるやうなるは。

大阪　岡崎かつ子

今年の春身にいさゝかの障りありて醫師のすゝめにより讃岐の小豆島てふ處に養生する身とはなりぬ、われの宿りしは山の半腹に在る尼寺なりしが、且は谷間にひゞく山寺の鐘の音に目覺むれば、山頂より流れ落つる瀧の筧を傳ふ淸水にうがひして寺内を散歩しつゝ門前に停みて見渡せば左手の方にかすかに見ゆる屋島は屋根の如く讃岐本島は恰も長蛇の横はれるかとあやまたれ島を圍める蒼々たる海原は浪いと靜かに其中に散在せる大島小島は未だ明けきらぬ夜の薄墨色を帶びていと妙へに其の間を行き通ふ船の白き帆のみ見へて鷗の三つ二つ泳ぐ樣など如何に巧なる茶人の打ちし盆石もかく迄やはと思ふ計り其景色其趣味實に拙き筆にはあらはしがたし、塵深き市中に住ふ身のかゝる景色の中にあるはさながら仙境に遊ぶ心地してたゞ茫然となりし折柄麓の方より四五人の女各肩に梯子の如きものを背負ひて上り來るにいといぶかしく景色に名殘はつきねども今朝のみに限らぬやはと内に入りて庵主の君に尋ぬれば彼等は皆薪木取る女子等とぞ、やう／＼朝餉を終へし後は御弟子達を對手に日ねもす語り暮し又も宿をさまよひ出でゝ松原つゞきの山道を下り行くに三坪計りなる平地に出でぬ、見下せば幾年となく浪にさらされつらむと思はるゝいはほに寄せては返す白浪の海面にのぞき込める磯馴松と相對していと美しく今や還御の車を早め給ひし日の女神は西の山の端にわづかに半面を殘して波上にきら／＼と黃金色の線を引きてうち寄する浪は金波の如くやがて其れも見へずなりて紫の帷は東の空より下り初む頃海上に靑き火の一つ二つ赤きも雜りていと美しく遠方に見ゆる漁火は螢火の如く岸邊に漕ぎ寄する漁夫の舟歌節面白く仰ぎ見れば山上よりは今朝上り行きし女子達の頭よりもなほ高く積み重ねたる薪木を負ひて少しも苦しげなる樣もなく樂しげに語り合ひつゝ家路に急ぐなと僞り多き都の住居に引き替へていと淡白なる山家の住居げに我が爲に無上の好伴侶なりしよ、

一月餘りの後わが身は彼等の惠に由りて舊に復しければ再たび紅塵深き市中にさすらふ身の今も猶なつかしき海よ山よ。

[illegible]町　神谷よし子

潮ひき初めぬ、とくゆかずや、とくゆきて我こそ獲物多くあさらめ、などいひつゝとよめく若者等、早やも潮の中に魚ふみ試みつゝいと心地よげなり、されと女の身の流石まだ入りかねて、やう〳〵砂になりたるあたりに貝掘り、又幼き子等はやどり蟹のありくを見ていと面白げなる、折しもあれ、潮干ぬと誰やらの叫ぶ聲諸共に、我も〳〵とあらそひ入りつ、妾も共におくれじと揃ひの赤襷かひ〳〵しく結び、裳をかゝげて馳入りぬ。小魚とらへて魚籠に投ずるあり、こちにさゝれあかえにさゝれていたやと顔打ひそめつ、取にがして悔しげに罵しる男あり、鯛をこそ我は得けれと人々に見せつ鼻うごめかす者もありいと〳〵羨ましけれど、そは大かた深さ膝の上にもなりぬれば、おとろ〳〵しきまゝに、魚もあらず、やう〳〵愛らしき小鰈二枚ときすてふを一尾得たるのみ、

さはれ面白さのなど變りあるべき、さるに早や正午近ければとて、きのふの雨の名殘の雫、印したる磯馴松影かしこにこゝに毛布など敷きて辨當ひらきぬ打食べつゝ、見渡す海面あゝひとりがむねのごと、色碧く天につゞくを僅かともへだつるものは、知多の半島、

松原こゝより遠く鼓が浦に、辛州の浦に、弓形なして綠より稍黑く、又小さく、淡く、つゞき〳〵たり。近き苫屋のあたりに、干したる網をかすめて走る白帆、又はるかなるは、さながら、かの梨の花びらの散りとまりたるかとぞ、波もおもしろや、汀に白き花咲かすれば、共にぞぱつと千鳥群立つ、あるはまた、南の方はるかに、漁夫が網引のいとをかし。

東京　かつら女

晴れ渡りたる空のあなた、三浦の崎とおしはからるゝあたりより月影さやかにさし登り、波のうね〳〵黃金を湧かすかとあやしまる。小由留木の磯邊に波を追ひつゝ遊ぶ人の多かる中を、出て入る舟を送り迎ふる海人の立ちさわぐも世を渡る業なればなるべし、海のあなたより法螺を吹きたてゝ寄せ來る舟、目じるしにとて濱邊

にたく松明、舟なる人の高らかに笑ひさわぎ又勇ましく唄ふ舟歌、陸なる海人や海人の子の呼び聲いとかしましきが中に、舟は波にのりつゝ渚に走り寄るを、二本の大綱に取り付きて、かけ聲勇ましく之を引く者、舟柾をもちはこぶ者、獲物をなげ出す者、投げ出したるを三人四人して捧もたわゝに擔ひはこびゆく者、一つとして目を樂ますと云ふ事なし。すでにして涼みの人ども一人かへり二人かへり海邊もやう／＼靜かになりぬ、波の音いよ／＼高くして水の色、益々白く月影いよ／＼さえ渡りて山の色益々青し、遠くに黒きは眞鶴の崎なるべく、近くに靑きは石橋山なり、顧れば先にさわぎの中心たりし舟も今は靜かに砂の上に眠り、早川の里のあたりの火影も其數少くなりぬ、夜やふけぬらん。

朝

伊勢なでしこ

朝の海ほど壯快なるものはあらじ。

水や空なる間一髪は次第々々に際立ち來りて、今や明け渡る曉の空おごそかに、濃藍を湛えたる海の新潮の香永しへに神の秘密を傳へて清氣骨に泌み入り、壓けき風の手睡りより醒めし萬象の顔を撫でゝ至大なる慰藉を平等に配れり、と見るまに、半天漸く色めき渡りて、一刷毛の雲夢の樣に流るゝや、數條の紅霓水平線上に閃きて、或は紫に、或は黃に、或は紅に、或は黃橙色に、陸離たる光彩は水や空やに搖曳して秒一秒に變化しつゝ、偉大なる白光の勃然として發揮するよと思ふまもなく、紅暾は徐々として浮び上りつ、更に一段の活氣を帶びたる萬象の歌に迎へられて、眩ゆき裝ひを波の上に輝せぬ、噫、噫、其瞬間!!。

沖なる島は金碧の色を漂はして喜びの笑みを捧げ、淸き渚には蜑が船出の賑やかにものせられぬ、嗚呼、此の平和なる光明に浴して幸多き海に朝の祈禱を奉つる子よ、彼の暦日なき深山に一生をおくるものと比すれば、其快樂果していかばかりぞ、我は常に思ふ、海の神秘深さことを。

あゝ、壯快なる朝の海よ。

夕

夕の海ほど美妙なるものはあらじ。
朝の海の壯快に醉ひし我は同じ浦廻の岩角に立ちて小さき眸に大觀を貪りつ、塵に汚れし袖を翳して油の如き海上を望めば、紅燃ゆる夕陽の影低く水平線に落ちて、金色の長橋眩ゆく我が足下に架せらるゝや、我は此の奇しき浮橋を渡りて太陽の世界に到らばなど罪深き空想を描きたりしが、日の大神は人の子のさがなきをわざみ給ひてか、其美しき橋を手繰るやうに掻消し給へば、西空に漂へる五彩の雲は、皆愛らしき笑みを湛えて今日の別れを告ぐるが如く、次第々々に光を收むる夕陽の、遂に團々たる一大紅玉となりて吸はるゝ如く海に沒しぬ、此時、萬象は「今日の光榮」を感謝して、皆喜びの歌を謠ひ、暮烟淡く磯の松原を罩めて夜の色漸く漁村に迫りつ、こゝらの獲物を舟に齎らして磯節おもしろく歸り來る蜑の、愛濃き妻子に迎へられて笑ひさゝめきつゝ、安き家路に就く幾群のいかに心をさなき境涯なる事よ。
美しかりし夕やけの空は灰色になりぬ、水や空やのけぢめもわかずなりぬ、海には鯨の如き島山の影と、幽かなる燈臺の光とを宿せるのみ、分一分にきらめきまさる星の數の、いかに深き契りを底の玉藻に結ぶらむよ。
我は常に思ふ、海の趣味に富める事を。
あゝ、美妙なる夕の海よ。

東京　和子

白波くづるゝ荒磯のものすごき眺そは此所になけれども悠々としてとこしへにひゞく波の音こそゆかしけれ空はほのかに藍色に匂ひて去りやらぬ白雲夕げたく漁村の烟となびいて遠く杳かに舟歌の聲波をつたひ風につれて聞ゆなり
夕日を浴びつ入江をさして歸りくる海鳥の影消えて見る目あやうき賤が軒にほしたる網の磯風にゆらめけるがみどり深き松の木の間にほの見えつ
日はまたく海にしづみて松の林もくさの屋も同じ色にぞたそがれ渡る眸を遠く房總の山にそゝげばてゝもまた

夕の色につゝまれて黒き衾を引きかつげりたゞ海原のみぞ白うほのめく寄せてはかへす波の色雪とみだれて眞砂路にさゝやき花と咲きては行人の足をとゞむ見渡す方は目もはるに潮はみちて今し海のはて水平線上に月出でんとす

明星はかゞやきつ波はこがねの玉と散りて磯草の香り高し沖にはいさり火一二點月に光を奪れつ　またゝけり

長州　ふ　よ　ふ

霞のとばり、日毎にあつうなる、彌生半ばの山こそいとめでたけれ。鶯の聲と共に、はなやかなる春の日の昇れば、世界には、美しき色ひろごりて、皆艶を競ふ中にも山は、取りわけ美はしく、その遠きは、霞の間よりいたゞきのみ、あらはせる佳人の眉の如く、近きは松杉の冬の難門を、くゞりきて、理想の春に逢ひたる嬉しさわふれる面を霞の間よりほの見せたる、得も云はれず。殊に鶯の竹ある所にて一聲と、なはぬ調べするもをかし。霞も漸く消えぬれば春の御神は、やさしき、御手をいよゝ加へさせられ、山かつの、小屋かと、思しき所より煙の一筋二筋面白く立ち昇り、海原の如き、空に映じ、乙女子の赤き袖さへ木の間に、見ゆるなど、とりどりに美し。殊に緑の松の間に山櫻の匂ひ出でたる、他にまさる花もなく優美にて朝日に對せる様など古歌さへ忍るゝ。まづ暫しのうちに少女のかざしとやならん。吹く風にあたら櫻の散るよと見し間に、日はいつしか西にしづみ、耳驚かす遠寺の鐘いと高う、空には朧月匂ひ出で、その下ゆく雁は、何地へ行くにや一聲いと高し。それと共に、又もや山櫻は、雪の如く、こぼれぬ。松風の音、さはやかに、ひゞき渡りぬ。あはれ山もし心あらば此の楽しき様をとこしへに續けよかし。

うたかた

住みすてたる故郷こそ戀しかりけれまして我ならぬ人もなつかしむ西の都の春秋思ひ出のなくてやは

東山の眺望めでたからぬにはあらねどすぐれてをかしきは嵐山よ霞渡れる朱雀野の末に雲のたなびくと見ゆるはやがて山の櫻なりけりまだ知らぬ人は長閑なる一日栞の花かをる野路ふみわけてとひても見よ山のたゝずまひのまづ懐しきに緑深き松にまじれる山櫻の清げなる下ゆく水も花なれや其夕暮こそ殊に哀はふかけれ麓の寺につき出す入相の鐘の響長く幽になれる折しも山風のさと吹けば眠れる蝶の夢さめてひら〱まふやうに降るは花の雪縹の水に散りて浮ぶや香ふ雪

二町登れば大悲閣と石に刻める花の山其花こそ名殘なく散りはてたれ躑躅の花の盛にはわけ登る袂も燃えむ心地せむ又郭公聞かむとそこ近く宿りてまどろみがてに明したる曉のをかしさ山の木立名は同じ緑ながらさすがに花と紅葉の梢けぢめ明かに霞も霧も隔てぬ景色繪も及ばじなら

峯の松風琴の音に通ふ秋の夜月すみ渡る下嵯峨のわたり虫の音繁き草むらの露にもすそしとゞになしつゝ行かむに寮の御馬に乗りたる御使もや見ゆると覺ゆるばかりされどかゝる宵ぞ此山の西にわれば傾く程もなくとく入るに猶山の端にげてとてゝにのみもいはまほしくてかこたるゝはさばれ麓行く川にうつれる影はたをかしからぬかは

薄く濃く楓に櫻にはた松にかゝれる蔦葛の紅に様々匂へるが常磐木に色はえたる美しさこゝの霜のよそに何異なるらむ水の底までそめなしつゝはては吹く朝風に誘れて下す筏士の襤褸の袖をさへ錦となすばかり散りはててさて後こそものさびしけれ

川瀬の千鳥聲悲しき冬の日火桶ひきよせつゝめでむ雪の朝唐土の香爐峯は知らねど木々の梢たゞ埋もれはてゝ春まつ心には花とも見ゆるおもしろき色としいへば縹の布をひきはへたらむ大堰川のながれ一すぢをりふしにつけていひしらぬけしきをかくはかなく書きいでつるはなか〱に惡しかりぬべきわざなるべけれとほこらまほしさのすさびなりかしさても花につけ紅葉につけて心もとなき山の名は如何なる人のつけそめけむとゆやしうて

長門　杉山きくの子

千早ふる、神代ながらの面影を殘し、星移り物變れども。動きなく、變りなきは、げに足曳の山にぞありける。其の變りなく、動きなき山、しかもよく、四季をり／＼に、そが面もちをかへ、人の心をちゞに動かし。泣かしめ、笑はしめ、喜ばしめ、憂へしむ。あはれ山なるかな。山ありてこそ河あれ。山の紫と河の明と、相映發して、茲に始めて、自然界の單調を彩り。望みある人、望みなき人に、無限の奮興慰籍を與へて、精神の萎縮を復活せしむるの靈妙。妾は山に於て始めて見る。古人の山水善く偉人を生すと、げに理りなり。

春の山。新玉の年たちかへるあしたより。山ふところにいだかれて、白き赤き梅の匂ひの、えならぬを始めとし。やう／＼春深くなれば。山もとかざる桃梨のながめ。山また山と、なき渡る、百千鳥のこゑは、云はずもあれ。漫然として艶ある雲かと疑はれ。翻然として香りある、雪かと訝られ。きら／＼として白球を連ね。彩霞をたゝみ。樹々艶を競ひ、美を爭ふは。高嶺なす、春のみ山の花さくをりにぞありける。

夏の山。水無月のなかば、人は擔下三尺の陰を爭ひ。犬は喘々として、柳陰に憩ふ。水乾き、土燒け、石熱するの頃。老幹幼枝、參差として枝を交へ。翠なす、若葉のみづ／＼しく生ひ茂りて、照る日の光微かに洩れ。細流潺々、石に私語く、深山の奧。誰れか夏山の樂しきを思はざらむ。あはれ綠の山、清らの川、そよく涼風、徐ろに美妙の樂みを傳へて。パラダイスにまよふの思ひせらるゝ所こそ。げにわが世の夏もわすらるゝなれ。

秋の山。女郎花多かる野邊に宿りせば、あやなく仇の名をやたてなむ、と、小野のよしきの君が歌ひしも、げに眞をぞうつせるよな。芳多き草花も、いつしか枯れて、木葉はふれるころ。只優にやさしき女郎花の、鮮かなる貌を殘せるも、宛然野邊の景色。紀のあるじが、白露も時雨もいたくもる山は、下葉のこらず、色づきにけり、の歌も。滿山のきばみ渡れるけはひ。げに山ありてこそ、始めて知らるめれ。

冬の山。山里は冬ぞわびしさまさりけり、人目も草も枯れぬとおもへばと。滿山色あせて寒風梢を訪ふ時。あるは一夜の中に、白銀の世界と化したる時の山の景色。げに何とて、筆につくし言葉に言はるべき。

ひめゆり

千葉 平川遊幾子

妾は胸の苦悶やるせなくて、今しも鎭守の裏山に來れるなり、時は夏のなかば、蟬の聲は木々の梢にたかし、こゝぞよけむと、椎の木の二本並べるに、携ふるハンモックを結び付け、妾はそが上に横たはりぬ、あゝこの山のこの木蔭こそ、妾が一の快境なりけり、風は颯々として靑葉を吹き、心地よきこと云はむ方なし、遙かに眸を放てば九十九灣の靑波は、恰も疊を敷き並べたらむ如くにて、そが間に白く見ゆるは帆船にやあらむ、妾は暫しその景色眺めしが、胸の苦悶はいつしかうせぬ、いでや携へし書をと、讀み始めしは湘煙遺稿なりき、あゝ女史はわが邦文學界の一女傑、その書き出で給ひし文の面白さに、妾は暫しこの世を忘るゝが如き心地のすると共に、女史を追慕の情は又禁じ難く、思はず落つる涙、二滴又三滴、

たちまち姉いさん其處にとの聲は起りぬ、見れば妹はいかにして知りけむ、麓の方より登り來りぬ、妾は手をあげて招きぬ、かれは滿面に笑みを浮べてかけ寄りぬ、あゝ羨しきは少女よ、かれの胸には一點の苦悶も無けむ、げに愛らしの天使とも思はれぬ、

妹の來れるに妾は讀みさしの湘煙遺稿は、ハンモックの上に置きて降りぬ、妹は乘せてよと乞ふに、下より抱き上ぐれば、うれしげにそが上に乘りて横たはりぬ。あゝ姉さん山の下はひくいね!、われ〳〵彼方の往來を往く人の少さい事よと、さもなき事を珍らしげに云ふをかしさに、妾も思はず笑ひを洩らしぬ、

妾はかたへの芝生に腰をおろし、山の四方を眺めたり、たちまち眼にふるゝは老杉の一木、あゝかの杉は又忘れ難き杉よ、過る年の春兄君が紙鳶飛ばして、かの杉にかけ給ひし事のありき、そを取らむと兄君はかの木の梢に登り給ひ、妾はそが根元にありて、落ち給ふな怪我し給ふなと、氣遣ひし事のありしが、思へば今は五年の昔と成りぬ、兄君は今都の學び舍にあり、雨の降る日の灯かけに、故里忍び給ふ事もあらむ、またうなゐ子の戯れ見ては、おのが幼な遊びを思ひ出で給ふ事もおはさむ、そが中にはこの杉の梢に、紙鳶を取りに登り給ひし事も思ひ出で給ふかそも。

見れば妹は遊びにや疲れけむ、すや〳〵と夢路に入りぬ、蟬の聲の高ければ聞えねど、ひく〳〵鼾の聲洩す

樣思はれぬ、
快く眠りし者を驚かさむも心なきわざと、妾は芝生に、そが眠りの覺むるまでと、さきの湘煙遺稿を讀みつゞけぬ、眼に浮ぶは幻の影、耳に聞ゆるは蟬の聲。

課題文

女子と交際

岡山　小山松枝

世の文明にくに赴つれて、女子たるもの家事を整理するかたはら、交際の術に熟練せざるべからず。家運の榮え位置の登るにつれて、その交際や複雜となるべきなり。しかも婦人の性温和にして、よろづ細やかに、かつ極めて優しく氣高き心情は、よく男子の剛き心を和げ、ことに主婦の交際に巧妙なるは、よく來客をして快樂を感せしめ、親族朋友の間柄をも圓滿ならしむ、實に女子の交際は家政上最も必要なり。しかして多くの人に接し、互に扶けもしまた扶けられもして此世を送らば、一には心をも樂しましめむ助ともなるべし又一には見聞を廣くし智能を開發するの益あるべし、これ此世に處すの人のなさではえあらぬ義務にして、他の動物と異なるゆゑんならめ。さて廣く世に出づれば人々ことさら女子の擧動につきては。些末の事にても目を注ぎ、非難を加ふるもの多し、けだし交際の拙なきによるならむ。若し世の開化と共にこの道も進みなば、禮讓の心なきときは社會より擯斥さるゝゆゑ自然德行を重ずるやうになり、女子の品位も高まるものなり。されば人には信と敬とを以て交り女子たるもの先づ文學を脩めて思想を養ひ完全有益の交際を求むべし。

大阪 岡崎能婦子

女子と交際、是れ實に兩者相はなるべからざる問題なり、若し一家の內女子なからむか其家庭は實に無趣味なるべし殺風景なるべし、又ある集合或は何れかの宴會に於て男子のみならば其集合其會は實に强硬なるべし乾燥なるべしげに婦人は一家庭の調和者なり社會交際場裏の機械なり然るに我國近き頃迄は女子を社會の女子とせず只一家庭の女子として取扱ひ常に家內に閉居せしめて所謂竈の前が都なるを以て偶々人の前に出づれば顏赤らめてさしうつむき必要なる話すらなし得ず又宴會などにも、父兄良人のみ出でゝ少しも子妹夫人をしてあつからしめず其席には卑しきはした女の侍りて卑猥なる嬌羞を以て彼等をあやなしつゝあり

されば常に人と交る事も少きが故自然世事と遠ざかり交際も上手ならず何事にも目だるき事のみなればそのづから男子より邪魔者厄介者として取扱はれたるなりされと今や女子敎育漸く盛となり女子も男子と同等に社會の半面を保つ者と見なされ社會交際なども皆婦人の手を待つ今日此任にあたらむとする我等は此道につきいささかの心得なかるべからず

米國に行き給ひしある君の宜ひきわれ彼の國にて何れの會に出づるも手持不沙汰などてふ事は少しもなく常に愉快に樂しかりき、されと歸朝してある會に出でし時實に手持不沙汰なりきと、是れ彼の國は世界中女權の最も高き國なれば何事にも女子のあづからざる事なく自然場馴れたるにもあらむか一つは宗敎的觀念の相違にもよるならむ彼の國女子の精神や博愛主義即四海兄弟てふ事を深く心に刻めるを以て如何なる外國人に對するもいと親切に愛を以て其の身邊をおはひ接する人をして恰も春風の中にある心地せしむ如何に交際巧なりとも其心に愛なくば人をして心より敬慕せしむる事能はじ・ ある君は宜ひき婦人は愛の化身なりされと彼女より是れを去る時は冷鐵よりもなをつめたしとされば我等次代國民の母として今や交際場に漕ぎ出でむとすわれ等女性は何事にも愛を基とし愛を以て人と交はるこそ此上もなき交際家ならめと胸に浮び出でたるまゝいさゝか寥餘の如き事を述ぶるのみ、

日本の女子は兎角引籠思案なり社會に出で丶圓滿なる眞心と聖き愛をもて多くの人と交際を結ぶを好まず一室に閉籠り絶えず座して裁縫し或は文机につかまりて「果なき我身」「つきぬ涙」「幸なき此世」など丶己れ自から果なきものとし幸なきものと思ひ大切なる涙ばら〳〵と落して暮す人多し、か丶る人は交際其もの丶如何に樂しきかをしらずたゞ人を見たら盗賊と思へといふ言をのみ信じ偶々交際を求むる人に對してもたゞ僞の妄言を口にしあるはうぢ〳〵と一言一言に後退りする樣で實に見苦しきかぎりなりされど是に反して喋々しきは冷やすしとかいへばこは必すべき事なり、近世女子の交際盛なりといへども其眞情もてするは少なく多言薄き唇を飜へし或は夜會よ舞踏會よと衣服の共進會をなしかの夫人の姿たかくこの令孃の衣服はしか〳〵と人を嫉み譏り侮り又は活潑〳〵と叫び多くの男子の内に入りて女子の品位を落すまでの行をし巻烟草口にふかしやがては議論し女子なりとて小さく引籠る謂なしいでや打出で丶天下に日本女子の心情を示さんとてやさしき女子の身にして撰擧の運動に狂ふなどに至りては過たるは猶及ばざるが如しといはざるべからず、元より天性女子はやさしきものなれば多くの人に對し貴賤尊卑男子女子にか丶はらず眞の心と聖き愛を以て交はらんには圓滿なる交際を遂げ得べきなり

稚ヶ谷　加川一枝

信濃　やよひ子

夫れ花に梅櫻桃李の濃艶なる、はたまた薄女郎花の清楚なるがある如く、我等女の身は、嫁しては春の野邊に異ならぬ麗らかな家庭の女王となり、交際社會に出入していよ丶夫が聲名を輝すもあるべし、あるはまたものむづかしき姑などのおはし、さらでも夫の氣質の女子が交際場裡にたつを嫌ひて、しとやかなる家居に、つゞまやかなる朝夕をおくり迎へするもあるらん、良い哉言や、女の身を故人はいみじくもいひつくせり、そは一生の苦樂他人に因ると、或はこの問題をつゞるに當り一篇の主意唯この文字がもとへてこそはと。

そもや昔は金殿の奥深う琴かきならし歌などのみよみ給ひし貴婦人も、世の開けゆく儘、時代と共に進まざる

べからずとて、やむごとなき位もてる夫人方の、何の會、これの會とて、供人すくなう外出なし給ひ、或時は外來の貴賓に應接遑なく、或はまた某殿の園遊會に交際の術をつくして、高尙なるたのしみを與へ給ふこと、たとへば、高き梢の花の、いみじき薫を放つに似たらんよ。それより下りて、所謂紳士紳商高等官の妻の君等、又夫君の地位次第によりてはさまぐ〵なる交際に暇なかるべし。外國の事はいざしらず、日本は生活の度未だ低し、收入の薄き家にて家婢一人の入費は隨分と目に上がるものなり、されば賢しき妻は必ず支出の道をわきまへて、分に過ぎたるの費は、よしやそが目的のよきにもしろ、さしひかへて夫に累を及ぼさゞれ、かゝるは朝は早く、夜も亦夜業の裁縫等に忙がはしく、子供なき折は、偶々の花見物、又は分に應ずる交際も爲し得て、たのしかるらんが、幼きもの丶一人增へ二人加はり乳のむ兒の絕間なきに到らば、其人たとへ才學に長じ交際術に巧みに、普通の女子として恥づることなきも、一日の外出は家庭に大なる損失を生じ半日の交際は、すくなからぬ不始末をきたすものなり　然れ共、交際の文字是決して狹き意義にあらず、外に出で丶衣服をきそひ美を爭ふが目的ならば、寧ろ家にありて雑巾をつゝるに若かず、若し偶々知己の相會して一椀の薄茶にかざりなきの風情をこめ、彼我心をうち明けての談話たらば、よしや貴人の花々しき粧なくも、これやさしき女心にあらずや。國と國、交際の結果彼の長所、我に來りしに非ずや。さるを怪しきは天下の男子よ、猶悔ゆ、交際の文字を我等女の、あまりにも、貴族的に見つることよ。

神奈川　ゆ　づ　る

古へ我婦人界に最も輕蔑せられ殆んど度外視せられたるは女子の交際てふ事なりき、さるを開運の御代女子の勢力活動も亦た漸く昔時と觀を異にする今日そが交際の道も開け範圍も亦た廣く且つ自由に進み行けるはこは社會文明に伴ふ自然の現象なるべし

そも交際としいへば國の交際家の交り身のまじらひ何れ事の廣狹大小はあれと皆な欠くべからざる事にして兩國の平和盛衰は其外交の巧拙に基く其如く一家の繁榮一身の智識發達上に於ても交際の如何に待つ事決して少

なからざるなり然れば花々しき地位に名譽ある事業をとり玉ふ婦人或は堂々たる一國を代表し國家樞要の衝に當れる人の妻たる女子はいはずもがな假にも通常一家の主婦となり夫を助け子を育み家を治めん者にはたとへ夜會舞踏會の作法禮式扱は流暢なる佛語の會話を解せずとも一通りの社交の心得應接禮法等の事は知らまほし徒らに因循なるは決して褒むべき事に非るもさはれ身をも家をも顧みず妄りに交際を放にし多言亂行に陷る如きは如何に交際を主とする家に於てもとらざる處ましてや位さまで尊からず富みたるにてもなき身の夫を凌ぎて我は顔に交際界にふるまふなど實に片腹いたき物ぞかし何も美衣盛裝花やかなる紳士婦人と手をとり交はし家を外に顧みざるが交際てふ物にあらずいぶせきはにふの小屋に身は宿りて日夜襤褸を纏ふわざにいとまなき身も親戚知人朋友はた又た社會に對する交情なからずやは

要するにこはそのがじゝ其身の程を考へ其境遇に從ふべき物なれとなへて女子は心さま正しく亂ならず先づ我心を治め整へて而して後如何なる事をもとるべきなれ分けても同情の念厚くしてまづ誠心をもて交るべきこそ望ましけれ徒らに阿諛贅言など凡そ浮薄のふるまひ計り卑しき物はあらずかし

今や何事も泰西を學ぶ世の中少き女子の交際自由をとく人あり誠やこも又た文明に伴ふ自然の理ならめと泰西の少女子はいざしらず未だ精神定まらず思想確ならざる我國若き婦女子が上には經驗あり思慮ある父兄が周到なる監督こそ願まほしき限りになん

伊勢　なてしこ

これを國家に譬ふれば、男子は即外交官にして、其交際を廣くする程尤機敏に、且高潔ならざる可けれと、女子は即内務官なるを以て、交際如何の點に至つてはさ程の能力を要せざる可し、といふ人あれと、その例の男尊女卑の弊風より打算したる僻見にて、事實は決して然らず、唯に男子の交際のみにて、紳士社會？に渴仰せられ、競爭場裡に勝を制する事を得むや。其尤困難なる家政を鹽梅して、內顧の憂なからしめ、暗に交際の道を開きて一歩を前に進め易くし、諸般の裝飾に、出入の應接に、來るものをして滿足せしめ、去るものをして

欽慕せしむる等、構放操縦の策略を施して、よく其効果を致さしむるは、實に、常に、女子の小さき胸裡に秘められて存する也、何ぞ男子の交際に重きを置きて、女子の交際を輕ずるの甚しきや。

假令、女子に參政權なしと雖、其制裁の原素に容喙するの權利は、先天的に尊き神のみ手より許されつ。教育に、事業に社會發達の機關に、表面的よりも裏面的の勢力を握り。虛勢を衒ふ交際よりも圓滑なる交際に特得の妙を有す。女子と女子との交際よりも、女子と男子との交際に於て、最其奇績なる結果を得るを見る。女子は實に天使也、愛の天使に非ずして交際の天使也、人間界を融和せしめんとして神の降せし交際の天使也、温かき雨也、芳はしき風也。翻つて、彼の昔の女丈夫を見よ、賢婦と稱せらるゝものを見よ、彼等は皆中外の交際に於て優に勝を敵に取りて、克く其奇功を奏せしもの也。裏店住居の内儀が其亭主よりも餘裕あるは、必竟其術に長けたるを以てに非ずや。

然りと雖、交際が社會の利器なる丈、又個人の大敵を招く事往々あり、殊に女子と男子の交際に於て意外なる醜狀に陷る事あるは大に戒心す可き事ならずや。

要するに、女子の交際は男子よりも高潔なる可し、因循なる可からず、温和なる可し、奇激なる可からず。唯克く其守る處を守り、行ふ處を行ひて、許す限りの交際を勉め、以て先途の利を許り、以て處世の法を講し、親の爲、夫の爲、子の爲、兄弟の爲、進んで斯道の便益を研究す可し。女子と交際と、交際と女子と、嗚呼、難い哉、處世の法。

我家の娘

山岸荷葉

十日――霽る。中途半端ながら、この火曜日が自分の休日で、午前中五七枚の寫眞の燒付に倦んで、午後机上に在ると、

「阿父ちやん！」と冴えた、細い聲は隔ての襖越しに瑶の呼ぶので、

「あいよ。」と答へれば、「瑶ちやん、行きますよ。」

自分と名乘つてすらりと襖を開ける。一旦開けた襖は自分の全身が出ると同時に、再び丁寧に閉めるので。而かも一生懸命の力を出して、うむ〳〵言つて居ながら、他の者が持ち添へると怒るので、默つて見て居れば、隙間もなく襖の閉められた後、横飛びに飛んで我が膝近くまで遣つて來る。「阿父ちやん、おかめ書いとくんな。」

緋無地のめれんすの、袖口を紫で縁取つた筒袖の、兩肱を机に持たせて、赤いめりやすの足袋穿いた足をとかとか遣る必要から、机に乘し懸つて、霞に鶴の摸樣のある、是もめれんすの涎掛で、疋田鹿子のちやん〳〵を上から整然と締めて居るのを、屈み身にしながら、黒目勝の圓な眼をいとゞ圓にして、林檎のやうな頰を脹らして居る、「阿父ちやん、おかめ、おかめ書いとくんな。」

世間の子と同じやうに、瑶もまたおかめとひよつとこが大好なので。父が書見でもして居るか、起稿でもして居ると、さも氣の毒さうな、而して書いて貰ひたさうに、遠慮して我が顔を窺ひ〳〵「おかめ、書いて、おくんな」と妙に節を付けて唄の樣に言ふのが例で。此時もまづ默つて居ると、「おかめ書いて、おくんのう。」

豫期した通りの節廻しで、而かもその言葉の終が、いつもと違つて、「おくんのう」と響いたので見ると、瑶は

小鼻を怒らして、小さな口を無理に尖らして、下眼遣ひにその顔を見せて居る。
「おや、何です、其の顔は？」と瑶は頷いて「えゝ。ひよつとこ見たいだねえ。」「おかめ見たいだねえ。」と、かう應じるのは、いつも合言葉のやうになつて居る瑶は何思ひけん、一層乘しかゝつて、硯箱の筆を獲やうとする。
「是はいけない。阿父ちやんが書いて上げます。」
「阿父ちやん、書いて下ちゆッて？」乘し懸るのを止めて、覗き込む。
「あゝ、書いて上げますとも。」
「おかめ書いとくんな、ひよつとこ書いとくんな、お團子書いとくんな、鯛魚書いとくんな、猫にや書いとくんな、鬼書いとくんな。」
我が紙に筆を執る間も、よく饒舌つて、樣々の畫を書いてくれと言ふ。怪しげな運筆で、おかめや、團子や、鯛を書くと、「阿父ちやん、上手だねえ。」とお世辭まで使つて、「今度、お瑶ちやん書いとくんな。」と即ち自分の似顔をといふ注文で、此方も馴れて居ながら彌怪しく畫けば、
「今度、えゝと……。」と考へて、「自轉車書いとくんな。」と段々むづかしくなる。「自轉車はこの畫師は出來ないつさ。」
「出來ない……？」と妙な顏をして、「出來ない、自轉車……？」
「あゝ出來ないよ。」と言ふと瑶は、「自轉車、怖い〳〵〳〵。」と肩を聳やかして首を縮め、幽靈のやうな手をして、さも〳〵恐ろしがる。是は過ぎし秋の頃、我家の老婆と共に町中で、避くる間もなく自轉車家に突懸けられたのを、半年近く過ぎた今以つて覺えて居る。

「瑤の注文は皆むづかしくつていけないから、今度、いつもの象を書いてやらう。ね、それが可からう。」
一筆書で象形文字宜しくと言ふ象を書くと、先方はそれでも大滿足。動物の内でも象を最も好む所から。「象だ
象だ、象だわ。」
頗る早口に言つて、又首を縮めて肩を聳やかす。但し是は嬉しい時も恐ろしい時も共通の動作で、兩足は頻に
蹈らす。「阿父ちやん。」と改めて呼ぶので、「何です。」と言ふと「象見に行きまちよか。」
「何…………？」と眉を顰むれば、「象見に…………行きまちよねえ。」と又語尾は例の如く口早に。我は少し閉
口して、「何所へさ。」「觀音ちやまへ。」「觀音ちやまへ？」「えゝ。」と獨り承知して居る樣。
「鳩ぽつぽに豆やつて、鳩ぽつぽ、ぱた〳〵やつて飛ぶは。」「さうかい。」「行きまちよねえ。」
かの圓な眼か物を言つて、小首を傾けつゝさも〳〵行きたさう。「なら、觀音ちやまへ、行きませうか。」
「えゝ。」と頷く顏は赤らむかと思はるゝ程に、喜ばしさの色見えて。かの足を蹈らすと見ると、いつか机の角
を廻つて來て、「ちやわ、行きまちよ。」
矢庭に抱き付くので、少し後へ引かれつゝ。
「此の衣服ぢやいけない。瑤も着更へて、奇麗なお衣服にして、阿父ちやんも着直すから、ね。」
「うゝむ…………。」と少し拗ねるのを、「さあ、着て行きませう。誰か、瑤に花の着いた、袂のある衣服を着
せておくれ。」と高く呼べば、「袂のある衣服？」
女の兒だけに洒落で、袂のある衣服を好むからに、それと聞いてかの姨の出入へ飛んで行く。
彌出懸ける事になつて、瑤は好な『御所車』のお衣服をと言ふのを、汚れて居る所から、他の菊の模樣のに、
緋に牡丹を大きく拔いた袖無しの被風を着せて、帽子はちよく〳〵の毛糸のを。
抱いて門口に出ると、「行つて參ります言はないの？」「行つて參る。」と横柄なもので。

「へい、行つて入らつしやい、お土産を澤山ね。」と送つて出た家内の者に、瑤の諭すやうは、「大人つくちて待つて入つちやいよ。」

「があ〳〵へ乘つて行きますが、ぎつて〳〵へ乘つて行きますか、何方？」と瑤を抱いて兩國の廣小路に立てば、「ぎつて〳〵が可の。」「宜しい。」と直ちに大川汽船、新柳橋の波止場に立つて舟を待つ間に、早くも瑤の目に止まつたのは、「小つちやな鳥が居るは。」

日向に向いて瓢形の鳥籠の中に、カナリヤの雙が囀つて居る。

「ひよつとこ見たいだねえ。」と何を見てかと思へば、鳥の嘴の尖つたのを見て然言ふ。かくてある中に舟の着けば乘り移る。

玉のやうな日南に、雲もなく風もなく、さては波も靜なる舟の中、些の搖ぎもなし。

「ぎつて〳〵へ、乘りまちよねえ。ぎつて〳〵へ乘りまちよねえ。」「あゝ、もう乘つて居るんですよ。」「うゝひ、ぎつて〳〵へ乘るの。」「乘つて居るんだよ。」「彼方のぎつて〳〵へ。」「そんな勝手な事が出來ますか。」

同じ乘組の人の笑ふ。あまりに船の穩かに行くぞ、乘らでありと思ふ幼き瑤は、彼方へ走る船を指して乘りたしとせがむ。

「白い鳥、白い鳥、見たまへ、瑤。」と父の指す方に三つ四つ二つの鴎飛ぶ。

「鳥が居た。」「鳥ぢやないよ、あれは白い鳥。」「白い鳥？」それも可なりと、「あゝ、白い鳥だよ。勘定をして御覽。」

瑤は危げの指しにて、「一二、三四、五つ六、七八——八つ居たわ。」「噓ですよ。今三つしか飛んで居ないぢやないか。」「八つ居たわ。」を繰返す。

傍の人の笑ふも宜なり。朝々散歩に出づる濱町河岸に、青物を運び來る荷駄馬を數へて、八匹になつた時を記臆し居て、何事の數にも八つと。「よくお口が廻りますでござんすねえ。お幾つ？お四つですか。」「い丶え、まだ滿三つにもなりません。」「おや〳〵、まあ。」と隣席の三十格好の女房の驚く顏を、瑤は又驚いた顏をして見て居る。

「へい、吾妻橋お下り。」「さあ觀音ちやまへ來ましたよ。」

上陸の後、雷門の前に、便宜上草履を調へて、仲見世を歩かす事にする。子自慢も嗚呼がましけれど、我が家にはいつ積もるとはなく、大柳合李に山ほどの玩具に飽きて、人の子の背に反りて强請むを聽かず、この兩側にある數多き店を知らぬ顏にすた〳〵行く。

「お仁王様見まちよねえ。」觀音様へ來れば、第一に仁王尊を拜して、小兵の体に力瘤入れて目を見張り、「お仁王ちやま、かうやつて。」

第二鳩の豆、第三花屋張の象、第四梅園のお汁粉といふのが例になつて居て、淺草寺前米と豆賣る露店の下に早くも瑤を見知れるが如く、寄り來る鳩の十數。

「鳩や、鳩や、豆上げまちよねえ。」と餌を投ぐるに連れて喰ふ鳥の、翼叩きするもあり、啄むもあり、舞ふもあり、這ふもあり、敷石も見えぬまでに群りて喰ふを見惚れて餘念なく。

「ちやあ、お二階へ行きまちよ。」と觀音堂の階段を上るを二階と心得て、菩薩の御前に立てば、瑤は涎掛けの中より賽錢を取出す眞似をして、放る眞似をして、さて小さき手を合せて丁寧に額きつ丶、「瑤ちやん、とうとよ、怪我致ちまちえんやうに、お願え………。」

數度び額きて、「ちやあ行きまちよ。」

賓頭盧尊者の前は無論の事、大提灯の下、さては奉納の雪のやうな鷄が遊んで居れば、是にまで丁寧にお辭義をして行く。昇降は抱いて遣つて、いつもうるさく勸める寫眞屋の前を出れば、正面こそは目差す花屋敷。

「象、象、象が居たわ。」

久しぶりで肩を聳やかして、釣下るやうにして右手を延ばして指すのは、門前に高く揭ぐる大象の繪看板。

「入りますか。」「え丶。」と頷き、「象は、何て言ひます。」いつも親達が言ふのを其儘の自問自答で、

「ねえ、象は……じやう、じやう、ねえ阿父ちやん。」「わ丶〳〵、じやう〳〵つて言ひますよ。」

切符を買つて入れば取付の細工人形は毀されて、四邊の荒びた中に、鐵柵を巡る黒熊。

「あれ、何です。」「え丶、熊、大きいな熊！」大きなに出來るだけの力を入れて。

「おや、おや、何か聞こえるよ。」

「え丶、何でちよ。何か鳴つてるよ。」「彼所ですよ。」

指して敎へるのは、一構への内にある自働洋琴で、寸時の間聞惚れて居たが、

「ちやわ、行きまちよ。」すた〳〵と行く。

似顔の人形ものは怖いと言つて過ぎれば、一段高くなつた木橋に沿うて一群の、「阿父ちやん、大變な鴛鴦よ。」と袖を牽いて敎へるので。「ねえ、居たでちよ。」「わ丶、居ますね。」「鴛鴦何て鳴きます。」おち、どりいつて鳴くのね。」例の自問自答ながら、圓い眼をぱち付かせて言ふので。何にせよ、幼き瑶に從へば、馬がうまと嘶き、虎がとらと吼ゆるとの事。寸時土橋の欄に凭つて、鶴と鴛鴦を見て居たが、軈て視線を轉ずれば、遙の正面に當花屋敷の太夫元。「象が居たわ……………。」と雀躍してその方へと走る。

動物の中でも瑶の最も喜ぶのは象で、鼻がぶらんて〱して、ビスケツトを頂戴と言ひ、大きな喇叭を「どうかかうか、喰ふ」と吹くといふ事。

大人は僅に手を持たす杉丸太の横木にも、なほ足らぬ瑶はその下から覗いて、この巨大なる太夫元の藝頭を、驚きも怖がりもせずに、つい傍で見る。

虎は暇と見えてぐつたり寐て居る。牡鹿は柵から首だけを出して居る。三つで一錢の薩摩芋を差した竹の棒を、持添へて猿に遣ると、喰べる猿よりも當人の嬉しがり方。殊に出口に近く長い高い棒の先へ上る彼等を見ては數分は口を明いて眺めて居る。

花屋敷を出てから抱いて、水族館の鯛魚を見るといふ約束ながら、かの暗黒の中へ入るのは、懸け違つて今日が初手なので、既に入口の前の海驢の繪看板を見て、否だと言ふ。「それなら、何の見世物が可の？」「えゝ。えゝと……瑶ちやんねえ、お汁粉が可の。」「おや、お汁粉！」驚けば、「えゝ、お汁粉………。」「行きませう、〱。」

いつもは梅園へと行くを、今日は變へて松村へと誘ふ。

松村に入つても大人しく箸を取つて、「瑶のお土産」と稱して、磯邊卷なるものを少しばかり誂へる。此間瑶は上り端の薄縁に、陶製の鉦が打つてあるのを仔細に見ては、捨てゝあるものと思つて、屢々摘まんで、取れない所から、

「焦れつたいねえ。」と誰の言ふのを聞覺えてか、そんな事を叫ぶ。傍に居た女中達が、それと聞いて大笑ひ。瑶はそれが少し不平で、

「笑ふんぢやないよ。」と一層てまちやくれた事を言ふので又笑はれる。

お待遠様のお誂へが出來て、是を半巾へ包めば、「背負つて、〳〵。」と言ふ。乃ち此の風呂敷包を、斜に肩に懸けて背負はせれば、「背負つた、背負つたい。」

我が腕の上で大喜び。仲見世では望に任せて、ひよつとことお龜とが、裏表になつて居る笛を買つて遣れば、後生大事と之を持つて、時々ぴい〳〵と鳴らしては、「おや、何てつたい、ぴい、ぴいつて言ひまつたねえ。」雷門の前に出れば、烟草の看板の勸進帳と、金太郎とを指して、例の『ひよつとこ見たやうな』顏をして見せる。

「があ〳〵へ乘りますか、ぎつこ〳〵へ乘りますか。」「えゝ、ぎつこ〳〵へ乘るの。」

よく〳〵船が好で、再び滊船に乘れば、短き日の西に傾き、水面に薄墨の影宿るに引更へて、東天に明瞭と十一日の月。

「月ちやんが居まづたよ、阿父ちやん。」

窓から遙に窺つて、頰に手を合せて拜みつゝ、月ちやん幾ちゆ、しまちよか。」「わゝ、なさいよ。」

「えゝ。」後から押へる儘に、窓に兩肱をかけて、「月ちやん幾ちゆ、十三七ちゆ、まだ年や若いな、あの子を產んで、この子を產んで……皆舂めて仕い舞つた………。猫わにや見たいだねえ。」人の言ふ事を先へ言つてそれからは不斷に唱ふ。君が代に、向島花盛、籠め〳〵、

「何の花開いた、天狗の鼻開いた……。」

往の如く船中を笑はす內、早くも兩國に着く。

瑤は今まで全く忘れて居た『おつぱい』の事を、茲に初めて思ひ起して、早く上れよと父にかぢり附くので。

「お土產持つて、阿母ちやん、乳母ちやん行きまちよねえ……ぢやわ、行きまちよ。ぢやわ行きまちよ。」

腕の上で兎の如く跳ねる。(をはり)

鎌倉の旅

村松清蔭

夏のはじめ、好天氣にさそはれて、用事先より、新橋の停車場を目掛けて、鐵道馬車に乘り込みぬ。さて行く先きは、何所迄と定めん抔案じつゝ、遂に、藤澤迄の切符を買ひ取りたり。「汽笛一聲新橋を」と、小學校生徒らしき唱歌を、心の中に打ち歌ひつゝ、汽車の小窓より品川沖を見渡せば、海士の釣りするさま山國にのみ住へる、我等が眼には、いと珍らしく、又おもしろし。

木の枝を樹て廻はしたるあり。何をする所ぞと、とへば、海苔を採る所なりといふ。然らば、淺草海苔は此所より採るにかといへば、然なりといふ。海上より秋風そよ〳〵と吹き來て心地すが〳〵し。

ほどなく大森につきぬ。千畦の稻田風にうちなびきて青海原に波たつごとし。六郷川を打ち渡り、川崎に着きぬ。夫より神奈川の停車場につきて、彼方を見渡せば、高き丘に別莊あり、程なく横濱に着きぬ。大小の軍艦其所彼所に見ゆ。木の葉に似たる舟も交りて、いと賑はゝし。夫より程ケ谷につき、隧道をくゞり、間もなく、戸塚、大船を經て、藤澤に着きぬ。此所より下車し、江ノ島迄は何里なるやと、野らより歸り來る農婦にとへば、一里程なりといふ。車に乘らんと思ひて、車夫のすゝむるに、江ノ島迄何程と問へば、三十錢といふ。そはあまりといへば、二里ありますといふ十錢にせいといへば、いかぬといひて、木片で鼻をかみたる體をして取りあはず、さらば徒歩にてゆかんと手荷物さげて行く程に、片瀨川の端に出でぬ。乘合船と記したる旗立てゝ、其所なる小屋の舟子、我を待ち顏に、此方を眺め居たり、車より船は珍らし、假令乘船料は高くとも、乘らでやはと走りつきて、船に乘り

て川を下りぬ。船の下るまゝに、此方彼方を打ち眺むるに、辨慶のごとき色の蟹、穴より出でゝ横這ひに這ふさま、いとうとまし。彼所の名は何、此所の名は何と問ふも、いと面白し。松の茂れる方を指していひつるは、彼の松林の下に、龍口寺といふ寺あり。其の寺は昔、日蓮上人が刑に所せらるゝとき、既に御首を擬き落さんとて、刀を揮り上ぐるや、ばたりと折れて、え斬らずなりぬと、説き出せり。日蓮上人は何物の化身か聞かまほし。かゝるほどに、向ふに松の生ひたる島山見ゆ。何所と問へば、江ノ島なりといふ、心のみ走りてえ止めがたし。

江ノ島の景は、さながら墨がき繪に似たり。

　墨書の繪とも思はる江ノ島は
　　繪の島とてそいふべかりけれ

江ノ島の橋の手前にて、船より下り、直ちに橋に上れり。島へとつきぬ餘り廣からぬ町の兩側に、宿屋と貝細工賣る店、多く軒を並べたり。宿引ども群がり出でうるさく宿をすゝむるさまいやし。

さてゆきゆけば一茶店あり。此所にて靴を脱ぎて草履をはき、手荷物をあづけて、海邊に下り立ちて、辨才天の岩窟に入る。波の打ち寄せて怒號する所に假橋あり。此所の入口は、さまで狹からねど、假橋の終りたるあたりより、甚だせまく。且つ暗くして入ること能はず。燭をとりて案内するもの、我等を待ち顔なり。此所の岩の横に徑三四分位の穴あり。淸水湧出す。弘法大師の穿ち玉ひしものなりといふ。賽錢を投じて飲むなり。たゞにてはと思ひ、銅貨一枚、賽錢箱に投じて、二三盃かたむけ、急ぎて燭を手にとり、案内するものに誘はれて、行く程に、一人一燭にては、たゞ己れの足元のみ見ゆるのみにて、上より滴たる水のかゝるからに、燭のみならず我心さへ、消えんばかりなり數十間許行きて、辨才天の宮に至る。拜禮し終り、是より横窟に至る。奥に天照大神を祭る。途中に親鸞聖人寐姿の石あり。燭をかゝげて見しに、いかにと思はるゝばかりなり。總じて、此岩窟は、愚夫愚婦を迷はさんために、作爲したるものにて、所謂、神佛混交の

標本室なりき。

千早振神と佛を交へおきて

人のこゝろを迷はさんとは

江ノ島は貝細工に珍らしきもの多き所なり。國の苞にせんとて、そを賣る店に立ち寄りたり。僞物多きが中に、簪の見事なるがあり。貝玉の大きくして、光りわるなどはてりがに見ゆ。其の價を問へば一圓二十錢、あるは二圓等種々あり。買ひ取りたればとて、與ふべき人しなければえやみぬ。



靴革包等預けたる茶店に歸りぬ。榮螺の壺燒は、此所の名物なりといひて、若き女どもゆきゝの客を呼びとゞむ。我等にもとすゝむるに任せて、其の壺燒を命ず。味いと旨し。さて見るに殻には角あり。彼は此殻を以て、金城鐵壁と賴むならんに、今は其のまゝ燒かれて、人の食となる。賴みがたきは世の樣なりき。

殻をのみ楯とたのみしさゞえすら

たをやめの手にやかれぬるかな

此所の茶店の庭より、海原遠く開けて、富士山雲の絶間にほの見えたり。

何所より見てもかはらぬふじのねを
世わたる人のこゝろともがな

夫より鎌倉に向はんとて、もと來し、橋を渡らんとするとき、十四五歳の男の子出で來りて、御荷物をかつぎまゐらせんといふ折しも、何所のものか知らねど、二人連の旅人あり。鎌倉に同行せんといふ。共に〳〵荷物をかつがせて、海岸傳ひに導かれて行くに、彼の男の子、かゝる事を業とするならん。いとよくなれ居て、此處は七里ケ濱なりといふ。七里あるにかといへば、六町一里としてなりといふ。されば四十二町なるべし、此の七里ケ濱には、海水浴場あり。男子は遠く沖に泳ぎ出で、女子は岸のあたりに、板を抱きて泳ぐ杯見るからに、己れも着物を脱ぎて、とび入らんかと思ひ、帶ときはじめしかど、連の人々の迷惑を、惹き起さんも氣の毒なりと察して、え入らずなりぬ。かゝる事あるが、故に、己れ一人にて旅立せしものぞ、かく連の出來たる事こそ、殘念なれとつぶやきぬ。

打よする波の花貝うつせ貝
拾ふ人こそうらやましけれ

しばしゆく程に、人の山なすあり。走り寄りて見れば大なる魚一尾、今漁夫等に料理せられ居る處なり。如何なる魚ぞと問へば、ふくろうなりといふ。ふくろうとは木に棲む鳥の名ならずや。戯談はいはぬぞよきといへば、戯にはあらずといふ。總じて此の海には、かゝる大魚の捕獲あるは、いと珍らしき事なりとて、漁夫の子は、徒跣にてかけ來り、海水浴に來りし男女は帶ときさけて、走り來て見居たり。

袖ケ浦は、景行天皇四十年十月、御子日本武尊、東征の時、相模灘より上總に渡らんとし玉ひし時、龍神祟をなし、暴風吹き來て、舟覆らんとしければ、妃橘姬、投身して、尊の安らかに渡らせ玉はん事を、海神に祈り玉ひし時、橘姬の御片袖、此所に流れつきしかば、かく袖ケ浦と申すとかや。先年下總國、千葉に遊び、海岸を廻りあるきし時、何といふ處ぞと、とひし

に、袖ヶ浦といふ。いとやさしき名なりけりな、何か由緒ある所にかと尋ねしに、此の袖ヶ浦と、同じき事物語りたり、千葉にて袖ヶ浦を詠じて、袖を絞りし事杯、胸に浮び出でゝ、同じやうに涙ぐみぬ。

何所ぞととふもかなしな袖ヶ浦
　　つゝまれぬまで涙こぼるゝ

向ふの崎は何といふと、案内の者に問ふに、彼所は稲村ヶ崎と申す、昔、新田義貞が、鎌倉の北條氏を攻めんとするとき、黄金作りの太刀を、海に投じて、退潮を海神に祈りし所なりと、

異心をこめて祈りしいさをしは
　　のちの世長く朽ちせざりけり

稲村ヶ崎の手前より、大通りに出でたり。一茶店に憩ふ。軒端に掲げたる、名所案内なりき。龍口寺を見物せんと思ひしかど、此所より立ち戻らねばならぬ故、連のものうけかわす。いと殘念なりき。萬福寺の前に出でぬ。案内のもの曰ふ、此寺には腰越状を藏す。と又一本の松樹あり。是は日蓮上人袈裟掛けの松なりといふ。

坂下村に着し、鎌倉權五郎の宮に詣づ。いと神さびたり。社前に丸き石二ヶあり。袂石（十六貫目）手玉石（二十八貫目）といふ。其の昔、鎌倉權五郎が十六歳の時、奥州より力ためしにとて、持ち歸りしものにて手玉石は手掌に載せ、袂石は袂の中に入れて歸れりと人間の仕業とは思はれぬなり。

長谷觀音に詣づ。大和の長谷觀音と同材にて、楠の一本木を以て彫み奉りしと、總丈ヶ三尺三寸あり。暗室に安置す。小さき戸をわけて入り、大の蠟燭をともして、車仕掛にて釣り上ぐ。是は勿體なくもと、鎌倉說明に取りかゝる。勿體なくば、かゝる暗室に入れ奉りて、金を出さゞれば見せぬやうな事はせぬぞよきと、いはまほしかりしかど、えいはず。かくの如き大なる楠ありや否や疑はし。連なる男曰はく、かく暗室におき奉るには、楠の一本木にあらざるが故ならんと、出口の向ふに、楠の石と化したる手洗鉢あり、足利義滿の献納せしものとかいへり。

日暮れたれば旅亭に入りぬ。そもこの鎌倉とは、鎌を埋む倉といふ詞なり。其の濫觴は、昔、大織冠鎌足未だ鎌子と申しゝ比、宿願の事ましますにより、鹿島參詣の時、此由比ヶ里に宿し給ひける夜、靈夢を感じ、年來所持し給ひける鎌を、今の大藏の松ヶ岡に埋み給ひけるより、鎌倉郡といふ。然れば鎌倉は武備兵將の居なる者也。さて又此所の風水山嶺を按ずるに、今の鶴ヶ岡は大倉といふ山なり。西に高き山は武曲星の地に相當る。其の名を武山といふ。又西に山あり。武庫と號く龜谷の山也。是、則ち鎌倉中央第一の勝地也。茲を以て、大織冠の古を勘ふるに、此地鎌を埋み給ひて、後、天智天皇八年姓を改めて、藤原と賜はり、内大臣に任じて以降、代々の皇帝の執柄として、末代に至るまで、萬國を治め給ふ、鎭守府將軍源賴義相摸守にて下向せし時、土豪直方の婿（直方は鎌足の末裔なり）となり給ひて、八幡太郎義家出生せしかば、鎌倉を讓り給ひしより以來、源家相傳の地として治承五年、右幕下賴朝鶴ヶ岡に八幡宮を崇めたてまつる、又八幡菩薩は、應神天皇の垂跡として、神功皇后三韓征伐の時、胎内にして將軍の位を得しめ給ふ、誕生の砌に、天より八流の幡降下る。鎭護國家、武將擁護の神也。大織冠鎌を埋み給ひたる地は、今の上ノ宮の地なり。此を松ヶ岡と名づく、故に後の山を大臣山と云ふ。此地に本は、稻荷社ありしを、賴朝建久二年に、地主稻荷を西の方丸山に移して、八幡宮を此の所に勸請し給ふ。是の故に、上ノ宮を松ヶ岡の八幡宮と云ふ。鶴ヶ岡といふは、下の宮を云ふなり。萬葉集に、

薪こる鎌倉山のこたる木を
　松とかいはゝこひつゝやわらん

又藤の實方の歌に

かきくもりなどかおとせぬほとゝぎす
　鎌倉山にみちやまどへる

大納言公任の歌に

わすれ草かりつむばかりなりにけり
　跡もとゞめぬかまくらの山

慈鎮和尚のうたに

　ながめゆく心のいろぞふかゝらん

　　鎌倉山のはるの花園

兼恵法師のうたに

　都思ふ春の夢路もうちとけず

　　わな鎌倉の山のあらしや

大臣山を鎌倉山といふなり。源　順が和名抄に、鎌倉郡の内に、鎌倉の里あり。何れの地を云はんか分明ならず。大臣山を鎌倉といへば、雪の下を鎌倉の里といはんか。藤の實方の歌に

民もまたにぎはひにけり秋の田を

　かりてをさむる鎌倉の里

續古今鎌倉右大臣歌に

　宮柱ふとしき立てゝ萬代に

　　今ぞさかえん鎌倉の里

夫木集藤原基綱歌に

　昔にも立ちてそまされ民の戸の

　　煙にきはふかまくらの里

東路やあまた郡の其中に

　いかに鎌倉さかえそめけん

中務卿宗尊親王歌に

　十年あまり五年までも住み馴れて

　　なほわすられぬ鎌倉の里

とありき。又一説に、本社は伊豫守　源　頼義、勅を奉じて、安倍貞任征伐の時、舟祈の旨あつて、康平六年秋八月、潜かに石淸水を勸請し、瑞籬を當國由比郷に建つ。（今此を下の宮の舊跡といふなり）永保元年一月、陸奥守　源　義家、修覆を加ふ。其の後治承四年十月十二日、源　頼朝、祖宗を崇めしために、小林郷の北ノ山を奠して、宮廟を構へ、鶴岡(由比)の宮を、此所に遷し奉る。社領永樂錢八百四十貫文あり。毎年八月十五日放生會、同じく十六日流鏑馬、二月十一月の初の卯の日陪從、今に不絶なり。新拾遺集に

左兵衛督基氏の歌

　鶴が岡こだかきまつをふく風の

　　雲井にひゞく萬代の聲

夫木集、爲實朝臣の歌に

つるが岡わふぐつばさのたすけにて
　高きにうつれ宿のうぐひす

又、藤の爲相の歌に

山路より出でやきつる里ちかき
　鶴が岡邊になくほとゝぎす

法印尭惠が歌に

吹殘す春のかすみもおきつすに
　たてるや鶴が岡の松風

鶴が岡、總名を雪の下と云ふ。此所に旅店あり。法印尭惠が歌に、

春ふかきわとわはれなり苔の上の
　花に殘れる雪の下道

三所に石の鳥居あり。一の鳥居より間四町十五間半にして、二の鳥居あり。又間六町四十五間にして鳥居あり。是を大鳥居といふ。波打際まで五町あり。此濱邊東は飯島、西は靈山崎、其間二十三四町あり。由井の濱といふ。大鳥居兩柱の間、下にて六間半、高さ三丈一尺五寸、石柱めぐり一丈二尺五寸、笠石長さ八間あり。一二の鳥居、兩柱の間、下にて間四間、柱のめぐり四尺五寸、東西同じ、都て五所に鳥居あり。賴朝の時建立有つて、代々修覆あり。今の鳥居は、寛文八年戊申八月十五日、御再興とあり。三所の鳥居ともに如斯とあり。……

東天やゝ白みそめぬ。雀は例によつて千代々々と囀る聲、耳朶を打つ。手を叩きて下婢を呼び、朝飯濟まして、社務所に行かんものをと、一の鳥居を入る、太鼓橋あり。太鼓を二つ切にしたる形なり社地廣大にして太鼓橋の右側に蓮池あり。蓮花今をさかりと咲きいでぬゆき〳〵て石階に至る。此の石階の左側に銀杏の大樹あり。是なむ公曉が隱れ居て、實朝を弑したる所なり、此の樹を一廻はりして打ち眺め、二廻はりして打ち眺め、遂に三廻はりして、其の大なるに驚きぬ。朱塗の門を入りて、社務所につき、祠官に面會をもとむ。先頃、他へ轉任せられたりと聞きて落膽せり。遂に十錢を投じて、寶物陳列場に入りぬ。武器數百點、

金銀の作りにて、人目を眩せしむ。中に楠正成の幅物あり。其の歌、

春曙

けしきたつ雲の一すぢひきすて丶
　霞にのこる春のあけぼの

秋夕

うそぶける言の葉草になぐさむは
　秋の夕のながめなりけり

其所彼所と注意して見るに、殿宇壯麗美觀を盡せり。眞に征夷大將軍源頼朝公の當時を追想せらる。夫より公の墓に詣づ。大倉山にあり。玉垣をめぐらしたる中に、五輪塔をすゑたり。いとさ丶やかなり。東京なる青山の墓地を見たる人の眼には、征夷大將軍源頼朝公の、み墓とは見えぬなり。

苔むせるみ墓のあたり來て見れば
　まつの小枝にひぐらしのなく

島津忠久の墓は、其の右の方なる石窟にあり。折々手入したるものと見ゆ。薩州の島津公の先祖なればなるべし。其の隣に、大江廣元の墓あり。忠久のと同じ。長州の毛利公は、廣元の流裔なれば、是も折々手入したるものと思はれて、荒廢のさま見えざりき。

鎌倉宮に詣づ。大塔宮護良親王を祭れり。別格官幣中社に列す。明治二年の創建にか丶る。此所は一面に畑なりしを、今の如く社地を作りて、宮を建てたるなりと、いと勿體なき次第なりかしな。か丶る大業をし玉ひし宮の、明治二年まで祭らざりしとは、社後の山腹に土窟あり。是なむ大塔宮が、足利直義のために、幽閉せられ玉ひし所なり。歷史を按ずるに、足利尊氏宮の威名を忌み、三位局と共に、誣罔構陷し、御謀反の由を奏せしかば、父帝察し玉ふに暇あらず、執へて鎌倉に流し玉ふ、尊氏の弟直義、土の牢を二階堂谷に鑿りて、幽閉し奉り、淵邊義博をして弑し奉る。實に建武二年七月二十三日也。御齢二十八」。と此の土牢直下するに、梯子を以てし、下に八疊敷位の室ありといへと、鍵かけありて入るを許さず。宮の弑せられ玉ひしや、義博御首を持ちて、主人の許に行かんとせしが

宮の怒眼生けるが如きを見奉り、大に恐れをなし、御首をば、傍なる藪の中に捨てゝ、逃げ去りしを、某の僧都耳に入れ、鎌倉勢の手にはかけ奉らせじとて、泣く〳〵御首を持ち歸り、理智光寺山の頂に、葬りたりといふ。わたらしき事なり。御墓の後に、一本の松あり。昔ながらの色もて、更に操をかへず、仕へまつるもいとまめ〳〵し。

　芦原や芦間の蟹の横にはふ
　　わさましき世のかゝるべしとは

滑川に至る。上流は胡桃川といひ、淨妙寺前を、西に流るゝ所を滑川といふ。其の下の流れを坐禪川といふ文覺上人此に居て、坐禪せしが故にしかいふ。藤綱夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋の中に入れてもたる錢を、十文取りはづして、此の滑川に落したるが、其を拾はんために、人夫を雇うて、五十錢を費したりと、今より見れば愚の至りといふべし。

諸所見物し終り、人車を雇うて、稻瀨川なる某氏の別莊に至り、引き返して停車場に至り、横須賀に至る。

此所の停車場は、軍艦の碇泊せる所にあり。下車して港内を見渡すに、日清戰爭の時、分捕りし靖遠、鎮遠の二艘繫留せり。其他稽古に使用する擬軍艦、或は水雷艇、其他、小舟數を知らず。水兵の小舟に乘りて行きかふさまも見ゆ。軍艦の内部を見て來よとて、添書貰ひて持ち來りしを、いづこへか失ひて、更に見えず。幸にして、軍艦を說明し與れたる、親切なるものあり。

横須賀なる米ケ濱は、昔、日蓮上人が、上總より來たまひて、此の濱に着き、上陸の際、上人を背負ひし舟子、榮螺の角を踏みて、足を傷けり、上人、哀れの事よとて、榮螺にいひけらく、榮螺よ、此の濱に棲むとも、爾來角あらしむる勿れとのたまひしによりて、此の濱に棲む榮螺には、今に至りて角なしといふ。

横須賀より馬車にて、浦賀に行きたり。此の港に佛國の軍艦一艘、修繕のため繫留せり、久里濱は、ペルリの黑船を寄せし所、去春五十年に相當するを以て、紀念建碑式を擧行せりとぞ。

浦賀より馬車にて、横須賀に歸り、午後六時五分發の滊船にて横濱に向ひぬ。船に乘ることの珍らしければ彼方此方を打ち眺むるうちに北の方に富士山を認めたり、夕陽沒せんとして、赤色の雲靆き、群山皆富士に向つて、平伏するが如く見ゆ。

こと山はみなふもとにて白雲の
　上にひいでしふじの神山

日全く落ちて、横濱港に近くや、電氣燈其他種々の燈火きらめきて、夜景又なくさかんなり。

數しらぬ燈ちかく見えそめて
　はや横濱とき〻ぞうれしき

滊船より下りて、某旅亭に投じ、市中を見物し、寢に就けり、翌朝、海岸を辿りて見れば、滊船より見たる夜景より下る事數等、されと大厦高樓の櫛比せるさまは、昨夜遠く海上より見たる夜目には、知られざりしを、今目の當り見て、活氣を帶びたる市塲の光景、行末の繁盛、推しはかられたり。夕つ方東京に歸りぬ。

（完）

にごり水

音羽の瀧

白魚女史

近きほとりに、音羽の瀧の音に聞えたるがあり。掬ぶ心の在しなば、いつとても御供仕つるべしと人の云ふ。音羽の瀧、嬉しや音羽の瀧、掬ばまほしや、行きて塵を拂はまほしや、すぐに母と嫂とを促し、泊り居りたる姉の子二人を伴ひて案内されぬ。人は勿體つけんとてや、態々細き小路の、泥濘たる、凸凹の坂を、遠く廻りて下りさす、宛ら深山を分けたる心地したるもをかし。

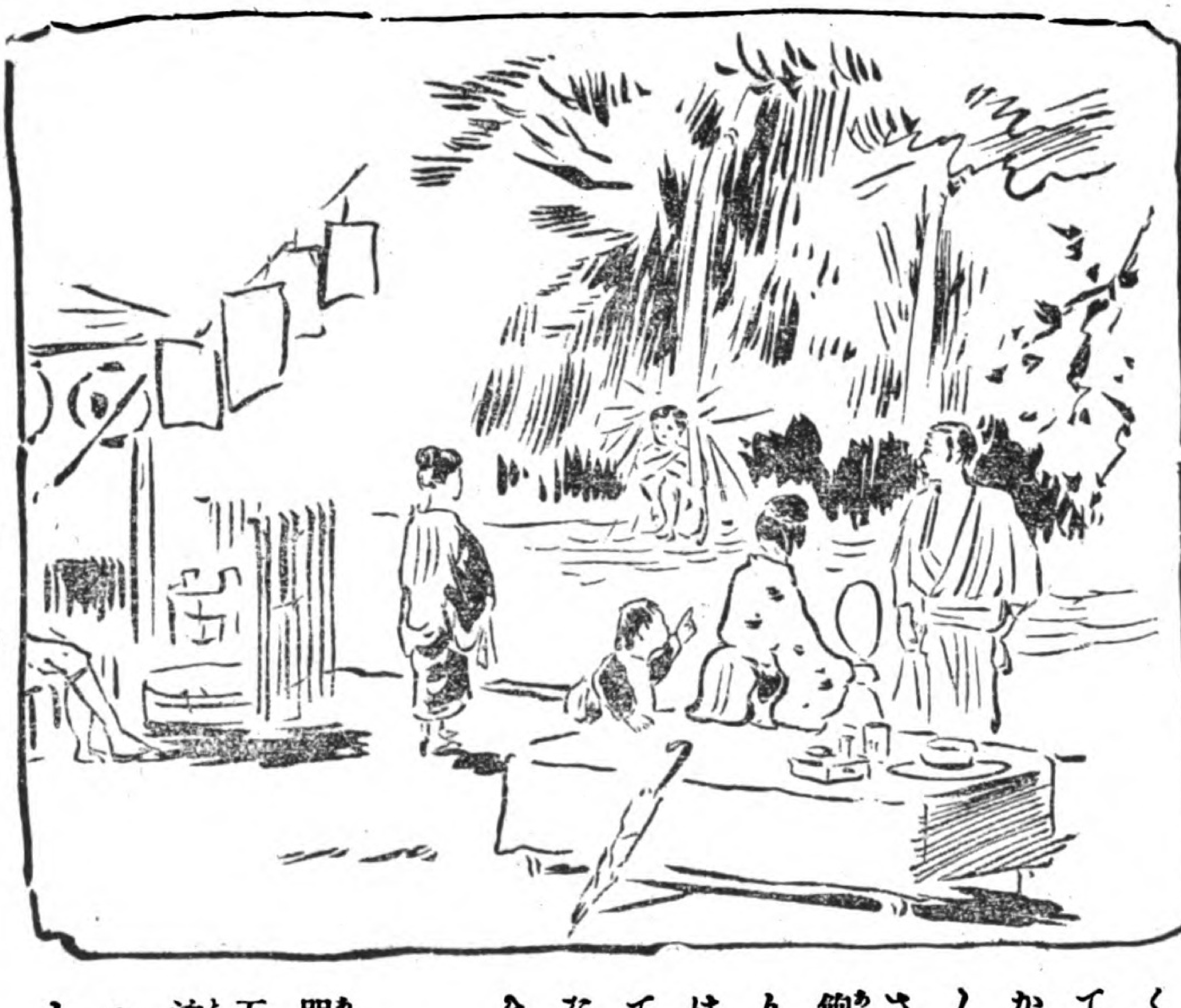
暖簾を潛るより早く、お世辭よき女の、迎への山の上に案内したり。取付の茶亭に腰を下ろさんとしたれば其所は、町の穢なき所の見ゆれば、此方へかけ玉へとて、隣りの席に移されぬ。其の前には便所のありて、目につくも憎ければ、風のまに〳〵怪しき匂ひをさへ

送り來るよ。よき御馳走かな。兎角己れが臭き所は、鼻に入らぬよとをかし。

御家來さん、御主人樣が瀧をお召になりますと、女の呼ぶ聲」如何なるお大名の渡らせ玉ふかと、思はず、其の人を見かへれば、四十格好の肥りたる男の、暑苦しく裝はせたる娘二人を伴れたり。御家來さんとは、挽き來たれる車夫を云ひしなり。女にもの云ふさま非常に傲慢に、痛く大盡めかしぬれど、そのさま、何となく下等にて、紳士らしくも、紳商らしくもあらねばまた田舍大盡とも見えず。元より學問教育のあるべき人とも見えねば、職人の肌なれど、宵越しの錢は使はぬといふ風にもあらず。大言を吐くに似ぬ、吝たれの如く、若や受負師の下に使はるゝものか、職工のお頭さんには非ずやなど思はる。かやうの人、上の人には頭をぴよこ〳〵下げながら、かやうの所に、横柄なるべしと思はれぬ。愛想よき女は、何も笑顔に取持て、孃樣は大學校に行かせ玉ふとな、それは結構なるよ、お太抵にはあらすなど煽て立てぬ。お大抵にあらすと云ふ言葉、我れならば省ぶき貰ひたきよ。大學校には、あの樣の子は遂に見し事なしと、此處に大學をよく知りたる人の怪げにしたり。やがて、御家來さんを呼び寄せ、酒一本許玉はりて、今日の勘定は安く願ふよと云ふを肴。宜しう御座います、歸りまして、親方によく申しませうと答へたるに、さりとは、お抱のにはなく、今日許の御家來さんなりしよと聞きとられぬ。同行にや、誰れならん、職工げの人の肩に縋りて、下り行く樣、宛ら、一力の舞臺の上ばかりの由良之助の見えなりしよ。大學校の生徒の父、何となく、ちぐはぐに見受られたり。餘り横柄に、大きなる事を云ひたるは、法螺の貝を吹き立し如くに思はれ、聞き苦しく、見苦しく、異側地位ある人は、自からにそれと知らるゝものなるを。かうやうの人、何れ、何かの、成上り者なるべしなど、中々に品格劣りて、想像せられぬるよ。

音羽の瀧、淸水にあらで、濁水なり。かくては暑さも洗へじ。日來は、十二社の瀧を、池水と濁りて見なし

つれと、これにははるかにまさりぬ。これは中々に汚れをつくるよなど、心の儘に云ひ下せば、然らば一日參らんと云ふ。明日は如何になど云ふ。何時にても參らん、妾は早きを願ふもの、案內はいつにても申すべし。まこと、それは此處らの比にはあらずよと、僅か一二度行きたるのみなるをかやうに知り顏に誇れば前の人によく似たる哉と心竊に可笑し。此の瀧への案內ついでにとて、下駄屋、小間物屋抔の、宜しき店を知りたりと聞



く儘に、なほ案內たのみて、音羽町九丁を、わりかせたるぞ面白き。返す〲、今日は洗はれぬ暑さ、煮沸りますよなど、飽迄云ひ落しぬるも、餘りに氣の毒なりや。さるは、後の妾が案內、比べて、飽迄誇りやらんとてなり。我れながら人わろき事よ。

山海の珍味

明日にもと云ひしまゝ、五六日を經たり。我れに泊客ありたり。此の客への待遇方々、とく案內して、誇りやらはやと思

ひ、人をして誘へば、今日は行かれず、明日にと云ふこれは、紺屋にはなくて、いつも明日なるよなど、惡口きゝつゝ、明日自ら行きて誘へば、友とち來りをりて、何となく迷惑げなり。今日が日まで、空しく待せおきて、徒に、水になし玉ひそ。人の來玉ふは。愈々幸、其の君達をも伴れ玉へなど、强ひて承引かせぬ。然らば暫く待ち玉へとて、皆々して何處へか出で行きて、二時間許を一人またせぬ。あな口惜し、思ひがけず留守番をさせられしよ。此の報いに花を一輪と、摘みぬれば、中々、花盜人を守らせおきたり。彼方にも拔目なければ、此方にも拔目はなきよ。

正午近くなりて歸りぬ。食事をものし玉はゞ、早く來玉へとて、まづ歸りて、母と嫂とを促せば、今日は行かぬと云ふ。いと悲しくなりて泣きぬ。愚や、然らば行かんと云はるれど、心進まぬ人を伴れ立んはうるさし、止まりてよとて、なほ泣き伏したる折から、誘ひし人々も來りぬ。心結ぼれて、うるさくて、物も云はず居りしに、彼方は、もと心すゝまでありしが、嫌ならば止むべしと云ふ。いやのものが、今朝より誘ひて午後を待ものかは、己れいやならば、いやとの玉へ、とかく、己が心を包む人心のうるさくなりて、最早行く事もうるさくなりぬ。止めん、止まらん、いやになりぬ。明日心を回復して、人と二人たづさはらんと、昔のやんちやん心、我れながら失せやらでか、人にだゝを揑ると云はれぬ。親馬鹿の母君、さ云はでよなどとやかく氣をもまるれば、嫂君も共に行かんとの玉ふ。扨は、兄君までが、何やら行かんとし玉ふ。俄かに嬉しくなりて、是非に連てと云ひて、遂に同勢十人の女連、中に兄君一人加はりて行かせ玉ふも、よく〱のおん情、いつに始ぬ事と、身に泌みて嬉しかりしよ。凍るまで水をわびたり。此の池に、月を浮べなば、如何に涼しからん、來て見まはしや、之れより度々、一人も來んなど、迷惑げなりし人の、いと心地よげに讃めそやしぬ。そや見玉へ、禍も三年たゝで、かゝる涼しき思ひ、心地よき地に來りたる、誰が爲か、剩さず禮をものし玉へと、思ふさま、誇られたるぞよき心

地。

日暮れて家に歸りぬ。尙、迷惑げなりし人を引きつれてこそ來りたれ。干物の燒きたるに粗飯を此處ら金山の珍味と厚くもてなしぬ。兄上は、ひとり聖を汲ませ玉ひつゝ、我が家は、妹も珍もの、我れも變もの、此の妹は、仕方のない人間、散々親の膝下に甘へ、また我れに甘へ、世間と云ふものを少しも見ざる、不分やの、困まり者よなどと、譏らるゝ口惜しさ。否、中々世間知らずには侍らず、行路の難は、よく知れるものをと云へば、空嘯ぶきて、聖の味ひのみ 聞こしめすも憎らし。

よきよ、行路の難、我れよく知りをりぬ、知りをりね。今日、兄君の伴れ玉はずば、よしや行くとも氣象の瀧かう暑さは洗はれざりしならんと思ふ程に、よく悟られてをるものをと、一人心に呟きぬ。

貴婦人

今日も亦殘暑烈しからん、一日を瀧に襲せばやとて、朝疾くより飛鳥の邊の瀧に至りぬ。まだ浴客一人もなく、よき折と人々浴びぬ。さのみ見苦しとも思はざりしは、家の人のゆゑなるか、山の上の特別の座敷を借受けて、息ふ程に、漸々あつくなり來りぬれば、浴客もいつかあつまり來ぬ。書生づれあり、職人づれあり女づれあり、夫婦づれあり、二百人も集りたるべし。客種の餘りによからぬは、我れ等を上のお客ともてなすにても知らる。廿歳は越えつらんとおぼしげの、品よき婦人の、痛う美しきと、十八九の、これも品あしからぬ、賢げなる書生風の男と、二人つれだち來りて下を見おろして、瀧を見まほしくしたれと、進みかねて、佇みたるに、品も高く見えぬ。顏も美しく、姿も貴く、あはれ、つれだつ人柄にて、天晴、貴孃とも、貴夫人とも見ゆるものを。あれは、何でせうと、伴れなる人の問ふ如く、人も皆怪しき視線を彼方に集めたり。されど、人品よき女の、衣裝髮容も賤しからぬ作りざま。男も純粹の書生、墮落したりとも見えず。何か、女子にもの云ふさま、遠慮ありげなるは、弟にもあ

らざるか、從弟どちか、準從弟なるか。いづれ、親を離れて、修業中の故郷人どちが、今日此處にさすらひてのすさびなるべし。山の下にも來らざりしは、人の集りたるを、恥かしうしてのまだ世なれぬ心ならんか。そゞろ氣の毒に覺えたれば、構へて見ぬやうにするを何者でせうと、なほあやしく人を見まはす。何者とも見えず、我れには純粹の故郷人どち、怪しう見ては、人も、さばかり、羞かしからんなと思ひやれば、蝙蝠傘に顏を隱しをるも、誠に氣の毒なり。何はあれ、若きどち、瓜田にくつを入れぬが善よと思はる。

男女の區別も今は入り亂れて、見苦しく覺えられたを五十路も半ば過ぎたらんと思しき夫婦の、軈て水浴に入りたり。夫が妻に打せんとて、手を曳て、瀧の下に伴れ行くに、水に恐れてや、きゝと大聲をたてゝ、逃ぐるさま、さながら狂人の如し。あはれや、あれは、妻の發狂せしを、介抱して此の瀧につれ來にたるか。さりても狂人のすべなさよ。此の人ごみに見ぐるしき聲、みぐるしきさま、夫は如何なる面目にか覺えんと思ひやらる。いつしか水に馴れてや、頭、肩等をや、暫くうたせ、やがて夫の手にすがりて出で來り、ぐたりとしたるさまにて、夫と手を交して、動氣をうたせ居るさま、宛然、色慾の發狂人と見られて、愴悽じう覺えたるを、後に見れば、狂人にはあらざりしなり。やがて、夫婦とも、素裸のまゝ、枝豆菓子などを手でみに持ちゆき、歩き廻して、酒酌交し居る樣、夢想兵衛にものしたる色慾國の畫のさまに、年をさへ加へて見られぬ。狂人ならぬと知りて、いよ〳〵すさまじく覺えられぬ。

係る所に、醉ひて歌ふあり、詩を吟ずるあり、空瓶を叩きて、調子をとるあり、がけの上をはひありきて、これは石の不動かとなづるあり。枝豆のからを供へて三拜などとす。不動誠に動せざると、我はをかしくてひとり笑ひをりぬ。

ハイカラを着たる、いやに氣どりたる書生、狆などつれ來りて、菓子をとらせなとし、白き服をつけたり、脱ぎたりして、いやに貴公子振をりしが、赤き褌した

るに、品格劣りて見受られぬ。何處の學校の生徒か、知らまほしと思ひ、人悪けれど、帽子の章を、そつと人して見せしめたれど、分からざりしよ。何處に行くも、かやうの見え坊を、必ず見受るよ。

己が田に水を引くにはわらねど、女の打れたるは、さやうにざま悪くしなさねど、男の打れ態は、餘りに不作法にて、宛ら動物を見る心地して、片腹痛く、此處ら汗を握りて、忍びて見て居りしよ。

人の噂

丑の年に生まるゝ者は、目上の者を衝殺すとぞ。此度の孫は、我が家に養ふべからずと、祖母の達ての御意に付かれず、是非なく里に出だしたりと云ふ家を、去年見たり。勿論、主人は養子にて、祖母の娘は、子一人を殘しおきて、他の男と不埒して家を逃げ、此度新に迎へたる嫁の子なりと聞きぬ。

先妻の生みたる娘、十七になれるが、怪しき病に罹りぬ。知らぬ人は我が子と見るべし、かやうの血統わりと見られなば、我が子の行末にも懸るべければ、人知れず、引取り玉ひてよと、お心よしの弟に、厄介ものを背負はせんとする後妻を、今年聞きたり。揃ひも揃ひたるよき對幅、繼母のかげものなるよ。

松虫の聲、誰れをまつにかと喚かされて家近く徜徉ひ出でたり。何處よりか人の音す。大きなる聲す。それで、僕は御亭主を辭したいのだ。教員の辭職、官員の辭職はわるが、御亭主の辭職は、古來まれだらう。辭職書はどう書くかね、有たらばと思ふけれど、まだないのだ。それで僕も困るのさと、呵々と笑ふ聲、山彦の響く許なり。

僕には親が三人さ、女房が二人半さ。然し、男は七人半迄はよいと云へば、まだ五人は持てるのさと、つゞくる語り草、餘にをかしければ、聞かまほしくて、少しうしろに從へば、彼方は酒の所爲か、千鳥足の進步鈍く、聲のみ大きく振立つれば、聞くにはよき都合。僕は貧乏の田舍學士さ、養父は陸軍の高等官さ、親の仰せで、親の身分に相應した所から、前の妻君は貰つ

ただろう。さうすると、僕の實母と衝突する。彼方でも八釜しく、此方でも不平、兩方から僕は不平せめさ。是非なく親の權利にまけて、里に預けておくうちに、肺病になつて死んだ。僕はそれで、毎月療治の代をやり、死んでからも、葬式料百圓をやつたのだ。實母はそれも鼻垂しだと云ふのだ。

それから今度の女房は、養父母の御厄介にならず、實母と相談して、此方でもらつた。すると、今度もまた衝突するではないか。母はさ、母は曰く、僕を鼻の下が長いとの玉ふのさ。女房曰くさ、貴方がお母さんをあまり大事にしすぎる故にだと云ふ。而して見ると、僕は兩方に鼻垂しと云ふしまつさ。それは鼻の下も長いだろうよ。たしかに一寸二分は有るだろうよ。だが五分迄にはあるまいと思ふのさ。

一體、男つて云ふものは、内がよく治まつて、内助と云つて、内で助けてくれてこそ、外の業も出來、勉强もでき、心も面白くなつて、命も惜しくなり、名譽も欲しくなり、自然、國家の爲にも働ければ、博士にもなれ、代議士にもされ、運よくば總理大臣にもなれると云ふ都合だろうと云ふに。大層大きく出られたねとはじめて、つれの人は合槌を入れぬ。

さうさ、僕だつて、そう、馬鹿にしたものではないさ然るを、君だね、アハ、、、母も頻に僕を責むれば妻、妻も僕を責めるのだ。二人して、同盟して、僕を責めるのだ。何ぼ大きい男だつて、耐るものではないと云へばさ、母も怒る、妻も怒る。何が同盟して、貴方を責めるものですかと妻おてる。何が嫁と同盟して息子を苛責るものかと母も怒る。しかし、とう云つても、責られるのさ。御亭主と云ふものは、うまつたものではないのさ。人を食はせておいて、人に責られるのさと、から〳〵と笑ふ。

君のマーザーは、そんなんではない樣だつたがね。矢張、やくのかねと、又伴れが口を入れぬ。

燒くと云へば、やくのさ。煑るといへば、にるのさ。私の可愛い忰の嫁だから、我の眼鏡に協ふやうにしてむと云ふのだから、伺へば誠にありがたい、勿體ない

事さ。七十四になつて教育しやうと思ふのだからね、御苦勞様の事さ。しかし、七十四の老眼鏡に叶ふめがねは、澤山はないのでね。アハヽヽヽ。月給は、今も母にあづけるのさ。財産は母にあり、權利は妻にありかせぐは亭主にありさ。馬鹿〳〵しい、亭主は稼ぐばかりで、財産と權利は、人に許あるのさ。實に馬鹿馬鹿しいではないか。此處に於て、御亭主は辭職したくなるね。御亭主はやめて、何でも色男になりたいね。どうか、工夫はなからうかねと笑ふ

君が惡いのだ、もうお母さんは、床の飾物にしてじまひ玉へ、そうして何でも朝晩に粗飯と云つては失禮だから、珍膳を供へ奉つて、三拜九拜し居ればよいではないかと、相手がまた云ひぬ。

それでも、よく相手の言が耳に入りて、それがさう行かんのだよ。大藏大臣、中々辭職せんのだもの。非職を願へばね、終身官だと云つて、はなさないのだ。それで、兄の方に母を托して、別に居やうとすれは、三十年も、困難の財政を執せて於て、今更夫では義理知らずなと喞つのではないか。女房は、あの氣むづかしいお母さんとは、一所に居られないと云つて、里に歸つてしまう、別になつたら、行きますと云ふのだ。それは、是非、お母さんと別にならうと思へばなれるさ。然し、元が僕の母だ、母の懐に育つて於て、今になつて、家に居やうとするものを、外へ行つて呉とは云はれんではないか。仕方がないから、女房は歸らんでもよいとしてあるのだ。そこで、男は七人半はよいとしてあれば、まだ五人はもてるさ。女房は女だ、傷物だ。しかし、きづものを、今の世はなほ賣りつけるかも知れないよ。アハヽヽヽ、君、今の世に、女權擴張論など、主張しないでもいゝよ。むかしの通りでも女の權理はいみじいからね。女ならでは世のあけぬ國と云つてね、來世には僕も、男になどは生まれないで女に生れて來やうよ。君もひげ面になとなり玉ふな。宜ではないか、亭主に稼がせて、それでぐず〳〵云はれてさ。やゝ、月がのぼつて來た、今日はこれは、中がいゝね、君、中迄交際はんかねと云ふ男、年は三十

五六なるべし、でつぷりした、品格賤しからぬ男。もう澤山だ、是丈つきあつて、管を聞けば澤山だ。去年も向島の土手を八丁、あつい日に照つけられて、あたりはゞからぬ大きな聲を振立てゝ、とんだ狂人のおつきあひしたには、僕は閉口したよと、つれの男は、醉ひも醒たるげなり。

ウン、ソーダッケ、去年もそうだつたね、實は、毎年君に話しに東京に來るのさ。また飲みたくなつた、ラム一つない仕方のない所だねと、から／＼と笑ふ調子狂せざれと、他處にも祈らるゝばかり。

しかし美人は此處らに限るよと、つれなるは、つく／＼と月を眺めぬ。

女ならば、如何ばかり。此の月に、あはれも露もそへて見んを、さながら、講談を演ずる如くに、おもしろく說きたるは、流石に男、氣の毒にも、をかしくも感じられぬ。母親は七十四歲と云へば、もはや長くはあるまじ、さとるも短し、あはれ之れを治めん良妻もがなと、他處ながらに覺えられぬ。（完）

むかしの洋行

菅原白峰

今より凡そ百年のむかし寛政のさる年のことなりき。頃は夏のはじめ吹く浦風にひるがへる皐月の鯉の吹流し、はためく幟は江戸の將軍が天が下しろしめしてゝに百餘年、泰平の氣象は萱が簷端に葺合せたる蓬蒲の色にも見えき、綠なす海原遠く渺望たる太洋につゞきて涯しら波の幾萬里、もろこし國はいづ地なるらん。山ほとゝぎす、森の若葉に訪づれてふた聲三聲、初がつ魚の呼聲も市にきこえぬ、下田の港は二里に近し、小稻の濱とて伊豆の漁場、軒かたぶける蜑が苫家あり、網小屋の棟木脊戸につゞける川尻にしぼりわげたる、の上に立ちたる漁師の目に不思議とおもはるゝ沖の方にて巖の浮きたる樣なるもの見えぬ。よく見れば船なり。異國の船なりといふ聲、崖の上より聞え渡りて漁村一帶に擴まれば、珍たき者を見んものと我を爭ひ、釜の前に飯焚ける女、納屋の軒下に麥搗く男、石垣に

鰻の穴せゝる小供の群より埴生の小屋にうづくまりて網造りせる老翁老媼のともがらまで、皆一同に彈機に仕かけられたる人形の如く、俄に跳あがりて船は何處と波打際に打寄り〳〵、村中の騒ぎ一方ならぬ有様なりき、

程なく船は近寄りて磯より三丁ばかりの所に錨を卸しぬ、大きさは千石船の四懸もあるべし、

そも日の本は世界のはじめといはれ唐と天竺の外に國ありとしも知らざりし浦人等が太平の夢を驚ろかせし異國船は前代未聞の事なればとて老若どもの打寄りて唯噪ぐのみ、その中にも村の名主は役柄とて多少心得のあるものなれば、まづ兎も角も委細の趣を書面に認めて役所へ注進せんものをと書役に船の圖形を象らせ急ぎ飛脚を差立て、下田の番所へと注進したり、そのうち夷船は傳馬を卸し、二挺櫓にて段々磯際へ漕寄する樣子なるに庄屋は油斷なく進み出で、若陸へ上りたらば、其所にて一應の吟味をなすべしとて待ちかまへしほどに、傳馬は難なく陸へ漕ぎつけたり、傳馬と見しは牛の皮にて張りわげたる二間ばかりの小舟にてその中に二人の異形なる人物、何も髪は惣髪にて長く脊に垂らし、二人共衣服は同く黒羅紗の筒袖の上衣に金の衣鈕を綴め、下袴は銀鼠色の天鵞絨にて、足には白き莫大小の上に深沓を穿ちしが一人は髪の毛薄赤く皮膚の色皙く、眼の中薄蒼色にて鼻筋殊に隆く、羅脊板に猩々緋の縁とりたる帽子を手に携へ、腰のまわりに細身の劍を佩ぎたる樣紛ふ方なき異人なるも、今一人は身の丈五尺ばかりにして年の頃二十ばかりにして同じく手に異形の帽子を携へ、風俗身形悉く異人の趣きを備へたれども、髪の色漆の如く黒うして眼の中涼くとうやら日本の人らしき容貌なりき。二人の異人は互に譯けの解らぬ事とも語りあひ、頷き合ふて袂別をつげ一人はそのまゝ陸へ停まり、一人はもとの傳馬へ乗込み、親船の方へ漕ぎつけたり、折しも吹來る嵐、海原を撫渡るかと見る間に風の摸樣變りて彼の異しの船は帆を一杯に張揚げ舳を東南の方へ向け千疊の波を開いて何處ともなく遁亡せたり、陸に殘りし異形の者

はそも何人にて何故ありて此地へ上陸せしや、庄屋を始め浦人共は唯不思議と感ずるばかりなり。

扨ても太平の世に不思議なる事なれば下田の番所はこの注進を得て驚く事一方ならず、役人と評議して急ぎ小稻濱へ出張せしに、時既に遲かりし、夷船は疾くに錨を拔いて何れへか逃げ亡せたれど其船より一人の異形人を陸へ殘し置たりとの珍事にまづ其の者をこそ覗るべしとて役人は庄屋の家へ赴きたり、上陸せし怪しの者は疑ふ方なき日本人にてその名を嘉七と呼び、本國は土佐のものヽ由、昌德丸といふ船の飯焚を爲しゐたる者にて、今より七年以前、歳十四の折、米を積みて大坂へ廻る途中、颶風に遭ひて難船し、乘込一同海底の藻屑となりしに、この者一人命ありて夷船に救はれ、數年の歳月異國に漂泊し、手づるを得て其の國の王にも面謁を遂げ、言語を習ひ俗を變じ、至る所の人により手厚き饗應にあづかり、珍らしき事共數多見聞したる末、此の度び遙々と故鄕へ歸りたるものなりと語るを聞ひて、皆々奇異々々といふばかり。扨て役人のいふやう今其の方の語る處ろは俄羅斯の國と察したり、此の度び其の方を乘せて參りたる彼の船定めし軍船の類ならん船中には如何なるものを蓄へてゐたるぞ、鐵砲、大筒、焔硝の類は夥しく備へてゐたらん又兵糧のやうな物を見ざりしが、人數は凡そ幾人ありしぞまづ其れより尋ねん、正直に申述よ、詐りあらば上の御咎めあるべし其の方十四の折夷船に救はれ、已後永年諸々方々漂泊したる事なれば、突然唯今此の處へ歸りても御國の言詞に差閊ゆる廉もあるべし、口不調法は幾重にも勘辨致すよとありければ、上陸人は快然として幾年ぶり、わが本國へ歸りたるよろこびを面にあらはし泪をふり落して、難船の顛末大凡に語り出しけるがこれぞ絶代の珍事、無學文盲の商人船の飯焚きが端なくも天涯萬里の異域に漂泊して國王の玉座近くつかまつり、山海の珍味の饗應にあづかりたる事、開明の今日にては、唯一塲の笑ひ草に過ぎざるべきも桃源塲裏夢こまやかにして、日本の外に曾て國ある事を知らざりし國人に取りてはこの少年があやしげなる

口頭より述べ來る一言一句、金玉よりも珍らしく尊とく、誠に驚魂駭魄の大珍事なりしならん。

夢物語

伊豆の濱に異國船入津して、日本の漂流人を伴ひ來たりたるは前代未聞の珍事なればと斥候に出張したる下田番所の役人は、まづ村の用掛りに申しつけ、村内の老若どもへ此の漂客を見せ置く事後學の爲なるべしとて殘らず集ひて庄屋が家へ招き致しぬ、漂流人嘉七といふは頭の髮を三つに組みて背後ろに垂らし其の端末を黑き絹にて包み、襟には黃金にて造りたる小さき鏡のごときものを掛け頸のわたりに眞臥兒といふもの〻飾をなし、筒袖の外套に赤き玉の衣紐を施し、同じ織物にて製りたる袴をつけ、紺地の錦の緊衣を着し、足には白き莫大小を穿ち、彼の國より歸りたる儘の扮打なりしかば賞翫に來りたる村の人々何れも奇異のおもひを爲し、異口同音に感嘆して見たりけり。

奉行はまづ昌德丸が難船の當時に溯りて此の少年が如何にして夷國船に救はれたるか、其後の摸樣顛末を話し聞かされたしとの質問に及びければ少年は徐ろに口を開きて言ふやう、抑も我等が土佐國の城下を出帆なせしは八月の下浣にて、城下よりは大阪へ登すべき米百俵、鰹節三十箱、紙二十貫其外のこざ〳〵荷物積み載せて明け六つに船出せしが沖合五里ばかりも乘出だせしかと思ふ頃、空摸樣次第に惡しく成り、風の方向南にかはりて吹きすさぶ音段々凄まじく、始め六合に張りし帆は一とわい毎に引下げて三合までに成したるが、室戸の瀨戸を乘り越すまでが一と辛抱とおもふまゝに少しづゝ風をわしらふて行くうち、又もや風は西に替りて漸々沖へ出るばかり、剰へ怒濤の爲めに舵を碎きて進退度を失ひたれば船中一同覺悟をきはめ帆檣を臥せ帆綱を括りて唯風の吹く方へ漂泊するに任せたり、されど二百石計りの渡海船が涯しなき大海へ浮び出でたる事なれば、さながら木の葉を弄らる〻如く、積みたる荷物の脚重くして屢々沈沒せんとしたりければ、百俵の米は大方海中へ打ち棄てたれば波荒くして

横縦十文字に煽らるゝ事一晝夜に亘り船中一同皆々精を勞らし今は働きを爲す勇氣も出でず、此の儘にして流し置ば何處の涯にか止まらん、兎も角もして船を止むべき工風をなさんと、船中總がゝりにて錨を卸したるに、其の綱の海底へ屆かぬうち船躰次第に傾きて、われといふ間に大波にあふられて船は敢なく覆りぬ。斯る折とて船頭舟子は豫ねて用意の板子に取りつき、水を潜りて出で浮きたるが、如何にせん一晝一夜働き通せし事なれば、今更に精竭き果てゝ一人沈み二人沈みて、船頭始め乘組五人の者共は何れも脆ろく成り果てたり此の時我は板子に取りつき横さまに覆りたる船の上に這ひ上がりしが、身は運よくも錨の綱に縋りつき、活きられるだけは活き延びんと、運を天に任せてゐたりしに、身の勞れにやいつしか精神昏迷して、其儘前後も知らず成りたりき。

眼覺めて見れば不思議なるかな、わが身は曾て見し事もなき美麗なる一室の中に在りて、周圍の光景の賑はしく且つ異樣なる如何にしても、合點行かず、恍然として四邊を見渡せば、斯は抑も如何に惣髪にて黒衣のぬいぐるみの衣服を着たる怪の男三四人も居しが、腰に劍など佩げ、金絲の頸かざりをつけたる顔色逞ましげなる大の男、或は月代だらけのケシ坊主、黒ん坊など、見も知らぬ者共、我が周圍に立ちならびて我が姿をつくづくと見詰め居たり、扨てはこれ話しに聞きし冥土の世にて我れはまさしく地獄に落ちしものなるかと、一時は斯くおもひ惑ふて、やゝしばらく恍惚と娑婆か、黄泉かを、辨まへざりき。

其時船頭とも覺しき一個の大將は我が身のほとり近く進み來りて何やらん手眞似もて言ひたれど、元より言語の通ずる筈はなれけど、我が破船したる檣の上に氣絶なし居たるを救いあげて、此の船へ收容なしたる趣を、手眞似もて仕方話しして聞かせたれば、我れ始めて其の顛末を知り得て、聊か安堵なしたり、何は兎もあれ我が一命を救ひ與れたる恩人とおもへば斯く其の面形の荒くれたる蠻夷男までもまた不思議となつかしく思はれ、船頭を始め乘組一同へ掌を合せて拜みけれ

ば、船頭はつく〴〵と我が容子を見て傍らなる一人に向ひ「やんはんす」と言ひたり、やんはんすとは日本人なりとの意味なりしならん。喉渇きて堪へ難く、水少し飲ませたまへと頼みければ、傍の者心得て早速巨大なる玻璃細工の德利に赤き色の水を充たせて持ち來れり、茶碗拿りて德利の水を注ぎ込みしに、得ならぬ香氣芬々として味また麗はしくまづ一杯を傾ければ口中の爽やかなる事譬ふるにものなかりし。

それより船頭は黑の筒袖の上に猩々緋の裝束をつけ、黃金の飾つけたる細身の劍を腰にさげ、眞臥兒の肩飾をつけて佛の間（佛の間とは船中の祭壇にて天主敎の畫像を安置し朝夕禮拜する所なり）へ入り題目を揚げ三拜して鐵砲を把り、海の方へ向けて空砲三度放し、我を伴ひて食間に入りたり、食間には白布もて包める高脚の飯臺に對ひ合て曲碌を二十ばかり供へたり、これは船中の重ちたるものが寄合食をなすに供へたる腰掛にていづれも天鵞絨にて包み美麗なる飾りを施てしたるものなりし、（飯臺は卓子にして曲碌は椅子なり）拿ち運ばれし食物は如何なるものかと打ち眺がむるに飯器はいづれもびいどろ細工にて酒の入りたる德利もびいどろ、肴を盛りたる皿もびいどろ、麥粉團子（これは麵包の事なりむかしは麵包といふものなし）を盛りたる丼もびいどろ何もかもびいどろづくめの器に添へて一人一人に銀の箸と、銀の匙二本づゝ出し、その料理は家鴨の丸蒸に金柑の砂糖漬などあり、其の外の肉肴取りかへ〳〵に凡そ五品ばかり、出されたるが、何れも結搆目を驚すばかりなりし、此の日は天主敎の佛の日にて殊更に盛饌なせし事とは後にて聞き及びけり。

扨て寄合食に招がれたる乘組の者共何れも大酒飲みにて一人前に二本づゝのびいどろ德利見る間に打ち明けたり、船頭は我れにも嘗みよとて盃に半分斗り注ぎさし吳れたれば、一と口唇をさしつけたるに、忽ち口中に火のつきたるやうに覺へたれば、這は恐しき事とおもひて舌を揮ひぬ。（寄合食とは會食の事なり）寄合食了りて後船頭は我れを招ぎて人々の面前にて樣

樣と仕形話を爲し、拇指を出して其の名を問はれし故我れは父親の事とおもひて其の通り名を言ひ置きたるに後にて聞けは其の拇指は親の事にはあらで國王の名號なりしぞ笑止なれ扨て又た船中にはケシ坊主二十人黒坊十五人計り居たりしが、是等の者は皆一時の雇人にて俄羅斯人の如く羅紗の衣服を着る事なく、唯麻と唐更紗の無地なるを着しゐたりしが、彼等は度々我れを見舞ひ、色々仕形話にて「やんぱう」へ歸り度き心はなきかなと問ひ慰めつ、折々油と砂糖にて製したる菓子など持ち來り、我れは徒然に絶へざるまゝ船中に畜はれたる猿、鷄、犬、家鴨などを見てこれを慰みとして日を送りぬ。

今日文明開化の世の中より見れば西洋の事物何でもなきやうなれど百年前の日本の有樣より見れば一事一物不思議の種ならざるはなく、たとへばランプ寸燐の如き日用品すらその當時は名も知らぬ、見も知らぬ怪しの魔物として見たるものなれば漂流人が偶然異國の船に乘組みてその衣食住に驚ろきたる、狀況想像の外にして眞に別天地の觀ありしなるべし

話說中俄羅斯とは露西亞の事なり

我が身を救ひ呉れたる俄羅斯の船は其の儘カ、ム、シ、ヤ、ツカ（西比利亞）といふ所へ着し其處に一と冬逗留せしが俄羅斯の代官のある所ゆゑ、役人共來りて我れを見物せしが、此の地は殊の外なる大寒國にて、海は一面の氷、びいどろのごとくに張り詰め、丸太の材木を積み重ねて家を造り、人間は皆其の内に棲ひ、出づる時は狐の皮にて面を包て目ばかり出だし、身にも亦狐の皮のぬいぐるみを着し、雁、鴨の類をうち、鹿など獵して、喰へと穀物甚だ稀にして、俄羅斯の代官より外に喰ふ事もならずといふ。不自由千萬なる處柄にて、早く日本へ歸りたしと願へとも、急に船の便もなければ、詮方なく一年を此處に送り、翌る年の六月やうやく氷の解くるをまちて、船を出したるが、一躰この船は商賣船にはなかりしと見えて、別段港へ入りて物積する樣子なく、何處にても唯島のあるところへ向けて見積りを爲し、時々鐵砲を打放して雁鴨の類を取り、

又は他國の獵船を見つけ次第に追ひ廻し、大筒など當り任せに打出して危うき業のみ働らきしが、船中の饗應は何時も結構にて、珍味の食物ありあまる事なれば我れもあまんじて其後は强て日本へ歸らんとはおもはず、迂濶〳〵と又一年あまり船の中に日を送りて、翌る年の八月おてうつか（西比利亞）といふ所へ入津し此處にて又一年過ごし、翌る年、やてうつかといふ村へ伴れられ此處にて又代官に見物せられ、種々の饗應あり、それより陸つゞきにて氷の上を橇といふものに乘せられ、いるてうつか（西比利亞首府）といふ所に送られたり、此處は人家二千軒ばかりありて何れも俄羅斯の人間の住む所にて大名さいも在る所なれば、町の造りも殊の外結構にて、蒸籠重箱を重ねたるやうな家十ばかりも見受けたり、此處にて我れは俄羅斯の王の旗本いたりやアかといふ人の世話になりて、言葉など習ひ一年餘り逗留して翌る年の二月十九日、その旦那と一緒におろしや（露西亞）の都へちゑるはうろ（彼得堡）といふ所へ送られたり、城下に着いて三日ばかりは車を馬に牽かせて都の大通りを見物したるが、遉がに王樣の御座る所とて町の美麗なる事いふばかりなく、色々の木もて造りある家、石の家、何れも蒸籠重箱を重ねたるやうに五重六重に積みあげ、二重目、三重目に花畑を作りて種々の草花を植ゑ、屋根の上に泉水を築きたるなど結構目を驚かさゞるはなかりき。程經て我れは其の旗本の取做にて女王へ御目見えを許され、御殿へ上る事となれり、此の日朝王の御殿より我が厄介となりたる旗本の家へ見事なる飾りをつけたる馬四匹繫ぎし御所車を差向けられ、大勢役人共附添ひ、我れを載せて御門内へ牽き込みたり。此の時の我が心の裡は如何なりし。見も知らぬ結構なる石の大門を入りて、御殿の石段を登りたる時は唯夢のやうにて四周は眼もくらむばかり、金銀もて飾りたる正面の曲碌の上に、年の頃六十あまりの婆樣の座敷一面に裾の擴がりたる裲を着流して金條の縫摸樣ある廣き涎掛を爲し頸の廻りに種々の珠玉を繫ぎ合せたるを二た廻り三廻りに纏ひ繞らし、恐ろしげなる目付もて我が身

を見物せられたり、我れはひたすら心はづかしく、前の方へ出る事も成り兼ねて、立ち佇りたれば、御老中とも申すべき官人、我が傍に寄りて申さるゝには、われが王様であるぞ、今少し前の方へ出でよ、大事はないぞと手を取り女王様の御前へ伴はれたり、左右には雲の如き人々何れも烏冠のやうなるものを頭に頂き、肩頭より胸へかけて金銀の飾を施し、乳の所へめんだりい(標章)と稱する圓き金の印をかけ御側には若き官女二十人ばかり女王と同じやうなる衣裳着て天俄絨にて裹みた曲祿を後にして、立ちながら穴のあくほどに我が顔を見つめたり、其時老中は我が兩手を重ねさせて女王の膝の所へ進めさするやうに敎へられしかば我れ其の通りになせしに女王は御身の指先を我が掌の上へそつと乘せられ、老中の指圖により我れ其の指を三度いたゞきて舐めたり、これはこの國の儀式なるよし、それにて御目見へは相濟み、土産物を頂きて旗本の家まで引取りたり、其の土産物の内には綿密なる細工の懐中時計と美事なる金の香箱にめんだりといふ金牌もありて誠に結構の品々なりし、此の時女王は年六十三にて名をカテリイナヲルスキイと申し、其の子に當る人ペチエルヤルとて三十歳なれどもまだ部屋住にて跡を取る事を許れず、何故かといふに一旦王の位を退けば一生尼寺に籠りて世の中へ出る事叶はぬ約束にて、扨ては容易に身代を讓り渡さぬ事とぞ、人々の取沙汰聞き及びたり。

少年が漂流の顛末は其物語の筋に依て大略を領會したり此上は滯在中彼の國にて見聞せし事柄にて我が國の風俗に珍事あらば、聞かんとて何れも座をすゝめければ嘉七は答へて言ふ樣何樣彼の國とて永く住み馴れては人情に別段變りたる所はなきものなり、唯彼の國は老若ともに悠長にして少しも物を急ぐといふ事なく別けて佛信心の盛んなる國柄とて何事も佛次第〳〵と稱して少しも急る事なき風俗なり、さりながら、人躰威ありて心底のやさしみなき樣なれ共、よく〳〵附合へば案じの外なる心意氣あり、私の滯留中不思議とおもひしは暦の違ふ事なり、一年は十二ヶ月なれども

一と月に三十一日といふ月ありて此の國一帶閏月といふ事無し。これは如何にも不思議なり、都には何の食物にても心任せにて少しも不自由な事は無けれ共オコウツカに於ては鳥、毛物の外に穀物は至つて尠く我が國の米を尊む事藥の人參の如し、大病人に粥を作りて與ふる外には平生用ゆる事無し、都にても米千石の價十萬兩するとは商人の話なり、我が國へ交易を願ひ出づるも金銀には少しも望みをかけず、唯米を得るの算段ならんとおもはれたり之れも尤の事にて彼の國にて金銀は至て澤山にて、何にても物の飾りには金銀を遣ひ、大抵な家は瀬戶物の代りに銀の器を使へり。貨幣は御國のものと違ひ丸き銀錢にて、表てに王の首裏に兩頭の鷲の紋付けあり、オホウツカの邊は殊の外に寒く狐の皮にて面を包み、目ばかり出して歩きしに縫ひ合せの透間より風入りて耳鼻のあらはるゝに石の如くなり。寒さに當りたる處はゑぐりたるやうに拔落つるなり、是れには牛の乳に丁子肉桂の粉を加へて塗り療治せり、彼の國の醫者は皆々亂暴にて何事も荒療治なり、見たる處にては大なる釣かけ鋸にて怪我人の足を挽切り、其跡を燒酎にひたし、木綿にて切口を包みたる處を見たり、イミセイッカの邊にては小作人より地代年貢を取らず、一躰に應揚なる氣質なり、彼の國人は茶を呑ませる事を御馳走となし、一軒一軒大なる茶釜を据ゑ付け、湯を沸かし置き客來の時必らず大茶碗へ大白砂糖を入れ、茶を溢るゝ程に注ぎ御馳走ぶりを示したり、貧乏の者にても茶釜は乾度据ゑたり。眞鍮にて日々磨を入るゝよし、扨又都に於ては切支丹は五十六宗有るよしにて其の中にヒラサラバサラといふは日本國の一向宗のやうなものにて至ッて惡敷敎門のよし、又、都にて老中あたりの住家は部屋の飾り中中美麗なるものにて天井、壁に色々の花摸樣ある唐更紗を張りつめ、石疊の玄關など見事なるものなり、彼の國の家は大方皆四角にて五重六重位かさね、戶障は大抵ビイドロ（玻璃の事）にてこしらへ、是れに獵虎と申す魚の皮を縮めて立付をよくせり、私し日本へ歸りがけにゑみせえつかといふ村を通りたるに不思議に

も日本の遊女二人に出遇たり此の者共の生國は聞き及ばざりしも風俗は一切異人にまがひて敷瓦をしたる石疊の上に床几を据ゑて、ケシ坊主やろすけ（韃靼人）なと相手に戯れ居たり、遊女の唄に「目の黒い、髪の毛黒い人の妻に成りたや、目の黒い子を生み日本歸りたや」と申し居りたり餘處ながら聞き及びて氣の毒の思ひを致せり。（完）

西藏奇談　（世界の秘密國）

▲拉薩滯在の大略　近者新聞紙上に喧傳せる西藏探險者河口慧海師が郷里泉州を出發して西藏國の首府拉薩に到着するまで實に三年九ヶ月の光陰を費せり師は拉薩に到着の後セラ大寺に寄寓し專ら佛典の講究に心を委ね少くとも滿三年は滯在する心組なりしかば何事にも注意して國民の歡心を買ひ殊に大藏大臣の庇護を受け安穩に日を送りし内國王不豫の事あり慧海師は大藏大臣の手を經て日本より携へ行きし藥の殘りを奉りしに王の病氣は頓に平癒せり爲めに非常の信任と尊敬を得て殆んど一年餘の光陰を送りしが翌年の春に至り端なくも其身の日本人たる事暴露して危難を告ぐる者ありしより倉皇行李を收めて拉薩を逃出づる次第となりぬ扨て西藏は今日こそ世界の秘密國として四境の封鎖嚴重なれども七八十年以前までは外人の交通自在にして障碍となれるは地理の險阻のみ隨つて西藏人は博愛慈悲の佛教を奉ずるより外人の國内に來る者あれば衣食を給して介抱を加へ少しも猜疑の念を挾まざりしが英國政府が西藏の藩屏なる王國を征服したるより俄かに鬼胎を抱き鎖國の政令を傳ふるに至り徳川政府が天草の一揆に懲りて切支丹伴天連の禁令を設けしと同一なり尤も國境を劃れる自然の天險は飛鳥も容易に過ぐる能はず文明の曙光未だ此暗黑界を照らさゞるが爲め外人に對して疑懼の念あるは止むを得ざるなり而も其法律の嚴重にして殘酷なる外人を導きて國内に入れ若くは之を庇護する者は門地官職の高下を論ぜず三族を夷滅せざれば止まずといふ是に就て先年某寺院の高僧大獅子能實宥尊者は外人の秘密探偵を幇助したる者なりとて糾彈せられ捕縛の難に遇ひ遂に水中絞罪の慘刑を宣告せられたり尊者は元來同國第一の碩學高德、刑の執行者も未來の冥罰を怖れて手を下す能はず徒らに躊躇歎息するのみ遠近の老弱男女も尊者の死を惜みて來り弔し聲を放つて慟哭し天地も爲めに黯澹、河水も亦咽ぶ尊者は索を頸に纏はれたるまゝ河中に浮沈する事數回、吏人を顧みて我命茲に盡きたり汝等我を殺すに忍びずんば我自ら死せんと水中に沈んで復浮ばざりしといふ。

消息文

はがき帖

君より　　　　伊勢　岸田鈴子

あまりの幼さを御そしりわらんはつらけれど、いと哀れなるは窓の障子に昨日より宿り居し胡蝶遂にみまかりしに候、いつやら戴きたる小さき箱惜しうは候ひしかど、假の柩と致し候。花も手むけ候。水も注ぎ候。御ひま在しまさば……おはしまさずとも、必ず〳〵御訪ね被下度候。かしこ。

我より

幸多き蝶の身羨しう相成申候。やさしき御手に埋められて、朝夕の回向……それよりもしげきに候はずや。私など世を去らんわと心細う候かな、御手向はをろか名をだに問はせ候まじ。

胡蝶二夜とも夢にみえ申候。白き長き衣に、脊に四つの翼をおひて……彼處に。

さても凄まじの雲や、定めて夕立に候べし。胡蝶塚御心づけ遊ばさるべく候。

君より

あの雷いづち落ち候ひけむ。恐しさにたゞふるひ居り候ひき。哀れなるは胡蝶塚、池にや流されし、影だに候はず。前の世の宿世いつまで拙う候ふやらむ。

評　あどけなき中に才氣も見ゆ、詩味に富み、宛として小詩篇を讀むの思あり。

なつかしき君に

ひめゆり
熊本　奥田光子

五月雨はれまなき今日この頃君には如何にすぐさせ給ふにか例の如く君は車の丸まとの机にもたれ筆やにぎり給ふ書や見給ふわらはゝ友なき宿のさびしさに又も御文をくり返し君が給ひしいろこきすみれの香をかぎ居り候。

あはれ五月雨は又ひとしきりふり出し庭の木の葉のおと高くなりまさり候わらはこの如き雨の夕母の棺を送り申候より憂き事つらき事つもり／＼ての悲しき運命は暗き世の底深くわらはをけおとし申候かゝる身には宗教も何も實に用なきものに候、わらはの血しほの泉はもはや涸れる如く相成候、君よかくいはゞすねたりとやおぼす實にすねたりな我身。

しかはあれど昨日今日我身のあやしさよ、この心のあやしさよ、さきの夜君が我手をにぎり給ひし時、香ばしき君がいつなきの、我ひたひになれし時あゝあやしな、我心、つらしと思ひし浮世用なしと思ひし浮世今はすてがたく、あやしき、くさりは、我をまとひ申候、つれ／＼のあまりおかしき一ふし君にまで　かしく

京に遊べる友の許へ

長門　岩田章子

初夏の滋賀の都や、いかにおはすらむ。あさ緑、烟の如き、紀伊路大和路の御便り、つぎ／＼に拜し參らせぬ朧ろ月夜の和歌の浦、若葉の奈良の京、さては、花よりも昔を忍ぶ葉ざくらに、吉野の里もおとなひ給ひしとやそもまた、月明き今宵は、湖の面わたる三井の鐘、いかに歌思ひます優しきみ心にしみわたるやらむ。こゝ宇部の里、遙かさがる鄙の、野らばら薫る窓の下に、たゞ一人遠く東の方思ひかへせば、あはれ、わが心いひしらずよ。くみ給へかし。ちか／＼に大和巡りも終り給ふよし。筑紫への御道がてら、吾宿に、難波の都の紅の塵も洗ふべう、一夜を契り給はずや。菖蒲月、花はなくも、あやめづらしう諸共に、五とせの昔のごと・宗

まき、葉櫻がくれに時鳥きかなむ。今年も、門の垣根に夕顔植ゑて侍り。必ずや、とぶらひ來ませ。たそがれの宿の、心あてなる花散らぬ間に。

評。平凡なる題も、君が才筆に入て清新若葉の其れに似たる文字となる。此くの如くの書信に接するもの、たとへ夕顔の宿ならずとも、何人か爲めに一日の車を枉げざるべき。

亡父の三週忌に際して

筑後　服部米子

梓弓春の彌生の長閑さも果なく何時か過行候てはや木々の若葉の色深く山郭公さへ名のり出候折柄先々其御許には如何日を送り給ふやらんと雲山遠く隔て候ては仲々に打案じ申され候朝の鴉鳴きのさわがしきにも夕の燈火の花散るにも心にかゝらぬ時も無之只々事なきを祈るのみに候扨ては御存の通りいにし年の五月十日は何時しか今日と行き廻り立返り候て早や世を去り給ひし父君の三週忌に當らせられ候得ば憐れ跡とふ法の燈火の光さやかにかげもなく母上始め一同打集ひ候て祈る心は一條にみだの御國に安らけく眠り給へとのみに御座候も三界の火宅に殘されし身は思の雲にはだされ候てつい〱爪繰る珠數もなか〱に涙の玉の數そひ盡せぬ歎に袂を絞り參らせ候定めし御身にも旅の空獨り千々に亂れし斷腸の思さこそならめと推上候先つ日御身申越し給ひし如く御送り附の寫眞早速佛前に供へ參らせ代參と致候も眺むる凡夫の目にはこれとて同じ涙の種子におはしましかくうるはしく成人し給ひし御身わけて學びの業も人に優れ今度は存がけ無くかずある人の長とやらん命せられしと申す御事今一度せめて語りもし聞き給はゞ如何に嬉しく思さんを人の世の定めなく末の松山千歳の後とても歸り來まさん折の候べきとは存じながら折にふれ事に附け有し事のみ忍ばれ候げに思出づれば四歳の昔秋も最中の望の夜に小舟浮べて矢部川の流に出で候ひしに折から月影の清けさに心も空に浮き立候て御身のすさびし笛竹に妾も共に歌をとなへて慰めまつりし夕の嬉しさもあるは花の朝共に樂み賞せし事もおはせしが嗚呼今はゝかなき夢と消え果て候事のうたてさげにや浮世は浮に似て行くも歸るも別れては知るも知らぬも

以宗松贈不識　ひめゆり　（一七八）

終の友後れ先立つ世の習とは申ながら頼み難きは人生に御座候何も〳〵今更致方なき賤のおだまき繰り返し候て却て御心を痛め候事わしくな思し給ふなよ只々此上は御身の一と日も早く業を終へ娑の花をかざしつゝ幾千代目出度名を擧げ家を起し給ふ事こそなき御跡の孝養なれとひたすら其期をのみ一日千秋の思ひにて待居候必ず〳〵螢雪の苦を凌ぎ一寸の日陰を惜み給ひて御勉學の程を祈るのみに御座候亡せ給ひし父はいと心高くおはせしを御身も氣高ふ生ひ立ち候へばよしなき人をな見聞き給ふなおどろの奥の花も美くしく藻屑かはたの月もすむ萬御身の心だにそと存せられ候何も〳〵悲しき餘共に語らはん同胞も御身の外に無之身のかくば文して申上候何時もながら水莖の跡拙なくわけてはりさく胸の思に後や先きかき亂れ思ひの半をもえいはでかゝる永文と相成宜敷御推讀の程願上候かしこ

評　纏綿たる情感、叙し得て遺憾なし

友へのかへし

貞　子

暮れ行く春をいかに見たまふとの御文けふうけとり候らひぬ、散り行く花わたらし、殘れるおそ櫻めでたしとながめしは二日三日、花もなくなりてたゞ青葉のみ殘れるはいみじと存せられ候、この下かげにハンモックつりて、好めるうたぶみよまんたのしみ、なか〳〵人にも語られざる程に候ふよ、花園にはなでしこも芍藥もさうびも、すべてはころびそめ申候、なでしこは海老茶袴うつくしき乙女にたとへつべく、芍藥はやんごとなき姫君の、振の袖けだかきにたとへつべく、さうびは才いみじき女學生にわなどりがたき氣品あるにもたとへられ申すべきか、品さだめうけたまはらまほしく候

今散步より歸りきし妹の、もちきしつゝじ一ひら封じこめ候このわたりのけしきおほかた、推しはからせたまへ、かしこ

評。清楚

歌反古に添へて

佐賀病院好生館内 江口そで子

懐しいなつかしい安子さん。五月雨勝の昨日けふの起き伏しはどうなの？。お變りもなくつて。妾子。貴孃にゆかれて、寂しくつて寂しくつてならないワ。

そして患者は少しはいゝの？。眠つて居間なんか寂しいのにつれて、亡き人のうへの懐ひいださるゝ事はなくつて？、又優しい故郷の母君の慕はるゝことはなくつて？。

今子。こゝ送つた歌反古は、貴孃の出ていつてから折にふれ事にあひて詠みいでたもので、もとより色も香もありはしないのだけど、もしも優しい貴孃の、つれづれの心やりとでもなれば、妾の嬉しさはどんなのだらう……。

安子さん。妾いつも西の空を眺めては、懐しくなつかしい貴孃のおかへりばかりまつて居ますよ。

評 他に奇なけれども、捨て難き思あり

博覽會場より

京都 はるさめ

おつ母さん！

いま美術館の入口に下駄を預けて居るの、人ごみで大層のぼせます。時さんものぼせるつて、そう言ふて居なされるの、叔父さまが、たゞもう、早う〳〵つてせきたてるんですもの、觀音さまの吹上げの上手に出來てゐる事や、植物の温室に瓜がなつて居ることや、牡丹の花の大きなのが散つて居る事やを、お母アーさんに見せたいわ、きつと吃驚遊ばすでせう、それで一所に來やうとお勸め申したものを……今夜は、イルミチーションが點されるつて、叔父さまが言つて居ますわ、イルミチーションつて、立派だそうですよ、歸つてからゆつくりお話し致しませう、あれ叔父さまが、またせき立て成さるんだわ……

ひめゆり　（一八〇）

病癒えて友を招く

横須賀町　名木山靜子

み心にかけさせられし病も、漸々に癒え侍りぬ。天つみ神も優しき君がみ心の、御學びの道さへ、たど〳〵しき計りに、數ならぬ身のこと、わづらはせ給ふを、感せさせ給ひてかと、たゞ君がみ情の忝けなさに、ひたに涙はこぼれ侍りしよ。見ませ、あやめも分かぬ迄に、此せはき袂は、ぬれにぬれて。何はとまれ、母にも、こよなう喜ばれて「わすは正子の君を始め、誰彼の幼馴染の君達に、み車まげまさんことを請ひまつりて、心計りのいや言だに申せよ」との事に、侍り。されば君よ。甚も懐かしき正子の君よ。いや知らぬ賤が女の言の葉は、許させ給ひて、身の願ひをきゝてたべ。荒庭の山蔭に、亡き祖父が植ゑ侍りし、かの形見の藤、病の内に櫻は早、根にかへり、藤はかくれ侍りしかども、獨此花は昨日今日にかをりいで侍りしよ。君待顔に。あはれ君。彼藤棚のもとは、それよ昔戀しきそこには侍らずや。花蓆下に敷きて、まゝごとせしも、はた亡き父が靴下編まむとて、君がみ敎へを仰ぎしも、はた月の夜に書よみ交せしも、皆其かげには侍らざりしや。明日はやがて懐かしき君がみ影を其上に拜しまつりて、何よりぞ語り申さなむか。花の家、紫の下蔭に、先驅はしきみすさびの御筆こそ承はらまほしう侍れ。切に我は伏して請奉るなるを。もしさらば只管に嬉し喜びて微笑むは花、躍れるは池の汀の緋鯉のみに侍るかは。

わすは何とぞ露茂き賤が園生に御車まげさせませよ。父なくはらからなく一人の母を杖とも賴むはかなき身、優しき友君はそれよ天のみ使。あなかしこ。

ふして待ち奉るを、花と共に。

評。情趣多

おとづれし友のかへれる後

ふさ子

いまか降り出でん空のけはひよゝはや汽車下りさせ給ひし頃なれど御途すがらだに雨なくてがなと空のみ打な

がめ候汽車の内側の御頭痛などとましまさでやわずか二日の御滯在姉在らずとて餘りすげなしせめて今一日だにとあのやうに申せしをふりにふりてのがれかへらせ給ひしものから君のみ車見えずなりて稍しばしあへざくかへりし姉の悲しみ怨み、お下駄お傘ひそかにかくし參らせとの心づかひも聞くよしなく何故とゞめ參らせぬとて恨みの數々私にのみ重き責負はせ候願はくばいさゝかとてもわたせ給ひてんや折から末の妹の招き候まゝ氣もちたるまゝそと次の間のぞき候へばせめてもの心からにや君がとゞめ給ひし白ばらかたへに私の文したゝむるも露しらず君がもとゝおぼしき文かき居り候よ姉におくれなば如何にせん思餘れど筆亂れたれとせかるゝまゝに筆とゞめ申候

されどつれなき今朝の御ふるまいおぼえよき君のわきとも忘れ給ふな必ずいつかは返しまゐらすやはさらばかしこ

遠國にある父の許に

こてふ子

世はなべて青葉の時節となりましたが父上には如何いらせられますか御馴れ遊ばさぬ土地故嘸御不自由勝であらうと雨につけ風につけ御噂のみ致して居ります當方も母様初め皆々無事に暮して居りますから何卒御安心下さい御心配なさいました昇さんの病氣も全く快くなりまして毎日元氣ようお仲よしのペチと跳り廻つて居りますお父様の愛していらつしやいました庭の躑躅も此頃が眞盛りで誠に美しうございます花も今年は父様の御在がないので嘸淋しく思つて居りませう去年は父様と宇治へ螢狩に參りましたが此夏はもう參る事出來ませんのね夜前螢が一つとんでゆきましたのでふと思ひだしまして誠にお懐しう存じました何れ委しい事は別紙母様の御手紙にござりませうからもう此位で

追々暑さに向ふ時節ですから一入御厭ひ遊ばすやう念じ上げます夜は大層更けたやう彼方の部屋で昇さんはどんな夢をみたか父様と可愛い聲で

窓を明けますと傾きそめた月影淡く机をてらしますわ、よい景色父様は此月をみてまわ何を思つていらつしやるだらう折柄月を掠めて時鳥一聲を名殘りかなたの森へ

ひめゆり

別荘から妹の許に

麹町　北村開子

お手紙を有難う、何より嬉しくて、繰返し〳〵よんでねばわやにも聞かしてやつたら、涙をこぼして喜んでよ季ちやんの學校も、ちか〴〵におやすみになるつてね、すぐいらつしやいな、淋しくて仕方がないのよ、此頃は寫生の材料とりに毎日方々へゆくのよ、そして山の奥へはいつて、歸り途がしれないで困つた事もあるの、けれとも其景色のよさといつたら、とても都で見られないと思つてよ、葉が青々と天も見えない程繁つている下を澄み切ている谷川が靜に流れて、數までよめる、底の小石まで、まつさほに見えて、夫は〳〵美しいのよ其傍の木に、ハンモック釣つて、女學世界でもよんだら、どんなに樂しいでせう、けれども、季ちやんは毎日都で、勉强してるのに、私計そんな呑氣な事してはすまないと思つてまだ鞄の中に仕舞てあるわ、あなたが來たらすぐ出さうと思つて
ばわやも毎日季ちやんの事計いつてゝよ、早くきて大きくなつたのを見せてやつて頂戴まわどんなに喜ぶでせうね季ちやん

故郷へ赴きし折父の許へ

埼玉縣　大赤隆子

着後直に差上候文は、御落手の事と存候、さても幾年ぶりの珍らしさに、昨日もけふも、里のたれかれ訪ひ來て、いつも、中の間の賑はしさ、父君は、など來給はぬと、怨じ顔なる君も、少なからず候。一昨夜は、町の姉上も參られ、初對面なる要子の、愛らしさ、御目にかけたく候、滑稽なる只作爺は、早厳に、岩躑躅の赤き

そもてき。涙もろき、お宗婆は、緑色美しき草餅に、豆の粉など添えて、背負ひ來しが、わらはの顔見るや否わな美しく、成人し給ひしよ、亡き奥様の見給はゞと、堪えぬべう、よゝと打泣き候には……。昨日は裏庭のばらの花きりて、母君のみ墓の、塵打拂ひ候、理なう落つるは、只涙にて……。父君のみ旨、心に念じて、み靈に告げきこえ候折柄、風緩やかに墓邊をめぐりて、いつぞや、お手植の標の柳、そよ〳〵とゆらめき申候、其わたり苔深くなり候事よ、まめなる伯父君の御手業にて、前栽の井の西、十坪餘の地は、殆と小植物園の觀を呈し候、朝とく、如露を片手に樂しげなる樣して、隆子よ、見よ此複輪の蘭の花、珍らしからずや、緣取の逸品ぞ、など、の給はせ候。背戸の谷川に臨みて、松にかゝれる藤の房やゝのびて、山吹の花美しく、流れを亂し、川の向の庫は、とり壞たれて、麥のみ靑く秀で居り候。わすは法要執行の手配にて、伯母君のお忙しさ、何も重ねて申上べく候。かしこ

評。短き行文の中に、多くの事項を陳べて能く悉くせり。

歸省中從姉への返し

牛込　鈴木吟子

さらでも此頃の御暑氣さには夏をよそなる御邊のみ兎角戀しう偲ばれ候を斯く美はしき御水莖の跡に接し參らせては石和の川の鵜ならねど身も魂もわくがれ出づる樣覺えられ申候誠や早う御伺ひまつるべしとは此春よりの御かね言夢忘れじとには候はねど玆にもさすが振捨難き袖のまよひの思はずも日數經て御誓ひにそむきし無禮さやがての御怨みもいとゞ後めたくまして京の兄樣始め濱の香代樣迄御揃ひ遊ばしてと承るに諾と答へて消えもせま欲しう思ひ入り〳〵扨は折柄の月影御見捨難うとてわすを笛吹川に御舟遊びの御催し作するよし名も睦まじき川の名に香代樣が例の妙なる御一手調べ通へば浪の鼓もいかにをかしき音をやたつらむかしと推し參らする程に何稻舟のいなにわらぬと申さむもなか〳〵誘はぬ水にも浮れ出でま欲しきばかりのすき心今宵さし出づる月よりさきに御音なひ參らす可く候淺茅が露の取集めたる御詫びはやがて御まのわたりにて聞え上ぐべくまづは御返り言までとりわへず申上候末ながら御方々樣へもよろしう御ことはらせ給ひてよわなかしこ

雜文

初夏の景

東京 佐々木和子

雲とみえ雪とまがひし櫻花もはや夜半の嵐に名殘なう散り果てゝ昨日は人のしげかりし花の山も今日は訪ふ人もなき青葉と變りていと淋しげなり思へば人の世に生るゝも花のしばしにこそ暮れゆく春のけしきこそげにやつれなきものなりけりやがて春もすぎ夏の初ともなりぬれば桂若楓などの木の葉いまだしげくはわらでわかやかに靑みたるいと心地よしこの頃は夕ぐれのけしきこそまたなくよけれ

鳥はねぐらに歸りゆきこがねの雲の夕映いと花やかなりしもまたく消えさりて小柴垣のわたり亂れ咲きたる卯の花に夕の色はせまり來れりかなたの森の梢うすぐろし天地はとこしへにしづまりゆきぬ

山の端に白き雲起りてねり絹のごとつやゝかなる月かげさし初め庭もせはいと麗やかに見え渡りぬ

紫のゆかりも深き藤波のひろやかなる棚に咲きつゞきたるが花びらに置ける夕露の月のほのかにやどりたる風情いとをかしげに紅の花よりもなまめかしうわでやかなりまた房いと長やかなるが靑葉がくれに匂へるはよき人の誇にこそ似かよひたれ誰がぬぎすてゝと云ひし秋の草にもいかでおとるまじうこそ覺ゆれ

吹く風颯と頰をかすめて花橘の香ゆかしく自然の幽趣にうたれて思にしづみし我はわたり俄に小暗うなりしに心づきぬ仰げば一輪千古の月雲に覆はれていまゝでわりし庭のけしきおぼろに消えて星かげのみぞ淡くまたゝきぬわゝ此の夕、たれかこの靜けきゆうべに對して天地の幽玄をうたはざるものあらむ

雷

弘前 三宅亮子

空は名殘なく晴れて、烈しかりし雨、わさましかりし音も夢の樣なり。大路へ立ち出でゝ見れば、北隣の媼も

向ひの細君も出で來て、諸聲に生ける心地なかりし由を曰ふ。さても彼の最後に轟きし音の例ならざりし事よいづちへか落ちけむなど曰ふ折しも、道行く人のなにがしの家くれかしが軒、さては野司の松の木末にもなど曰ひのゝしるに、今更思ひ合せられてかたみにかほうち守られぬ。誠やなる神はことわざにも地震火事と共に世の恐ろしき者の數に入れて、山の端の雲の景色のつねならぬを見るややがて、われ先きにと蚊帳の中にすべり入り、香くゆらし北野の神を念じなどひたすら命一つのたすからむことを祈りその愈烈しうなりはためきて幾度ともなく頭上に落ちかゝりぬべき心地する時に至れば、神のたのみもおぼつかなくなりて、今までなしゝ咎あやまちを再犯すまじきよしなど心に誓ひ、さては彼の避雷針と曰ふものを設けおきたらましかばとさぞ思ひぬる。されど苦しき時の神だのみと曰ひなむやうにさばかり恐ろしう感せしも、いつしか名殘なく晴れ渡れば、いつの間にかの北野の神も打忘れ、再三度かゝる憂き目を重ぬる内は、漸々よこしまになり行くなべての人心の日ひかひなさよ。かゝるためし猶他にも多かりけりとな。

海邊に遊びて

山崎壽子

二十世紀の女子たるべき身が、いつも銀行の出勤時間を過ぐれば直ちに些々たる一室にのみ閉籠りて、あらんは健康に宜しからずと、いやに衛生家を氣取りし我は、幸の好天氣を機として、時間後同じ行員なる一少年を誘ひて程近き海邊の山に遊ぶべく立出でつ、いぶせき茅屋のあたりを過ぎて野路に出づれば、蒲公英栄の花などは黄金の色を競ひ合ひて、名も知れぬ愛らしき小鳥の田の畔に餌をあさる風情里の童の池の面に淺く大いなる桶の如きもの浮めて其が上に輕々と打乘りながら遊び戯るゝさま等いと興あり、伴へる少年はいと無邪氣なる性質にて彼の梢にありし鳥を、いつ射止めし事ありとか、彼方の小池に鮒の多く住めるよし、さきつ頃朋友と共に我はこの險しき路を下りし事ありと海濱に急斜して見るからに眼眩めく計りなる小逕を指して、誇り顔にしめすなど罪なき種々の事を得意に語り出して我を笑はしめぬ。

やがて我等は大石小石の磊々たる嶇道を、からくもよぢて漸く峠に至れば西の方に連れる一帯の山々は近きは碧遠きは青く瑠璃を展べたる海の面には大小奇形の島嶼散在して、眞帆片帆心地よげに打上げたる船の遠く近く行通ふさま、宛然一幅の活畫の如し。我は徐ら雙眼鏡を取出して眺むれば、彼少年はかしこに赤き犬の駈けるを見給へ遙に海鳥の飛び行くを眺め給はずやなど指さして眼に暇なからしめぬあまりに長閑げに珍らかなる四邊の景色に寫生帳を家に忘れしを、いと殘り惜しく思ひつ倘もあかず眺むる彼方には岬遠く海中に突出して、そと遙に面せる隣村の家屋は淡く夢の映じ、半切となんよぶ異樣の大なる桶を海上に浮めて、水禽の如く海水に出沒せる海女の一群あれば、陸の方より漕ぎ來れる二三艘の漁舟の中に仁王を造りそこねたらんやうなる荒び男の、赤銅にもまがふ胸もあらはに、頑丈なる腕に櫓を取りたるあり、何やらん聲高に罵しりつ、赤黒う太やかなる脛のあたり迄現はしてたえず船中に働く若者のさま、小島の上にうづくまりし婦人の海草をしきりに摘みて籠に入るゝ風情、賑くふくよかなる肌をはゞかる態もなう現はしながら三々五々打くつろぎて海濱の岩陰に火を圍める海女の有樣、別天地をつくり出して、日頃見なれし我眼にも異樣に恐ろしうも覺えつ、彼は何これは何とまめ／＼しく說き示す少年の案內ぶりの可笑しさに共に打興じつゝ雨ふりなば直ちに消え去るべけれど、此處に遊びし紀念よと笑ひながら戯れに洋杖の先にて怪し氣なる人物なと地上に畫を殘しつ、見かへればうすれゆく夕陽の彼方の山の端にわづかに名殘を止めつゝあるに驚き、いざ歸らばやと少年を促して急ぎ本の路を辿れば、上りし折よりも倘恐ろしう怪くて、母上の下駄にては惡しかりなんと注意したまひしを聞こえぬ態して立出でし罪よと、今更心弱くも歎聲を洩らしつ、きれかゝりし與緒覺束なげに穿ちながら漸うにして家に至ればよくこそ歸りましにきと云はぬばかりに愛らしきカナリヤは我顏を見て一しきり高くなき出しぬ。

福翁世帯の話

松原岩五郎

上代の事は知らねど德川幕府三百年は日本婦人の身に取つて牢獄の世なりしなり。

封建時代に於て日本の婦人は先天より大なる罪を犯したるものとしてこの牢獄に投せられしなり。而して彼等は女大學と稱する犯罪の個條書を觸廻され汝等はこの如く罪あるものなり。終生この牢獄を出ること能はざるものなりとの判决を下されて、永くその寃罪に苦しむことゝなれり。實に是れ婦人の身に取つて千古の大疑獄といふべかりしなり。明治の始め福澤氏西洋に航し、泰西の文物を視察して歸るや。日本婦人が久しくこの疑獄の裡に呻吟しつゝあることを聞き。是れ必らず何人かの讒訴に出でしものなるべしと、婦人の罪狀に就て深く穿鑿を遂げ。始めてその大なる寃罪たることを發見したりしかば驚くこと一方ならず依てまづ日本婦人論なる始末書を公にして婦人の寃罪を論じ背く世の耳目に訴へ次で品行論、並に日本男子論、男女交際論などの辨論書を公にし、かくして此疑獄に苦しみつゝある寃者の辨護に力め、幕府時代に下されたる婦人の罪狀書に向つて種々なる反證を提供せしかば、社會は漸く我が同胞の讒訴に陷りしものなることを知覺するに至れり、是に於てか氏は更に婦人の牢獄に向つて根本的破壞を企つるの必要を感じ、女大學評論、並に新女大學と稱する辨駁書を公にしたり。是れ實に婦人の牢獄を破壞する最後の鐵槌なりしなり。

溪川の水に流れて須臾も止まらず、昨昔の水は今日の水にあらねど、兩岸の山は依然として在り、草木春に遭へば花ひらき、年々歲々花は同じと雖も、見る人は同じからず、時勢の變遷またこのごとし。人は逝いて鎭長に跡を絕てど、其人の遺せし績は千載猶世に殘るなり、日本開國の先達福澤翁の著、日本婦人論は三百年の久しき社會より蔑視されたる我が同胞の一半、日本の婦人に向つて深厚なる同情を寄せ、博大なる親切と、綿密なる辨護と周到なる用意を以て、婦人が天賦

の性能と。婦人が特有の美質とを普ねく世に紹介し、而してその地位、責任の大切なる由を知らしめたるものなり。

されば封建時代三百年間日本婦人の枉屈を伸しもの實この書にして、社會の壓制を斥げ、男子の暴力を排し、婦人に對する在來の迷想、妄說を打破せしもの實に又この書なり、この書の價値は日本婦人に就て先人未發の言わる處ろに存す。彼の男子にのみ武器を與へて婦人よりは總ての權利を剝奪したる貝原氏の女大學、封建時代の遺物、文明開化の邪魔物たる女大學、戀愛神聖の敵、家庭改良の障害物たる女大學を側面より打擊したるもの實に又此の書なき。

日本婦人論の外、家庭及び、男女に關するもの日本男子論わり、男女交際論わり、品行論わり。いづれも婦人の寃枉を伸べざるはなく又男子の暴行に向つて痛棒を加へざるものなし。而して彼の一世の物論の種なりし女大學評論、並に新女大學は、二百年來日本婦人女訓の實典たりし貝原氏の說を根底より打破し、新たに千載不易の確說を樹てたるものにして新日本婦人の爲めに氣を吐く萬斛、眞に痛快淋漓の議論なりし。翁に金言わり曰く

夫婦の間は無禮の內に禮義わるものなり

蓋し翁の說は夫婦は不禮の極度を行ふものにして無禮極度は即ち禮の起る處ろなり。是の禮を知るものは即ち人類にして。この禮を知らざるものは獸類なり。一夫、一婦の說即ち又玆に抱胎せり、この一夫一婦の禮義を知ると知らざるとは即ち人獸の差別の岐るゝ處なり。然るに舊來の女大學は禮の根元たる一夫一婦の制を等閑に附して一夫多妻を認許したるの言わるを以て世の獸性に富める男子は籍て以て自個の武器となし、この殘酷なる武器を揮り廻し、婦人を虐待するの事實なきにわらず、翁が婦人論の根元は又この逆勢を挽回するの目的たりしこといふまでもなし。

日本開國の先達が婦人の爲めに百年の寃枉を伸べたるの事柄を別としてこゝに又翁は一家獨立の說を提げて家事經濟論、世帶論、活計論、詳くいへば儉約論、庖

厨論に就て婦人、並びに一般家政者の用意を求めたるものあり、翁の世帶論に向つて評論を加へんと欲するもの即ち是なり思ふに世上有觸たる經濟書の多くは、抽象の學説に富んで普通家政家の了解に困難なるの事情あり。即ちそのいふ處ろ多く禪僧の説法に似て在家の耳に入らず、茲に於て翁は、親鸞上人の方便に倣ふて最も俗耳に入り易き比喩を以て經濟學の精神を解説したり、是れ即ち民間經濟錄にして劈頭第一物價の段に左の言葉あり、その斷案を下す處ろ頗る奇拔にして婦女童蒙をしてよく合點せしむ。曰く

物の直段は品物の位なり、米一俵の價二圓にして麥一俵の價一圓なれば、米の位は二にして麥の位は一なり、絹布の價は木綿よりも高く、金銀は鐵よりも貴し、斯く物の價の相違するは何故と尋ぬるに世の中に之を好む人の多きと少きとに由て價の高下あるなり。

人の好むものにても又價なきものあり、たとへば渇する時に淸水を欲し、炎暑の時に凉風を欲す、然れど水と風とに價なきは何ぞや、是れ天然に澤山ありて錢を出して買ふの必要なければなり。又天然に澤山なるものにても賣買の價あることあり。東京の深川、本所の邊は水に不自由にして一荷づゝ買ふて飮む、一荷の價一錢但しこの一錢は水の價にあらず、唯水屋の賃錢なり、田舍の山奥にては薪の價なけれど之を伐つて都會へ持出せば價あるがごとし、東京にて水を買ふと聞かば驚ろくならんと雖も薪の錢になることを思はゞ其の理合を合點すべし云々

誠に是れ明快なる説明にあらずや、經濟論物價の解釋比喩の妙なる、千萬人に勝れたる智識ならでは決して斯る趣味ある説明は得られぬものなり。次には賃錢の事を解釋してあり。曰く

世間には終日汗を流して僅かに十錢か二十錢の賃錢を取り年中働いて衣食に足らざる者あり。農夫職工、車夫、日雇の如し、又汗を流す程の骨折もなくして日雇人足の十倍も百倍も賃錢を取る者あ

り、醫者、學者、商人、官吏のごとし、これは心を勞するものと、力を勞するものとの相違なり、世の中に腦髓を勞する仕事は難くして其人も少く、力を役する仕事は易くして其人も又多し、且つ腦髓を使ふ仕事にはその修業に時間を要し、金も入る事なれば成業の上に賃錢の高きも其筈也。又同じ力役にても身體の爲めに惡しき仕事か、又は穢らはしき仕事は割合に賃錢も高し、譬へば夜中寢ずの番か礦山の金掘は衛生に害あり、火葬場の人燒は穢らしくして人の嫌ふ仕事なるが故に賃錢の割合他よりも高し、藝娼妓なども又此類なり、見懸は奇麗なれども其實は甚だ穢らはしき商賣なり、女子に遊藝の嗜は大切なれども藝妓などの境界には陷るまじきものなり。云々

この說正面は經濟論なれども、裏面には立志篇も含めば、敎訓の意味も含めり、斯くてこそ眞に活ける經濟の學問といふべし。

前條の如く心を勞する仕事と力を役する仕事とは賃錢に莫大なる相違あれども其事柄を見て何れを貴しとし、何れを賤しとすべからず、世の中の人をして悉皆學者、役人たらしめば、誰ありて衣食住の物を作るべきや、學者が終日書を讀み、役人が每日役所に通ふも之に由て衣食の生ずべき理なし、されば心を勞するものは力を勞するものに由て生活を保つものなれば、努々之を輕蔑すべからず、むかし學者や役人のなき世の中にても人類は生活して生命に別條はなかりし、されど今日學者、官吏の如きものゝみにて他に衣食を作る者なければ人は一日も生活すべからず、故に力役者は心勞者の命の親といふも可なり、我が命の親にして謂れなく是を輕蔑するは自ら自己の愚を示すものといふべし。

論旨一轉、心を勞するもの必ずしも貴しとせず、力を役するもの必らずしも賤しとせず、經濟上の約束にて賃錢には格段の相違あるも、身分に貴賤はなしとの意を明かにしたるものなり、四民平等の福音誠に天は人

の上に人を造らず、又人の下に人を造らずとの警語を下して門閥、階級を打ち破り、以て三百年來國民の迷夢を覺醒したるこの翁の意氣を思ふに足るべし。學者官吏の輩動もすれば高く止りて別人種の如くに考へ勞役者を侮蔑すること犬馬のごとくなりし社會の風習に向つて一大警鞭を加へたるものといふべし。翁の如きは眞に平民の味方にしてその眼中に貴賤尊卑の區別なきものなり。而して又曰へり

　右は一と通りの理屈なれども今日の事實を見れば力役者は唯賃錢の少きのみならず、兎角世に侮られて常に人の下に就くその所以は何ぞや、第一力役者は身代なくして人の世話になること多し、譬へば金を借らんと欲して金主に頭を下げ、又は智識見聞狹くして分別乏しく常に人に相談して人の智惠に依賴すること多きが故なり。金を借るも智惠を借るも同樣にして自然人の下に就かざるを得ず、余輩は世間の智者と稱する輩が實際の事も知らず空論にのみ走りて人を輕蔑するを惡めども、さりとて無學文盲の力役者にも左袒すべからざる場合あり、故に今後智者は實際の事に心掛けて力役者に依賴せず、力役者は次第に身代を造り出し又學問に志して智者に依賴せず、双方互に獨立して天下泰平なるべきなり。

次に儉約の事を論じて實際的家政學の極意を出せり。世上萬卷の書を讀んで得る處ろは甚だ稀なり、然るに此書僅かに十數行の文字中、吟味すれば人間一代富を作るの秘訣を洩らして富貴、榮達、勝手次第に人々の取り去るに任す、數行の文字、之を讀めば恰も求めずして寶の山に入りたるが如き心地す、手を空ふして歸るは眞に愚なるが如くに感せしむ、誠に鬼神を欺くの文といふべし。

　力役者の人に輕蔑さるゝは身代なきが爲なり、力役の身を以て金を剩すは甚だ難きことのやうに思はるれと又決して然らず、塵もつもれば山となる、儉約の極意は人にも言はれぬ所に在るものなり、一椀の冷飯、一筋の燈心、決して粗畧にす可らず、

兎角人は目の前に澤山なるものを勘辨なく費すこと多けれど大なる心得違なり、河に居て水を惜み、山に居て薪を儉約するの覺悟なければ世帶は持てぬものなり、世間の人にこの覺悟なき證據を得んとならば彼の都會の地に出稼する田舍者を見よ、田舍に生れて粗衣粗食、一年に三圓の金をも餘すこと能はざる者が、都會に出れば月に二三圓の給金を取りながら一年の末に身代を勘定すれば三圓を餘さゞるのみか、却て五圓の借越をする者多し、必竟都會に出れば己れが給金の高さに由て油斷し、世間一般、暮しの豐なるを見て油斷し金錢を見ること河の水の如く、山の薪の如く思ふの罪なり、油斷大敵、田舍への土產には唯惡疾を携へて歸るのみ、斯る心得違ひは出稼の者のみにあらず學問修業の書生にも甚だ多し氣の毒なることなり。

論說明快まことに名刀を以て豆腐、蒟蒻を斬るがごとし。假に一丁字なき爺媼もこれを聞いて合點せずといふことなし。儉約の極意は人にも言はれぬ所に在りとの警語、一椀の飯、一本の燈心の粗略にならぬ戒め、目の前に澤山なる品物を注意すること、河に居て水を惜み、山に居て木を惜むの覺悟、この僅かなる言葉の中に含まれたる哲理の廣大無限の意味ある事をよく勘辨すべし。この二三ヶ條の言葉をよく解釋して眞に實行し得たならば、其の人は既に家政學の極意を免許したも同樣にて不日世帶を持ちて大なる身代を造り。富貴を得るはいと易き事なり。又田舍者が給金のよきに油斷して金を餘さゞるの譬へ。今の世の浪費家に對するよき忠告にして。日本人の弱點を言ひ穿ちたるものなり。

されば質素儉約、身代を作るの法は細々積で怠らざるにあり、之に反して奢侈無狀、身代を破るの法も又、細々費して怠らざるに在り、俄かに得たる金は身に附くべからず、博奕に勝ち、相場に勝ちを得たる者のごとし、幾萬圓の金も一時の夢にして之を子孫に遺したる者なし、啻に子孫に遺す

能はざるのみならず、生涯も保たず、十年も保たず、多くは今日の大盡にして明日の乞食たるを常とす。

僥倖を欲ふは元と淺墓なる智慧なれども。世間の人情としてこれを欲せざるものなし。既に人情ならば、これ萬人の希望にしてその慾や又大なり。この大慾の爲めに人多く失敗す。是を戒しむるに一言なかるべからず、例に曰く「今の世に金滿家と稱して手堅き家と稱する其先祖を聞くに必らず博奕家にもあらず、又相場師にもあらず、唯に細々積んで怠らざるの要訣を守りたる者のみ、世人若し之を疑はゞ、遠く其證據を求むるに及ばず、如何なる町村にても苟も三五十年の間變ることなき金滿家なればその家の主人に質問して此の要訣の虛ならざるを知るべし、世に紀文大盡はなきものなり」とあり。明快なる理法を以て冷靜なる忠告を加ふ、誠に達人、有道者の言にして、世の表裏を洞觀して誤ることなし。

俄かに得たる金は身に附くべからず、此の言果して是ならば俄かに降り來りたる損亡も又深く恐るゝに足らず、世の中には火事、水難、樣々の災難あれども其の災は思ひの外に輕きものなり、人の家に尤も憂ふべき禍は識らず、知らずして奢侈に赴き、いつとなく錢を費すに在り、一日に見へず一月に覺へず、一年の終に至り三年の終に平均して身代の次第に衰へたる者を名づけて是を細々費やすの禍といふべし。譬へば火難、水難は怪我(負傷)の如し、細々費やすの禍は勞(肺病)のごとし、怪我の出血は一時眼を驚かす事あるも思ひの外に平癒し易し、勞(肺病)の容躰はさしたる苦痛も覺へざれども到底全快すべからず。而のみならず、怪我に驚ろいて身を養生すれば瑕口の平癒速かにして却て身體の健康を增すことあり、所謂禍を轉じて幸となすものなり、世の諺に類燒の家却て繁昌するものを燒け太りといふ、家を燒て繁昌する理由はなけれど、怪我の後に身を大切にして養生するが如く、類燒の後に世帶を引締め、細

く費やすの習慣を破つて富を致すの實を示したるものならん、世の諺にあまり虚はなきものなり。

云々

此の段儉倖の反對を取つてその理由を示す、儉倖の戒めを聞いて猶心に滿足せざる人も此の反對の例を示して說かるゝに至らば、忽ち釋然として、心に會得すべし、火事水難恐るゝに足らず、恐るべきは眼に見へざる奢侈なり。一時の負傷驚くに足らず、恐るべきは苦痛のなき肺病なり。肺病と負傷の喩を以て、奢侈と災難の喩に比す。その比喩の巧妙なること、如何なる細工人もこの手際には眞似べからず。人間萬事を讀み盡したる老成人にあらざれば叶はず、福澤翁が物の譬へを取るの巧妙なる常にこの如し。說の善惡、理の當否は兎もあれ、一言まづその比喩を聞いて直ちに要領を得。人感せずといふ事なし。眞に天下獨歩の材といふべし。

後段禍を轉じて福となすの喩へ。事の兩端を捉へて、利害得失を論ず、常識に富めるものならずは。此の如き解釋を下し得べからず。次で曰へり

右の如く質素儉約、細々積で身代を作り、その身代を何事に用ゆるやと尋ぬるに、第一衣食十分にして家內安全ならんが爲なり、第二子弟の敎育に金を惜まずして二代目の人物を作らんが爲なり、第三他人に依賴せずして世の侮を防ぎ、我が思ふ儘の事を行はんが爲なり、今世上の有樣を見るに、貧乏の爲に親子兄弟共に一家に居ること能はざる者あり、甚だしきは、愛らしき子を捨て他人の手に渡し、睦まじき夫婦相分れて別々に稼ぐ者あり或は假令子を捨て妻を去る程の貧に至らざるも、錢なき爲めに子の敎育を十分にすること能はざる者は天下十に七八なり、又今の世に人情として身代なき者は唯其身に不自由をするのみならず、家の貧しきが爲めに謂れなくして他人の侮を受くること甚だ多し、これは必竟これを侮るもの、不德にして侮を受くる者の身に於て毫も恥ずるに足らずと雖も、滔々たる天下の勢、錢を貴ぶ世の中に住

居すれば、此勢には敵すべからず、錢の敵を防ぐには錢を以てせざるべからず、斯る淺ましき世の中なれば、有德有智の人物にても遂には錢の爲めに志を屈して我が思ふ事を十分言行に顯はすを得ず、生涯奴隷の境界に沈で朽果るもの甚だ多し、世に民權論の行はれざるもその原因多くは論者の貧乏に在り。

此の段質素儉約の目的を述べたるものなり。儉約する方法は斯く〳〵なりとて旣に其の遣り方を說きたれば玆には何の爲めに人間は儉約し、何の爲めに金を儲くるかといふ事を十分に說明したり。第一家內安全の御守を得んが爲なり、第二子弟の敎育費を作らんが爲なり、第三自主獨立して他人の厄介にならぬ爲なりといふ、その詳細なる理由を說明するに簡單なる言葉を以てし、よく其の情を盡せり。又金なくして親子兄弟一家に居る事能はざる事より、貧乏にして子弟の敎育費を得ざる事まで尤もその意を得たるものなり。扨て身代なき者が貧乏の爲めに他人の侮を受くる事をいふに至つてその議論實に千鈞の重ありといふべし。人間の貧乏元より恥るに足らずと雖も、悲しい哉滔々たる社會は不德なる俗物の寄り合にして貧乏者と見れば何かなしに之を輕蔑するの習ひなり、不幸にして貧乏に生れたるものこそよき迷惑といふべし。さりとてこの暴風雨には敵すべからず、暴風を防ぐには金鐵の家屋を以てせざるべからず。黃金の敵を防ぐには又黃金を以てせざるべからずといふの結論を以て人間自衛の策を示したるものなり。むかしは濁世の風俗を厭ふて山林に隱れ、市井に隱れたるものあり。貧乏にして謂れなく人の侮りを受くるを憤りたるものならん。併し是れは消極的の隱遁策にして甚だ妙ならずと合點して敎を立てたるは流石に翁の見識なり。是れに對して翁の取る處ろは積極的の隱遁策ともいふべし。世間にては翁が金錢をいふ事あまりに濃厚なれば、その爲め一時誤つて拜金宗などの語を報はれし事さいあり、拜金か、非拜金か、この一章を熟讀すれば、翁が金錢に對する眞意知るべし。拜金宗の汚名を被ぶつてまでも人を利

益に導けり。誠や翁のごときは法の爲めに一身を犧牲にせし、親鸞上人、日蓮上人にも比すべき高僧知識といふべきなり。

幼年の時より父母の金を費して學校に修行し、既に二十歳を過ぎ、二十四五歳にもなりて、何か職業に就て錢を得るに至り、その所得二十圓なれば二十圓の手一杯に暮し、三十圓なれば三十圓を餘さず、五十も百も際限あることとなし、一月の所得は一月に費し、一年の歳入は一年に盡して嘗て前後の勘辨あるもの甚だ少し、昔し江戸の鳶の者は宵越の金を遣はずといふことあれとも、痛く是を笑ふ可からず、其日の所得を其日に費すものと、其月の所得を其月に費すものと無勘辨の有様は毫も優劣なし、斯の如く所得の增すに隨ひ暮し向の費も亦共に增して啻に手一杯のみならず、往々出入差引の不足を生じて借財の媒たりといふ可きのみ。既に借財あれば、爲に自分の志を伸ばす事も叶はず、何様に心に面白からぬ事ありとも、錢を取る事に戀着して、獨立自由の精神は消へて痕なく、幼年の時より父母の金を費やし、父母の身を勞したる學問の修行こそ徒費徒勞といふべきのみ、儉約の旨は爪に火を燈して金錢を積み、之を見て快樂とするに非ず、金錢の權を我に握つて獨立快活の精神を逞ふせんが爲めなり。

新夫婦が新たに世帶を持つに動もすれば無勘辨なる費用多くして家の持てぬ事あり。この一章を味はふて、よく覺悟すべき事なり。

以上は儉約章に就ての話なるが、儉約の次に正直の章あり、其の次に勉強の章あり。正直とは信用の德を説きたるものにして、經濟學上の一節なれとも此篇に説く事は必らずしも信用篇の學説にはあらず、又勉強の章は人々の作業を説いたるものにして生產の義に當てはまる個條なり。今その大意を擧ぐれば。

男子は外を務め、婦人は内を治むとは分業の旨ならん、然りと雖も一家の主人が、世間の附合を專

らとして、商賣營業の取引、財産の處置、貸借の出入より家宅の普請(建築の事)奉公人の始末に至るまで一切是を引受けて細君は戸外に出たる事もなく、他人に面會したる事もなくして奥に蟄伏するは萬々世帶の便利にあらず、婦人とても世間の附合なかるべからず、況やその商賣營業に於て財産の始末も心得、貸借の出入も承知して主人の留主には帳合を引受けて差支なきこそ一家の細君といふべし。扨又男子も家事を見るに遑らずといふも、鹽、味噌、薪炭の多寡、出入を知り、衣服家具の種類員數を知り、子供の起居眠食、に注意する等の事は遁る可からざるの職分なり、倘細に亘れば、男子とても綻びの縫ひ樣位は心得てよし、世に不幸にして主人の早く死して未亡人は途方に暮れ借金あるも知らず、貸金あるも知らず、唯帳面を投出して他人の指圖のみに依頼する者あり、又或は不幸にして、早く妻を亡ひ、一家は眞の暗にして子供の始末に當惑する者なきにあらず、畢竟家の世帶に分業の行はれたる弊害なり。

右は經濟學上分業の法の社會經濟の上に便利なるも一家の經濟に取つては不便なりとの事柄を説明したるものなり。男女夫婦別々に事をなし、或は内を治むるもの、外を務むるものとその區別を立てゝ双方別々に稼ぎをなすの弊害をいへるものなり。今日の世帶に於て女子が男子の業務に就て知悉する事少きは一般の風なれども又男子が家の事に頓着なくして、簞笥の底に何があるやら、毎月の薪炭が何程費るやらに就ては又殆ど無勘辨といふべし、家政の事は元より女子の務又稼業は男子の務なれども、務め以外の知識は双方共に備へ置きて緩急相救ふの用意ありたきものなり。との意を述べたるものなり。

又昔しの大名などの家には分業の最もよく行はれたるものにて御祐筆あり、御針あり、御庭の掛あり、御湯殿の掛あり、御料理は無論、煙管、灰吹、の掃除に至るまでも各々其職掌の者ありて一切萬事、家内の業を分ち之を分ち盡して主人に殘れ

るものは唯二重の蒲團の上に坐して飲食するの一事のみ、之を一家の便利といふべからず。又近來西洋の女教師が日本に來りて文學、音樂の教授は勿論、料理、裁縫までも一切引受けて無藝無能なる日本の女子を訓導して西洋文明の光を輝かさんとて女學校を開きたるものあり。然るにその女學大先生の技藝を問へば反物を裁ちて衣服を縫ふ事を嘗て心得ずといふ、蓋し、彼の國には分業の法大に行はれて衣服を仕立るは仕立屋の職分となり、婦人にても衣服の仕立を知らずとて不外聞にも爲らぬことならんと雖も我國に於ては然らず、彼の西洋人の教る縫取の笹縁の飾など日本にありては玩物に等しき、仕事を習はんより娘の子にはまづ糠袋の縫ひやう、襦袢の仕立方、次で反物を裁て男女の衣服を製するの藝を覺ゆることそ緊要なれ、されば分業の法は國々の風俗、人口の多少、國財の貧富にも由るものなれば、一概に之を便利とのみいふ可らざるなり。

むかしの大名と西洋直傳の女學生とを以て比喩とすこの大名とこの女學生と、いづれも文明の家庭にありて無用の長物たるべし。

右の次第を以て考ふるに分業の法は社會に便利にして一家に不便利なり、今の日本の有様にては、社會の間にも猶且つ未だ此法の行はるべからざる所あり、況んや一家内に於てをや、男女老少成る可く丈け業を分たずして相共に勉強してまめに働く可きなり、學校に通學する生徒にても、唯讀書のみにては職分を盡したりと云ふ可らず、家産の貧富に拘はらず家内庭園の掃除もすべし、衣服下駄傘の始末もすべし、町使の用も辨ず可し、家業の手傳も務むべし、成長の後に迂濶なりとて世の嘲を取り、兼て其身に不自由するは幼年の中に家事を知らざりしの罪なり、學問手習は唯分業中の一個條と云ふ可きのみ、學校に出入して讀書の教授を受け以て揚々自得する者は、我黨の少年にあらず、但し經濟學中に於て分業、分財等の事は其旨

深遠、初學の爲には了解に難くして却て無益なれば、爰に之を云はず。

この一章は道德經濟の旨趣を述べたるものなり、分業兼業の理非、得喪論は別として、家内に於て勉むべき人々の心得を說くや、名を經濟に藉りて而して其實は人の私德を導く。元來經濟學の極意は道德に在り經濟の及ぶ處ろ、道德の旨と吻合する處ろなくんば經濟の價値なしといふべしと雖も世の所謂經濟書が人を敎へてその德心の發起を促がすの力は至つて微弱たるを免かれず、然るに此章の解く處ろ、鑿々として道德の旨意に叶ふ、實に大家の步趨尋常人の企て及ぶ處ろにあらざるなり。以上は民間經濟錄中の語にして一篇の主眼は經濟の何物たるを知らざる人に經濟學の精神を知らしむるの目的に出でたるものなるが、更に又經濟と道德の關係に就て蘊蓄を發揮したるもの世帶論あり。左のごとし

世帶とは衣食住の物を程よく用ゐて一家内の健康を保ち其心を樂ましむることなり、渡世、活計などとは意味の異なる所あり、活計といへば身の働を以て衣食住のものを得べき元手を作り之を家内の用に供することにて世帶も活計の中の一部分なれども唯世帶とのみいふ時は此物を得るの法に非ず物を費すことにのみ關係する文字なり、故に身の働を以て得たる財にても先祖より讓り受たる財にても或は他人より惠まれたる財にても、其財の出所を問はず、唯是を費やして衣食住のものをさへ用ゆれば即ち世帶を持つ人なれども自分の身の働きを以て其財を得る者にあらざれば、譬朝夕ゆたかに暮して不自由なきこと華族の如き輩にても活計を爲す人とは言ふべからざるなり。

世帶とは經濟學上の所謂消費篇にして、學語を以て是をいへば物件の充要性を剝奪するの行爲をいふなり、即ち一家内の健康を保ち、愉快を取り、人間生々の幸福を享得する爲めに按排よく物を費して行くことなり、所謂家政、家事經濟なるものなり、たとへ活計上の働きありて幾千圓の收入を得、又は先祖代々讓受けの

家財あつて豊かに生活し行くの身分なりとて、世帶を持つこと拙なればその家の繁昌は覺束なきものなり、是に反して譬へその收入は割合に薄くとも世帶の持方巧みにして、消費の按排ほど合を得れば、家計必らずしも難義にはあらざるなり。下の一句は、額に汗して食ふは人生の大義なりてふ斯翁の哲學より割出したる言葉なり。

故に世帶の事は唯費すの一方にのみある働なれども活計には得ると費すとの兩樣の働あり、世帶の事は日夜間斷なくして一樣の道に從ふものなれども、活計は時に從つて種々の變通あり、世帶の事は單にして活計の事は複なり、世帶の事は靜かにして活計の事は動く、斯の如く兩樣の間に單複、動靜の區別あるが故に世人或は暗にこの間に難易輕重の考を作り、錢を得るは難き事なれとも、錢を費すは易し、錢さいあれは世帶を持つに何の苦勞あるべきや、子供の仕事より容易なるべしなどとて世帶の事を輕々しく思ふ者あり、大なる心得違といふべし。

福澤先生曾て說あり、一家の臺所を程よく賄ひて行くの細君あらば、一國政府大藏大臣の職務を取らせても差支なしと、實に活計は男子の働にして世帶は女子の働といふべし世帶は金錢物品を消費する一遍の働らきなれば、何人にも出來得べしと速了するは大なる僻見なり、先生常に世間の輕蔑する事柄に就て、又常人の輕々看過する事柄に就て深き注意を拂ひ、平凡の中に眞理を發見して言常に人の意表に出づ、謹て服膺すべき事多し

世帶の要は事物の順序に注意して前後を勘辨するに在り、夕方の食事を朝より用意し・明日入用の品を今日に買ひ、冬の衣服を秋に洗ひ、秋の暴風を夏に防ぐは固より論を俟ず、都て家內の品物の置物所を定めこの多小有無を暗記せざるべからず又衣裳は簞笥に在りて夜具は長持に在るや、下駄に餘りありて、傘に不足なきや・蠟燭の安物は多く買込みたれど、提灯の張替は忘却せざるや、用

簞笥の底に不用の反古はなきや、押入の隅に風呂敷の潜伏するものはなきや、倘甚だしきは半切の紙を接がずして手紙を書き接たる紙を引裂きて鼻紙に用ゆる者もあらん、事物に順序ありとはいふべからず、又今日の人事に於て其進退は大躰人の情意感動に依ッて制せらるゝものなれば、偶々錢を得て、偶々物に遭へば、その用の有無を論せず、一時其物に感じて之を買ふこと多し、其の情は恰も花を見るの情に異ならず花は唯目に見て情に感ずるものなれども品物は錢と交易して之を家に携へ或は數日の寵愛なきにあらざれども數年の重寳たるを得ず、之を沈沒し又是を沈沒し新陳交代せずして陳々堆をなし、夏の虫干、冬の煤拂に至ッて始めて自から驚愕するのみ事物の前後に勘辨あるものといふべからず。

女子の天職たる家事經濟に就て言を設けたるや極めて切實なり、事物の順序を注意すること、品物の置場所を一定する事、物品の用意を周到にする事、金錢を握ッて感情に奔らざる事、無益の物を買はざる事、世帶の用意を説いて到れり盡せりといふべし。この翁常に事物の極端より極端を見、又其の表裏を洞察して、結局の場合を想像して説を立つ、故にその議論時として殘忍に陥る事あり滔々たる世間の人情は常に此の極端と表裏とを洞見するの明なきが故に事を處するに優柔不斷なり、翁の如きは如何なる場合に於ても、又如何なる方面に向つても常に革命家たるの本領を失はざるなり。

又世帶の要は事物の釣合を保つにあり、家の貧富に拘らず、衣食住の物は一様に其身代と相當せざるべからず、裏店に金の茶釜は不相當なり、官途に奔走するものが、俄かに月給を得て之に加ふるに旅費を以てし生來始めて千を數ふるの金を握ッて、之を如何にせんか、まづ地面を買ッて普請をなす、座舗の道具も出來妻子の衣裳も成る、次で築山、泉水に及ぶ世帶の道具未だ完からずして早く既に數千の金を消費し、頓に免職の一命あ

れば又是れを爲す事如何、世帶既に膨脹したるものは俄に之を收縮すること難し、之を自然に任じて放却せんか、家屋庭園日に荒廢せんのみ、庭の唐金の燈籠も、座鋪の銀の香爐も芥溜に鶴の下りたるに異ならず、不相當の古跡明に目擊すべし、畢竟其由緣は何ぞや、最初不時の金を得て身代に不相當なる世帶を營まんとして遂に困り果たる有樣に至りしものなり、博奕する者は論外、都て相場などとする商人等が折節大金を得れども身代を保つこと能はざるも不時の金に制せられて世帶の釣合に注意すること能はざるが故なり、故に世帶の釣合を保つは家產永久の貧富を察して一品たりとも身代に不相當なるものを買ふ可らざるは無論、假令或は他人より貰ひ、或は先祖傳來の品にても今の身代に不相當なるものは一切これを家に留く可らず、銀の急須に番茶を煎るも不相當なり、蒔繪の菓子盆に鹽煎餅を盛るも不相當なり、器孤ならず、必らず鄰あり、銀の急須は金の烟管を導き、蒔繪の盆は紫檀の火鉢を招き、大有力の主人にあらざれば此器の權を制すること能はざるものなり、歐行したる少年の窮するは所持の金時計に窟しめらるゝなり、華族の家に改革の行はれざるは大名時代の殘品が家內に跋扈するが故なり、世帶の釣合大切なりといふべし。

この一項新世帶の人を戒しむるの言なり、始めて世帶を持ッ人は永久的の勘辨なく、一時の感情目前の便宜を以て事を企つるが故に後日に至ッて必らず悔悟を免かれず、先生世帶釣合の說を出して新世帶者の無勘辨を警戒す俗世界の人情は恰も風のごとく平日靜かなりと雖も一朝狂ふ時暴威烈しくして當るべからざるものあり、されば不時に金錢を握る時は平素の謹愼を忘れて忽ち世帶の不釣合を來し、其の爲め却て不測の禍を招くに至るもの多し、世帶に勘辨の大切なるとを知らせたるものなり。

又世帶の要は細々注意するにあり、前に言へるが如く世帶は唯費す一方にして其事甚だ單なれば之

に當るの要害も唯儉約の一方にして亦甚だ單なり、然るに世人は世帶の旨と活計の旨とを混同するよりして此世帶の要害たる儉約の旨をも蔑視するものあり、活計家の言に曰く、三筋の燈心を二筋にするも一月に何合の油を餘すべきや、數滴の油を儉約し、些細の薪炭を惜み、手を黒くして火打箱を搖き廻はし、揚枝を以て重箱の隅を抉くるが如き何ぞそれ見苦しきの甚しきや、試に思へ我輩が本職の餘暇に千圓の金を借て之を巧に運轉すれば以て此方を利し一月三十圓の金は手に唾して取るべしと、此事甚だ活潑にしてよく少年の耳を悦ばしむるに足ると雖も活計家は一を知ッて二を知らさるものより、奢侈が奢侈を導て次第に不始末に及ぶものならば儉約も又儉約を導て次第に始末に及ぶ理なり、數滴の油は儉約の止まる處ろにあらずして儉約の發生する原素なり、又本源なり、油は以て炭薪に及ぼし、炭薪は以て衣服に及ぼし、遂に家宅庭園、一切の世帶に波及す可し彼の活計家は、唯眼前數滴の油を見て直に之を一二十圓の金に比したるのみ所謂一を知ッて二を知らざるの言なり。

右條々に論ずる如く世帶の有樣は都て靜にして活潑ならず、日々夜々一定不變にして快樂に乏しきが如し、然るに此編首に世帶の要は家族の心を樂ましむるにありといへり、今此事に就き末文に數言を足して編を終らん、事の一定不變は世帶の約束なれとも時ありてこの調子を破るの手段なかるべからず、即ち花見なり、月見なり、市中の見物なり、野邊の遊山なり、祭禮式日なり、誕生祝義なり、或は年忌法事、佛參等も此箇條に加入す可し此日に於ては老幼子女衣裳を改め、相當の馳走を設け、或は家族手を携て外出することあるべし、或は親戚朋友互に招請して宴席を設くるともある可し、此時に談話、遊戲の自由なるは勿論、或は席も摸樣次第にて遊藝の嗜ある者は遠慮なく躍りも良からん、鳴物も良からん、之を人間の快

樂と申すなり、然るを世の學者先生が人事を生嚙みにして遊山見物は無益なり、祝義禮祭は俗なりと云ひ、甚しきは年玉の餅を小兒の戯となし、法事佛參を老母の愚痴と稱して之を顧みざる者あり、年玉の餅も月見の團子も、唯是を口に喰て腹を太くするのみの物にあらず、恰も是を終歲連綿たる世帶の關節にして、その一定不變の調子を破り、又是を調和し、世帶の眼を驚かして之に新撰の活力を附與するものなれば、其功能至大至重なりと云はざる可からず、固より人々の貧富により或は十分の快樂を盡す能はざる者あるは論を待たずと雖も、其貧は姑く止むを得ざるに附し、子供の誕生日に鰯の干物にても儀式は儀式として存じたきものなり。

方今女子敎育の進步と共に家政學の書籍世に遍く、家事經濟を說くこと極めて綿密にして用意周到を盡すと雖も、事物の兩端を示して利害を說きたるの書に至つては殆んど稀なり、福澤先生三十年の昔に在つて既にこの議論あり、その識見の博大なる、眼孔の鋭なる、卑事に向つて注げる注意の深厚なる、元より尋常讀書生の端睨し得る限りにあらずといふべし。

新刊紹介

▲**海陸大王**（少年世界定期增刊）
巖谷小波山人、武田櫻桃子、木村小舟子の三氏が筆を揃へて合作した長篇の御伽噺ですから、少年子女は一讀なさるが宜　。（博文館發兌）

▲**大洪水**（世界お伽噺四十五編）
西伯利のお伽噺を日本の少年に解るやうに書き改めたもの、亂暴を戒むるといふ敎訓的の意味を含んだ結構なお話で御在ます、（博文館發行巖谷小波編）

▲**七夜ものがたり**（少年世界文學第拾編）
アンデルセンお伽譚集より譯した七夜物語と、其に附錄として矢張全集から譯した鬼皇子と神の御使との二篇が收めてあります、どれも敎訓的の美しうお噺。（高須梅溪篇富山房發行）

▲**百姓と惡魔**（少年世界文學第十一編）
これはトルストイ小話集中より譯したもので、「百姓と惡魔」「靴直しと天使」といふ面白い二種のお譚が載せてございます。（中島孤島編富山房發行）

▲**家庭割烹講義錄**（後期第一）
日本料理の部には井上講師の貝料理、衞生料理外五十餘種の調理法を載せ、西洋料理の部には宇野講師擔任の鍋料理、豚の肉汁外二十種の調理法を敎へ、其の他に別科、科外講演、談叢等何れも割烹に關する智識を集めたれば、主婦方の一讀すべき良雜誌なりといふ。（家庭割烹講習會）

會　　話

和　文　英　譯

あなたは大坂の博覽會へ御出でになりましたか、	Have you been to the Ōsaka exhibition?
いゝへ未だまいりません、	No, I have not been there yet.
大變人が出るそうです、	I've heard many people goes there.
私は來月參いりたいと思つて居ります、	I hope I can go next month.
私の兩親も其の時分參いりましよう、	My parent will go about that time too.
あなたはなぜ御一所にいらつしやいませんか、	Why do'nt you go with them.
留主ばんがござい ませんから、	Because we have no one to stay home.
そんならおみやげが澤山ございましよう、	Then, they will bring many presents for you.
ほしい者が澤山ございます、	There are many things which I like to get.
京都の絹物類がほしうございます、	I should like to get Kyōto silk goods.
日本一でございます、	They are the best in Japan.

彙報

◉女學世界懸賞募集　女子をして世帶の務を知らしめんとの目的を以て日本大地主の家事經濟と題し第一回の懸賞文を募集せりその詳細は別項記載の通り專ら家政資料に供するものなるが引つゞき第二第三回以下順次募集の都合なり江湖諸彥奮ッて寄稿されん事を第一回〆切は八月十日限とす

◉露國小學生徒の修學旅行　浦鹽港小學生徒は今回我が博覽會を機とし本邦へ修學旅行の都合にて學校敎師を約四十名監督者となり小學校生徒約六十名を牽ゐ本月十八日出發敦賀へ直航し金澤、京都を經て大坂に來る由

◉同志社女學校　京都同志社女學校は創立以來玆に二十五年を經過したるが今回擴張の方針を取ると同時に廣く天下の義俠家に訴へて基本金の募集に從事し同校卒業生は纎腕を揮つて東西に奔走しつゝあるが寄附金は片岡健吉、湯淺次郎、大澤善助の諸氏監督の任に當る由

◉暹羅留學生の着京　暹羅皇后陛下より派遣せられたる同國留學生男女八名は先月二十二日新橋へ着し麻布暹羅公使館に入れり右の內二名は皇帝の甥に當る親王にして他の二名は貴族の子息なり年齡は十五歲より十八歲迄女生四名も各位地ある人々の令孃にして年齡は十四五歲女生は我國に於ける美術工藝傳習の目的にて高嶺女子高等師範學校長之が敎育監督を擔任すと

◉福澤先生の頌德碑　大分縣共立敎育會に於ては福澤先生の頌德紀念碑及び紀念文庫建設の議を議決し文庫は大分に紀念碑は先生の鄕里なる豐前中津町の舊邸蹟に定まるべしと

▲詞林三歌仙　當代の才媛を網羅せる佐々木信綱氏の竹柏會はその第四回の懇親會を日本橋倶樂部に催ふせしが、餘興として大塚楠緒子の作詞林三歌仙を演じたり、演者はいつれも同門の人にして業平、小町、喜撰の歌舞伎的扮裝は來會會員の喝采を博したり、

家政資料第一回懸賞文募集

懸賞 日本大地主の家事經濟

家事經濟に關する廣汎なる智識を養成し、智見を弘くして以て世事に應ずるは女子敎育の主眼たり、學問は必ずしも理科、博物、歷史地理に限らず、活計を知り、世帶を知り、深く世上の生活狀態を識りて之が應用に敏なるものこそ眞に學問の活用を得たるものといふべし。本誌深く是に見る所あり今回全國各階級に於ける生活の事情を明かにしその得たる材料を取捨して是を九月以後の定期增刊誌上に掲載せんと欲す、是れ一は現在世帶の主働者たる主婦の參考に供し、一は學窓生徒の應用に資し、普く家政的智識の普及を謀るの趣旨に出でたるものなり冀く江湖の家事に熱心なる諸氏の奮て寄稿されん事を（女學記者識）

（投書〆切八月十日限）

懸賞金

一等 金貳拾圓 一名
二等 金拾圓 一名
三等 金貳圓 五名
（十行二十字詰紙數十五枚まで）

投稿注意

▲本文 現代家政學上の資料とすべき者なれば成宜く文飾を避け事實有の儘なるを望む

▲大地主の標準 耕地十町以上、又は直接國稅三百圓以上を納むる農家、若しくは傍ら商工業を營む地主を標準とし、成宜くは其地方にありて數代連綿たる名望家か、又は品位、德望ある家に就て記すべし。但し家名は變名にて差支なし

▲家の由來 祖先は如何にして家を興し如何にして身代を作りしか、勤儉忍耐家名を興せし著るしき事歷あればこれを記されたし

▲現在の地位 家の地位、名望、勢力並に家產の大体を記し、その家の現在の特色を記すべし又農家の外に商工業を營む家ならばその商工業の有樣をも記されたし

▲生活事情 年中行事、冠婚葬祭、家族、雇人、衣食住、日常生活の狀態、其他小作人の關係。家風、娛樂、百般生活上の狀態を詳細に記すべし殊に近來文明の進歩に伴ひ、地方富豪の生活狀態も多少の異狀を來したる向もあるべしそれ等の事項は別けて詳しく記載し相互の參考となるやう務められたし

▲經濟事情 收入、支出、租稅、敎育費用、物價、賃錢、給料、其他金穀の出納に關する事一切洩なく記載ありたし

▲收支計算表 一年間の收入、經費若しくは一ヶ月間の收支計算表を造り明細に記載たし

八月以後募集の項目

▲都鄙中等社會の家計
▲日本小作人の世帶
▲舊大名奥向の經濟
▲現代華族の家政

女學世界 定期增刊 廣告

（二〇七）

次號記事豫告

（第三卷第九號七月五日發行）

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）：金二十錢
四册（三ヶ月分）………前金七十五錢
八册（半ヶ年分）………前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）………前金二圓八十錢
內（定刊數………十二册
　（增刊四回……三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切目等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ。

不許複製

明治卅六年六月十五日發行　第參卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

明治お伽噺

—→《第二編》←—

巖谷小波山人著
武内桂舟畵伯畵

お伽三幅對

製本既成

●全壹册洋裝菊版極美本
●密畫數十個挿入
●正價金拾貳錢郵稅四錢

(一)命の玉 第一回—命の問屋、第二回—花見の山、第三回—劍の山、第四回—屍の山

(二)附木船紀行（發端）—附木舟（一）—蛙ヶ淵、（三）—甲良島、（四）—鋏ケ崎、（五）—緋鯉の瀬戸

(三)風船玉旅行 第一回—入道は風船玉を呑み太郎は風船玉に乗る、第二回—兩個の鷲は太郎に擊たれ一陣の風は太郎を奪ぽう、第三回—雲男頻に勇童を試み雨龍遂に勇童に[illegible]る、第四回—雷公途を讓り兩師途を教ふ、第五回—太郎は玉に逢ひ風神は玉を返す、第六回—玉一太郎に救はれ入道太郎に碎かる、第七回—月日玉を與へて嘉賞し太郎玉を捧けて凱旋す

博文館發行

明治お伽噺

—→《第三編》←—

巖谷小波山人著
武内桂舟畵伯畵

上卷出來
下卷近刊

新八犬傳

附りお伽小三幅對

●全二册洋裝菊版美本
●密畫數十個挿入
●正價各拾貳錢郵稅四錢

巖谷漣山人が未だ獨逸へ洋行しない前に、少年世界へ起稿されたのが此編で、八犬傳と云へば、昔曲亭馬琴といふ人が書いた日本一の長い小說で、また隨分面白い作ですが、此新八犬傳も先づ漣山人の作では長い方です、而も變化自在、犬好きの坊ちやん八人に、犬張子が八匹そろつて、めでたく局を結ぶといふ、其上編からワンとお讀みを願ひますよ…………………

博文館發行

(後付の三)

世界お伽噺

—《第四十五編》—

小波君著
葦舟君畫

大洪水

全壹册洋装美本
正價金七錢
郵稅金二錢

喧嘩好きのリフンチャンが、魔王の頭を撲り飛ばして、世界は一面の大洪水、皆さま、早く讀んで御覧なさいべりやのお話は之です……………

博文館發行

世界お伽噺

—《第四十六編》—

小波君著
金秋君畫

三本の劍

全壹册洋装美本
正價金七錢
郵稅金二錢

鍛冶屋の息子が、刀三本で、頭の十五ある龍を殺し、一足飛びに、王様の息子となつた出世話、之れは又ズコーデンの口碑、面白いぞ〱……………

博文館發行

（後付の五）

（後付の七）

少年商業文庫

第貳編

天城米海君著　大羽畫

（寫眞挿入）

商業の栞

全壹册

洋装美本　正價十五錢　郵稅四錢

商業の思想を養ひ商業學の大意を説き少年者をして商業に入たらしめんとするもの即ち本書の目的なり僅々百餘頁の小冊子に此目的を達すべき總ての材料を網羅し而も趣味津々覺えず快を呼はしむるの結構は本書の特色なり一夜に商業の全体に通し直に活商人たらんとする者は必ず本書を讀むべし商家子弟の夜學讀本として補習學校の課外讀本として又一般少年の實益讀本として之に償するもの世未だこれあらず

第參編

天城米海君著　大羽畫

（寫眞肖像入）

世界金傑譚

全壹册

洋装美本　正價十五錢　郵稅四錢

古今歐米の富豪三十餘家を一編の中に收めて毎章肖像繪畫を挿み著者獨得の妙技を以て家々立志成効の徑路を描出す實業立志編として眞に空前の好著なり少年者は固より讀まざるべからず青年老年の實業家亦讀みて意外の利益を得べし本書一たび出て從來の類書忽ち顔色なからん

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（後付の入）

女學世界定期増刊 姫百合
毎月壹回五日發行
(明治卅參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可) 第參卷第八號 (明治參拾六年六月十五日發行)

博文館創業

第十六週年紀念



太陽臨時増刊

陸の日本

六月十五日發行
創業第十六週年紀念日

四六判二倍
大判紙數二百四十餘頁

我が博文館は創業第十六週年紀念の爲めに太陽臨時増刊として本書を發行す、其體裁は前年發刊の「海の日本」と同一にして、其發行部數は平時の太陽に數倍す。今や太陽は東洋唯一の大雜誌として内外到る處に普及し無比の高評を博せると眞に本館の光榮とする所なり

官私の鐵道は今や全國を通じて四千哩に上り、本州、四國、九州は云ふを待たず臺灣に至る迄、滊車の走らざる所なし、然れども此等鐵道の沿道案内記にして讀んで面白く、携へて有益なるもの無し、會たま之あるも記事極めて粗略にして實用に適せず、或は各鐵道會社に編輯せられたるは、精確なりと雖も其社線の局部に限り。能く之を集めて全國鐵道の最近最精なる案内記は、未だ一も之あるを見ず、旅行者の迷惑想ふべきなり

不完全なる案内記を便りとして、旅行するは、狂ふたる磁石を携へて針路を定むるが如し、無用の經費を要し、無益の時間を費し、而して必要の觀察は多く之を逸す、危險と不利益と、之より甚だしきは無し。「陸の日本」は此等の不便と危險とを除く爲に出版す、全國の鐵道を中心とし其沿道の名所舊蹟、神社佛閣、名山、温泉、海水浴等の遊覽地より其遠近の距離、舟車の賃錢、旅館、料理店の名稱、宿泊料、滯在費、等に至る迄、悉とく特に人を派遣して詳かに調査せしめ之を輯めて漏さず。陸上に於ける旅行案内ば、方今世に此書の如く精確なるもの無し

「陸の日本」の記載する所は、本州四國、九州は勿論、北海道臺灣に至るまで各鐵道沿道各驛の市街に於ける、水陸の交通、諸官衙、學校公共團體、銀行會社を首とし、物産風俗商工業の状況までもまた詳かに之を網羅し其材料は諸官廳各鐵道會社及び市役所商業會議所等に請ふて最近の材料を得たるもの多し、故に此書の價値は多言を要せずして明らかなる所幸に高評を玉へ

東京本町 發兌元 博文館

全國鐵道地圖大判一葉
寫眞版十六葉入

正價金參拾錢
郵稅二錢

(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑳
明治36年6月（第3巻第7号、第8号）

2006年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3049-7　C3321